第四回 銀華文学賞発表

第四回銀華文学賞には日本全国および海外から三八二篇の作品が寄せられました。多数の御応募をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。昨年の倍を上回る数で、選考もたいへん難航いたしましたが、応募作の中から、選考委員の河林満・大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。優秀な作品、力作、佳作も多かったことから、今回は「入選」を設けさせていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は二二号以降に順次掲載される予定です。ご期待ください。

第四回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇〇八年一月二六日（土曜日）午後二時より東京の三鷹産業プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式といっしょに開催する予定です。どなたでも参加可能ですので、ぜひ御出席ください。

第五回銀華文学賞は昨年とほぼ同じ要領で行ないますが、締め切りは六月三〇日と一カ月早くなりましたのでご注意ください。御応募を心からお待ちしております。

銀華文学賞

当選

「荒るゝ海」木戸竜之介（栃木県那須塩原市）

「桜　雪」時見藍人（京都府綴喜郡）

「祖母の死」志賀幸一（静岡県浜松市）

優秀賞

「銀鉛色の海」山下悦夫（三重県津市）

「クズの葉が揺れる」伊藤伸太朗（千葉県松戸市）

「逝く者」細谷　清（福島県会津若松市）

「空蝉」片山郷子（東京都北区）

「船渠のメモリアル」山﨑敢造（茨城県守谷市）

「竅（あな）を刳（く）る」木村令胡（福島県会津若松市）

「大岡川」高橋三雄（神奈川県横浜市）

「長すぎた滞在」福迫光英（鹿児島県鹿児島市）

※「大岡川」（高橋三雄）および「長すぎた滞在」（福迫光英）は誌面の都合により、23号に発表させていただきます。

奨励賞

「ホノルルの夜は更けて」高橋惟文（山形県山形市）

「ピーノフカ」牧港誠之（神奈川県横浜市）

「石の鷺」来の宮あんず（東京都江戸川区）

「おっちゃん高校生」国方　勲（大阪府枚方市）

「聖橋心中」窟原　騒（東京都品川区）

「桜前線」大林　豊（千葉県市原市）

「二十八才の頃」外狩雅巳（神奈川県相模原市）

「雪解靄」神通明美（富山県富山市）

「るいらん」坂下光一郎（東京都立川市）

「アカダモの樹」吉阪市造（北海道網走市）

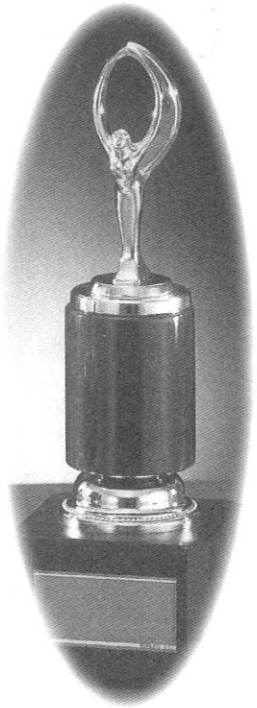
「因縁めぐり」山本しげこ（千葉県松戸市）

「いまさらめく」あやのはじめ（神奈川県秦野市）

「妖魚変容」つるみみつる（埼玉県坂戸市）

「鬼の手」江口久路（京都府京都市）

「フライパン」島木田久麿（愛知県春日井市）



結末と展開のすがた

小沢美智恵

銀華文学賞は回を重ねるごとに応募数が増え、水準も年々上がってきている。今回は最終予選を通過してきた五十六の作品を選考委員全員で読んだ。

差はわずかである。そこからどれを選ぶかだが、一つの筋立てを終わらせる結末と小説全体の結末をどのように結びつけるかが、作品の印象を大きく左右するという感想をもった。多くの作品が、全体的にはよく書けていながら、結末がいまひとつなのである。そのため決め手に欠け、各委員で意見が違ってくる。延々と協議した結果、三作品が当選となった。

結末がピタリと決まった木戸竜之介氏の「荒る、海」は、戦争に負けて緊張状態を失い、生きる意味がわからなくなった青年が、嵐の夜を船で乗り切る経験から生きる目標をつかむ話である。主人公は、その日「保証技師に選ばれ、偶然時化の中に突っ込むまで、いつも生命を大切に抱きしめて、危険にさらさずに来た。それは本当に生命を大切にして来たと言える事なのだろうか。危険を覚悟で命懸けで必死に生きる事の方が、本当に生きる事ではないのか」と思う。そして一晩中たった一人で舵輪を握り乗員の生命と船を守った砲術長の姿を見て、当面の目標を「海の男達の航海安全に役立つ航海計器の研究開発に定め、それに全力で立ち向かって見よう」と決心するのである。細部がわかりにくいという瑕疵はあるが、嵐にもまれる船の緊迫感は伝わってきて、全体をつらぬく主人公の意識の流れが揺るがず、読む者を感動に誘い込む。

入選

「狂い猫」　堀田利幸
「やぐら太鼓」　七浦とし子
「たそがれは茜色」　高辻貞夫
「揺れるピアス」　小野友貴枝
「酔い処」　花村地面
「岩魚淵」　羽田俊三
「長い回廊の向こう側に」　室町　眞
「輪郭の消えた男」　内海深山
「あなたはどなた」　柏倉敏之
「鯉と老盗」　北条かおる
「S寺の夏」　岩澤あきら

作品の評価に作者の実人生を持ち込むのは邪道であるが、この作者は実際に航海計器の開発に携わり数々の賞を受けた人であるらしく、その略歴までもが「作品」の一部に見えてくる。若い日に決意し、その志通りに生きた、作者の生そのものが作品であるような、実年齢を重ねた人にしか書けない重みがある。

時見藍人氏の「桜雪」は、認知症の母を介護し続けた末に、親を殺すに至る孝行娘の話である。介護のために仕事も恋も失いながら、母を大切にする娘の健気さと世の仕組みの酷薄さは書けているが、文章が終わりに向かうにつれ情緒過多になっていき、最後には歌い上げてしまっているところがどうかと私には思われた。が、ふっと引き込まれてしまう部分は確かにあり、強く推す委員もいて、受賞には賛成した。

志賀幸一氏の「祖母の死」は、少年時に血のつながらない祖母を介護したときの悔いを淡々とした筆致で描いている。誰しも自分が生きることに忙しい。ましてや子どもでは十分な介護などできなくて当然だが、後になってもっとどうにかしてやれなかったかと思うのもまた人間の真実だろう。それを作者はユーモラスともいえる祖母の姿を活写することで示し、供養の書とした。

二作品介護の話が当選作となったが、福迫光英氏の「長すぎた滞在」も、老人施設の問題を痴呆の父殺しとからめて描く暗く重い話である。前の二作が個人的な視野で描いているのに対して、この作は共倒れになりかねない社会問題として一回り大きな視野で捉えている。仕掛けを凝らし、ラストでなぜ主人公がその施設で働いているかわからせることで、家庭で痴呆老人を看ることの無理が示される。全体としてこの世への長すぎた滞在となった老いをどう扱うかの問題提起になっているのである。

抑制のきいた文章も申し分ないし、構成も考え抜かれている。小説の技量としては一番ではなかったか。私はその点を評価し当選作に推したが、救いがないという他の委員の意見を否定することはできなかった。私もまたカタルシスがほしいと思っていたからである。

この作は介護の問題をつきつめるために、施設に収容された老人を「物」のように描いている。一カ所でも老人を感情のある「人間」として造型すれば、作品世界に亀裂が生じ、もっと高い次元に突き抜けることができたのではないか。むずかしい問題に立ち向かった意欲作であるだけに惜しまれる。

他に印象に残った作品を六つあげる。

片山郷子氏の「空蝉」は、乳ガンになった女性が自分を見つめ直す話で、「気がついてみたら何もない」という老いの孤独がよく伝わってくる。一種のモノローグで、小説としての結構には欠けるが、人生を見つめる作者の目の深

さが作品世界を支え、確かなものにしている。

木村令胡氏の「竅を刳る」は、女の嫉妬・情念を文体そのものであらわして読ませ、独特の味わいがあった。

高橋三雄氏の「大岡川」は、大人の男と女のある種のおとぎ話だが、ふとそんなこともありえるかもと思わせる不思議な魅力がある。

山本しげこ氏の「因縁めぐり」は、わがままな老母を看る老娘の話で、ドライな目が老人介護小説を乾いたものにしていて面白かった。

国方勲氏の「おっちゃん高校生」は、定時制高校に通う年輩の男性が若い級友たちを励まし助けていく話で、理屈をはねのけた読後感の良い話に仕上がっている。

北島雅弘氏の「フライパン」は前世がフライパンの夫と石の妻の話で、その発想が面白く、ユーモラスな会話のとぼけた味に好感が持てた。

他にも同レベルの作品はたくさんあり、ここに紹介できないのは残念だが、その差は、物語の展開の違いにある気がした。いい作品はその作品世界で最も起こってしかるべき出来事が、その出来事の一番もっともな運びで展開する。過去に実際に起こった出来事をただ再現したり、作者の頭の中で無理にこしらえたりすると、どうしても展開に無理が生じ、普遍に至る道筋から遠くなるのではないか。

大きな収穫

五十嵐　勉

第四回の銀華文学賞は応募数三八二篇と、昨年の二倍以上の作品が集まった。またその内容もレベルアップしていて、読み応えのある作品が多かった。豊作と言える。私の採点では、優秀賞以上のものが、二十六篇あった。これらすべてを優秀賞に推薦したいところだが、優秀賞の数は五篇前後が基準であるところから、やむをえず他に回ってもらった。したがって、優秀賞、奨励賞の差はほとんどなく、他の選考委員の推薦の強弱による結果でしかない。実に充実した作品群に接し、銀華文学賞の意義がいっそう深まった感を強くした。

当選作に推したいと思った作品は、六篇あった。「桜雪」、「荒る、海」、「クズの葉が揺れる」、「逝く者」、「船渠のメモリアル」、「銀鉛色の海」である。

時見藍人氏の「桜雪」は、認知症の母親と心中する物語を軸にしているが、切々たる文章の流れが人間の底に澱む悲哀の調べを深く奏でていて、母という存在のはかなさと悲しさが痛く浮かび上がってくる。それがゆえの人間の根の揺らぎを美しく追い詰めていくところに、一つの結晶を感じた。他の選考委員が指摘したように、「ひらかなのような風」など表現に甘い部分が多々あるものの、老年を主題にした多くの作品のなかで、その悲劇がひときわ光を放っている気がした。

「荒る、海」（木戸竜之介）、「船渠のメモリアル」（山崎敢造）、「銀鉛色の海」（山下悦夫）は、海やドックの仕事の現場での激しく厳しい格闘を、生き生きとした筆致で描いたリアリズムの秀作である。生死を賭けたその迫力には、有無を言わさない実人生のしぶきがある。素材の古さを超えて生々しい実感を浴びせてくる。大きな空間や自然と対峙する人間の緊張感があり、生きるということに肉体でもろに向き合う躍動感がある。若い人にも読んでもらいたい作品である。

「クズの葉が揺れる」（伊藤伸太朗）は、稀有な小説である。鬱病の主人公が、世界の根源的な不安感から、存在の認識を通して再度世界を把握し、生きる力を得ていく、存在心理のドラマを構築している。廃屋とそれに絡まり伸びるクズの生命力を直感し、この世界の認識の根を知覚していく過程は、濃密な描写に支えられていて、現実の根源を問う掘削感で満たしてくる。生と死のあざなわれた植物の生存感がグロテスクなまでに露出し、その生々しい呼吸によって、生きる怪奇の相が鮮やかにひろがってくる。この筆者でなければできないスリリングな喚起力が、日常の裏に潜む世界を覗かせてくれる。これは生存の根のドラマの小説であり、サルトルの「嘔吐」につながる、実存の光景を呈示している。歴史という観念の部分がない分、よりリアルであり、より我々に隣接するものとして迫ってくる。伊藤伸太朗氏のこの結実に、拍手を送りたい。

今回方法として最も注目した作品は細谷清氏の「逝く者」である。この文体は独特で、句点も読点もない、つながりからつながりを生んでいく流れの文章である。段落もない。ここには既成の、文とか、文章とかいう概念はないのかもしれない。しかし一つ一つの言葉のかたまりには手足が感じられ、強い脈絡が感じられる。現象としての日常の時間があると同時に、過去が同じ現在の時間の中に流れ込み、重層的な意識が、それぞれ生きもののように蠢（うごめ）いている。幾層もの過去の時間が同時に呼吸し、その意識の総体を形作っている。しかもそれは、ある未来――死に近づく未来へ向かって息づきながら流れている。そこには人間という単体の明晰な意識があるのではなく、それぞれ勝手に生きて折り重なっている過去の時間の総和としての存在があるにすぎない。この作品はその時間の重層の断面を鮮やかに見せてくれる点で独特であり、統一体としての個体意識以上に、複数の過去意識の集積がただ生きる意志の上に蠢いているその裸形を表出させている点で、傑出している。あ

る意味では意識の流れとも言え、ある意味では透視的、重層的な意識立体とも言える。ピカソは個人の顔の中に複数の空間表情とその内面を表現して批評家はこれをキュービズムとしたが、細谷清氏の作品は個人のその表情の中に、時間のいくつもの層を表現した時間立体の表現とも言えるだろう。方法の新しさは注目すべきで、人間の生存と足元に覗く本来の闇は、こういう方法を通していっそう露わになるはずである。

小説における真の新しさとは、風俗や流行や社会変化の新しさの表層面を追うものではなく、まったく異なった照射によって未知の世界像や未知の生命像を露呈するものでなければならない。物語や日常性のリアリズムだけを追うのではない、従来とは異なった方法を十全に駆使してしか、この複雑で多様な現代の我々の生存は捉えられない。こうした方法を我々はもっと積極的に用いるべきだろう。

「クズの葉が揺れる」と「逝く者」とは、まったく新しい世界と方法を提示した作品として、銀華文学賞の大きな収穫となった。

「空蟬」（片山郷子）は頭の奥にいつまでも蟬の鳴き声が騒ぐ作品で、その音の底に、生きる深い波立ちが確実に伝わってくる。

「竅（あな）を刳（く）る」（木村令胡）は女の執念の背後に濃い闇が覗いていて、それが時空によって薄らいだり浄化されたりするのではなく、もっと濃縮され、剛玉のような硬さを得て鬼気として息づいていることを感じさせる点で独自の世界を見せている。

「長過ぎた滞在」は、状況はおもしろいが、主人公の基盤が弱く、後になって付け足しのように主人公の背景が説明されるのでは、この重い世界の構造が支えきれていないというべきだろう。

真実の描写

八覚正大

志ある者は集まれば刺激し合い互いを高めていく。そんな人々の間にこそ新しい創意工夫が生まれ、心身の凝集によって文学的英知のエネルギーが高まるものではなかろうか。

今回は前回をはるかに上回る三八二篇の作品が集まった。質と量が相関する事実は、やはり文学にもあるのだろう。読み応えのある作品にいくつも出会った。

最後の予選を通った五六篇を読んで、私は「祖母の死」を受賞作に推した。

この作品には死を看取るまなざしがある。そのまなざしとは、優しさ・厳しさという次元を超えた、否応なく命の行く末に付き合わされた者の、他者への寄り添いのそれである。

戦災に遭い焼け出されて浜松にきた家族。しかし父は売れない浪曲師で、母と一年の大半を旅回りに出ている。そんな中で六畳と四畳のマッチ箱のような家に、中学生の主人公ボクと祖母と猫だけが住んでいる。

体の悪くなった祖母は、やがて下の世話で苦しむようになる。

《正月を過ぎたころである。布団の中で祖母が変な表情でもじもじしていた。どうやら失禁したらしい。ボクは布団をまくって「臭せえっ」と、露骨に顔をしかめてみせる。祖母は恥ずかしいのか逆に怒った顔をしていた》

主人公のボクも、なんで自分が世話をしなければならないのかと腹が立ってくる。しかし、自分しかいない中で事態に直面せざるを得ない。

《ある日、外から帰ってくると布団が空になっている。驚いて見回すと台所の床を祖母が這い進んでいた。流し台に手をかけて今にも立とうとしている。自力で水を飲むつもりだったのだ。（そんなにも飲みたいのか！）　ボクは驚きと哀しい思いで棒のように立っていた。ボクの気配に祖母はぎょっとふり向いた。邪魔するなと威嚇するようだ。その必死の形相が、そばへ寄りかけたボクをたじろがせた。鬼気迫るものがあった》。そして、祖母は金のない身から一度だけ医者にかかり人生を終えていく。

ここには、現代の介護の凄まじさはない。また声高なおどろおどろしさもない。死を飾り立てる意匠もなく観念的賛歌もない。仕方なく寄り添い人の死を独りで見切った少年のまなざしと、迷惑をかけまいと死んで行った老婆のある種の尊厳が控えめに朴訥に（けっして美しくはなく）描かれている。状況は狭く細い。しかし、ここにこそ命の伝達のリアリティがあり、介護が社会問題として取り上げられる前駆の、人間の看取りのテーマがある。

かつて介護を声高に叫んで芥川賞になった「介護入門」という作品があった。あれが介護のストレスに対する一瞬のお祭り騒ぎ（躁的な防衛）だとするなら、この作品は介護の事実を掘り起こした、まさに「風雪に耐えた言葉」による描写と言える。ラストは次のように描かれている。

《白布に包んだ骨壷を首から胸にかけて、学生服のボクはとぼとぼと先頭を歩く。周囲の人々から、たった一人で祖母の看病をした少年は褒められた。褒められるたびに少年はうなだれた。一面の菜の花畑の道を、わずか五、六人の葬列が進んで行った。遠い遠い記憶の風景である。それでも今でも菜の花畑を見ると、古傷のように胸が疼く。年を経るごとに、祖母と猫しかいなかった家が、暗く哀しく見え

てくるのである》

幾分似たような表現にどこかで触れた感はあるが、ともあれ介護の苦しさ凄まじさを人間の尊厳につなげていくための道は、このような謳い上げることのない「哀しみ」の描写への書き手の意志の持続と、自分もいずれは順番としてあの世へ行くのだという静かなる覚悟を背負って行くことなのだろう。

一方の受賞作「桜雪」は認知症の母親に寄り添い、社会の構造を憂いながら、ついに母親を殺してしまう娘の視点から描かれた小説である。文章力があり、なかなか読ませるものになっていた。

ただ《一人っ子である私が、母のために会社を辞め、自宅での介護に専念をするようになって、もう十年が経とうとしていた》とあり、主人公の思いがありすぎる気もする。作者はその主人公へふんだんに感情移入しながら、どこか作者の価値観や高いところからのまなざし（広くはあるが）まで混入させている。たとえばラストに近い部分に《再び命を吹き込まれることのない負け独楽が、「生」と「死」のグレーゾーンの中で、人生を見つめて見つめて、見つめた挙句、再生すら信じられる余裕もなく、私には何も見えていなかったのだと思った》とある。これは状況の渦中の人間には発せられない言葉ではないのか。作者の感情移入過多から、どこか謳い上げる作品になっているのを感じる。かなりの想像力と描写力を持ちつつ、それらの力と陶酔感で書かれてしまったような感を拭えなかった。

さらにもう一つの受賞作「荒るゝ海」は、船舶に使うためのオートパイロット開発に向かう青年技師の、人生の針路を決める瞬間を描いた迫力のある作品である。終戦間もなくの虚無の暗い青春から立ち直る男の見たもの、それは荒れる海のピラミッドのような水塊の壮大な光景と、その中で敢然と一人舵をにぎる砲術長の姿だった。言葉が硬い感じは否めないが、それを超えて人間の思いの丈を突き付けられた凄味はかなりのものがあった。

以下は、印象に残った作品への感想である。

「クズの葉が揺れる」　鬱の男性の回想、描写がかなりいい。しかし謎が解かれていないもどかしさがあった。

「狂い猫」　孤独な老女がよく描かれている。近所の反応のディテールがいい。しかしラストが暗い。

「逝く者」　老婆の内言語。句読点なしの文章。小説としては読みにくいが、実験的でありなかなか迫力はあった。

「ホノルルの夜は更けて」　かつての教え子の冤罪に悩む学者の姿がほほ笑ましい。教育者の良心を感じる。

「大岡川」　力はあったのだが老いてしまった男と、それに寄り添う健気な女が胸を打つ。将棋の力が見直され苦境から立ち直るが、どこかあっけない結末に感じられた。

「アカダモの樹」　豚を殺す場面の迫力はなかなかだが、樹木と豚があまり結びつかなかった。

「京鹿の子」　老姉妹の近親たちへの回想。淡々としていたが、最後まで筆力が落ちず読めた。

「竅（あな）を刳（く）る」　夫を寝取られた女の怨念話。銀華文学賞常連の作者。描写力はすさまじいほどではあるが、能に解釈を求めたところがよく伝わらず、感動にはつながらなかった。

「ピーノフカ」　沖縄の海の話。文章は相変わらず瑞々しいが内容が焼き直し。

「銀鉛色の海」　ニシン漁の現場に出たアルバイト学生の目から見た世界。臨場感あふれる現場が描かれている。漁師たちの掛け声がいい。そして少女への淡い恋心も描きこんで、なかなか読ませる小説になっていた。感動を禁じえなかった。小説の組み立てから言うなら受賞作「あるゝ海」より優れているようにも感じられた。

「空蟬」　ガンで乳房を失った女性の心がよく描けている。

「半分っこ」　老母から自立できない息子の葛藤がよく描かれている。

「鬼の手」　死んだ父親の手紙から、自分の意外な出自を知る主人公。父であった男の意外な正体と、その男に殺されたも同然の母。しかし男の懺悔の言葉は染みるように深い。凝縮された文体、人間の業を描いたなかなかの作品と感じられた。ただ状況が特殊な点が受賞という形を呼びよせない憾みはあった。

「フライパン」　自分をフライパンだったと気づく男。自分は石っころだったと思っていた妻。中年の夫婦が、自分たちの存在の意味を一瞬立ち止まって模索するような、ちょっと不思議な寓意小説。なかなかのインパクトが感じられ、さらなる発想と話の展開が期待される。

「桜前線」　親を亡くした少年と老女の北帰行。二人の死のラストはあまりに悲しいが、旅の途中での描写、食事の場面などなかなか読ませた。なぜか、往年の名画「禁じられた遊び」を連想させられた。

「輪郭の消えた男」　地味だが男の不思議な存在感はあった。ただラストは悲しい。

「二十八歳の頃」　その時代の状況と、たった一つの技術に誇りを持っていた男が、自尊心を失って行くプロセスはよく描かれていた。

「船渠のメモリアル」　高度成長期の労働者の姿、描写の迫力鮮明さには打たれた。

「傘」　不倫をし子どもまで作った父親の死と、妻子ある男と関わる主人公の娘の気持ち。描写が良かった。

「目のある光景」　前半部分の画家と主人公の女性との恋愛は惹かれて読んだ。

「鎧の男」　三十年ぶりの男との巡り会い。ラストの女の

決意がいい。

銀華文学賞へ、さらに結集していただきたいと切に思っている。それは今まで「書いてきた」ことの人生に意味を与え合うことなのではと。

作品の顔は題名

小浜清志

毎回思うことだが、まずタイトルが悪い。作品の顔は題名であり作者はそのことをもっと真剣に考えて欲しい。私の師匠であった中上健次の芥川賞作品は、「岬」である。岬という言葉から伝わってくるイメージを私はこのように想像する。海、断崖、孤独、地の果て、終焉、飛翔、などたちどころに浮かんでくる。そしてその作品には私の頭に浮かんだイメージに符合する物語が展開するのだから、読後、「岬」という題名に全てが収斂されているということに気がつくのである。題名のつけかたはいろいろ言われている。漢字とカタカナの混じったほうがいいという説もあるようだが、私の師匠は漢字二文字にしろといつもうるさかった。もちろん、それが万人に通用するわけではないが、多分、少なくとも私には、その方があっていると見抜いてのことだったと思う。ちなみに、師匠に見てもらった作品は「風の河」「光の群れ」「祈る人」「陽光」「赤いカラス」「消える島」などがあるけれど、「陽光」は私がつけた「業火」という題名をかってに直したものである。勿論、私に異義などないからそのまま単行本になってしまった。それほど、題名には神経を尖らすというエピソードを、参考にしてもらったらうれしい。

当選作の「荒るゝ海」であるが、息をもつかさずに読ませる筆力と描写力に脱帽であった。荒波を航海する船が自然の前ではいかに無力か、かつての船旅を思い出しながら小説の魅力にひたった。

次なる当選作の「祖母の死」であるが、貧しく寂しく一人の老婆が死んでいくさまを淡々と描いているところにやり切れない哀しさが漂う。国の行政官に読んでもらいたい。これまで歴史の谷間で哀しく惨めに亡くなっていった人たちへの鎮魂歌としてもこの作品の存在価値があるのだと敬服する。人は何のために生まれ何のために死んでいくのか、読み終えたあとしばし窓外を眺め思索してしまった。住まいの周りの風景などが配置されていればもっと奥行きが出たのではないかとも思える。

残る当選作の「桜雪」であるが、この作品も重い内容にあふれている。こちらの世界とあちらの世界を行き来する母を看護する一人娘の苦悩をたっぷりと書き込んであり、読みすすめるのも息苦しいほどであった。人間の避けられない老後は深刻であるだけに辛いものである。今回の応募作品には似たようなテーマが多くあった。身近であり、誰にでもありうるから今後も増えるであろうが、小説にしていこうという意気込みを期待したい。

私が今回もっとも感銘をうけた作品は「るいらん」というアルツハイマーになりかけたもと劇団員の老人を描いたもので　その手法にまず驚かされた。危うい日常から時田という主人公の輪郭が滲み出てくるさまに私は圧倒された。残念ながら他の選考委員の点が低く、私が思ったほどには評価されなかったが、傑作であると再び読みかえして確信している。

作品としては少し物足りなかったが、泣かされた内容の「おっちゃん高校生」「ホノルルの夜は更けて」はテーマの良さを活かし切れていなかったのが残念である。「ピーノフカ」の筆力は見事としかいいようがない。沖縄の作品を何作か読ませてもらったがどれも力強く新鮮であった。ぜひ今後も書いて欲しいし、その筆力を期待している。「聖橋心中」は平坦な滑りだしが豹変する迫力にこころ打たれた。「S寺の夏」も筆達者である。寺での生活は想像もつかないが、読む楽しみを充分に味あわせていただけた。修行僧の酒と女。大浴場での野合は美しい絵になっていた。まだ言い足りないが誌面の都合でここまで。来年も良い作品を期待している。

渇　水

河林　満

文学界新人賞受賞

水道代が払えない家族を
死に追いつめたものは何か
表題作と「海辺の光」など
母性と肉体の連結を希求する
気鋭の作家の力作小説集

文藝春秋
1300円（税）

重要なテーマ

大高雅博

予想されたことだが、前回からレベルは高くなり、最終選考に残るだけでも難しくなっている。また、応募も三八〇篇を超えたということで、かなりの力作が集まっていて、今回は特に激しい議論があった。

この文学賞では、幾つかの重要なテーマが現れている。例えば、戦争であり、高齢者問題である。今回、僕が注目したのはまず、その新しいテーマを持った作品、「聖橋心中」（窟原騒）である。これは全共闘時代の作品である。僕自身は全共闘世代より少し若い世代になるが、現在の学生には想像がつかないこと――学生が大学を占拠すること、機動隊が催涙ガス弾を学生のデモ隊に水平に発射するなど、そういう時代があったことを全く理解できないだろう時代の話である。僕の学生時代でも、例えば、学費の値上げも、学生の自治会の賛成がないと、上げられないというような現在では考えられないような状況があった。これらの時代のことは、戦争の記憶が風化していくのに対抗してそのころを残そうとする、それが小説化する力となるように、風化する前にくり返し語られるべきテーマではないかと考える。全共闘世代は、そろそろ、定年になる時代なので、時間ができれば、是非、色々の角度から書いていただきたい。

窟原氏に対しても次作を期待したい。

「大岡川」（高橋三雄）は余り幸せではない人生を送ってきた二人が六〇歳を過ぎて協力しながら生きていく話で、実はそういうテーマの作品は幾つか寄せられているが、たいていは悲惨な結末となる。この作品はそうではない。それがまず良い。細部も自然な流れがあり、中々の作品になっている。読後感がとても良い。

「因縁めぐり」（山本しげこ）は、「老人小説」なのだが、どこかが新しい感じがある。娘と母との関係、娘と義母とそりが合わずに別居している夫など、設定が良く、普通とは違う感じがある。それが、もっと鮮明になって、新しい小説を書いているという自覚がもっとあればよかったかもしれない。

当選作に触れよう。

「荒るゝ海」（木戸竜之介）は選者から満遍なく点数を集めた。海の情景描写がよく、また、主人公の持病が芥川龍之介の「歯車」にでてくるのと同じ症状というのが面白い。小説としてまとまっている。

「桜雪」（時見藍人）、「祖父の死」（志賀幸一）は、幾つかの欠点が指摘されたものの、何人かの選者が強く押した。選者の心に届くものがあったということで、小説の評価というものは普通の試験と違い、合格点ではなくこういう一面もある。

評価が難しかったのは、「竅（あな）を刳（く）る」（木村令胡）である。文体の迫力、完成度も高い感じがあるのだが、細部で、どこか誤魔化されているようで強く押すことができなかった。明確さが欲しい感じがある。

今回は他にも注目作が多く、題名だけあげると「フライパン」「長すぎた滞在」「船渠のメモリアル」「鬼の手」、最終に残ったものは、かなりレベルは高く、また、下読みの段階でも面白いものがあり、予選で落ちても悲観する必要はない。全体のレベルが上がっているのだ。次も、応募総数が増えるのは確実であり、ここまでくれば選者としては、逆に欲が出てくる。次は、一段も二段も上の突き抜けた作品を期待したい。

どれもが捨て難い

河林　満

今回の「銀華文学賞」選考会は、かなりもめたように思う。介護のテーマで当選作が二つ出たけれども、私は『祖母の死』を高く評価した。なぜ選考委員会がもめたかということについては、よく分からないが、候補作品の中に、例えばある職業を長年続けてきて、その職業の特殊性というものがあり、そこから小説を立ち上げているという言わば他人には窺い知れない世界を書いている作品が割合に多く見られたことも一因になっているかと思う。そういった意味では、全候補作というわけにはいかないけれども、どれもが捨て難いという魅力はあったように思う。まさに「銀華文学賞」。一定の人生の経験を経てきた人たちならではの作品の創作というものがあった。これ自体は非常に喜ばしいことであるだろう。

中上健次は、もう没後十五年を過ぎ、今なおその存在感を大きくしているけれども、小説というものについて、例えば次のように言っている。それを紹介したい。

「小説ってそんなに難しいものではない。ただ、書くことと読むことというふうに考え始めると、結構頭をひねる。小説の書き方にもいろいろある。実感的に書く人もいれば、頭をひねりひねり書く人もいる。考えたことを顕わに残す人もいれば、砂をかけて埋めてしまう人もいる。自覚してか、無自覚でか、物語の型どおり書く人もいれば、物語にいやいやしながら、結局は物語の型に収まる人もいる。物語・反物語という言葉は、言ってみれば二十世紀も終わりに近づき、世界中で根付いた感のある小説を臆せずにグルメになったり料理人になったりして味わい直したり、作り直したりしてみようという掛け声のようなもの。オートミールもあれば、フォアグラもある。炒飯もあればお茶漬けもある。初めから終わりまで、問題は食べるか作るか、そのどちらか」

つまり、何をどう書いてもいいのだが、小説の、あるいは創作の面白さというものは、絶えず現実、非現実という対立もしくは交歓、現実の中に非現実を見るというようなところにあるのではないかと思うのだ。

ノンフィクションは、現実を、事実を主人公とし、主題とするけれども、小説の創作というのは、その向こうに非現実というものを見る眼差しというものがあるのではないだろうか。例えば、アンデルセンの童話に『マッチ売りの少女』というものがある。彼女は、鬼のような両親から、クリスマスの雪の降る寒い夜にマッチを売ってくることを強要される。彼女は、街角に立って家路を急ぐ人たちに「マッチを買ってください」とはかない声をかける。しかし、誰もマッチを買ってはくれない。夜は更けてきて、寒さがつのってくる。少女はとうとう売り物のマッチを一本擦ってしまう。一瞬、マッチの小さな炎は少女の頬を赤らめ、少しばかり暖めるが、そのマッチの火の輪の中に彼女を愛してくれた死んだおばあさんの顔があらわれる。おばあさんは、少女に呼びかける。「こっちへおいで」。少女は、いよいよ寒さに我慢できずに、そしておばあさんに会いたさにもう一本マッチを擦る。やがて夜が明けて雪の上に凍え死んでいる少女を町の人たちは発見する。

哀しい物語であるが、マッチはこの時、少女の生活を支えなければならない大事な商品であった。それが現実である。しかし、その現実、マッチを擦ってしまうという現実のむこうにおばあさんの笑顔という非現実を作者アンデルセンは描くのである。その非現実を見つめる眼差しこそ、小説を書く人に求められるものではないだろうか。

したたかな人生の経験、それは重要である。同時に、人間というのは一人であがいて生きて苦しみながら、そこにどう他者が入り込むか。社会という地熱に自分という一回限りの人生を孵化させるか。さまざまな経験を小説に化身させ、どう人の心に分け入っていくか。新たなる創作の展開を期待したい。

文芸思潮　銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も文芸思潮　銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いとしたいと思います。どうぞご参加ください。

日時●平成二十年一月二十六日（土）
授賞式午後二時より／祝賀会・新年懇親会六時より

会場●三鷹産業プラザ　7F（三鷹市下連雀三・三八・四）
※JR三鷹駅南口より徒歩7分（中央通り三つ目の信号を右折）

会費・飲食費●六千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03-5706-7848 池田・日十嵐まで 090-8171-9771

選考会風景

銀華文学賞選考委員プロフィール

河林　満

かわばやし　みつる

1950 福島県生まれ
立川市役所勤務 のあと文筆に専念
中上健次に師事
90「渇水」文学界新人賞受賞・芥川賞候補
93「穀雨」芥川賞候補
他に「黒い水」「年譜」「塵芥のさなぎ」「海からの光」など多数 「渇水」文芸春秋刊
「掌の小説を書く会」「文芸いわき」主宰
よみうり・日本テレビ文化センター講師
吉野せい賞選考委員

小沢美智恵

おざわ　みちえ

1954 茨城県生まれ
千葉大人文学科卒
出版社勤務
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか　まさひろ

1954 石川県生まれ
日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

飯田　章

いいだ　あきら

1935 東京生まれ
58 早大第二政経学部卒。多数の職を遍歴
「文芸首都」会員
74「迪子とその夫」で群像新人賞受賞
87「あしたの熱に身もほそり」芥川賞候補
他に「電線」「向島へ」「初恋」など多数

小浜清志

こはま　きよし

1950 沖縄県西表島隣の由布島に生まれる
69 県立八重山高校卒業と同時に上京
　劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める
　その後も様々な職を遍歴
87 作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める
88「風の河」で第 66 回文学界新人賞
「消える島」および「後生橋」で芥川賞候補
小説集『火の闇』(集英社)

八覚正大

はっかく　まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」やルポ『夜行光の時計』など
教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉

いがらし　つとむ

1949 年山梨県生まれ
早大文芸科卒
79『流謫の島』で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材しながら東南アジアを遍歴
「東南アジア通信」「アジアウェーブ」編集長
主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞)　他の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

作家集団「塊」メンバー

第５回　銀華文学賞　作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

応募資格● 2008 年 6 月 30 日現在において 45 歳以上の者

応募規定●

400 字詰原稿用紙 50 枚前後 (20 枚くらいのものでも可)。

ワープロ原稿は A4 用紙 40 字× 30 行で印字。手書きで原稿用紙使用の場合は必ず A4 の原稿用紙を使用のこと。縮小コピー可。必ず右上を閉じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)④〒(郵便番号は必ず明記のこと / ないものは失格)・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦ 400 字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門(銀華文学賞応募作品と明記のこと)

予選通過者には通知し、希望者はインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社
文芸思潮「銀華文学賞」係
TEL&FAXO3-5706-7848　E-mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金 10 万円(受賞者複数 2 名の場合は 7 万円、3 名の場合は 5 万円)
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金 1 万円(数名)
奨励賞■賞状・賞メダル　入選■賞状・記念品

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切● 2008 年 6 月 30 日(当日消印有効)※前年より 1 カ月早くなりましたのでご注意下さい。

発表●予選通過者は 2008 年 11 月発売の「文芸思潮」26 号に発表する。受賞作は 2009 年 1 月発売の「文芸思潮」27 号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、犀利な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

荒るゝ海

木戸竜之介

東洋鋼管横浜造船所の構内を歩いて行き、正面の岸壁に訪船すべき捕鯨船（キャッチャーボート）第五松丸が着岸しているのを見たとき、黒木健一は自分の腕時計で時間を確かめた。午前十時を五分過ぎていた。タラップを上がる前に、彼はさりげなく先頭を関沢設計課長、次に担当営業の小杉さんの順になるように、自分が一番後へ回り込みながら、課長に言った。

「私は真っすぐに舵機室に降りて行っていゝですね」

課長の返事は造船所の騒音に打ち消されて聞こえなかったが、ゴマ塩で散切りの頭が頷くのを見たので、黒木はタラップを上りつめると、すぐに二人から離れ、急な鉄の階段を続けて二つも降りて機関室に降り立った。メインエンジンの右舷側の通路に出るとエンジンに沿って船尾に向かい、機関室から鉄の階段を一つ上って舵機室を覗いた。そこは船尾で、海へ突き出した部屋であり、従って床下は海で、中央に舵頭を囲んだ舵機が据えられていた。舵機は船体の大きさの割りにはひどく大きく見える油圧方式の物であり、その左端に自動操舵機（オートパイロット）の操作部（パワーユニット）が設置してあった。また、そのすぐ前から、船の首尾線と平行に機関室へ向う通路の左の壁に、パワーユニットを制御するためのリレーボックスが装備されているのが見えた。彼はそのリレーボックスの正面に、それと対面するように立ったが、忽ち足のやりばに困った。というのは、その狭い通路には縦にケーブルやパイプが通っていて縦に歩くときは、その隙間に靴が入るので普通に歩けるが、体を横に向けると、これらを直角に踏む羽目になるからであった。しかし、自分の作業服の尻で他の機械のスイッチを押したりしないのを確かめて、リレーボックスの正面の機械に寄り掛かってしまうと、案外に仕事は楽にできた。

リレーボックスの蓋を手前に外すと大人の履物より少し小さい、真鍮製の下駄のような二つの大型のリレーが並んでいた。黒木の第一の仕事は半田鏝（ごて）で、このリレーの周辺に沢山付いているコンデンサーを、回路図で確かめながら、持参した容量の小さいものと交換することであった。リレーボックスの中にはサービス用のコンセントがあるので、黒木はそこに半田鏝のプラグを差し込んで仕事を始めた。

一九五四年の秋であった。この頃、三〇〇トンクラスより小さい漁船で使えるオートパイロットは、二、三年前から、彼の所属する日本航海計器が販売していたが、六〇〇トン乃至九〇〇トンの遠洋捕鯨船に適応するオートパイロットは世の中に未だなかった。本船、第五松丸は三〇〇トン用オートパイロットのパワーユニットを特別に改造した試作品を積んだ初めてのキャッチャーボートなのであり、この改造の責任を負ったのが、大学卒三年目の若い研究所員、黒木健一だったのである。

大型商船では、舵を片方の端から逆の端まで動かすのに三〇秒かゝる。これは三〇〇トン級の遠洋鮪船でも、ほぼ同様である。しかし、捕鯨船では、端から端までを十五秒位で取れないと鯨の急速ターンについて行けない。そこで黒木は本船のパワーユニットを改造して歯車比を変え、一回り馬力の大きい直流モータを使って、端から端までを十五秒で動くパワーユニットを作り、本船の定期ドックに間に合うように納入し、既にサービス部員が造船所の技師と協力して先程の操舵機に取り付けてあった。しかし、同時にリレーの動作に要する時間を、ずっと短縮しないとパワーユニットは動作不安定に陥って実用できない。実はこのためにキャッチャー用オートパイロットは作られていなかったと言ってよいのである。黒木はコンデンサーを交換し、若干の抵抗を追加するだけで、この問題を解決する方法を見付けていた。リレーボックスは改造が間に合わず、標準品のまゝ納入し、本日の黒木自身の手による改造になったのであった。

作業終了後、黒木はブリッジへ上がって行き、操舵室側から、オートパイロットを「自動」に入れ、磁気コンパス上に取り付けた設定針路のツマミを回し、操舵室正面の窓の上に付いている舵角指示器で船尾の舵が正しく動作しているのを確かめ、更に「遠隔」にして、リモートコントロ

ーラでも舵が自由にとれるのを確認して、予定の作業のすべてを終えた。十一時四十分であった。七〇〇トン弱の本船のブリッジから見ると、右舷側の海面は意外に下の方に見えたが、左は造船所の背の高い工場のスレートの波板の壁と、無数のサッシの窓が見えるだけであり、曇り空も含め、すべてが灰色で霞んでいるような感じであった。

ブリッジの左舷のウイングの、すぐ下の甲板に関沢課長が造船所の白いヘルメットをかぶって立っており、黒木を見ると、来いと言う風に手招きをしたので、黒木はウイングに直接付いている鉄梯子を降りて行って、作業終了の報告を手短かに述べた。課長は、そのすぐ後で次のような事を彼に告げた。

本船は、この正午で定期ドックに予定されていたすべての作業が完了する。しかし、十二月からの南氷洋での捕鯨に対し、これでよいのかどうか、海上でのテストをしたい。水産会社の本社の指示で、急に本日午後出港し、明日、金華山沖で、このための試験をする事になった。金華山沖は東日本では最も鯨の居る海である。鯨を発見したら直ちに捕鯨を実行して、すべての新設の機械類の動作と性能を確かめる。鯨が見付からなければ、それに代わる演習を行い、できるだけ新設機械の洋上性能を確かめて戻ることになろう。造船所からも保証技師が乗船する事になり、今、人選中である。当社もオートパイロットの保証技師を要求されたので、お前が乗るように。

適任者は自分しかいないのは明白だった。黒木は素直に、この命令を受けた。お前の自宅はお母さんだけだったな、電話はあるのか、ときかれ、ないのでおフクロ宛に、こういう事情で二、三日帰らないと電報を打っておいて下さいと頼んだ。

急に忙しくなった。造船所から二人の技師が乗り込んで来て、更に無線機器の保証技師と黒木を加え、船長から、船内行動についての注意事項が、ブリッジの右舷のウイングで立ったまゝ言い渡された。殆どは常識的に当然の事であったが、甲板を歩く時は必ず内側を歩き、手摺りがあるからと安心して海寄りを歩いてはいけない、この命令は厳守だぞ、と言われたのが大変珍しく聞こえた。握り飯とタクアンの昼食を下甲板に座って、保証技師一同が急いで食べた。

黒木は工具箱を割り当てられたキャビンのベッドの下に入れたりしてから、操舵室へ上がって行った。見渡すとクレーンによる積荷作業がどんどんはかどっており、二時過ぎには出港可能なように見えた。こうして、二時半出港と決まり、課長と小杉さんはブリッジへ一度上がって来て、黒木に元気でな、と月並みな事を言うと降りて行き、造船所の岸壁の人垣の前の方に立って見上げているのが見えた。

出港は呆気なかった。操縦性に特に優れているキャッチャーボートなので、エンジンの回転はデッドスローのまゝであるのに、船と陸をつなぐロープが外されると忽ち岸壁との間がすき、その黒く見える細長い海面に船尾の方から白い泡が渦を巻いて入り込んで来ると、それが船を押しているかのように、船は離岸して行った。

出港前後に操舵室が満員状態になるのには慣れていたので、黒木はその間だけ、操舵室から二階下の自分のキャビンに行った。保証技師で乗船すると、普通は蚕棚のように上下に何人もの人が寝るベッドを与えられる。しかし、今回は小さな倉庫と言うか、納戸のような所で、戸棚の一番下の段が予備のベッドになっており、それを割り当てられた。恐ろしく狭いが言わば個室なので、黒木は内心喜んでいた。ドアを開けて入ると右はすぐ壁で、左に向かってやっと一畳位の床があり、正面から左へ下段がベッドであった。二段目も三段目も収納庫であるが、装備機器の説明書の類が、やゝ乱雑に押し込まれているらしいのが、戸棚の扉のガラスの所から見えていた。床の左の奥には、何か縦横高さのすべてが五十センチ程の機械が置いてあるらしく、上に麻袋のようなものがかぶせてあった。黒木は肩掛けのカバンをベッドの毛布の上に置き、足元の方へ押しやって、ベッドの頭の端から六十センチ位の所へ尻を突っ込んで座った。肩から上はベッドへ入れず、まことに具合が悪かった。寝る以外は何もできないベッドであった。

黒木は本船で仕事中、自分のいるべき定位置は操舵室中央の操舵機のあたりであろうと見当をつけていた。オートパイロットの管制器は、その右の方の壁に装備されていた。黒木はそこへ行こうと思ってブリッジへ昇って行ったが、操舵室に入って見ると未だ人で一杯であった。船長が正面の窓際で双眼鏡を持って立ち、指揮していた。操舵機の舵輪の前には操舵手がいるだけでなく、造船技師も居り、あと二人ほどヘルメットの人がいるので、黒木をいれて六人もいれば、狭い操舵室はそれでもう満員である。黒木は結局、操舵手の右後の右舷のウイングへ出る出口のドアの所に立っている事にしたが、じっとしてはいられず、ウイングへ出て前方や下を眺めた。捕鯨船なので船首はぐっと高くなっており、そこに捕鯨用の大砲の台座があり、その上に、綱がつき、先がブツリと平坦になっているモリが見られ、モリの胴体を飲み込んだずんぐりした大砲が正面を向いていた。その大砲の手前に背が百八十センチ以上ありそうな、体格の非常に優れた大男が立っていて、大砲の周辺を点検している様子であった。造船技師にきいてみると、名前は村上さんという人で、本船の砲術長だとの事であった。

第五松丸は横浜から真っすぐに浦賀水道に向かって南下しつゝあった。普段なら右手には、京浜急行電鉄沿いの街々

がやゝ遠ざかりながら見え、もう少し行けば左に順に海堡が現れる水域であるが、この日の視界は、余り良いとは言えなかった。本船の舳先が切り開いた水は、右舷のウイングに立つ黒木には右の方へ浪となって離れて行きながら、灰色とも緑色ともつかぬ鈍い色の上に、白い小さい波頭を乗せて、眼下を右後方へと去って行く。東京湾の奥の方を走っているにしては、相当、波があるなあと黒木は思ったが、余り気にしてはいなかった。と言うのは、彼は船の揺れには強い方で、滅多に船酔しない自信があったからである。

右舷前方に岬が次第に黒っぽい姿を見せ、それは船の正面に向かってぼやけ、左側前方の背景に霞んで溶け込んでいた。右の方の岬の突端から、ほんの少し左に寄った所に白い灯台が見えれば、それは観音崎に間違いなかったので、黒木はその辺に視力を集中しようとした。ところが、丁度見たいところ、灯台のあたりがうまく見えず、黒木は何回も見直した。そのうち彼はその辺に金と白金でできた先の尖った三角形がチカチカと瞬いているのに気付いた。それは未だ背景の灰色の風景に溶けていて、微かに、尖った瞬きが在るのか無いのか、定かならぬ程度に見え隠れしていた。黒木は参ったなアと思った。これは彼の持病の尖輝暗点症の前ぶれなのである。この病気は亡くなった父からの遺伝で、別名を古典的偏頭痛症と言う。黒木は十五歳位の時に初めて経験し、激しい嘔吐と頭痛に襲われてひどく苦しんだ。当時、父は私と全く同じだ、間違いなくお前は私の息子だと、変な事に感心しながら、「眠るしか対策はないよ」と言うのであった。その後、一、二年に一回位の割りで、黒木はこの発作を起こした。しかし、今日はまずい。どうしようか、冷静に考えをめぐらしながら、視線は観音崎の辺をさまよっていた。もう輝くものは輪郭のぼけた楕円状になり、その中に輝く「とんがり」が沢山見えていて、その背後は、もう何が在るのか見えなくなりかけていた。完全に目が見えなくなる前に、どうしてもベッドに潜り込まねばならなかった。

黒木は操舵室に入って行って、船長の後にだまって立ち、しばらく様子をうかがっていた。近くで見ると船長は意外に若く、四十歳弱に感じた。眉毛の濃い、目の大きな人であった。背は黒木より僅かに低く、百六十六、七センチ位かな、と思った。双眼鏡で前方針路を見ていた船長は眼鏡から目を離した。急な命令を出しそうでもないので、黒木は声を掛け、持病の偏頭痛が起き始めたので、申し訳ないが数時間、眠らせて欲しいと話すと、船長は前方を見たまゝ、頭痛だなどと言って、もう船に酔ったんじゃないのかと、軽い笑い声をたてゝから、当分オートパイロットを使う予定はないから、寝てよろしいと許可してくれた。

この病気には本来、飲み薬の特効薬があるが、発作時に

眼科医にとんで行くのでなければ手に入らず、今まで間に合った事がなかったので、今回も薬がないのは諦めるしかなく、黒木は自分のベッドに戻って、おとなしく毛布を体の上に広げて目を閉じた。芥川龍之介もこの病気を持っており、「歯車」という作品がある。彼はこの中で金色の歯車が回ると書いているが、黒木のは金色のトンガリと、もっと輝いて白金のように見えるのとあるし、右回りも左回りもあるようで、歯車が回ると言うより、チカチカと瞬いていると言うのに近かった。目を閉じると、もう、この輝くものは視界の半分に広がり、目を開けても周辺部分しか見えていないのが解った。眠れたら、うまくかわせるが、これから襲って来る頭痛の事を思うと、とても眠れず、いつものように去来する考え事の中に入り込んで行った。

終戦から、もう九年になる。この間、黒木にとって寝る事は休息ではなく、つらいことでもあった。眠りに入るまで、どうしても「考え事」を経なければならなかった。それは一言で言えば、誰でもが通過せねばならぬ「青年の課題」なのであるが、この世は生きるに値するか、人生とは何か、自分は如何に生きるべきか、私の生き甲斐は何か。人は皆、本当の答は解らぬとしても、当面の答を胸に、大人として青春の中へ出発して行く。しかし、黒木の場合、満十六歳で終戦と青年の課題とが同時に押し寄せて来た。東京の山の手に住む黒木にとって、昭和二十年前半の昼間は陸軍施設への動員、夜は空襲との闘いの日々であった。降り注ぐ焼夷弾が自分を直撃するか、とゾッとする瞬間を、幾夜も味わわねばならなかった。そして、その後、急に回りに広がる火焔との対決に専念し、緊張し続けた日々であった。終戦と共にこれらは急に消え失せて心身共に弛緩した彼は、緊張し続ける事より、弛緩した日々の方が恐ろしい事に身震いした。常に受身で生きていた黒木は、襲ってくる敵が急に消え失せたとき、恐ろしい喪失感の中に突き落とされたのであった。

彼は昭和十八年十月の雨の神宮外苑の学徒出陣式を忘れることができなかった。戦死していった先輩達に対して「私は生きている。御免なさい」と言う気持は、今も消す事ができずに、この胸にある。戦場に行く事から、日本の学生には逃げ道がなかった。「はがくれ」を読み、無理に自分の死に価値を見出そうとした。すべては無駄であった。もう、大人の言う事は信じない。黒木は昭和二十年の秋、再開した旧制高校の授業には出席せず、哲学書や文学書の乱読の中に埋没し、再出発の手掛かりを探し続けたが、急には何も見つからず、この世に絶望し、自分には何の能力もないと絶望し、次第にニヒルの谷底へ沈潜して行ったのである。こうして黒木は、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」のイワンの「とにかく三十歳まで生きて見よう。

この世が生きるに値しないものならば、それからでも遅くはない」と言う言葉を呟きながら、悄然と工科大学を卒業し、今の会社へ就職し、父の葬儀をこなし、母と二人の、見た目には平和な暮らしを続けて来た。青年の課題は何も解決していなかった。

もう九年になる。私はどうにかして私を救出しなければならない。三十歳まで、あと五年しかない。黒木は寝入る前に、やはり、今日もそう思うのであった。

もう日は暮れかけていたが、黒木は頭痛が峠を越えかけていると判断していた。と言うのは次第に吐き気が強くなって来ており、これをどうにかしなければならなかった。吐き気は偏頭痛のせいだけではないようで、先程から船の動揺が非常に激しくなり、横になっていると胃袋に加速度が加わって、胃が体内で動き、ぐっと胸の方へ上がって来る事があり、こうなると吐き気に耐えられない。頭痛はひどかったが、とにかく一度上へ出て見ようと思った。

動揺で力がかゝるが結構つかまる物があり、すぐ前の廊下には簡単に出られた。しかし、階段を上がろうとして手摺りを掴んだきり、しばらく動けなかった。階段が下から黒木を押してくるのに耐えていると、突然、階段は下へ逃げてしまい、彼は恐ろしい速さで駆け上がらねばならなかった。横へも力がかゝるので、階段は危険に満ちていた。半分、腕力で上がるように、操舵室に顔を出して見た。様子は一変していた。正面の左右の旋回窓の左の方へ、大男の砲術長が立ち、右の旋回窓に船長が立っていた。あと当直の操舵手が舵をとっているだけであった。すべての窓と両側の出入口は厳重に封鎖されていた。外はひどい音になっているのが解った。雨が降っているわけではないが、高いしぶきが常に降りそゝいでおり、黒木は右の壁のオートパイロットの下に水平に着いている手摺りを握って体を支えているのだが、それでも体は大きく揺れた。正面を見ると、波でデコボコなので水平線と言えない海面が窓に対して平行でなく、ひどい角度で傾いて見えていた。

船長は黒木に気付くと手招きしたので、壁の手摺りを伝って近付くと、黒木の耳に口を寄せて、「天気予報とは大分違って、海は時化だが目下は金華山沖へ行くつもりで航海している。ハッチは全部締め切ってあり、決して開けてはいけない。丸窓もブリッジと次の階しか開けてはいけないし、すぐ閉めろ」と言うことであった。船長は眉毛の濃い人であるが、ひどく濃く見え、異様に顔色が青白いように思えた。

黒木はすぐ階段を降り、一階下の廊下で、ブリッジのすぐ下の正面やゝ右舷よりの丸窓の所へ行った。ガラスにしぶきが粒になって付いているから、とても見にくいが、それでも黒木は全体の状況をやっと掴む事ができた。本船の

舳先が大波によって、どんどん持ち上げられていき、やがて波の頂上に達すると、舳先は一瞬空中に首を突き出したようになる。波はずんずん後ろへ下がり、船は急にガクンと頭を下げ、波を左右に切り分ける。すると本船の前方には、巨大な水の谷が見えて来て、その底へ向かって船はぐんぐんと引き込まれて行く。これには結構長い時間がかゝるように感じる。そして彼は恐ろしい光景を見た。船は舳先を下げているのに、水の底にまで達してしまうと海面は上向きに角度を変えるから、船は慣性で水中へ入って行ってしまうのだ。舳先の大砲まで、しぶきをあげて海中に入り、操舵室のある四角い建物だけが空中にあるのみで、全甲板が一度海中に入ってしまう。この時、黒木は体重が何倍かになったように床に向かって押し付けられる。その後、前方の海面はゆっくりと上り坂に変わって行き、本船の前に次第に立ち上がってくる。船は砲座を再び水上に出して、この波の坂を、やっとのことであえぎながら上り続ける。長い長い上りが終わり、昇りきった途端、再び舳先は波面を左右に切り開いて降りに移行する。これが数十秒の周期で果てしなく繰り返されているのであった。しかも、この運動のすべてが、何故かスローモーションの映画を見ているかのように、重々しくゆったりしており、目に入るすべての波面は白い泡に包まれ、泡のない海の部分を暗緑色にきわ立たせている。この光景は黒木のやっと堪えていた胃袋に直撃でパンチを加えた。黒木は右へ駆け出し、一番近い右舷の壁にある丸窓の二つの大きな止めネジを気違いのように回して窓を開けると、首を近寄せて一気に吐いた。食道が飛び出しそうで、胃液が鼻の奥に鋭くしみて、急に涙があふれ、何も見えなくなった。やがて本船は轟音と共に水面下に向かったので、黒木はあわてゝガラスの嵌まった丸窓の二ケ所に金具を掛けネジを締めた。だいぶの時がたって再浮上したときに、窓をそっと開けて眺めたが、すぐ下のデッキには何もなく、目に入る甲板はすっぽり濡れているだけで、黒木が本当に嘔吐したことは、信じられないように何もかも消えていた。

黒木は手摺りに掴まったまゝ、規則正しく繰り返される船体の上下運動に身をまかせていた。もう、あと何回嘔吐しなければならないのか、見当がつかなかった。船が急に下がる時は、胃袋は口から飛び出しそうになるし、船が下降から上昇に移行するときは、胃は臍の下まで引きずり込まれるようであり、尖輝暗点症の発作がなくても嘔吐は避けられなかったかも知れない。しかし、吐き気のひどい割りに、実は出る物がなく、結局、黒木は二回吐いただけであった。考えてみると、昼のお握りとタクアンとお茶以後、何も食べず、既に夕刻になっていたから、胃は殆どカラだとしても不思議ではなかった。吐き気がおさまると共に、激しい眠気が襲ってきた。これも尖輝暗点症の特徴である。

こゝまでくると、もうチカチカと眼底で輝くものは、すでに薄れ、その淡くなった金や白金のきらめきの向こうに、現実の景色が見えるようになっていた。黒木は竜の背中を這うような感じで、不気味な加速度が乱舞する階段を降りて、自分のベッドに転がり込み、あっと言う間に深い眠りの底へ落ちていった。

黒木は目が覚めかけた時、ひどい衝撃を感じた。何か巨大なものでベッドを横から殴られた感じであり、ギョッとして頭をあげた。第五松丸の自分のベッドにいることは、すぐ解った。真っ暗な闇であったが、音だけはひどいものであった。ディーゼルエンジンの単調な繰り返し、大波が船殻をたゝく轟音、しぶきの連続音、船のキシミなどが一緒になって聞こえていた。この時、もう一度、ひどい衝撃を受け、黒木は床にほうり出されそうになった。照明のスイッチの位置は覚えており、ベッドから手の届く所にあった。しかし、二十ワットの電灯がついた時に、黒木は眼前に有る物に、またしてもギョッとした。それは鉄でできていて、直径三十センチ、長さ五十センチ程の円筒形の本体が横になって、四本の鉄の脚が付いた物であった。モータージェネレータである。この部屋の隅に麻袋をかぶって置かれていた機械であり、通信機か何かの予備の電源と思われた。黒木の見ている前で、船の動揺にあわせ、この機械は急にツーと動きだして、ベッドの反対側の壁に激突した。みると壁の下の方も、ベッドの縁も既に割れたり、へこんだりしており、だいぶ前から暴れていたことが解る。黒木は力学で習った「静摩擦係数は動摩擦係数より大きい」と言うのを思い出した。動揺で力が掛かっても、ジェネレータは中々動き出さないが、動き出してしまうと、摩擦力が急に小さくなるので、すごいスピードになり、何かにぶつかる迄、止まることができないのだ。

黒木は時計を見て、その時刻表示が信じられなかった。真夜中の一時を過ぎているのである。眠り過ぎた。これでは職場放棄みたいなものだから、操舵室へ行こう。しかし、立った途端にジェネレータに足をつぶされるだろう。黒木は部屋が狭くて助かったと思った。ベッドの縁から乗りだして扉へ体を預けると、何とか把手へ手がかゝった。船の揺れとジェネレータの動きをしばらく窺ってから、黒木は空中を飛ぶように扉に体ごとぶつかり外へ転がり出た。床も壁も揺れているので、しばらく立ち上がることができないで、あっちこっちと倒されたが、何とか起き上がると戸を閉めた。操舵室へ上がる階段や、その手前の床は、割に明るく照明がついていたが、どれも、目に見えない方向に動揺の加速度を持っているから、魔物の住家のようなもので、あらぬ方向へ突きとばされる。手摺りから全く手を離すことができない。黒木は腕力で目に見えぬ魔物をねじ伏

せるようにして階段を昇り、操舵室の手前のチャートルームに入った。テーブル上の海図が微かな明かりに照らされているのが見える。あと、黒のカーテンをかわせば操舵室であるが、黒木は操舵室に入って、まず失敗した。

船の操舵室は、夜の海を監視する必要上、灯火禁止であり真の闇である。黒木は全く、うっかりと中央に操舵機があるのだから、その辺に手を出して掴まれそうな物を掴めばよいと思った。そうして出した手が、何かにふれたと思った途端に、その手は激しく払われ、黒木は揺れる船の中に倒され、転がされ、自分の姿勢がどうなっているのか、全く解らなくなってしまった。黒木は倒れる時、悲鳴をあげたような気がした。

「誰か」きびしい声がした。

「パイロットの技師です」

黒木は左手をムズと大きな手で握られ、すごい力で立たされた。右手が壁の手摺りにふれたので、黒木はあわてゝそれを握りしめ、両足を踏ん張って壁際に立った。

「砲術長だ。お前、生きておったか」

砲術長は舵輪を握って立っていた。黒木は、出した手がふれた巨大なものは、砲術長の体のどこかで、彼の手で突きとばされたのだという事を理解した。

村上砲術長は時化が予想以上にひどく、好転する見込みもないので、演習は中止という判断になり、本船は既に帰途についている。船長も当直士官も操舵手も、疲労と船酔いでひどい状態になってしまったので、当分俺一人でいゝと言って休ましてやった、と砲術長は豪快に笑った。砲術長の話によると、捕鯨船の乗組員は十二月から春にかけて南氷洋で捕鯨をするので、この時は船に強いが、日本から出て行く前の、今頃が一番体が鈍っていて船酔いし易いのだとの事である。機関場の方がしっかりしてるのに、こっちの連中はしょうがないと言いながら、

「お前、生き残っているのなら舵を取れ」

と黒木に言うと、もう左前方の旋回窓の方へ行ってしまった。黒木は操舵輪を握って立った。必死に大きく開けた目に前面の五つの四角の窓は何とか見える。真の闇の中でも、外は室内よりは明るいのだ。微かに青白く見える。しかし、海など見えない。操舵機の前の磁気コンパスには微かな照明が入っているから、針路を示す指標と、それに向かい合うコンパスカード上の一度ごとの目盛と、一〇度ごとの数字は、闇の中に浮き上がっている。しかし、それも指標の前で常に激しく左右に動いている。針路と言っても、平均値がどの辺かを見るしかない。村上砲術長は前方を見たまゝで、

「お前は俺が取舵、面舵と言ったら、それで解るか」ときいた。

「いえ、どっちが取舵か、面舵か、いつも大混乱です」

「そうか。当分針路は二三〇度だ。大体でよい。この時化だ。何とか二三〇度でステディーにしろ」

黒木は、はい、と答えてコンパスカードを見ながら操舵輪を回し始めた。その内、段々目が慣れて来て、外が少し見えて来た。舳先が空に向かって突き出ている時には船首が割にはっきり見えるように思えた。船首の砲座の所へは、操舵室の一階下から鉄の橋がかゝっている。それが周辺より少し白く見える。何も見えない時は船首も水没しているのかも知れない。黒木は当分外は見ない事にした。外を見ると、とても同時にコンパスを見られないからである。ところが、間もなく、とんでもない事になってしまった。動揺の中で最も大きいのがローリングと言う横揺れである。従って舵輪を回す方向がローリングの方向と同じ時は、舵輪は軽い代わりに、すごい大角度を回さねばならず、ローリングと方向が逆だと、舵輪は急に重くなってしまうのだ。それを両足を踏ん張って実行するのは容易でなく、黒木はこれは長くもたないと思った。そこで舵輪の真横に行き、舵輪の回りに付いている沢山の把手に手をかけて、自分の顔の方へ引っ張る事にした。この方が楽ではあったが、逆回しの時、舵輪の下の方の把手を引き上げる事になり、姿勢もつらいし、コンパスカードが視界の外へ行ってしまって方位が読めない。こうして、十五分か二十分で、もう黒木は限界に達し、何回か転倒してしまい、とうとう身の危険を感じ始めた。

「砲術長、オートパイロットを使わせてください」

「オートパイロットは、こんな時化でも使えるのか？　機械を壊しては駄目だぞ」

「大丈夫です。そういう使い方があるんです」

「それなら、使ってよろしい」

黒木は、まずコンパス上の設定針路を二三〇度にしてから、壁際のパイロットの管制器にとびつき、手探りでスイッチを「自動」に入れた。さすがに自動操舵は、黒木の操船とは大違いで、二三〇度の目盛は指標から一五度位の範囲には、いつも入っているようであった。黒木は左手で操舵機の脇についている手摺りを掴み、右手でパイロットの下の壁の手摺りを掴み、正面を向いて仁王立ちになった。この姿勢なら、今迄で一番楽であり、夜が明けるまで、この姿勢で動揺の加速度と闘うしかないと思った。

黒木は管制器の中でリレーが働くときのゴツゴツした打音を、時化の海の轟音の中から、識別して聞いていた。その音が正常であればコンパスから時々視線を他の方へずらす余裕ができる。

黒木はさりげなく、自分の右側すぐ後の、今は閉めきったドアのガラス窓の方へ、ちらっと目をやった。暗闇に慣れてきた目に、何か白いものがガラス窓の外を通って行くように見えたからであったが、見直すと何も見えず、ただ

暗黒の虚空があるだけであった。そのうち、正面の五つのガラス窓の上の方でも、時々何か白いものがゆっくり動くのが感じられた。何となく不思議な気がしたので、黒木は膝を少し曲げ、両手はしっかり手摺りを握ったまゝ、動揺に合わせて腰をゆすりながら、時々意識して右の戸のガラス窓の上の方を見上げるようにしていた。今度は見えた。しかし、それが何かは解らず、ただ白い泡のようなものが、右舷上空の遥か高い所をゆっくりと右後方へ移動して行くのを見た。あれは何だろうか。もう黒木の疲労はひどいものであり、意識も多少朦朧としていたかも知れなかった。黒木は時々右舷のガラス窓の上の方へ、淡い期待のような思いを寄せて、視線を走らせた。二度目にキャッチした時、それはどうも波頭であり、白く砕けているのだと思われた。でも、その時も、それが一体何を意味しているのか、全く気がつかなかった。三回、四回と、偶然にその白い物が行くのを見ているうち、突然、黒木はそれが何であるのかを理解した。本船が海面の長い巨大な昇りの斜面をあえぎながら昇って行って、舳先で水の頂上を左右に切り裂いたあと、本船は地獄の底へ向かうかのように、前方遥か彼方の波の底へ向かって降り始める。そのとき、右の波頭は本船の船首を離れてから、右の上の方へ斜行して、ずっと上がって行き、右舷の窓からやっと見えるような遠く高い所を、ゆっくりと本船の後方へ去って行くのであり、その頂上の砕けた白い波頭が、黒木の見たものであった。言い換えると、波の頂上を舳先が左右に切った時にできた波頭を頂点にして、クフ王のピラミッドのような海水のピラミッドができてしまう。それは船が谷へ向かって下がるほど、相対的には聳えて行く。この巨大な水のピラミッドが本船の右舷をゆっくり通過して行くのであり、黒木の見た白い波頭が本船のマストより高い所を通って行くとき、その白い波頭と本船の間には、暗くて見えないが、右上がりの水の斜面が続いている筈なのであった。黒木は目を閉じて自分の理解したものを瞼の裏に描いてみた。それは壮大な光景であった。波頭と船の距離は百メートルに及ぶだろう。このピラミッドの持つ質量は巨大なものである。その上、この辺の水深は千メートル位はあるだろう。

今、この海が本船を飲み込むつもりになれば、それは何でもない事なのだ、という事がとてもよく解った。それは理解したのとは違っていた。納得させられた実感があった。この船体が、無限に続くような繰り返し応力に耐えきれず、どこかが破損すれば、第五松丸はあっけなく奈落の海底に引きずり込まれるだろう。そうなれば海神の如き村上砲術長と言えども、どうしようもないであろう。そして私自身も。その私自身も、という思いが、全く恐怖も悲しみもなく湧いてきた事に、黒木は不思議な気がした。

黒木は手摺りで体を支えたまゝ、船と共に揺れているのに

慣れて来ていた。白い波頭の意味するものが解った時から、黒木は何か、心の奥の方でホッとするもの、解放感に似たものが生じているように思った。そのせいで、自分は何も怖くないのだろう。毎日、私は自分の人生を無駄にしないために、どうすべきなのかを、考え続けて来たが、それは自分の生命の責任を一身に負うのと同じ事であった。しかし、今夜、私は自分の生命を守る事ができない。私の運命は嵐の海に、あっさり握られてしまった。そう思ったとき、私は自分の生命の責任から解放されたとも言える。その解放感だろうか。しかし、そうだ、と素直に言えないものもある。もしそうなら、普段の私は自分の生命の重さに圧し潰されながら生きていたのか。そんなつもりはないと、黒木は思う。

今夜、私には快い緊張感がある。そのせいだろうか。終戦後、平和が訪れたとき、緊張せずに過ぎる日々の中で、弛緩してしまった自分に驚き、緊張していなければ精神生活と呼べるようなものを保持できない事に愕然とした事実は、その後ずっと身にこたえている。今夜、私は空襲の夜、赤くなった夜空にB29のピンク色に輝く大編隊が真上を通過して行った時と同じように張り詰めた気持ちでいる。それが今は、むしろ、嬉しくさえある。私は今夜しっかりと生きていると、黒木は思える。弛緩した日常の精神状態から緊張の中へ「解放」されたのだろうか。だが、「緊張の中への解放」と言うことは有り得るのだろうか。

それも違うのかも知れないが、この戦後の平和な九年間、私は自分の生命を他者にまかせようとした事はなかった。それは、かえって自分の生命を粗末にした事にならないだろうか。平和の中でも、生命をかけた冒険はできるだろうに、本日、保証技師に選ばれ、偶然時化の中に突っ込むまで、いつも生命を大切に抱きしめて、危険にさらさずに来た。それは本当に生命を大切にして来たと言える事なのだろうか。危険を覚悟で命懸けで必死に生きる事の方が、本当に生きる事ではないのか。私は、今夜、肉体は疲弊していても、精神は普段より生き生きとしているではないか。

動物だってチーターはサバンナを時速一〇〇キロで走ってこそ、「輝いて生きている」のではないだろうか。霊長類に属する「ヒトと言う生物」も、せい一杯、ヒトらしく行動してこそ、生きていると言えるのではないか。全速のチーターのように必死に行動してこそ、「人生」と言えるのではないか。己れの「生き甲斐」が見つからないからという事は、行動しない事の理由にはならないのではないか。「行動」が人生では「考え込む事」より前になければいけない事だったのではないだろうか。

もう九年になる。もう無駄に費やす時間はない。結論は何一つなくても、もう走り出す事を優先すべきなのではないか。そうでないと生きている事にならない。では何をすべきか。私は、まだ何も知らない。今は本船を無事に帰港させるのに全力を尽くす事だろう。それが「今夜を生きる」と言う事ではないか。こうして、日々その日の糧を得るためだけでもよい。全力投球で生きて見ろ。そういう生き方の中で考えなかったら、人生を理解する事はできないのではないだろうか。「必死に行動し続ける本物の人生の中で得た事、考えた事だけ」が私の信ずるに足るものなのではないだろうか。

前方の五つの窓から見える遥か遠い海面が、時々映画でも見ているようにチラリと鮮明に見えた。初めは、それがはっきりしないので、黒木には、これも中々理解できなかった。段々に解って来る。本船は波高が本船より高い波の中を航走しているので、偶然、本船が波の頂点付近にいる一瞬だけしか遠目がきかないのだ。あと大半は金ダライの底から見ているようなもので、すぐ近くの水しか視界に入って来ない。そして遠目のきくときに、偶然右の方から灯台の光が来ている時に、それに照らされた遠くの砕けた水平線が目に入るのであった。いつもしぶきをかぶってはいるが、雨は止んでいるらしく、随分遠くまで見える瞬間がある。偶然、本船が波の頂上にいる時、見事に灯台に照らされる時が出て来た。随分遠い筈なのに、黒木から見ると灯台は近く、しかも高い山の上にあるように見えた。灯台の桁違いの明かりは、暗闇に慣れた黒木の目には痛くて、灯台の光が、サーチライトの道になって離れて行くと、しばらくは海が全く見えなくなってしまった。黒木は思わず小さな声を漏らした。村上砲術長はそれを聞き逃さなかった。

「灯台の光は見るな！　前方の海から目を離すな」と言う声が戻って来た。

「はい」

砲術長は、しばらく海図室へ行き、やがて戻って来ると、操舵機の舵輪の前に立ち、「針路二一〇度」と言った。

黒木は針路設定ノブを動かし、船首方位が二一〇度を中心に左右に振るようになるのを見定めてから、

「二一〇度になりました」と答えて、

「野島崎の灯台ですね」と念を入れてきいた。

「そうだ。普通、白浜の灯台と言うがね。針路二三〇度で来たにしては、ずっと陸に寄ってしまったので、しばらく二一〇度にする。少し離せばいゝ」

灯台とは、こんなに懐かしいものだったのかと、黒木は時折本船の上空をサッと通過して行く光を見ながら思った。灯台の光は時化の海から見上げなければ、その心強さ、有難さは解るものではなかったのだ。それに野島崎沖と言えば、もう東京湾の入口も近い。黒木は灯台の光を飽かずに味わい続けているうち、東の海面のすぐ上の空が青白く

なり始めているのに気付いた。黎明の時刻になっていた。
チャートルームから船長が入って来て、黒木を見ると「オヤ！」と言うような顔をしたが、何も言わず、村上砲術長の所へ行って話し始めた。二人の会話は時化の海に消されて黒木には聞こえない。そのうち、船長は右側の旋回窓の所へ行き、窓の下に付けてある箱の中に金属製の見掛けない瓶を立てゝ入れた。村上砲術長が近付いて、その瓶から直接何か飲んでいた。砲術長は急に黒木を見ると、
「キャプテンが水を持って来てくれた。お前も直接口を着けてよいから飲め」
と言って瓶を箱へ戻した。そう言われると、黒木は昨夜から何も飲んでいない事を思い出し、手摺りに掴まりながら箱の所へ行って水を飲んだ。加速度で水は急激に口に入って来た。普通の瓶に比べて口が大きかった。すぐ左にいる船長に、黒木は
「珍しい瓶ですね」ときいた。
「南氷洋の帰りにケープタウンに寄った事があってね。水筒にいゝと思って、その時に買ったんだ。多分ラム酒でも入れる瓶じゃないかなァ」
船長はずっと海を見ながら言った。
「いつからオートパイロットで走ってるんだ？」
黒木は、真夜中の二時頃だと思います、手動操舵では私の体力が不足でしたので、と答えると、船長は黙って頷いた。
船長がリモートコントローラーで操船して見たいと言われたので、黒木は管制器のスイッチを「遠隔」に切り換えて、リモートコントローラーを船長に渡した。船長は左手で操舵機の左側の手摺りを握って体を安定に保ち、コントローラーを右手の掌の中へ入れるようにしてツマミの横へ親指を添えて、ツマミをゆっくりと回しながら、正面の窓の上の舵角指示器を見た。命令通り舵が取られるのを確認すると、今度はコンパスへ目をやり、二百十度に針路を保つよう、操船した。十五分位たった頃、船長は、
「とても具合よく操船できる。漁船では、どんな使い方をしているのか？」ときかれた。
漁船では網の入れ揚げに際して、リモコンを船の舷側まで持って行って網を見ながら操船する。小型貨物船では接岸する方のブリッジの端から顔を出して、岸壁と船の間隔を見ながら操船するなどと話した。ただ、接岸に使うと、万一パイロットにちょっとした故障があっただけで、船をぶつける心配があるため、接岸には使わないと言う慎重な船長も多い事を伝えた。
船長からは、リモコンのコードの長さには制限があるのか、との質問があった。黒木がキャッチャーの寸法なら、船内のどこまで、伸ばしても問題ないと答えると、この冬の南氷洋でよく検討して見るが、大砲の近くの砲術長の隣

に立って操船するか、マストの上の見張台で鯨の水中の姿を見ながら操船できると捕鯨はやり易いと思う。次の春に意見を伝えるからコードの長さを変えて貰いたいとの事であった。船長は、「わざわざ一晩航海したが殆ど何の試験もできなかったようなものだ、しかし、オートパイロットの実用試験だけはできたな」と言って黒木の肩をポンと叩いた。
結局、平砂浦の沖を通り、洲崎を回るのに二時間近くかゝった。洲崎をかわして館山湾内へ向かうと、急速に波は静まっていった。黒い雲が、まだ沢山ある空ではあったが、透き間だらけで太陽の光が筋のようになって海に差し込んでおり、そういう所から海の上にこちらへ向かって金色の反射光の道ができていた。しかも波が金色に輝くすぐ前の波間に、紫の蔭ができて、海を油彩画のように見せていた。
船長は、全員を起こして来ると言って、下へ降りて行った。
村上砲術長は右舷へ寄って、エンジンテレグラフの磨き上げた真鍮の把手をチリンチリンと音をだして回し、後進に入れた。すぐにエンジンルームから応答があり、やはりチリンチリンと鳴って指針も後進を指して止まった。船の行き足を止めようとしているのだが、つい先程までもデッドスローであったから、第五松丸は注意して見ないと、進んでいるのかどうか解らない位であった。湾の入口の右の岬の先には、以前に黒木がヘリコプター用計器の実験の時、ヘリで降りた事のある小さなヘリコプター用の飛行場が、黒木の目の高さの所に広がって見えていた。
村上砲術長は前方の湾内を見据えたまゝで、
「パイロット中止。手動に切り換えろ」と命令してから、
「昨夜の事は誰にも口外しないように」と言った。黒木はオートパイロットを「手動」に入れ、舵輪の把手を一押しして、その応答の手応えを感じながら、砲術長の言葉の意味が解らず、
「はい？」と変な声を出してしまった。
「本船では、夜、時々、俺が一人で当直に立って、オフィサーや甲板員を寝かせてやる事がある。昨夜も結局、そうなってしまった。だが、事情を知らない人に誤解されて、キャプテンやオフィサーに迷惑がかゝるといけない。だから、お前は俺一人だったなどと言ってはいけないのだ。何も知らない事にしておいて貰いたい」
「解りました」
「キャプテンが皆を起こしてきたら投錨する。体制を立て直して横浜へ入港するまでには、まだ、数時間かゝるだろう。君はそれ迄、ベッドで眠りなさい」
村上砲術長は、この時、振り返って黒木の顔をしっかり

と見た。にこやかな微笑が、その顔にあった。

「御苦労であった。今後も訪船の機会があれば、俺を訪ねて来なさい。もうすぐ、朝飯の用意ができる筈だ。いつでも食べに行きなさい」

黒木は何故か、万感の思いが込み上げて来て、深々と砲術長に頭を下げると、そのまゝ海図室を走り抜けて階下へ降りた。この時になって黒木は自分の足元がひどく悪くなっていて、殆ど廊下を真っすぐ歩けないのに気付いた。長時間、動揺と闘った為に、三半規管がおかしくなったのか、疲れ過ぎているのか、よく解らなかった。黒木はもう一つ、階段を降り、自分の部屋に跳び込んだ。モータージェネレーターがベッドの入口で邪魔をしており、ベッドの縁も砕かれてしまっていた。しかし、黒木には、もう、それをどける力は全く残っていなかった。這うようにしてジェネレーターを跨ぐと、黒木はそのまゝベッドにもぐり込んで、毛布を胸まで引いた。

黒木はまたも、終戦以後の自分の虚無の中の暗い青春を回想した。そしてその中には、今度の航海のような経験は一晩もなかったと思った。昨夜経験した沢山の事が新鮮に脳裏に蘇って来た。考えて見れば黒木が操舵室へ上がって行く迄、村上砲術長は舵輪を握って、たった一人で、一番大切な前方監視に努めていたのだ。機関場を含め、合計数十人の昨夜の乗員の生命と、高価なキャッチャーボートの管理責任を、キャプテンの分まで一人で平然と負っていたのだ。村上砲術長は、昨夜も見事に「彼の人生」を生きていたのだ。黒木は九年前に「もう大人は信用しない」と決めて、戦前の自分と訣別したつもりであった。しかし、この人をも信じないのは、どうか。この人は時化の海との格闘の中で、黒木の九年前からの信念を揺るがせてしまった。彼は黒木が模範として生きるに値する人に思えた。そういう人が存在したのだ。黒木は自分が余りに観念的に生きていたためにこういう人が見えなかったのだと思った。

まだ、青年の課題は何も解決していない。しかし、当面の目標を村上さんのような海の男達の航海安全に役立つ航海計器の研究開発に定め、それに全力で立ち向かって見よう。自分なりに全力を尽くして生きてみるのだ。平和の日々の中にいても、自分の精神の緊張状態を保つために、自分の心だけは怒涛の中に置いて生きて行こう。

恐るべき睡魔が襲って来た。忽ち両手も両足も何キロかの重りを着けられたかのように重くなり、ベッドへ押さえつけられてしまった。黒木は瞼の裏に、もう一度、あの波頭を見た。それは白く砕けながら遥かに高く右後方にゆっくりと上がって行く。それと共に黒木は眼前の暗黒の水の谷へ、本船と共に吸い込まれて行くかのように、深い眠りの底へ沈んで行った。

受賞の言葉

木戸竜之介

私は若い頃、文学青年で、短編小説や随筆を少し書いた時代があり、勤務先の会社の文芸部の機関誌には投稿していましたが、それ以来四十年、文筆活動をしたことはありませんでした。私はその会社で五十年以上も研究開発に従事していたエンジニヤです。一昨年、七十五歳になるので退社させて欲しいとお願いして会社を去り、その後、初めて書いた短編が「荒るゝ海」です。

第四回銀華文学賞の募集要領は、応募資格が四十五歳以上となっていましたし、「シルバー世代の底力を見せて下さい」と書いてあるのに勇気付けられて応募する事にしましたが、まさか当選するとは思ってもみませんでした。正直に言って、とても嬉しかったし、元気が出まして、では命のある間、もうしばらくペンで仕事をしようという気持ちになった事は本当に有難いことです。

私は満十六歳で第二次大戦の敗戦に出会いました。ずっと東京におりましたので、空襲で痛めつけられた上に、敗戦後の思想的衝撃にさらされ、更に食糧難のため餓鬼の心理も解りました。これらの体験が私の精神構造の基盤を作ってしまいましたから、私は今も心の片隅に戦後を引き摺っており、ペンを取れば自然に青春の主題を取り上げてしまう事になります。「荒るゝ海」も、七十八歳の老人の瞼の裏に今も浮かんで来る遠い昔の自分の姿です。壮年の時代にも、たくさんの主題があったではないかと、自分に言い聞かせるのですが、強烈に思い出すのは、暗黒の青春時代の事ばかりです。この世を去る前に、本当の大人として生きた壮年時代を主題にした作品を書かなくてはいけないと、受賞して、ますます、思いを強くしました。

私の作品を真剣に検討評価して下さった選考委員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

木戸竜之介

きど　りゅうのすけ

1929年(昭和4年)東京生まれ。78歳

1951年　東京工業大学応用物理科卒業

同年　(株)東京計器〔現(株)トキメック〕入社。ジャイロ研究室勤務

1968年　工学博士(東北大学)

1979年(株)トキメック取締役。那須研究所長

1989年　同社取締役退任。顧問就任

2005年　顧問退任。退社

この間、船舶用ジャイロ、オートパイロットの研究開発に従事。「造船学会賞、造船工業会賞」(1966)他、受賞多数

1987年　紫綬褒章(ジャイロ装置の発明)

栃木県那須塩原市在住

小説集

夏の鶯（うぐいす）

清松吾郎

銀華文学賞奨励賞 **幻の季節（とき）**

銀華文学賞優秀賞 **命の宴** 収録

人生の哀感、生きることの悲愁……
諦念の底から漂い包んでくる夢幻の芳香。
清松文学のぬくもりは深淵に根ざしている。

かりばね書房

1500円（税込）

ご注文は TEL03-3959-3228

文芸思潮バックナンバー

第1号（創刊号） 2005.1 ¥1000
銀華文学賞発表
文芸評論家座談会「日本文学の衰退をどうとらえるか―再生は可能か―」
井口時男・富岡幸一郎・菊田均・山崎行太郎
原爆特集「暗闇の中から」桑原千代子／「核の信託」五十嵐勉

第2号 WAVE 2005.4 ¥500
特集・老年と葬儀／五十嵐勉「「帰郷者」の栄光と悲劇」

第3号 2005.5 ¥1000
ラビンドラナート・タゴール「日本訪問記」
井口時男「現代の犯罪と文学」
五十嵐勉「ノンチャン、NONGCHAN」

第4号 WAVE 2005.7 ¥600
特集・戦争と記録／下山良行「金閣寺亡命」／斎藤澄子「質問してもいいですか」

第5号 2005.8 ¥1000
特集・戦争と人間
八覚正大「イエロークラスター」／河林満「卒塔婆を売る男」
古居みずえ「私が見た抵抗のパレスチナ」

第6号 WAVE 2005.9 ¥600
特集・郷愁／二宮英郷「砂山」／小佐美智子「我が心のギレスン」

第7号
第一回文芸思潮エッセイ賞発表　本間美紗子「ヌヌ」／小浜清志「親方・師匠／中上健次」／五十嵐勉『風の色」／山脇正邦「未遂」／山岸恵一「ガス壊疽」／仲間秀典「封印」

第8号 WAVE 2005.12 ¥700
第一回現代詩賞発表／野中美峰「アメリカ詩のマーケット事情」

第9号 2006.1 ¥1100
第二回銀華文学賞発表
文芸評論家＆作家座談会「テロと２１世紀」
　井口時男・山崎行太郎・河林満
八覚正大「零度の遊び」

第10号 WAVE 2006.3 ¥700
鈴木英夫「かけおちシンデレラ」／前岡光明「蝋梅の香るとき」

第11号 2006.5 ¥1100
対談「立ち上がる文体」小川国夫・井口時男
特集・飯田章
富岡幸一郎「批評と文学創造」

第12号 WAVE
特集・リストラ／つるみみつる「ギフト」／福田志緒「私の選んだ道」

第13号 2006.9 ¥1100
第二回エッセイ賞発表
特集・同人雑誌からの文芸復興
座談会＝三田村博史・千葉龍・森啓夫・尾関忠雄
インタビュー＝大河内昭爾

第14号 WAVE 2006.12 ¥700
第二回現代詩賞発表／清松吾郎「命の宴」／鈴木みい「航跡」

第15号 2006.9 ¥1100
第三回銀華文学賞発表
座談会＝「暴力的な現在」井口時男・山崎行太郎・小林広一・河林満
原石寛「雪女郎」／中野睦夫「餌食」

第４回銀華文学賞第３次予選通過者

「朝妻八風剣始末」梅村芳住
「庭木剪定悶絶帳」戸野本和行
「幻のお光」　小泉裕一
「縄をなう」　安芸　遥
「禁漁」　原　久人
「未完の肖像画」　杉本宜子
「これから始まる」内田　潔
「夕影」　服部龍治
「トルストイの車輪」木山きよし
「明日への道のり」田中勁一郎
「永く緩やかな坂道を」湯本もゆ
「長靴」　波佐間義之
「茶房『爛柯』」　竹内英美
「兄貴の背広」　北里　啓
「とよ」という名の草」平山浩己
「眩暈」　沖野健治
「石の、まほろば」藤原邦洋
「金繍の雀」　松田征士
「分かれ道」　森　幸夫
「価値観の相違ですから」未森玲央
「Ｎの呼ぶ声」　小野寺　勇
「八十歳のアダムとイブ」　麻屋与志夫
「墜の中」　五味えり子
「猫の手タクシー」栗栖ひろみ
「恢復」　佐藤義弘
「老いたロマンチスト」志田　植
「島流し」　鈴木英夫
「黒い流れ」　佃　陽子
「野良犬ゴンダ」　前岡光明
「海のくれた贈り物」藤野秀樹
「残照」　凪葉
「追いつめられた殺人者」　森田　薫
「たくらんけ夜曲」梨場貞人
「港のマリー」　不理　満
「羅府亭の狸」　福田　敬
「鏡の噂」　芦川宏昭
「ハヅキ」　山本淳一
「そのときはよろしく」　椿山　滋
「惚けちゃったのかい？」　安保美智子
「夢見るマリガリ峰」龍宝
「橋の上から」　丸山　史
「回転木馬」　文月はつか
「エバー・グリーン」半井澄子
「手まり花」　北川　佑
「凍えた部屋」　福田静代
「柔らかい土」　針生宏子
「五十年目の贈り物」南田作一
「プールサイド」　寺島ゆり
「クズの葉が揺れる」伊藤伸太朗
「講和条約発効の思春期」　ごとう しんぞう
「意味」　ヒロロ
「狂い猫」　堀田利幸
「やぐら太鼓」　七浦とし子
「長すぎた滞在」　福迫光英
「祖母の死」　志賀幸一
「鬼の子」　黒澤晴美
「荒るゝ海」　木戸竜之介
「逝く者」　細谷　清
「ホノルルの夜は更けて」　高橋惟文
「大岡川」　高橋三雄
「アカダモの樹」　吉阪市造
「幸せ巡礼旅」　大原伍郎
「因縁めぐり」　山本しげこ
「京鹿の子」　志村晶子
「竅を刳る」　木村令胡
「ピーノフカ」　牧港誠之
「七夕様」　舞出　勉
「石の鷺」　来の宮あんず
「たそがれは茜色」高辻貞夫
「いまさらめく」　あやのはじめ
「妖魚変容」　つるみみつる
「揺れるピアス」　小野友貴枝
「銀鉛色の海」　山下悦夫
「スクーリング」　西沢喜文
「煙の行方」　廣江智美
「酔い処」　花村地面
「ダッカ駅裏の貨車」三好洋
「空蝉」　片山郷子
「半分っこ」　児玉照夫
「岩魚淵」　羽田俊三
「ブラッド・エクスプレス」　今井良一
「シーズンオフ」　平塚壮吉
「桜雪」　時見藍人
「鬼の手」　江口久路
「フライパン」　島木田久磨
「おっちゃん高校生」国方勲
「聖橋心中」　窟原騒
「桜前線」　大林　豊
「長い回廊の向こう側に」　室町　眞
「輪郭の消えた男」内海深山
「最後の女」　坂本つばさ
「あなたはどなた」柏倉敏之
「リマインドの旋律」藤森敬一
「二十八才の頃」　外狩雅巳
「雪解靄」　神通明美
「船渠のメモリアル」山崎敢造
「傘」　平井利果
「真冬日」　田島朝美
「鯉と老盗」　北条かおる
「目のある光景」　今井　夕
「るいらん」　坂下光一郎
「臨終記」　平野ゆき子
「Ｓ寺の夏」　岩澤あきら
「鎧のおとこ」　古厩志津子

第四回　銀華文学賞当選作

桜雪

時見藍人

やや薄暗くなった長い真っ直ぐな帰り道に街灯の灯がともる。走る自転車の色気ない影が長く伸び切った午後四時。そろそろ認知症を患った母が、目を覚ます時間である。買い物帰りの私は、自転車のペダルを漕ぐ足に力を込め、家路を急いだ。

私の家は、この最後の直線道路を先へと行った、同じ間取りの3LDKの古い木造平家が立ち並ぶ、その集落の一番奥にある。道の両側には焼杉の門と低い柵が続く。どれも築二十五年以上という少しばかり傾きも見られる公営住宅で、それぞれの小さな庭には山茶花やシクラメンと、冬の訪れを知らせる淡紅色の花が揺れるものの、集落にはどこか寂れた雰囲気が漂っている。

私は脇目も振らず自転車を走らせ、家に着いて玄関先に自転車を停めると、すぐに買い物袋を手に持ち、体ごと重い玄関扉を引いて、バシャリバシャリと音を立てながらつれない「静けさ」に入った。

幸い母はまだ家の中をウロウロと歩き回りはしていなかったが、靴を脱いで板戸を開けて見ると、日差しの翳りはじめる味けのない寒い障子で閉め切られた六畳の居間には、七十歳になる認知症の母が、既に蛇の鱗を残した寝巻姿で正座をしながら卓袱台を見つめ、破れた窓の障子紙の隙間から洩れる薄明かりに影絵となって、一人仄暗い中に

不気味な微笑を浮かべていた。

私は居間に足を踏み入れるとまず庭に面した大きな障子を開け、さらに部屋の空気を入れ換えるためにガラス戸も開けた。空瓶のような部屋にひんやりとした風がスーッと入ると、母は待ち侘びていたようにいきなりヒョイと立ち上がり、黙ったまま私を通り過ぎて、サンダルを履いて庭に出てしまった。母にとって、私の存在はもうないものに等しかった。私は母から目を離すことができず、縁側からずっと目で追い掛けた。

「母さん、庭から外へは出ちゃダメよ」

認知症のために被害妄想が激しくなっていた母が、近所を徘徊し、何かと言い掛かりを付けては、近所の人とトラブルを起こすようになっていたからだった。私の知らない間に遠くの町までふらふらと歩いて行ってしまい、徘徊しているところを警察に保護されたことも二回あった。その度に、唯一人の家族である娘の私は、取り敢えず一つ一つ頭を下げて回り、下を向いては足下の数を、意味もなく三つ数えていた。年をとれば誰だって多少なりとも人に迷惑を掛けるものだという考えと、世の中の年寄りに対する理解の少なさに、私には悪いという気持ちはあまりなかったのだ。

近所ではもう母は、「汚いばあさん」「気が触れたばあさん」で通っていた。異常と思われても仕方のない発言と行動以外、外見は何の変わりもないから、周りの者には母が病であるとはわかりづらかった。しかも散歩をする母にとって、集落を貫く真っ直ぐな道路には隠れる所はなかった。どの家の玄関も居間も道路に面していて、誰が歩いているのかは丸見え状態で、さらに道幅四メートルでは近所の冷たい視線から逃れ様もなかった。私たちは週に二、三回、そんな中を歩いている。道端で立ち話をする近所のおばさんたちは、近頃になって金銭的な理由でパーマもあてられない、私の素人カットの頭に少し寝癖が残り、それに加えてどことなくだらしなく見える着物姿で散歩する母を見つけると、端から見ればその貧しい生活に汚くなった身形（みなり）と少し異様な雰囲気からか、一様に声を急に落とし、皆それなりのにこやかな会釈はしてくるものの、私たちが通り過ぎれば「嫌ね、どうにかならないのかしら」「でも可哀相よね、本当に」などと、あまりにも露骨な陰口をたたくようになっていた。私はそういう陰口に、「母さんは汚いものなの？　汚いものと綺麗なものとはどこから分けるの？」と頭に血が上るような思いをしながらも、こちらも迷惑を掛けているのだからと、出来るだけ聞き流すようにはしていた。しかし、そういう親からどのように聞かされているのか、下校途中の小学生の子供たちですら、「あのおばあさんには近づかない方がいいよ。何をされるかわかんないからね」と馬鹿にする有様で、時には「汚いとい

うことは、まだ生きているということなのよ。汚いものから学ぶことだってあるのよ」と、強く言い返したくなることもあった。言葉に傷つき、言葉に泣き、でも本当はそんな時にでさえ、心の中では悔しい気持ちとは別に、「母さんの理性は失われてしまったのかもしれないけれど、感性はまだしっかりとしているんだから、人生の先輩には最大限の敬意を払って接して欲しいわ」と、すがるような思いで身勝手なお願いをしていたのだった。

こういう苛立ちが長い時間に少しずつ積み重なってくると、私は段々と物事を窮屈に考えるようになってしまい、もともと母子家庭から母が水商売をしていたということで周囲とうまく打ち解けられずに、かなり以前から挨拶程度の付き合いではあったが、今では私も近所との接触をほとんど断ち、もはや近所では孤立した状態にあった。私の方にも、ぬくぬくと生きているものへの、いや既に心のどこか片隅に、「生」そのものに対する投げやりな拒絶反応があるのかもしれなかった。

一人っ子である私が、母のために会社を辞め、自宅での介護に専念をするようになってもう十年が経とうとしていた。最初に母の様子がおかしいと感じたのは、昔からの掛り付けの医者の所へ行こうとして、場所がわからずに帰って来た時だった。何年も通い続けた、知らないはずのない場所にどうしても行けないというのだった。そのことがあってからは、銀行にお金を引き出しに家を出ても、途中で何をするために家を出たのかわからなくなって戻ってくるなど、どんどんと母の物忘れは酷くなっていった。それでも私は、母を病院に連れていく程のことはないと思い、年齢相応の物忘れだと安易に考えていた。そんなある日、いつものように私が仕事から帰ってくると、玄関先にいた母が、「どちら様ですか?」と聞いてきた。その瞬間、私は何とも言えない恐怖に背筋が凍りつき、大きなショックを受けると共に、母に只事でない事が起こっていると初めて感じとった。そしてずっと躊躇い続けていた、母を専門医のいる大きな病院へ連れていくことを決意したのだった。

足を運んだ病院では、予想どおり母が認知症であると診断されたが、もちろんそのことは母には告げず、又、ある程度の覚悟はしていたものの、私もそれを容易に受け入れることはできなかった。もとの状態には戻らないという医者の言葉は理解できても、心が納得できなかったのだ。あれほどしっかり者だった母が、私の目の前でさらにいま以上に呆けていくことが全く想像できなかった。しかし、背負ったものの大きさに途方に暮れ、不安に震える足で帰宅すると、その日の夕食に、母が私の代わりに久し振りに作った筑前煮を口にした瞬間、医師の診断が誤診ではなかったことを強く悟らされてしまった。昆布の出し汁は煮出し

過ぎ、醤油も味醂も必要以上に入れたらしく、食べづらいほど甘辛くなっていた。母の味ではなかったのだ。その時、私は医師の注意を受けていたのにも拘らず、無神経にも「母さん、味がへんだよ」と顔をしかめ、いきなり最初の過ちを犯してしまい、母を不機嫌にさせてしまった。

母の症状は、それからも「まだらぼけ」の状態からさらに止まることなく進み、病気の進行は医師の予想よりも早かった。「こちらの世界」と「向こうの世界」の狭間にいた母は、一日に何度も何度も「加代ちゃん」と私の名前を呼び続け、失われていく自分の記憶を、その言葉で繋ぎ止めようとしているかのようだった。しかしその甲斐もなく、一年と経たないうちに、ついには会話がほとんど真面(まとも)には成り立たなくなってしまった。その頃になると、近所に迷惑を掛けることも目立って多くなり、又、私の会社に一日に何度となく意味のない電話を掛けてきては私を困らせるなど、私が仕事を続けていくことも困難になってきていた。そしてその時の私は、医者の忠告などとうに吹き飛び、そんな母に憤りさえ覚え、自分を抑えることが出来ずに感情的になって、その度にきつい注意を繰り返してしまっていた。私もどのように対応していいものかわからないままに母を持て余し、大きく困惑していたのだった。いまになって思うと、母にとって「加代ちゃん」という言葉は、もしかしたら忘れずに最後まで守りたかった言葉ではなかったのかと感じるときがあり、そのことを考えると、私はいまでも胸が張り裂けそうな気持ちになることがある。母も間違いなく呆けていく自分と闘っていたのだ。私は自分だけが母の病と闘っているものだと長い間勘違いをしたまま、たくさんの過ちを犯してしまった。何よりも私は、その時のそんな母の切ない気持ちを考えてやることが出来ずに、母との最後の心の交流のチャンスさえ無駄に逃してしまっていたことを深く後悔している。いまはもう母はいない。謝ることもできない。失われてしまった時間は取り返しようがない。

ますます強固に取り付く病と二人連れの母と、同じ屋根の下で罪の意識を持ちながら暮らす私。私たちの病との闘いの生活は、そのようにして始まったのであった。

猫の額ほどの庭に出てしまった母は、しゃがみ込むと、薄い夕陽に茜色に染まった地面に、楽しそうに木枝で絵を描き始めた。機嫌のいい時は、まるで三角だけの、幼い子供が描くような太陽をいくつも描くのであった。「今日も生きてます」と、生きる喜びを太陽の数で表わしているのだと私には思えた。そして、庭いっぱいに描かれた太陽がさらに紅く燃え、いつしか本物の太陽のように見え始めると、母の心はまだ完全には病んでいないのだと安心ができた。母の病が少しは快方に向かっていくような、そんな可

能性が信じられた。しかし、何か気に入らない様子の時には、丸い背中に翳りのある表情で、只々地面を木枝で縦に強く削り続ける。その姿は、世の中の欺瞞を削り取っているようにも見えた。もし介護ノートでもあれば、ひと言「生きてます」と書くのだろうと。

母の描く太陽の数も五つになり、近くの寺の夕刻を知らせる鐘がゴーン、ゴーンと低く響き渡ると、小さな庭にまだまだ太陽を描き続けようとする母と、それをずっと縁側から見守る私、そして「カーカー」と侘しいカラスの鳴き声だけが夕餉の町に残されていた。

「母さん、暗くなってきたから家の中に入るわよ」

私は庭に降りて母に近づき、まだなごり惜しそうに太陽の後ろ姿を見送る母の手に付いた砂を払い落とすと、その手を引いて家の中に入った。それからすぐにガラス戸と障子を閉めて明かりをつけ、母を居間に座らせてから、食事の準備のために台所へと向かった。

襖の白地に母の影が消えることのないように気を配りながら調理台に立つと、さっき買ってきたばかりの弁当を袋から二つとも出して蓋を開け、その中から軟らかくて噛みやすいおかずを少しずつ、一食分だけ選んで母の皿に盛り、半分程に取り分けた冷たいご飯には、軟らかくするために水に通してから電子レンジに掛けた。温かい湯気と焼いた秋刀魚の香ばしい香りの立つ皿を居間に運ぶと、すでに電子レンジのチンという音からご飯時を知ってか、母は嬉しそうに体を前後に揺すりながらも、大人しく卓袱台の前で正座をして待っていた。私は皿を片手に母の隣りに跪き、それから皿を置くために、もう片方の手で卓袱台の上に置かれている口紅と手鏡を台の端に寄せようと、まず口紅に手を掛けた。すると母がいきなりその私の手に向かって、

「ダメ！」

と、白い障子に閉め切られた部屋いっぱいに響く大声を出し、口紅を丁寧に丁寧に元の位置に戻し始めた。

「ご飯食べるんでしょ。お皿が置けないじゃないの」

しかし、母は口紅を台に強く押し付け、私の言う事を聞こうとはしなかった。ここ数年、母はかなり昔に使っていた赤い口紅を、何かを思い出したかのように持ち出し、身近に置くようになっていた。加えて母には、常に卓袱台の真中やや右に古い口紅、その左に手鏡というような、絶対的な置き位置もあった。口紅と手鏡との間には、母にとってこれ以上動かせない漲る緊張感があり、それらが持つ確かな存在感を感じているようだった。私には、母がなぜ急に口紅にこだわり始めたのか見当も付かなかった。母の中でも空腹の自分との葛藤はあるらしく、段々と前後の揺すりを激しくさせるものの、それでも母は口紅と手鏡を勝手に弄られるのを必要以上に嫌った。私にもその事はよくわかっていたのだが、母の意志を尊重したいという気持ちは

ありはしても、無理にでも皿を台の上に置かないと、いつまでも母が食事をとらないので仕方がなかった。長い時には三十分以上も、母の口紅とのにらめっこが続くのであった。

「母さん、いい加減にして！」

「うーっ！　ダメ！」

私が叱ると、母はさらにそれ以上に高い声を出して私を黙らせる。

私は母の目線で会話をしなければと思いながらも、ぼけた経験のない私にはいまでもなかなかそれが上手く出来ず、それに、もし私がただ優しく言ったとしたら、私も母も崩れてしまいそうな気もしていた。これからもこれが毎日続くのかと思うと、いつものことながらやり切れない気持ちで一杯になってくる。

仕様がなく皿を手に持ったまま暫く待って、半ば諦めた様な低い声で、

「母さん、ご飯なんだから……」

と言うと、今日は早い時間のうちに、やっと母が自分で口紅と手鏡を諦めるタイミングを見つけて、皿を卓袱台の上に置くことを許してくれた。無意識に溜息を漏らした私は、それから母の首にお気に入りの赤いタオルを巻き、また台所へと立ち上がった。そして私が再び台所から自分の皿を持って戻ってくると、母はもうすでに自分で割り箸を持ち、おかずの汁を顎から垂らしながら、皺くちゃの顔で口を動かしていた。私はそんな母を声も出せぬまま無言で見つめ、暫くしてから、涎掛けをした地蔵様のような母と向かい合って食事をとった。母の首に見える赤色は、もともとは私が幼稚園に通っていた頃に、食事の時に好んで首に巻いていたタオルの色で、母にはそんな昔の、か細かった私の首の記憶が刻まれているのかもしれなかった。この時の母には、食べ物に夢中になる子供のような愛嬌も見られたが、本物の地蔵様と明らかに違っているところは、母の魂が「こちらの世界」にはないということ、その一点だけが耐え難い事実として横たわっている。円い卓袱台には、もう昔のような気持ちの丸さは感じられない。

昼と夜が逆転してしまった二人が、深夜の「静けさ」のそこはかと忍び寄る世界に入ると、私は大きな不安に押し潰されそうになる。介護と両立できるような仕事は見つけられず、又、高校を出てすぐに就職し、会社員として十年働いて貯めたお金も、崩し崩し生活をしているうちに、そのほとんどが底を突いてしまっていたのだった。

頼れる親戚もない私は、数年前に一度母を連れて市の福祉事務所に出向き、生活保護を求めたことがあったのだが、担当職員に、「あなた、まだ三十六歳なんだから十分に働けるでしょ」と冷たくあしらわれ、働きたくても働けない

状態をわかってもらえず、生活保護は認められなかった。しかもご丁寧にその職員は、帰り際に、

「おばあちゃん、しっかりとご飯を食べて、栄養を取って、適度の運動もしなくちゃだめよ。それから、指先を動かすような何かをした方がいいわね。リハビリにもなるから」

と、医者の領域にまであれこれとわかったような口を出してきた。老いて幼児のようになった母に、若い女の職員が噛んで含めるように言い聞かせる様は、子供の私の心には悲しみの思いが抑えられなかった。しかし、その時の私には、「もし私に腕力でもあったら、ただでは済まさなかったわよ」と心の中で叫ぶことが精一杯で、無力だと思って泣きたくなっていた。究極のところ、悲しみの経験のなき者は、他者の悲しみを知り得ないのだと知った。寂しさとても同様だと思った。思い出すと、廃残の身が一層悲しくなる。

この光景が私の脳裏から離れ去ることはなく、それ以来、私には恐ろしい気持ちが先に立ち、いくら生活が苦しくなっても、再び福祉事務所へ行くことはできなかった。又、殻に閉じ籠ってしまった私たちは、デイサービスや家族援助ヘルパーなどの公的サービスの利用もしなかった。口達者の頭のいい人達みたいに自ら主張する術を持たず、能動的な対処ができずに、只々この厳しい防戦を凌ぐ毎日になっている。

さらに真夜中の「静けさ」の染み渡る世界。最近では、出口のない介護に私の口数もめっきりと減ってしまい、いまも昼寝から覚めたような気怠さと、焦点があやふやになった不思議な感覚で一日を過ごしている。

私はこの十年間、砂を強く握り締めるように生きてきた。渾身の力を込めて生きていなければ、私の中の何もかもがうまくまとまらずに、サラサラと指の隙間から零れ落ちる砂のように、私自身が崩れ落ちてしまいそうだった。しかし、いくら力んでも、握り締めた砂は一粒一粒私の握り固めた拳から確実に零れ落ちていく。

私は今夜もまた、ぼんやりと窓の傍に座っている。隙間風が骨の芯を通り抜け、虚しさを畳に染み込ませる。いつまで続くのかわからない介護とはほとほと厄介なものだと、いまさらながら思っていた。女性の平均寿命を考えたとしても、あと十五年はある。せめてあと十五年、二十年……と、期限さえ付いていたならどんなに楽になれるだろうか。……しかし、それは母の死を望んでいるのと同じこと。それに、かといって一人で人生をやり直していくことにも、もう自信が持てない私もいる。

私はそんなことを考えながら、窓の障子を少し開け、時刻を知る大きな月と、ひたと寄り添う子供のような輝く星々を眺めた。月の光は照り、喜びを与えてくれる。丁寧に生きていれば、ほんのちょっとしたことが私の心を和ませてくれる。幸い私には、夜になりたての一番星を見つけ、月の後ろ姿を見送る膨大な時間がある。

母はというと、今晩は私の呼び掛けにすら反応することもなく、そのほとんどの時間で「向こうの世界」にいた。社交的だった性格はすっかりと変わってしまい、一晩中項垂れ、虚ろな眼差しで塞ぎ込んでいる。ひとりブツブツ呟きながら何かをしては、ちょっとしたことでひとりで癇癪を起こすこともあったが、そんな時には、私が母に口紅を握らせることで大人しくさせていた。又その後に、リハビリを兼ねたビーズの小物作りを勧めると、それだけはもくもくと数時間は続けた。長年水商売で生きてきた母は、慌てて締めたような腰紐と、隙のある着崩れた寝巻姿で、一段落が付けばその都度手鏡を片手に何度も赤く口紅をさし直し、満足そうな微笑を浮かべていた。明るく灯した紅以外に艶やかさはもうないものの、夜がそう思わせるのか、不思議にその時だけは穏やかで心地の好い気配だけが肩に滲み出し、母の横顔に気品と、桐の花のような凛とした精神の気高さも窺われた。

口紅は、母にとってなくてはならない物だった。そして私にとっても、ぐずつく母を大人しくさせるための特効薬になっていた。

それにしてもこの社会に見捨てられた、節約に節約を重ねる生活。風呂も五日に一回。家にいても、哀れにもしょんぼりとしていなければならない。私は再び夜空を仰ぎ見て、お金のないということはつくづく哀れだと思った。

私たちには霜の置く寒い冬の夜。親子二人きりで、黙って座って朝日を待った。

外がすっかり明るくなると、ようやく二人の長い一日は終わる。毎日が同じことの繰り返しだった。そして時計の針は、また朝の八時を指している。

「母さん、そろそろ寝るわよ」

私はそう言って、一日の終わりの作業を淡々と始めた。まず卓袱台を居間の端に寄せ、それから押し入れの中から蒲団を二つ取り出して、ぴったりとくっつけて敷く。次に枕を置き、摩り切れた古いシーツを裂いて作った二メートル程の白い布の紐を手にすると、母を蒲団の上に座らせる。そして、私の寝ている間に母が歩き回ることのないようにと、その紐の片方を母の腰に結わえ、もう片方を自分の手首に括り付ける。母を辛抱させてそれぞれに結び目を作ると、母は観念したように奇妙に体を揺らすのを止め、蒲団の上に小さくなってうずくまった。私は、まるで干からびたミイラのように見える母のその上に、さらに押え込むかのように掛蒲団を掛け、最後に止めの蓋をする。

「母さん、電気消すわよ」

作業を終えた私は、蛍光灯から垂れ下がった紐を引いて明かりを消し、私も自分の蒲団の中に滑り込んだ。すると母は透かさず、蒲団の中に安らぎを見つけたのか、一変して甘えるようにもぞもぞと動き出し、蒲団から顔を出して「うーん、加代ちゃん」と、私の名前を呼び始めた。今日は母が何度も何かを求めるように私の名前を呼ぶのを止めないので、仕様がなく私が疲れた腕を持ち上げて母の頭を優しく撫でてやると、母は安心しきったように穏やかな表情になって目を閉じた。この「加代ちゃん」という言葉は、以前の呆け始めた頃の「加代ちゃん」という意味とは明らかに異なるものだった。しかし私は、いつもこの小丸電球に照らされた無邪気な母の笑顔に騙されていることを知りながらも、鼻を曲げる臭気の中での下の始末など、一日の大変な苦労を、最後にはまた許してしまうのであった。この時の母が私の冷えた身体を温めてくれている、それも間違いのない事実だった。悴(かじか)んだ私の小さな拳を、母は口にくわえてあたためてくれた、そんな遠い日の母の愛情を忘れることはできない。時々私の心の中にもう一人の母が現れては、私の頭を撫でてくれることもある。母と私を結ぶ布の紐は、干からびていてもヘソの緒には間違いなかったのだ。そう思うと、うら悲しい手首の結び目は熱く感じられる。

やっと今日も閉め切った冷え募る障子に、二人の心が唯一通じ合ったような、穏やかで安らぐ空間が訪れた。そして私は心細い紐を改めて握り直し、いくつも母に甘えていた幼い日を思い出し続けるのだった。歳月の無情を恨みながら、過去のあれこれを胸に浮かべては消し、眠れぬまま枕を濡らした。

午後三時になると、タオルに巻かれた目覚時計はベルを鳴らし、起床時間を知らせる。

私はパッと目を開け、急いでベルを止めた。それからすぐに自分の手首の紐を手繰って母の手を探し、母が落ち着いて隣に寝ていることを確認すると、その手首の結び目を解いて、母を起こさないように気を配りながら、そっと蒲団から抜け出した。

これから私は、母が起き出すまでの一時間位の間に、また急いで近くのスーパーにまで自転車を走らせ、一日分の買い物を済ませて戻ってこなければならなかった。既に生活もままならない状況だった私には、買い物とはいっても、夕方になって割引になった弁当を二つ買うのが精一杯だった。私たちは毎日それを少しずつ小分けして皿に盛り、電子レンジで温めて数回に分けて食べている。出来るだけ色々なおかずの入った弁当を見つける努力はしているものの、やはり毎日一人につき弁当一つだけでは、栄養バランスも良くないせいか、私の頬は痩せこけ、去年の冬には四十五キロあった母の体重も、いまでは三十五キロを切ってしまっている。

私は眠い目を擦りながらトイレを済ませると、すぐに洗面台に向かって氷のように冷たい水で顔を洗い、歯磨きを始めた。

洗面台の鏡には、水面に浮かぶ亡霊のような姿に、くっきりとくぼんだ骨の奥の、運命と闘っているギョロっとした大きな眼が映る。そしてその瞳は、少し開けられた換気窓から聞こえてくる近所の世間話を耳にしながら、冷たい視線と言葉の暴力にも負けまいと、段々と炯々とした輝きを増して、人を射すくめるような戦闘態勢へと入っていった。小窓からは、悪口を言っている口から念仏を唱える声も、答えを既に持ちながら、頷いてもらいたいだけの相談者の声も聞こえてくる。小窓から流れ入る空気には、馬鹿馬鹿しくも色々な色があった。それでも、急いでスーパーを往復するだけの私にとっては、この小窓だけが唯一身近な世の中の情報源であり、接点でもあった。

しかし、この日窓から漏れてきた話は、折角歯磨きをしながら充電したバリアーを張るためのエネルギーも、ごっそりと削ぎ落とされるような内容だった。

「あらー、おめでとうございます。可愛らしい赤ちゃんね。女の子?」

「有難うございます。女の子です。御蔭様で無事に出産することができました」

「そう、お名前は?」

「ユウカです」

道路を挟んだ斜向かいの家の、新しくやって来た若い嫁と、その隣のおばさんの声のようだった。

私は歯ブラシを動かす手を止め、「へぇー、赤ちゃんが生まれたんだ」と思うと、青白い顔を鏡にゆっくりと近づけた。そして歯ブラシを口にくわえたまま、一気に光を失った瞳を鏡に映しながら、恐る恐る手櫛で髪を静かに梳(と)かしてみた。すると、洗面台にパラパラと落ちる木の葉髪と、黒髪の中に見出した幾筋もの滝のように流れる白髪は、いままで大人しく裏返って隠れていてくれた、顔を背けたくなるような醜い何ものかが急に表に翻ったように、四十歳を間近にした私に、自らの身に老いの訪れを強烈に感受させた。

生き物のように蠢く白髪は、既に子を持った女ならば、やがて授かる孫を予感させるものなのかも知れないが、まだ歩いたことのないすべすべの足に蹴られる幸せを知らない私にとっては、それは女にとっての性の死を予感させるものであった。私には女としての哀しみを認めざるを得ないような、また孤独な行く末を悟らされる瞬間でもあった。

しばしば自分の影に見入っては幽暗な思いに沈み、いつ

も緊張が弛めばなんとも重くてやりきれなくなる。私は窓枠に張り付いた薄氷を、そっと指で押し潰す。

やっとタオルでしょぼくれた顔を拭き終えた私が着替えのために自分の部屋に入ると、白いレースカーテン越しの日に照らされた壁の、忘れたと思っていても一際白く光る四角い跡に、自然と目が留まってしまう。画鋲で留められていた、悔いて尚残る恋の跡だった。壁の色の違いは、付き合っていた長い時間。華やいだ色彩の中で交錯していた、彼と私の思いがまた伝わってくる。私は思い人が傍らにいない淋しさを埋めるものは何も持ち合わせてはいない。その深い淋しさを叫びたい日も、もう数えきれないほどある。何かに託して昇華させるものを持たない私は、小窓から吹き降ろす、肌を刺す寒さにきゅっと身震いを一つすると、右手を窄(すぼ)めて口にあて、また時間の中に立ち止まり、不覚にも遠い記憶を紡ぎ始めてしまった。

私にも以前に結婚を前提に付き合っていた男が東京にいた。友人の紹介で知り合い、そして三年程付き合った頃に母が認知症になってしまった。医者からそのことを告げられた時、すぐに飛行機で東京に出向いて彼に相談し、「それでも結婚してくれるの？」と尋ねた。すると彼は、一瞬表情を失った様子ながらも、明らかに不安そうな顔をしていただろう私に、「いいよ」と、力のない言葉を口にした。しかし、その有難い言葉はあまりにも弱々しく、私には言葉通りの意味には取りづらかった。それに彼は、それ以上の具体的なことは何も話そうとはしなかった。そして、その日の別れ際に、彼は多分しくじってしまったんだろう、振り向き様に困った表情をチラッと浮かべた。私はそれを見逃すことなく、その時の彼の心中の全てを察してしまった。それから数日後に、慣れない介護にてんてこ舞いをしていたこともあって、何かにつけて煮え切らなくなった彼の態度にやや喧嘩ごしになったまま、「もういいわ！　重荷だってことくらいわかってたから」と、電話で私の方から彼に別れることを申し出た。いつも不幸というものは、それまでに積み上げてきた時間の長さに拘らず、呆気ない程素早く訪れるものだった。

厳しい状況の中でも波立ち、迸(ほとばし)る想い。私の心の中には、いまでもあの時の彼の表情を読み取った自分の判断が間違いであればと願うように、鳴らない電話を待ち続け、いつまでもその男の面影が引っ掛かっている。私はいままで男女の仲に限らず、多くの縁を結んでは解く繰り返しの中で生きてきた。しかしその中で、彼と私が日々連ねた、別れるとは思ってもいなかった熱い結び目には加減がなかった。彼に見え透いた、重みのない汚れた泪など見せずに済んだなどと強がってはいても、悲劇はまだ解き切れない冷めた結び目に宿っている。解す時の方が少しの辛抱が必要だった。私の中にはいまでも思い切る気のない隣人がいる。しかし、いくら彼の面影に添い寝をするように思い浮かべても、その面影は笑うもやがて涙の隣人。背に赤ちゃんを負ぶり、体を揺らしながら歩くことは夢の話。

仕事も、恋も……そのすべてが、すべてが母の犠牲になってしまった。その事実は私を寂しく、切なく、やり切れない気持ちで一杯にさせ、さらに一層悔しくさせる。いくら頑張っても心が通じ合わない、「向こうの世界」にいる母の面倒を見るのはやはり辛かった。降り積もる小さな悲しみも、時には飽和状態になることがある。それゆえ私は何度もこの家から逃げ出したいと思ってきた。しかし、母がいるから逃げ出せなかった。こんな時、子供のように大声で泣けたらどんなにすっきりすることかと思いながらも、私は私自身を抑えるために、「何の才能もない私が、唯一劣等感から解放された、学歴もキャリアも意味のない、自分にしかできない仕事じゃないか」と、呪文を唱えるように何度も何度も反芻する。……忘れたい。忘れよう。ありのままに。

私は一つの大きな深呼吸で、もう昔のことは振り返らず、あしたという日も考えない、その日一日をコツコツと生きていくだけだ、と強く自分に言い聞かせ、着替えを始めた。部屋を出る最後にコートを脇に抱え、彼からプレゼントされた腕時計を手首に巻くと、それでも肌に触れる金属の冷たさは一入(ひとしお)に感じられる。

私は冷えのぼる障子で締め切られた薄暗い落魄の家を出ると、いつもの道をスーパーに向かって、記憶の疼きが交じる足で今日も重く自転車を漕ぎ出す。

十分程でスーパーに着き、駐輪場に自転車を停めると、私はまず拳を強く握りしめて入口へと向かい、かごを手にした後は、一直線に一階の食品売場の弁当コーナーだけを目指した。この日は既に陳列台に三割引のシールが貼ってある弁当が並び、気になる店員の姿も見当たらなかった。もうあと一時間も待てば半額にまで値が下がるのだが、私にはそこまで待つ余裕はなかった。これ以上帰る時間を遅らせてしまうと、母が目を覚まして起き出し、オシッコを漏らしながら玄関の扉を叩き始めてしまうかも知れないからだった。

私は胸を撫で下ろし、「昨日は魚だったから、今日は酢ブタがいいかな」などと呟きながら、おかずが昨日と同じにならないものを先に目で二つ選び切ると、その後にそれを素早く手に取ってスーパーのかごの中に入れた。ほぼ毎日同じ時間に、同じ服装で、割引になるのを見計らうようにスーパーに通って何年も経てば、嫌でも食品売場の店員に顔を覚えられてしまい、私に気付いた店員が、目を逸らせながらニヤリと含み笑いを浮かべ、割引シールを貼る手を止めて従業員扉の奥に引っ込んでしまうこともしばしば

になっていた。それは、割引の弁当しか買わない、スーパーにとって利益の上がらない客に対して迷惑顔をしているというよりも、いい年をしてろくに弁当も買えないのかと言わんばかりに貧乏人を蔑み、明らかに意地悪くイジメてやろうという空気に他ならなかった。以前ならばそんな時、恥ずかしさのあまりに自分の耳が赤くなっていくのを感じながら、すぐにその場から離れて階段の踊場へと逃げ出し、その恐怖心からか、ベンチに座って店員の不気味な笑みを思い出しては暗い想像を繰り返していた。そして腕時計を睨みながら、じっと再びシールが貼られるまでの数十分の時間を震えるようにして待っていた。しかし此の頃の私は、この時間になってもシールが貼られていなければ、「味の落ちた弁当なんだから、早くシールを貼りなさいよ」と思える位に、少しは厚かましく構えることができるようになり、また経済的にも余裕がなくなっていた。

そしてさらに私にはもう一つ緊張させられる場所があった。それは、割引商品ばかりをレジで清算する時だった。まず、昨日と同じレジ係のいる所は絶対に避け、又、黙って割り箸を入れてくれるような、私に気を配ってくれるレジ係の所へも行かなかった。哀れんでいられるような雰囲気がたまらなく嫌いだったからだ。それがアルバイト学生のような若いレジ係ならば、なおさら自分が惨めに思える。私には、まだ露骨に軽蔑しているような視線を浴びせてくれるレジ係の方が、開き直ってしまうといった、自分の中での闘い様があった。

私は五、六人並んだレジ係の中から条件に合った一人を敏速に選び、レジに弁当を通した。それから割引シールを隠すように弁当を貰ったばかりのビニール袋に素早く入れると、目的のものを首尾よく手に入れられた安心感からか、緊張もやや緩んでしまい、そこからは培った蔑む視線に耐え得る厚かましさも十分には発揮できずに、いつもの逃げ出すかのような速い足取りでスーパーを出た。

私が白い息を荒く吐きながら駐輪場に戻り、弁当を自転車の前のかごにそっと置いてから再び自転車を漕ぎ出すと、俄(にわか)に薄日の差す銀色の空からは、静かに初雪がはらはらと舞い始めてきた。その美しさは天のしわざか、前日までの春日和を思うと、赤色のネオンに照らされた雪片は、桜の花びらと見紛うほど綺麗だった。柔らかいひらがなのような風に乗った花びらは、時を緩め、頭にも肩にも降り懸かり、ふんわりとした温もりの感触が伝わってくるようだった。そして反射鏡に映った、身を屈めて花風の真中を走る自分の後ろ姿もまた薄いピンク色に染まって、しかしそれはどこか儚げで、気まぐれな風に頼りげなく震える、うつむいた片栗の花のようだった。

除夜の鐘が鳴り、年が明けると、急ぎ足でやってくる寒

さの中、私の心の介護ノートに新たな三百六十五日の白があった。しかし二月になっても、底冷えに悩まされ、雪のちらつく、凍える日が続いて、ノートには克つべき力で埋めることもなく、白も続いている。昼も夜もなく、眠れず、私はもう心身共にくたくたになっていた。時に見えない大いなる敵に向かって、「目の前に姿を現しなさいよ」と叫び、いつでも死ねると思うことだけが心の支えとなっている。どんなに蔑まされても、どんなに惨めな思いをしてでも、何があっても平気で生ききることとは程遠い世界に足を踏み入れた。私にも誰かの笑い声や罵る声が、手で耳を塞いでいても家中の至る所から聞こえるようになっていた。私の中に母を憎む心があるからか、やっと眠りについたと思えば、呆けた母を夢の中で打っている。母の葬儀の夢さえ見ることもある。私も母と同様、病と二人連れの状態にあった。そして私たちの生活もさらに困窮を極め、もう弁当など買うことも出来ず、食べ物と言えば割引の食パンと牛乳に代わっていた。パンを浸す牛乳は、しばしば砂糖水になることもある。生命を晒す日々、空腹は死に向かう第一歩。私たちにもまた、争うことのできない厳しい自然界の事実であった。

この日、スーパーへ買い物に行く必要のなくなった私は、起き上がることもせず、どこからともなく漂ってくる遠くの音を耳で追いながら、蒲団の中で寒さを凌いでいた。このままいけば、あと三ヵ月ですべてが底を突く、そんな不安が時々頭をもたげる。この公営住宅ですら、家賃滞納で退去を迫られることが予想された。しかし私には、既に「何とかしなければ」と考える気力すら失われ、それに、「もっと早くに手立てを考えていれば」というような後悔もなかった。すべてのことが、逆らうことのできない自然の流れの中に存在しているような気がして、そのまま私も、ただ流されようとしていた。

それでも見飽きた天井を見つめていると、溢れ出る悩みは尽きず、私がいくら疲れ果てていてもエスカレートしていく母の我儘な要求に、私自身どのように頭の中で決着をつけてよいのかわからなくなっていた。母が孤独に埋もれないようにと一日中気にかけていれば窮屈だと言い、私が目の届かない所に行ってしまうと落ち着きをなくし、騒ぎ出す。そして私が叱れば叱るほど、どんどん母は子供になっていく。誰もが気の済むまで孝行をして親を見送れるわけではないだろうが、恩を受けたばかりで、返せないことを悔いるよりはと、そう考えている中、私がふと手首の紐を手繰ると、既に口紅をさした母は、薄暗く、火の気のない六畳の部屋の真中で、いつものように卓袱台に向かい、幸せな思い出ばかりを選ぶように枯れた指であどけなく赤いビーズに針を挿していた。これはすべて、母のための犠牲なんかではないのだと自分に言い聞かせる私は、ゆっく

りと蒲団から起き上がり、「ストーブの一つでもあって、暖をとることが出来たなら、少しはこの埋没の感じを追い払うことが出来るんだろうに」と、ふと洩らしてしまった嘆きの言葉と共に、それでも温もっている私の毛布を母の肩にそっと掛けてやった。

それから私が凍え果てるガラス窓の前に立ち、障子を少し開けると、自らの身から漂い出たような暮色の夕陽が否応なしに射し込み、天を恨みたくなる空には、飛行機が赤い灯りを点滅させて高くに飛んでいた。私は時折薄らぼんやりと、彼の元へ通い続けていたあの頃を思い出しては東京へ向かう機影をここから見上げている。そしていま、また冬空を横切ったジェット機の乗客たちが、希望を抱いて頭上を通り去っていく。

私はふと、悩みや苦しみを抱えながらも、なお生き続けなければならない人間とは何なのだろうか、と自分に問い掛けた。しかし、母の病に翻弄された私が、しんとした静寂に仕方なく俯き様に見た雪は、汚いものも、綺麗なものも、一様に覆っているだけだった。ただ、大地に溶けそうにもなる雪は、ひとりになりたい心にそっと触れてくる。人間とは厄介で、悲しい生き物だと思った。

視界から機影がすっかりと消えてなくなると、私はひとつの身にふたつの心が宿る悲しみを秘めたまま振り返り、静かに母の横に両膝をついて座った。それから私は、これからも母に寄り添うのだという気持ちを確認するために、針を持つ母の手の上に手を重ねた。やはり、からだ中に懐かしい想いが流れ、触れた母の手の小さな皺の一つ一つにまで愛着がつのってくる。しかし、触れた細い母の手は冷たくて、長く一緒に暮らしているのにその冷たさに気が付かなかった。そしてこのことが、髪の毛が逆立つくらい苦しみ、悩み続けた私の心に突然、或るさざ波のような思いを立たせた。

「母さん、もうだめだよ……もうお金がなくなってしまったんだよ」

ただ静かに言うつもりだった自分の声は、いつになく弱々しく、しかも震えていた。私はなぜか自分の、その他人のようなわななく声に酔い痴れた。もう片方には、自分の感情を素直に口にできたことで、何かパッと私たちの方向性が見つけられたような気がして、気が楽になっていく自分がいた。

それでも母は、私のおののく声が聞こえてはいなかったかのように、何の反応も示さなかった。しかし、私が母の手をゆっくりとゆっくりと摩り始めると、母のビーズに針を挿す手は急に止まった。母は何かにじっと堪え、沈黙し続けているように見えた。私はまだ母が何を堪えてのことかわからないまま、

「もうこれ以上生きてはいけないんだよ……ゴメンね、馬

鹿で不器用だから食べ逸れちゃって」

と酔い痴れ続けて、さらに一方的に声を震わせた。すると母は突如会話を繋いでくるように、

「加代ちゃんはいい子だよ」

と応えた。それは本当の母の声だった。

私は驚いて母の顔を見た。そこにはどこか懐かしくも、優しい表情の母がいた。母の眼には、正気の光が蘇っているように見えた。長い間孤独に耐え、一人で頑張り続けてきた私は、過ぎた時代の嘗ての面影に、「母さん」と思わず母の胸に顔を埋めた。堰を切ったように大声で泣き出してしまった。母に甘えたい気持ちで一杯になっていた。一人ぼっちでなくなった私は、もう涙を堪えることができずに、「母さん、私どうしたらいいの」と、ただ泣き続けた。

母はそんな私を宥めるようにまた一度、

「加代ちゃんはいい子だよ」

と言った。内へ内へと籠るような微動だにしない声だったが、声が小さかったからこそ私の耳を一層澄まさせた。私はいつまでも本当の母と、その覚えのある声で繋いでいたかった。

しかし、そんな束の間の私にどこからともなく、「いまだよ」という声が聞こえ出し、母の胸に顔を埋める私の心の奥底では、私の中に隠れていたある思いが大きくうねりを上げ始めた。そして気が付くと、私は母に何度も「これでいいよね。間違ってないよね」と、心の中で問い掛けていた。

私はやっとの思いで涙でクシャクシャになった顔を上げ、

「母さん、何か持っていくものはある？」

と、誰ともわからない声に従って、試しに声を出して母に尋ねてみた。

すると母はもうすべてを察しているかのように、何の躊躇いもない様子で、

「口紅。女の身嗜みだからね」

と気丈に答えた。しかし、それから母の表情は一変して曇り出し、か細い声で続けた。

「それに怖いの、いつまでも加代ちゃんの綺麗な母さんでいないとね」

私はいま、なぜ母が口紅にこだわっていたのかを知った。

「馬鹿ね。私が、どんな母さんでもほったらかしにしたりするわけないじゃないの」

私の口からは、嘘とも真実とも言い難い言葉が咄嗟に時間を埋めるように出た。そして私自身、そう言って不思議な感覚に陥った。母は、それを見抜いていたのかどうかはわからなかったが、針とビーズを卓袱台の上に置くと、代わりに手鏡を手に取り、やや安心した顔にゆっくりと丹念

に丹念に口紅を入れ直し始めた。優しい笑みを鏡に投げ掛け、鏡には懐かしい昔を、幼い頃の私の姿を映し出しているかのようだった。

しかし、母の紅のさし方はそれから段々と、私に見捨てられまいとするふくよかなものから、きりりとした輪郭へと変化してゆき、それは明らかにある目的のための準備、正に最後の「女の身嗜み」に見えてきた。

この時、私は母の了解を心の中に確かに感じた。本当の母の声に触れられたことで、やっと私の頭の中でうまく理屈が合ったように、私にも何の迷いもなくなっていた。私はずっとこの機会を探していたのだと確信し、そしていま、同時に自分の中の何かを殺してしまった。深く悩んでいたはずなのに、それは意外にもいとも簡単にやって退けられた。母の手にする手鏡に映った私の暗黒色の瞳には、喜びは消え、悲しみと凄みだけが共存していた。私は急いだ。いましかないと思った。単に私に迫りくる罪の意識を軽くしたいがためなのか、母が「こちらの世界」に居る時にでなければいけないような気がしていた。

私はすぐに自分の手首の紐の結び目を解き、次に母の腰の結び目を解いた。紐を断つように、母との別れをすでに悔いているかのように、苦しい結び目を解いた。私は決してこの解く時の辛抱は忘れない、そう思いながら、その紐はそっとパジャマのポケットの中に仕舞い込んだ。母は上唇と下唇を擦り合わせると、口紅のキャップをカチッと閉め、二度と主の姿を映すことのない手鏡を手放した。

「そうだ。それでいいんだよ」と、悪魔の声は再び私に優しく囁いた。私はまたその囁きの言いなりになって、

「行こうか、母さん」

と言うと、口紅を握る母の手をさっと引いた。母も、白い障子に手鏡だけを残し、黙って手を引かれた。

玄関でそれぞれがコートを羽織り、穴の空いた靴下にサンダルを履いて零落の家から外へ出ると、母が玄関の扉を閉めた。新たな「静けさ」に出たガラガラという音は、紛れもない母の音だった。母が閉めれば母の音。家族それぞれの音だった。

外に出た母は白い息を吐いて身を縮め、そのこげ茶色のコート姿は、まるで木の葉や枝の欠片で編んだ粗末な蓑に包まった、小さな蓑虫のようであった。

私は母の手を強く引いて、雪が融けて所々に土が覗く庭を、再び母が「向こうの世界」に行ってしまうことのないようにと足早に歩き、門の外に出ようとした。

門を出ると、蓑虫は急に立ち止まって一度振り返り、目を半眼にして古びた家と、香りのない庭の冬枯れた木々を見渡した。その小さく萎んだ寂しげな生き物の後ろ姿には、小さな神が付き添い、滅びゆくものの輝きがあった。差し込む光というよりは、母自体が一つの発光体のように見えた。醜悪なものの奥底から澱みを掻き分けて出てきたような、そんな綺麗な光を放ち、美しさと醜さの中に荘厳さが生み出されている。その光には悲愴さはなく、永遠に続くとも思える暖かな色の灯をともし、燃え尽きる直前のローソクの炎の明かりとは明らかに異なるものだった。

道路の両脇には、融け残った雪が消えかかる夕陽に薄らと緋色に染まり、母ももう立ち止まろうとはせず、私たちは手を取り合ったまま真っ直ぐな紅い絨毯の上をよろよろと歩き始めて、町が見渡せる近くの小高い丘を目指した。声はすれど姿を見せない家を一軒一軒通り過ぎていても、私にはもう世の中を恨む気持ちは全く起こらなかった。雪は不思議に私を深く内省させ、回想させた。意味のある人生だったのだろうかと、問い掛けずにはいられなかった。それでも「道」は、下ばかりを見てきた私の半生に、黙ったまま何も答えてはくれなかった。私は、自分の住む町であっても見知らぬ町を歩いているような気がして仕方なかった。しかし、鼻孔を擽る自分の里の〝匂い〟だけは、そこに確かに存在していた。私は、どこか懐かしい思いは母には告げず、自分の胸にそっと仕舞った。

真っ直ぐな道を歩き終え、いつも向かうスーパーの方向とは反対側に角を折れると、すぐに全面に雪を輝かせている丘が見えてきた。丘の頂上までは桜の木が立ち並んでいる。白く覆われているせいか、丘と空との間に一体感が生じ、天国へと繋がる階段のように思えた。そんな雪を置いた丘に足を踏み入れると、母はすっかり古びた自分の魂を風に馴染ませ、マッチ棒のように痩せ細った足でふらふらと、真っ白な雪の上を右左と遊び歩きを楽しむように登り始めた。

「加代ちゃん、この愉快さは歩かないとわからないわね」

母が言った。私は、老いぼれて、老いぼれていった先にこういう境地があったのか、と真実を打たれたような気がした。確かに最初私は、よろよろと足跡を残す母の後ろ姿に、全力できりきりと回転することで身を保ち、やがて時とともに失速し、止まり際にほのかな哀愁が消え残る、そんな独楽を見ていた。しかし、結局心のどこかで、明らかにそう思うことだけでは飽き足らない私が、母を、そして自分自身をも、何ものかに弾き飛ばされ、奪い取られてしまう負け独楽にしてしまっていたのだった。再び命を吹き込まれることのない負け独楽が、「生」と「死」のグレーゾーンの中で、人生を見つめて見つめて、見つめた挙句、再生すら信じられる余裕もなく、私には何も見えていなかったのだと思った。

暫くして母は歩みを止めると、

「足がびしょびしょになっちゃったよ」

と言った。

「冷たい？」

「大丈夫。……今日も夕陽が赤いね」
私はさらにハッと息を呑んだ。私には、夕陽を見つめるその母の涼しげな眼差しが、「沈む夕陽ですら赤々と輝いているね」と言っているように聞こえた。母は復活を信じていること以上に、まだ命を燃やし続け、生きていたいのだとはっきり感じた。そしてこの桜坂を登ることは、自分だけの我儘だったのかと思った。しかし、それでも私にはこの切羽詰った状況で、再生を信じることだけが精一杯で、もう足を止めることは出来なかった。私は、「お願い、もうこれ以上苦しめないでね」とばかりに、母の手をきつく引いた。
「母さん、行くよ」
母はもうよろけるような遊び歩きはしなくなった。頂上だけを見据える私の目からは、歩く踵を伝わる振動に、新たに苛立つ涙が一つ零れた。
息を切らせて天辺に辿り着いて見た自分の町は、路頭が故郷だと思っていた私にも、より懐かしく見えた。湿り気のない風が身体に宿り、遠くなればより大きくなる思い。古くから神の鎮座するこの桜の丘は、私たちに相応しい場所だと思えた。眠ることのない冬の丘から、眼の前にいま落日の燃えたぎる町を一息に呑む私と、口許を微かに持ち上げ、何を思ってか不気味な微笑を送る母。厳粛な静けさに包まれた私たちは、それぞれの思いを抱え、冬の透明な風に溶け込んでいる。
私は最後に、「自分の中のあなたは先程殺してしまいました。でも私たちを見捨てた神様、どうかこの町をあなたの愛で包んでやって下さい」と、頭を深々と下げ、礼を尽くして一つ願うと、仄暗い大きな一本の桜の木の下まで母の手を引いた。そして桜の木を背にした私は、口紅を握り締める母と向き合い、母を引いたその手をパジャマのポケットに突っ込んで、仕舞い込んでいた紐を静かに取り出した。それから項垂れるように背中を丸め、手にした紐を母の折れそうな首にそっと巻き付けると、唇に霞む夕陽の紅を重ねた母の顔を目に収めた。
「母さん、ゴメンね……」
しかし、私は紐の両端を握り締めたまま、額と額を合わせて目を閉じ、ずっと躊躇っていた。母の額の温もりが消えてしまうことが恐ろしかった。私は天の声を待った。しかし、いくら待っても天からの囁きはもう聞こえてはこなかった。
暫くしてサクッという音がして私が目を開けると、母の握っていた赤い口紅は雪の中に沈み、母は、咄嗟に額を離した私の顔を澄んだ目で見上げていた。そして歪に曲った母の両手がゆっくりと持ち上がると、その危うい手が私の首を柔らかく絞め出した。
「よしよし……私がやってあげる」

母が優しく白い息を吐いた。しかし、それから母の鼻の下にも瞬く間に雫ができ、その老いた眼はいたずらを見つかった子供のように、どこか自嘲の笑みをもらした、いたずらっ子の眼へと変わっていった。
泣いた瞳でもう一度母の顔を目に収めた私は、天の声を待つまでもなく、母のその一言で心を決めた。折れないように、苦しまないように、力に慈しみを込めて紐を引いた。引いた手にはドクドクと、紐からより強い温もりのような感触が伝わってきた。
「生まれ変わってもまた母さんの子供でいさせてね」
私は力の限り閉じた目蓋に敢えて優美に笑った母の姿を映し出し、自らの心に叫んだ。
遠退きそうにもなる意識の中、やがて紐を伝わる温もりは跡形もなく消えてなくなった。私の腕の力が抜けていくのと同時に、母は崩れ落ちるように膝を折り、私の足元に座り込んだ。もし来世でも母と子としてめぐり合えたなら、一輪の小さな桜の花となって、この木の一本の枝に二つ慎ましやかに並びたいと強く願う、そんな私の紐を握る拳は激しく震え出し、頬に、叫びたいほどの唇に、冷たく重い泪が伝った。
音の消えた夕暮に、ゆっくりと顔を上げて開けた私の夕色の泪で溶いた視界には、映った別れの桜の花びらが、儚く崩れ去った母の魂のようにヒラヒラと頼りなげに舞い始め、やがて細かく、烈しく、町に降り懸かるように流れて行った。母の七十年も、見えない風に押し流されてきたような私の一生も、そんな風によってできた、不思議な時間の流れの中の、一つの小さな白い波頭でしかなかった。あっと言う間の十年だったことに、私は呆然と立ち尽くした。

詩集
星を狩る夜の道
池田　康
「文芸思潮」現代詩人賞受賞！
詩歌句
北溟社
TEL03-5155-8285

受賞の言葉　時見藍人

小説は読むものであって、自分に書けるものではないと、長い間疑うこともなく思っていました。しかし、ちょっとしたきっかけで一年半ほど前から小説を書くようになり、「桜雪」はその二作目です。小説の書き方もまったく知らず、手探り状態の中、取っ掛かりとして理科系的発想のもとに、分析・実験・検証といった一連の流れを繰り返しながらつくった作品です。努力と気持ちは惜しみなく注ぎ込んだつもりですが、いわばまだ実験的作品でした。今回の受賞は大変うれしく思っておりますが、戸惑いも大きいです。でも、結果として今後の励みになることには間違いありませんので、素直に喜び、より自分らしい作品がつくれるように書き続けてゆきたいと思っております。

時見藍人

ときみ　あいと

1961年　東京都生まれ

大阪市立大学大学院博士課程

栄養保健学専攻中退

現在、京都府在住

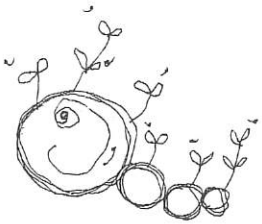
インターネット文芸新人賞

緑の手紙

五十嵐勉

カンボジア難民ポ・シティはなぜ発狂したか。フィリピン戦線の生き残りの父と戦跡を訪ね、カンボジア難民の告白と重ねながら平和日本の矛盾を告発する問題作

アジア文化社　1700円



文壇人國記

県別日本文学の旅

大河内昭爾

日本全国を文学の足で歩き、文学の眼で見、文学の心でとらえた壮大な現代日本の文学風土記。これは筆者の文学の蘊蓄と情熱なしにはなし得なかった前人未到の日本列島文学行脚である。

日本文学風土記
ここに成る!!

東日本編六〇六ページ・西日本編七〇七ページ
6800円+税　8400円+税

おうふう

〒101-8340 東京都千代田区猿楽町 1-3-1

TEL03-3295-8771

第2回蓮如賞優秀作

小沢美智恵 著

『嘆きよ、僕をつらぬけ』

「夏の花」の著者・原民喜の、45歳で自ら世を去るまでの、苦悩に満ちた、しかし一筋につらぬかれた清冽な生涯を、精緻な作品解読と深い共感を通して甦らせる感動の評伝傑作！

発行所　河出書房新社　　定価　1300円

第四回　銀華文学賞当選作

祖母の死

志賀幸一

貧乏というのはある意味では相対的なものである。まわりがみんな貧しければ、まぁこんなもんだろうという感覚がある。

東京で戦災に遭い、焼け出されて静岡県浜松へ来た。昭和二十五年である。その頃は向かいも隣もバラックだったから、すきま風が吹きこもうが雨漏りしようが恥ずかしいことはなかった。戦後の急激な復興でしっかりした家があちこちに建ちはじめると、わが家のみすぼらしさがきわだってきた。台風のときなどは屋根に上がって釘を打ちつけたりしていたが、そんなことも気がひけてきた。

父は売れない浪曲師で、母はその曲師である。一年の大半が旅まわりだった。送られてくる生活費はとぼしく、窓ガラスが一枚割れても、しばらくはボール紙でふさいでおくようなぐあいである。それでも長い間には杉皮葺きの屋根がトタン板になったし、部屋に敷いた莫蓙が安物の畳になった。

そんな六畳と四畳のマッチ箱のような家に、ボクと祖母と猫がいた。猫はボクが小学五年生のときに近くの酒屋からもらってきた。眠っている親猫の後ろに四、五匹の子猫がいたが、一匹だけボクのほうにちょろちょろと寄ってきた。この猫の不幸はそのときからはじまった。後で聞けば、他の猫はそれぞれ裕福な家にもらわれていったらしい。

三毛のかわいい雌猫である。嫁入り道具みたいに鰹節が一本ついてきて、なんだか儲かったような気分になった。

チロと名前をつけ、ろくな餌も与えなかったが、彼女はわが家にはもったいないくらいに美しく成長した。適当に太っていて目がまん丸で、三毛の配色もいい。それに鼠捕りの名人である。チロが来てから隣の家に鼠がふえた。わが家の鼠がそっくり逃げていったらしい。

隣は表通りに面した小さな旅館である。苦情がきたのでチロを一日隣へ貸し出した。チロは廊下を歩きまわり鋭い眼で天井を睨んでいたが、主人が抱いて天井裏に放してやると、しばらく物凄い音が続いたという。大勢の鼠が住んでいたらしい。その親玉の鼠を捕まえた。お陰でボクは隣から謝礼をもらい、チロに初めて蒲鉾を食べさせてやった。日光東照宮にある〈左甚五郎の眠り猫〉のモデルは、ただ眠っているだけで付近の鼠が退散したという。たぶんチロのような猫だったのであろう。

がさつな祖母はそんなことはおかまいなしだ。餌をねだってそばへ寄ったりしてゆくと、叱りつけてやたらに叩く。猫の小さな頭が畳に激突してぐぅと変な声が出た。

「お婆ちゃん、やたらに叩くなよ」

見つけるとどなりつけるのだが、追われたチロがときどきボクの背後に逃げこんでくる。陰で叩いている。まったく手癖の悪い婆さんである。ボクも幼いころにはよく背中を叩かれた。さすがに中学二年生にもなられては叩くわけにはいかない。

「ようするに、弱い者いじめなんだ」

「嘘だよぅ。わしゃ、おまえを叩いたことなんかねぇだで」

その白々しさがボクを本気で怒らせる。それで言わなくてもよいことまで追及する。祖母もしまいには爆発して、

「なんだと、おまえ、言っていいことと悪いことがあるだぞ！」

祖母の目は片方が開かない。見えるほうの小さな目をかっと見開いて、入歯がとび出さんばかりの形相になった。

どなり合いは隣近所に筒抜けである。祖母が自分の都合のいいことだけを言いふらして歩くので、悪者は全部ボクになった。

祖母とは言うけれど血のつながりはまったくない。名はいちという。若いころに田舎の遊郭で仲居のようなことをしていたらしい。侮辱した言い方だが、器量がよければお女郎さんにでもなったであろうが、片方の目が不自由な上にひどく不器量だったために、下働きか仲居のようなことしかできなかった。客引きで卑猥な話をしながら、やたらに相手の肩や背中を叩いたのであろう。たぶんそれが癖になっている。

祖母はその後、遊郭の常連だった源吉という大工の後妻になった。源吉は仕事嫌いの道楽者だった。町内の祭りなどには「源兄ぃ」と呼ばれて威勢がよかったが、ひどい貧

乏で雨漏りのする長屋に住んでいた。

父は生まれて間もなくその家へ養子にもらわれてきた。いわゆる里子である。昔は旦那が芸者などに生ませた子供を里子に出すことは珍しくなかったらしい。子供に付いてくる養育料が目当てで里親になる者もあったという。源吉夫婦は金も欲しかっただろうが、子供好きで落語に出てくるような人情家でもあった。だから父は貧乏で苦労はしたが、人並みの親の愛情を受けてともかく成人した。東京へ出て浪曲師になった。源吉が死んだのでその妻を東京へ引き取ったのである。

父は浅草の雷門近くに新居を借りて住んでいた。寄席の真打ちで売り出し中だった。寄席に出るかたわら、劇場の浪曲大会、ラジオ、レコードといそがしかったそうだが、ボクが物心ついたころには、声を潰して転落の坂を転がりはじめていた。地方巡業が多くなった。

祖母はその留守にボクの親代わりをした。父とボクと二代にわたって子育てをしたことになる。子供好きで面倒見はよかったが、その叩き癖には閉口する。食事どきや銭湯へゆくときは遊んでいるボクをつれ戻しにくるのだが、

「ほーい、お湯へ行くだよ。早くしな」

と背中を叩く。なにか言いながらまた叩く。本人は軽く叩いているつもりだろうが、五つや六つの子供には大人の大きな掌はこたえるのである。だからボクは捕まらないように先へ先へ走ってゆく。銭湯の流し場では逃げられないので、ぴたんっぴたんっと異様な音がタイル張りに反響した。周囲の人がふり返る。ボクは恥ずかしいので、薄笑いしながらあたりを窺ったりしなければならない。近所の評判では、親の留守にボクが虐待されていると思われていた。

そんな低俗野蛮な祖母だが根は善良で、ボクはべつに嫌ってはいなかった。買い食いとおしゃべりが好きで、近所の洋食屋、喫茶店、お好み焼き屋で田舎弁まるだしでよくしゃべっていたが、かならずボクを連れていった。ボクは一つ布団に寝て、祖母のしなびた乳房をにぎって育った。

祖母もその頃がもっとも楽しい時代だったかもしれない。やがて日本が戦争に負けそうになり、首都東京が敵の攻撃目標になってきた。ボクは浜松の母方の一族と富山県の山の中へ疎開し、祖母は親類をたよって千葉県の田舎へ逃げた。終戦後は東京へは戻らず、母の在所の浜松へ居着いて、またボクといっしょに暮らすようになったわけである。

祖母の年齢をよく知らない。昔からお婆さんだったような気がする。よく働くけれど、総入歯を茶碗の湯の中で洗い、そのお湯を飲んでしまう。みそ汁の味見をするのにしゃもじをじかに口に当て、残りをまた鍋にもどす。ご飯や煮物によく髪の毛がまじっていた。ある時にはみそ汁の中に一かたまりの毛玉が入っていた。炊事をしながら髪を梳

いたにちがいない。汚い婆さんである。取り柄は、貧乏に慣れていて楽天家である。いくらボクにどなられても嘘ばかりついてくじけない。それから和裁ができることである。

近所から浴衣の注文をもらってくる。生地の布へ糊を塗り、張り板の上で陽に晒してピンとのばす。寸法をはかって裁断する。夜ごと手縫いの針でシコシコと縫っていた。アイロンはどこから持ってきたものであろうか、中に炭火を入れる式のものである。そのアイロンをていねいにかけて出来あがりである。わずかな手間賃をもらうと、近所の駄菓子屋へ焼そばやお好み焼きを食べにゆく。夏はトコロテンやわらび餅である。ボクはえらそうに小言を言ったりどなりつけたりしているくせに、そういうときはおごってもらうのである。

田舎まわりの歌舞伎を観にいったこともある。近くに桟敷席のある南部劇場というのがあった。祖母はボクを誘っていそいそと出かけた。座布団を抱えて、

「市川牡丹は眼が大きいでね。きりっと睨むとそりゃいいよ。田舎千両っていうだよ」

と、昔から知っている口ぶりである。そういうときには遊郭の仲居をしていた顔にもどっていた。そのなごりかどうか祖母はずっと和服で、髪は昔のちょん髷のように頭の後ろで小さくしばっている。寝るときは箱枕だった。

◇

父が十四、五歳頃の写真であろうか、六歳ぐらいの男の子をおぶった写真がある。

「……政夫だよ」

と、父はあまり話したくない口調で言った。義理の弟だそうだ。源吉夫婦は父の後にもう一人里子を貰ったのである。政夫は成人して祖母といっしょに東京へ出てきた。たしかに東京の家に、体格のいい青年が出入りしていたのをかすかに記憶している。おとなしくて優しい感じだったが、いつのまにかいなくなった。父の話では、女にだらしがない。変な女にひっかかって、埼玉県のどこかで貧しく暮らしているという。

祖母は毎日遊んで暮らした浅草時代が忘れられない。その頃の話をするとよく政夫の名前が出た。

「お父ちゃんは学校じゃ勉強がよく出来ただが、政夫はいつもびりっかすでねぇ。でも、やさしい子だったよ。東京じゃ鉄工場へ勤めて別に暮らしていただが、給料日にはきっと遊びに来て、小遣いくれたり、どっかへ連れてってくれたよぅ」

ボクの直感では、祖母はたぶん政夫の世話になりたかったにちがいない。女のいいなりになるような男は優しいのだろう。だが他人と競って生きてゆく能力は低いようだ。祖母がそんな政夫を慕うことは、父にはいまいましいこと

かもしれない。落魄の芸人とすれば、せめて義母を養っているだけでも感謝されたいであろう。喧嘩ばかりしているボクにも嫌味に聞こえる。がさつな祖母にはそんな配慮はない。

「政夫はいまどうしてるかねぇ」

などと言うので、

「政夫さんのところへ行きなよ」

「……どこにいるかわからんじゃないか」

「調べりゃわかるさ。わかったら行くかい？」

どうせ断られるにきまっている。意地悪くからんでやると、

「……行ったってしょうがない」

祖母はうらめしげにボクを睨んだ。

◇

秋が深まったある日、学校から帰ってくると、向かいのお婆さんが家の前に立っていた。「お松さん」と呼ばれている人である。

「変な声がするよ。どうかしたんじゃないかね」

と言った。たしかに家の中から叫び声がしている。家に飛びこんで便所の戸を開けると、祖母の痩せた尻が和式の便器にはさまって抜けないのである。

「目がまわって……」

尻餅をついたらしい。脇の下へ手を入れて引きずり上げた。あっけないほど軽かった。足元がふらついているので、とりあえず布団を敷いて寝かせた。もともと喘息の持病がある。コンコン、ヒーヒーとむせていた。

「便所で倒れると、よくないって言うよ」

お松さんが小声で言った。この人の亭主は母の伯父である。新興宗教の布教所をやっていて、ボクの家の地主でもある。親戚中でも近所でもケチで薄情な夫婦で通っていた。とくにお松さんは「冷たい女」だと言う人がある。祖母が助けを呼ぶ声を聞いても、なかなか家の中へ入らなかったようだ。面倒に巻き込まれることは嫌なのである。

次の朝ボクが目を覚ますと、祖母は起きて台所でコトコトと音をたてていた。みそ汁のにおいが流れていた。

ボクはいつものように学校へ出かけたが、帰ってくると祖母はまた布団の中で横になっていた。

「晩ごはんは、作っておいたでね」

ごほごほと咳きこみながら弱々しい声だ。そんな病人ぶった声がわざとらしくて嫌な感じだった。

「ちょっと行ってくる」

ボクは鞄を放りこんで外に出た。同級生の山川と映画を見に行く約束をしていた。

広い道へ出ると向こうから山川が走ってきた。鞄を置いてきたのだ。

「待ったか？」

「いや。今日は工場休みだって？」

「モーターが壊れてな、修理してる。親父のやつ昼間から飲んでやがる」

山川の父は少し前に染色工場を始めた。借金で家と工場を建て、電話やオート三輪車を設備した。経営は苦しいようだ。山川も小学生の弟も学校から帰ると仕事を手伝わされる。水仕事なので山川の手はいつも霜焼（しもやけ）でふくれていた。それに小遣銭も少ないので映画を観ることもごくまれである。いつも二流の映画館だ。二流は古い映画だから料金が安い。しかも三本立てである。

全部見て帰ってくるとすっかり夜になっていた。明るい商店街を歩いてくると同級生の松本恵美子に出会った。微笑してかるく会釈をしてすれ違っていったが、少し前を男の高校生がさりげなく歩いていた。

「あいつら、さっき並んで歩いてたぞ」

山川はいまいましそうに振り返った。松本恵美子に憧れている同級生は多い。勉強も飛び抜けて出来る。ピアノも弾く。色白でスタイルのいい多才な少女。家庭も裕福である。あるとき山川はため息でもつきそうな顔で、「天は二物を与えずって、嘘だな。一人の人間にいくつも与えている」と言った。恵美子を羨望しつつ、特別な感情を抱いていることはすぐにわかった。

「新劇の女優志望だって、ほんとかな？」

山川は未練げにまた振り返る。

「ほんとうだろう。あいつならなれるさ」

「外国の恋愛小説ばっかり読んで、それで自由恋愛か……」

「あばずれだよ」

ボクは敢えてけなして山川をなぐさめた。ボクと恵美子は同じクラスで文芸部にいる。他人の詩などを褒めたりけなしたりして手や肩を叩きあっていた。山川ほど距離は遠くない。

山川は別れぎわに、

「俺、工業高校へ行くことにした。染色屋だからな。おまえはどうする？」

と言った。ボクは黙っていた。内情はボクより貧しいかもしれない山川が進学するのは意外だった。ボクは秘かに定時制ならどうかと模索していた。しかし昼間工場で働いて、夜遅くまで学校の机にかじりついているイメージは暗い。恵美子などはすでに青春を満喫している。えらい違いだと思った。

路地を入って、家に明かりがついていないことに不審を抱いた。紐を引けば点灯できるようにしてあるのだ。

手探りで中に入る。闇の中にこんもりと布団の位置がたしかめられた。動く気配がない。なぜかどきりとした。

「お婆ちゃん……」

電灯をつけると布団がかすかに動いた。眠っていたらしい。コンコンと咳をしている。
「なんだ……死んでるのかと思った」
「なにを言うだ、縁起でもない」
祖母はもぞもぞと布団の上に起きてきた。

◇

夏向きの家に冬がきた。新聞紙を丸めてふさいでも、すきま風はどこからか入ってくる。
祖母は寝たり起きたりしていたが、とうとう一日中起きてこなくなった。枕元に酒の四合ビンに入れた煎じ薬を置いて、ときどき変な姿勢で飲んでいた。キンカンの実を煎じたものだという。
ボクが炊事をする羽目になった。七輪(しちりん)に炭をおこすのだが、これが意外にむつかしい。七輪の中に紙や木屑を入れて火をつける。その上に消し炭を乗せ、さらに固い炭を乗せる。七輪の口を団扇であおぐ。やりそこなうと家中がもうもうたる煙である。
「おーい、けむいよぅ。なにしてるだ」
さっそく病人がゴホゴホむせながら文句を言ってくる。
「うるせぇな。こっちだってけむいんだ。がまんしろよ!」
どなり合いながら、布団の中の祖母の指示通りに飯を炊き、みそ汁を作った。

学校を遅刻する日が多くなったが、担任は「そうか、お婆さん病気か……」と言っただけで咎(とが)めなかった。両親が旅に出ていることも知っていた。
祖母の布団にやぐら炬燵を入れてやった。豆炭が入っている。いつもはそれでボクの布団を温めておいて、ボクが寝ると後を祖母が使っていた。これからボクは冷えた布団に入らなければならない。震えながらちぢこまっていると、チロが端のほうからそうっと入ってきた。炬燵で温まっていても祖母の布団には入らないのである。
寝たきりにはなったが、祖母はトイレだけは自力で済ませた。這っていって柱や羽目につかまって立った。
ある日、ボクの留守に山川が訪れた。
「こんちはー。いるかぁ」
表戸を開けると境の障子が半開きになっていて、ちょうど立ち上がったばかりの祖母が見えたという。もともと痩せさらばえている。青ざめた皺だらけの顔、ほつれて茫々の髪。それが人の気配によろよろと近寄ってきた。まるで亡霊である。
山川はわりに気が小さい。
「俺、あれから二、三日不眠症になっちゃってな。よわったよ」
「オーバーなこと言うな。俺はいっしょに暮らしてるんだぜ」

「いや、亡霊に驚いただけじゃない。俺も年をとってああなるかなぁと、後でいろいろ考えて憂鬱になったんだ」
両親から今月の送金があった。いつもより少し多い。祖母が寝付いたことを知らせたからである。父の手紙が添えてあった。
〈今月から新潟県の温泉センターに移った。今年はいつもより積雪が早いという。母さんが腰痛で難儀しているが大丈夫だ。お婆ちゃんをいちど医者に診せてくれ。おまえにばかり世話をさせてすまない――〉
新潟は雪国である。ボクは幼いころ富山県の田舎に疎開していたから、雪の中の生活がどんなものか想像がつく。持病の腰痛を抱えて、雪の町を長靴で歩いている母の姿が浮かんできた。
真夜中に誰かに呼ばれて目を覚ますと、祖母が布団の上に座っていた。喉をゼイゼイ鳴らしながら肩で息をしている。
「ちょっと背中をさすっておくれよ」
今にも死にそうな声だ。
「ええっ、この寒いのに、冗談じゃないぜ」
「そいでも、苦しくて、苦しくて……」
「なに言ってんだよ。お婆ちゃんは一日寝てただろうが、俺は起きてたんだ。眠くてしょうがないよ」
ずうずうしいババアである。健康な者まで病苦に巻きこもうとする。その手は桑名の焼きはまぐりだ。ボクは背を向けて寝たふりをしていたが、ゼイゼイとますます苦しそうである。
喘息というのは、吐く息と吸う息が同時に塞がれてしまうので息ができなくなる。苦しい病気だそうだ。
「……もう、うるさいなぁ」
どうせ眠れない。舌打ちしながら起きて骨ばかりの背中をさすってやった。祖母はおもねりをこめて、
「ああ、楽だよぅ。楽だよぅ」
としきりに言う。
(嘘つけ。さすったくらいで、急に楽になんかなるものか。ババアめ芝居してやがる)
寒くて鼻水が出てきた。十分もさすっただろうか、ばかばかしくなってきた。
「終わり! きりがない」
突き放して寝てしまった。
次の日、学校から帰ってくると、外で待っていたチロが足に絡みついてきた。餌皿が空になっているにちがいない。餌皿は祖母の手の届くところに置いてある。
「お婆ちゃん、餌やらなかったのか?」
言いながら上がってゆくと、祖母は目をつぶってぐったりしていた。かすかに息はしているようだが、呼んでも返事をしない。あわてて向かいの家へ駆けこんだ。

お松さんがゆっくり出てきて、
「医者を呼んだほうがいい。電話しなよ」
その後で「電話賃はもらうよ」と言った。どんなときにもしっかりした婆さんである。壁にどこかの医院の電話番号が貼ってあった。医者など誰も知らない。とにかくそこへ電話した。
しばらくすると路地の前に自動車が停まった。年寄りの医者が看護婦をつれて降りてきた。そのころには祖母も少しは生気をとりもどしていたが、注射をされると急に元気な顔になった。医者が来たことを誇らしく感じているようだった。
「心臓がだいぶ弱ってるな。あとで薬を取りに来なさい」
横柄に言って医者は帰った。お松さんが言うには元軍医で気骨のある人だという。薬をもらいに行くと、支払いがびっくりするほど安かった。家の様子を見て仁術を施してくれたらしい。ありがたいような情けないような気分である。栄養のあるものを食べさせろと言われたので、帰りに駄菓子屋へ寄ってお好み焼きを焼いてもらってきた。食べられるかどうかと見ていると、寝たままぺろりと食ってしまった。
「なんだ、元気いいじゃないか」
騙されたような気がした。

◇

正月を過ぎたころである。布団の中で祖母が変な表情でもじもじしていた。どうやら失禁したらしい。ボクは布団をまくって「臭せえっ」と、露骨に顔をしかめてみせる。祖母は恥ずかしいのか逆に怒った顔をしていた。
布団を替えて、濡れた布団や毛布を外へ干した。日が当たると臭いはいっそう強烈である。
「なんで俺がこんなこと……」
同級生で誰かこんなことやっているだろうか。腹が立ってしかたがない。たぶんこれから排便の世話をすることになりそうだ。
すこし離れた所に母の妹がいた。実の叔母である。富山県へ疎開したときには、この人がボクの母親代わりをしてくれた。
相談すると、
「まさか家政婦も雇えないしねぇ……」
ため息をつきながらブリキの「おまる」を貸してくれた。三角形でちょっと見るとハンチングのような形をしている。低いほうを尻に当てておけば寝たまま尿も糞もできるのだそうだ。
祖母は痩せているので、ブリキに尾骨が当たって「痛い、痛い」とごねている。
「ぜいたく言うなよ」
臭い布団をまくって処理をする身にもなってみろであ

る。それでもしぶしぶタオルを尾骨の下に敷いてやった。
寝たまま用が足せるせいかどうか、祖母は水ばかり飲んで小便の頻度が多くなった。用を足した後はすぐにボクを呼びつける。ちり紙で後始末をしてくれと言う。そういうことは潔癖性らしい。こき使われて腹立たしいので、始末をしたあとしばらく布団をまくったままにしておいた。寒さがこたえたら少しは水を飲むのも加減するだろうと思ったが、病気で口が渇くのだから中毒患者のようなものだ。
それで一計を案じた。枕元に置いたヤカンを小さな急須に替えてしまった。ボクが外出してしまえばやがては急須が空になる。空にならないように、工夫して飲むだろうと思ったのだ。
ある日、外から帰ってくると布団が空になっている。驚いて見回すと台所の床を祖母が這い進んでいた。流し台に手をかけて今にも立とうとしている。自力で水を飲むつもりだったのだ。
(そんなにも飲みたいのか!)
ボクは驚きと哀しい思いで棒のように立っていた。
ボクの気配に祖母はぎょっとふり向いた。邪魔するなと威嚇するようだ。その必死の形相が、そばへ寄りかけたボクをたじろがせた。鬼気迫るものがあった。

◇

冬休みが終わったがボクは学校へ行かなかった。すると、担任がとつぜん訪れてきて祖母の様子を見て帰った。ボクはみじめな家を見られて恥ずかしい思いをしたが、これで休みの延長が公認されたようなものだ。冬休みの宿題などまったくやっていない。学校で叱られなくてもすむことになった。病人の看護も悪いことばかりではないと、ちょっとおどけて舌を出したりしてみた。
朝はいそがしい。ふつうの飯とお粥の二食を作らなければならない。お粥には鰹節を入れて醤油をすこし落として味をつけた。ちょっと前は鍋を枕元へ置いておけば、祖母は布団の上に起きて勝手に食べたが、今は匙で口へ運んでやらなければならない。
煎じ薬が切れたので、近所の庭になっていたキンカンを一籠もらってきた。生でかじってみるとずいぶん酸っぱい。
(こんなもの効くのかな?)
疑いながらも鍋でとろとろと煮てやった。
叔母が来て、汚れたまま溜まっていた衣類や布類を洗ってくれた。
叔母は帰りぎわに遠くから祖母を眺めて、
「病人がああいうことをすると、長いことないって昔から言うよ」
とボクの視線を誘った。祖母が顔の前に掌をかざして裏表をひらひらさせていた。死の前兆として視力が衰える、

病人はそれを確かめることをするというのである。
ボクは、春になれば祖母はまた起きてくるかもしれないとどこかで思っていた。叱りつけたり意地の悪いことばかりして、お粥のほかはろくな食べ物も与えなかった。それでちょっとあわてた。今、死なれてはたぶん後悔することになるであろう。
「お婆ちゃん、なんか食べたいかい？」
我ながら利己的だが聞いてみた。
「なんかうまいもの食べたいよぅ」
祖母ははっきり目を開けて答えた。
「なんか買ってくるよ」
外は強い風が吹いていた。
祖母は明治生まれで故事をよく知っている。死が迫った病人の奇行をネタに、うまいもの食べたさにまた芝居しているのかもしれない。そう疑いながらも、饅頭や最中のようなちょっとした上菓子を買ってきた。
「食べられるかい？」
「食べられるとも」
祖母は布団の中からすぐに手をのばした。かぶりつくようにして食った。
「少し取っておいて、ぼちぼち食べたらどうだい」
しかし誰かに食われてしまうと思っているのか、ボクの言葉に耳も貸さない。餓鬼のように食う。唖然としてボクは眺めた。また一杯食わされたかという思いと、なにやら後ろめたい気分が交錯した。それほどに病人を飢えさせたのはボクなのだ。親からの送金は多くはないが、たまに菓子を与えるぐらいの余裕はあるはずである。みんなボクの小遣銭に消えてしまっていたのではないか。
菓子を平らげ、水をがぶがぶ飲んで、満足して祖母は眠ってしまった。後の排泄の多さには辟易するわけだが、
（まぁ、これもいいさ）
ボクは借金を返したような気分になった。しばらく寝顔を眺めていた。すると、軽くいびきをたてていた祖母が、ふいになにか寝言を言った。
「ありがと……」
と聞こえた。なんの夢をみているのだろう。菓子がよほどうまかったのか。ともかく祖母から礼を言われることはめったにない。少しばかり良い気分に浸りかけていると、直後に白けさせる言葉が祖母の口から洩れた。
「……政夫」
夢の中の相手はボクではなかった。苦笑して退散するしかない。
（くそババアめ！）

◇

祖母の便が黒っぽい茶色になったのには驚いた。故事を知らないボクでも、これが何を意味するものか漠然とわかる。

外でお松さんが洗濯物を干していた。
「オバちゃん、黒い便が出たよ。なんだろうね」
「それはカニババっていってね、もう長いことないって証拠だよ」
表情も変えずに言った。
「医者に診せたほうがいいかね？」
「さぁ、診せても診せなくても、おんなじだと思うよ」
冷酷なことをはっきり言う人である。ボクはその顔を眺めながら、この人は正直なのだと思った。たぶん自分が死ぬときも、天命のままに淡々として逝くのではなかろうか。
「……診せなくてもいいかなぁ？」
ボクは首をかしげてみせた。我ながら責任転嫁をやっているようだ。お松さんの冷酷さにおんぶしているのだ。
カニババの臭気は異様なものである。薬品のような変な臭いがまざっている。ボクは布団をまくるたびに顔をそむけて、
「あしたから、汲み取り料をもらうよ」
などと嫌味を言った。
カニババはずっと消えなかったが、祖母はとくに弱ったふうもなく、飲み食いもしっかりしていた。夜中にはボクを叩き起こして背中をさすらせた。
郊外では、菜の花がちらほらと咲きはじめていた。
外出から戻ってくると、部屋の空気がすっかりカニババの臭気に汚染されていることがわかる。それは祖母の生きている証しのようでもあったが、ボクの心を哀しい葛藤に追い込んでもいた。暖かくなれば起きてくるかもしれないと、奇跡を願う気持ちもある。どうせ死ぬなら早いほうがいいと、冷酷な思いに駆られるときもある。
ボクの偏見か、祖母の顔がしだいにしぶとく生きているという感じになってきた。排便後の処理で嫌な顔をしたりすると、
（このまま何十年も生きて、おまえに復讐してやる）
意地の悪い目で睨むことがある。手荒い看護にみじめな思いを抱きながら、心の底ではボクを呪い嘲笑しているのかもしれない。
学校がやがて春休みに入るころ、山川が学校帰りに立ち寄った。
「あした、松本恵美子が来るってよ」
「えっ、俺の家へか？」
「文芸部の有志で見舞金を集めたそうだ。松本が代表で持ってくる」
これは仰天だ。裕福な人間の気まぐれや偽善は、まことに迷惑である。
「おいおい、冗談じゃないぜ。見舞い金なんかいらねぇよ。

こないでくれって言ってくれ。頼むよ」
拝みたいほどの思いだ。こんなあばら家と幽鬼のごとき病人だ。恥ずかしくて見せられるものではない。恵美子にはなおさらである。
「……そうだな。俺から断ってやるよ」
山川は頷いて去った。彼にはボクの狼狽がよくわかるはずである。
畳に仰向けにひっくりかえって、汚い天井を眺めた。しなくてもいい見舞金を提案したのはたぶん恵美子であろう。ボクの家を個人的に訪問する口実かもしれない。裕福で遊びに積極的な女だから、貧乏人の羞恥などおかまいなしだ。しかし、青春とはそうした交流で花が咲くものである。そんなせっかくの好意を断ってほっとしているとは、我ながら哀れだと思った。もともと恵美子はボクの詩や散文に好意的な評価をしていた。あるとき写真を交換しようとも言った。ボクはそのときも曖昧に笑ってごまかした。恵美子と今以上に親密になることを怖れているのだ。貧乏とは卑屈になることだと思った。
ふと気づくと、チロの顔が間近にあった。
夕暮れで家の中が薄暗い。いっぱいに開いた瞳孔がじぃっとボクを見ている。たぶん餌をねだって媚びているのだが、恵美子のことを考えていたせいか、一瞬どきっとさせられるほどそれは美しく妖艶だった。
（……おまえは、美人だなぁ）
寝返ってチロに頬擦りした。柔らかな毛の感触が心地いい。なぜか狂気のように抱きしめたかった。あまりのしつこさにチロは当惑したようだ。苦しがってボクの手をひっかいて逃げていった。

◇

お粥を食べさせていると、めずらしく祖母は「もう、いい」と顔をそむけた。
「へぇぇ、今日は少食だね」
「味付けがしょっぱすぎるだ。あしたからもっと薄くしとくれ」
「しょっぱいか、変だな？」
そのとき祖母はふいになにかを思い出して、一人でふっとふき出した。もぞもぞと昔の話を始めた。
「味の話で思い出した。東京にいたとき、おまえの母ちゃんが旅から帰ってきて、よしゃいいのにボタ餅作ったっけ……おまえがせっかちに横から手をだして、一口食べてあわてて口からほき出した。えらくしょっぱいボタ餅だったでなぁ……砂糖と塩とまちがえただよ」
何度も聞いた話である。祖母は誰も笑わないと「……大笑い」と自分だけ笑ってしめくくるのである。ボクは返事もせずに粥の鍋を台所へ運んでいった。
古い柱時計が六時五十分を示している。七時からテレビ

でプロレスの実況があるのだ。
「俺、ちょっと出かけてくるでな」
祖母はもう少し昔の話をしたかったのかもしれない。不機嫌になって、
「どこへ行くだよ？」
「どこへ行こうと勝手だろ」
咳き込む声を聞きながら、出入口の戸をわざと手荒く閉めた。
街のラジオ店ではテレビを店頭に置いて、特別な人気番組を通行人に見せていた。高価なテレビが買えない庶民は、みんな街へ立ち見に行くのである。
路地はもう暗かった。片方の下駄の鼻緒がゆるんでいた。早く行かないと良い場所が取れない。がらがらと下駄をひきずって急いだ。
華麗な商店のウインドーが並ぶ。横町では赤提灯やバーのネオンが客を呼んでいる。どこからか美空ひばりの「リンゴ追分」のレコードが洩れていた。
（世の中どんどん変わってゆくなぁ……）
変わらないのは我が家ばかりのようだ。
テレビの前はすでに前が見えないくらいの人だかりである。相撲を辞めてプロレスに転向した力道山が、アメリカから凱旋してきた。巨漢のアメリカ人レスラーを、得意の空手チョップでバッタバッタとなぎ倒す。戦争に負けて希望を失っていた日本人にはそれがたまらなく嬉しい。力道山がやられそうになるとはらはらして声援した。どんなに痛めつけられても、けっきょくは力道山が勝つのである。それでみんな愉快に解散できる。
テレビの興奮を惜しむように、しばらく街を歩いた。家に帰っても楽しいこともない。古本屋で文学全集や詩集を立ち読みしてぶらぶらと帰ってきた。
家の路地を入ったところで少しいやな予感がした。出がけに祖母の不機嫌になった顔が甦ってきた。いつになく多弁だったことが妙にひっかかった。
戸を開けると、ガラス障子の向こうに裸電灯にひっそりした部屋が見えた。箱枕から落ちて横向きになった祖母の顔がある。口が少し開いたままだ。
ボクはなぜか息をつめて座敷に上がった。
こういうドキッとさせられたことは何度もある。眠っているにちがいないと敢えて思いながら、おそるおそる布団を揺すってみた。
「お婆ちゃん。おいっ……お婆ちゃん！」
返事もなく、固い体がまったく動かなかった。
——しゃがんでいた足に力が抜けた。尻が畳に落ちた。頭の中が真っ白だ。
（死んだのか？　まさか……ほんとうに死んだのか？）
死ぬかもしれないとどこかで思っていたくせに、この突

然が信じられなかった。さっきまで笑って話していたではないか。死ぬとはこんなにもあっけないものなのか。ボクは罪人のようにあたりを見まわした。静かすぎることが怖ろしい。

しばらくそのままぼんやり座っていた。少しずつ冷静になってきた。

直接の死因は喘息だろうか？　激しい喘息の発作が続いて、弱っていた心臓が止まってしまったのだろうか。ボクがプロレス観戦に夢中になっているとき、祖母は苦しみもだえていた。助けを呼んだかもしれない。いくら呼んでも誰もこない。

「……ごめんな、お婆ちゃん」

祖母の頬に触れてみた。すでに冷たかった。たった一人の哀れな死に方だと思った。生まれてから貧乏ばかりの不運な人生である。

幼いときからずっといっしょに暮らしてきた。慣れ過ぎてぞんざいな扱いになった。優しい言葉など一度もかけてやらなかった。せめてボクではなくて別の人の看護を受けたかったであろう。

部屋の隅に物差しが落ちていた。尺、寸という単位の鯨尺である。着物を仕立てるときに使っていた。裏側に「いち」とへたな字で書いてある。

布団の下から大きな財布がはみ出していた。ずいぶん古い。ガマグチと呼ばれる口金のついたものである。仕立ての内職で得たお金をここから出し入れして、後でばちんっと口金を鳴らしていた。

そうっと布団の下からガマグチを抜き出した。すくに開けて調べることを躊躇した。そのへこみようから中身が想像できる。はげしい自責の思いが迫ってきた。祖母に一度も小遣い銭をやったことがなかったのだ。寝たきりの老人が買い物をすることはないと思っていた。考えれば、他人に買ってきてもらうこともできた。祖母はそれを言わなかった。買い食いの好きなお婆さんが、空の財布を抱えて毎日ただじっと寝ていることは苦痛である。しかしボクに要求しても、どうせどなられるだけだと思ったのだろうか。

ボクはとうとうガマグチを開けた。やはり一円も入っていなかった。ていねいにたたんだ小さな紙切れが一枚出てきた。南部劇場の優待割引券である。座布団をかかえていそいそと歩く祖母の姿が浮かんできた。

（お婆ちゃん……）

冷たく固くなった手を撫でた。骨太の節くれた指だった。また胸がつまった。夜なべをして稼いだわずかな銭で、ボクにおごってくれたのである。ボクは小言ばかり言ってなにもしてやらなかった。医者もたった一度しか呼ばなかった。

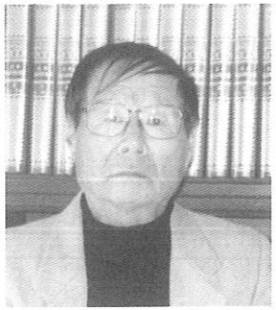
いつかボクは畳に両手をついていた。突き上げてくる涙を押さえきれなくなった。

◇

白布に包んだ骨壺を首から胸にかけて、学生服のボクはとぼとぼと先頭を歩く。周囲の人々から、たった一人で祖母の看病をした少年は褒められた。褒められるたびに少年はうなだれた。

一面の菜の花畑の道を、わずか五、六人の葬列が進んで行った。遠い遠い記憶の風景である。それで今でも菜の花畑を見ると、古傷のように胸が疼く。年を経るごとに、祖母と猫しかいなかった家が、暗く哀しく見えてくるのである。

祖母の死



志賀幸一

しが　こういち

1939年生まれ
静岡県浜松市在住
浜松短期大学商科卒
詩誌「遠州灘」に24年在籍し
退会（平成17年）
個人詩集「詩思遊」
伊豆文学賞（小説）
　第7回（平成16年）優秀賞
　第8回（平成17年）優秀賞

受賞の言葉　志賀幸一

人生には他人の審判を受けなければならないことが多々ある。小説を書いて評価を得ることもその一つである。予選から最終選考までそのどきどきするようなプロセスも魅力だが、やはり当選してナンボのものである。

小説はフィクションがたてまえで、フィクションの部分が多いほど面白いが、あまり多すぎると浅薄になってしまう。〈祖母の死〉という小説は80パーセントが真実である。面白味には欠けるけれど、そのかわり迫真さでまさる。そんな大甘の自画自賛で出品した。

いつも思うことだが、選者の眼というものはたいしたものだ。だから選者というわけだが、その慧眼の門をくぐり抜けて当選するのには少しばかりの運も左右する。今回は幸運に恵まれた。とはいえ推敲百回、努力が認められた喜びは筆舌に尽くしがたい。

バブルの前後は金儲けにばかり狂奔し、日本人の教養も文化もなおざりにされてきた。ちかごろ日本語や漢字のクイズがテレビの番組に出てきて、その広がりの中から、衰退した日本文学の復活に淡い期待を抱かせるほどになってきた。よろこばしいことである。

そんな折りに私のつたない小説も世に出た。〈祖母の死〉は、私の中にずっと消えずにいる忸怩たる思いである。一人でも多くの人に読んでいただき、厳しい評価をいただきたいと願うばかりである。

銀鉛色の海

山下悦夫

海に夕闇が迫っていた。西の水平線に沈みかけた北の太陽が、東に被さるようにそそり立つシリバ岬の残雪を赤く染めている。

ここは北海道の余市町沖にある鰊建網漁場。昭和二十五年の鰊漁期も、三月初めの網おろしから半月余りが過ぎて、冬の日本海の荒々しさがようやく消えようとしていた。

北海道西海岸の鰊漁業は鰊建網が主体だった。この網は旧式な定置網で、魚を誘導する垣網と漁獲する身網からなり、身網は岸から四百から千メートル程の沖合に設置する。沖合に生息している鰊は、三月から五月にかけ沿岸に押し寄せて産卵する。これが群来で、この魚群を漁獲するのだ。漁場では網起こしが行われていた。鰊建網の網舟（作業船）は、網起しを行う起し舟、魚を取り込む枠舟、大船頭が乗る指揮船の口引舟で編成されている。起し舟の船端に立ったヤン衆が身網を手繰っているが、そのかけ声にいま一つ威勢がなく、網を曳く手にも力強さが感じられない。鰊が入っていなくても、身網の形を整えるために頃合いをみて網を揚げるのだ。網起こしは早いペースで終わった。

「おーい、学生さんよ。網は空網だ。早く寝るべし」

曳船の船橋で網起こしを見守っていた船長が、船首にいる今村に言った。今村は東京近郊にある水産大学の一年生で、一年上級の柳川と学年末休暇を利用した漁業実習に来ているのだ。そして今日が初めての出漁だった。

「もう寝るんですか」

今村が聞き返した。まだ六時にもなっていない。四時過ぎに夕食を食べて沖に出たのだ。

「この船だば、網起こしのたんびにシタンバイしなければなんね。網は朝までに二回か三回は起こすはんで、手すいたら寝とくんだ」

船長は後ろ手で船橋のドアーを閉めながら言った。曳船は発動機船で、無動力の網舟を曳航して漁場を行き来する船である。

今村達が実習している鰊漁場は、室蘭に本社のある日水産が経営するもので、事業場はモイレ海岸にあった。午過ぎに余市へ着いた今村たちは、漁場の責任者である事業場長に面接した。四十歳を少しこえた年格好のその人は、面長の端正な顔立ちで古いが生地の良い背広を着ており、漁村にはそぐわない都会的な雰囲気を備えていた。到着の挨拶をした二人に事業場長は、

「本社が一方的に君らを押しつけてきたんだが、鰊は年々減っているし漁場も北へ移っている。鰊漁は先細り状態だ。いまさら実習しても意味がないんじゃないかな」

と、主に札幌など都市部で使われている、イントネーションの北海道訛りを除けば標準語に近い言葉で言った。

北海道の鰊漁業は、明治中期に百万石（七十五万トン）を超えていた漁獲が、昭和十年代には二十万石（十五万トン）以下に落ち込み、大平洋戦争終了前後にはやや回復したが、その後は再び不漁に転じている。漁場も、大正年代に南部での漁獲が激減し、昭和二十年代では積丹半島以北の西海岸に限られるようになった。それで、江戸時代から千石場所として知られてきた余市も、鰊場としては南限に位置することになってしまった。

追い返されるのか、とやや緊張した面もちで突っ立っている二人を見ながら、事業場長は慰め顔で続けた。

「まあ、折角きたんだから、鰊場がどんなものか勉強してってくれ。それにしても、君たちのいる間に纏まった漁があればいいがな」

そして傍らにいた六十歳ぐらいの事務員に、

「学生達の寝場は宿泊室でいいだろう。それから大船頭に紹介してやってくれ」

と言って不機嫌そうな顔のまま黙り込んだ。

ヤン衆の総帥である大船頭は五十歳ぐらいの年格好で、作業服のうえに樺太犬の毛皮の袖無しを着ていた。

「そんだか。学生が実習をするだか」

大船頭は事務員の話に頷いてから、

「起し舟に一人と曳船に一人乗ってけれ」

と訛りの強い東北弁で言った。

それで、起し舟には北陸のブリ定置網で実習経験が

※筆者注　漁場（ぎょじょう）網や釣り具などで魚や貝などを漁獲する場所。
漁場（ぎょば）水産物を生産（漁獲・加工・保蔵・流通）する一単位。個人経営の多い漁業で用いられた。余市にある保存鰊番屋は福原漁場と呼ばれている。
鰊場（にしんば）鰊漁業が営まれる場所。

ある柳川が乗り、今村は曳船に乗ることになった。

曳船は十トンほどで、十五馬力の焼玉機関を装備していた。乗組員は二十歳代後半の船長と船長よりやや年上の機関長だったが、水夫役の今村が加わったので三人となった。

寝場所は船橋前の魚艙だった。機関長は機関室に寝るので、船長とここで寝るのだ。海は少しうねっており、船はゆっくりと揺れていた。筵を敷いただけの板敷きに服を着たままのごろ寝だが、ダルマストーブがあるのでそれほど寒くはない。船長はすぐに寝入ったが、今村はなかなか寝付かれなかった。

今村は水産大学で一年を過ごしたが、将来を漁業に託すことへ疑問を抱くようになっていた。もともと漁業に魅力を感じていたわけでもなく、仲のよかった同級生に誘われて受験したのだった。だが捕鯨船に憧れていたその男は落ちてしまい、自分は本命だった工科系の大学に不合格だった。進学すべきか迷ったが、父が公務員である家の経済を考えると浪人する気にもなれなかった。

しかし、入学して幾らもたたないうちに、水産大学に進んだことを後悔するようになった。占領下の漁業は日本近海に閉じこめられていて、大手水産会社も鰹鮪などの近海漁業で細々と息を繋いでおり、漁船の労働条件等も最悪で、産業としての魅力に欠けていた。といって工科系に入り直す気力も失われたまま、教職の単位を取って教師にでもなろうかと考えながら学校に留まっていたのである。

水産大学は実学優先の気風が強く、学期末休暇などを利用した漁業実習を奨励していた。アルバイト代わりにもなるので一度は経験してみよう、と思っていた春休み前、寮で同室の柳川が鰊場で実習することを知った。北海道なのも魅力だったので同行したのである。

今村は、そんなことを思い出しながら、それでも二日間の旅の疲れでうとうとした。どれほどもたたないうちに、

「起きれ。網起こしだど」

と言う船長の声で目を覚ました。網の方からは、夕方と少し違う緊迫感のあるかけ声が聞こえてくる。「群来か」と飛び起きて甲板に出たが、またしても空網だった。

その夜は二回網起こしがあったが何れも空網で、朝六時前に最後の網起こしをして漁場を引き揚げた。三十分あまりでモイレ海岸に到達し、船を漁港に繋ぐと朝食である。昨日の夕食はお客様扱いで宿直室で食べたが、今朝からは番屋で食べるように言われていた。

ヤン衆の生活場である番屋は、板敷きの広間が居間兼食堂である。ヤン衆には座る場所が決まっているらしく、それぞれに山盛りの丼飯と味噌汁碗が置かれている。

今村たちは、どこに座ったらよいか分からないまま佇んでいると、若い女がやってきてヤン衆たちから少し離れた板敷きを指さした。

「すぐ飯を持ってくるはんで、あすこで待っていてくんろ」

彼女はオオナベと呼ばれる炊事婦頭で、二十歳を少しこえた年格好だった。名はなみ子で、体全体が丸々として健康そうな肌色をしていたが、鼻が丸まって小さい割に口が大きく、美人というにはやや遠い顔立ちだった。だが、目がキラキラと光っており、絣の筒袖にもんぺと長靴姿が番屋の風情と調和がとれていて、それ相応に好ましい印象を受けた。

腰を下ろして待っていると、先ほどの女と同じ服装をした小柄な娘が、盆にのせた朝飯を運んできた。今村たちの前へ来ると、二人の顔を見ないようにして丼を配ったが、手が震えて味噌汁を少しこぼしてしまった。今村が娘を見直すと、東北の女に特有な色白の細面にはあどけなさが残っていて、娘というより少女といった方が正しかった。接したことのない東京の大学生などという種族に向きあったので、少し緊張しているのだろうか。

そのときヤン衆の中から、

「おーい、ゆき。味噌汁をもう少しけれ」

と声が掛かった。ゆきと呼ばれた娘は「はーい」と言って、炊事場のほうへ小走りに去っていった。今村は、長靴履きの後ろ姿に見入りながら「北の漁場にいるのだ」という思いが胸をひたしてくるのを感じていた。

こうして今村たちの鰊場実習が始まった。

早めの夕食を済ませた午後四時、夜食の飯櫃をぶら下げたヤン衆に混じって漁港に行く。

まず曳船が出港し、起し舟、枠舟、口引舟が漕ぎだしてくるのを待つ。十六人が乗っている起し舟では、若い衆が船首の両舷で櫂を漕ぎ、網舟船頭が艫櫂で舵をとる。港の入口を出ると同時に舟漕ぎ音頭の唄声があがる。

鰊場の労働の多くは音頭にのせて進められる。網起こしのときの網起こし音頭、鰊積替えの沖揚げ音頭、網に着いた数の子を振り落とす子たたき音頭などなど……、それぞれの労働に合わせた音頭が唄われる。

音頭は、節の調子で全員の力を結集させる一方で、節と節とをつなぐ微妙な間が力を抜かせて疲れを休めさせる。節回しを先導する「ハオイ」と拍子を取る「シタ声」との掛け合いで進められるが、声に自信のある者が「ハオイ」を、残りが「シタ声」を唱える。

歌詞はそのときどきに合わせて組み合わされ、ときには即興の文句も織り込まれる。しばしば卑猥な歌詞も混じる鰊場の音頭は、厳しい北の海での仕事に堪えるための労働歌だが、それだけにヤン衆の哀感が込められている。

中でも舟漕ぎ音頭は、音頭というよりかけ声といった方が適当なのかもしれない。歌詞らしい歌詞はなく、かけ声と合いの手だけが延々と繰り返される。遠くの海鳴りが伝わってくるような沈み込んだ響きを持ちながら、どこか人懐っこく耳障りのいい独特の節回しである。やはり音頭としかいいようがない。

「おしこーお（ハオイ）」

「オーオシコー（シタ声）」

「えんやぁ　さーえー　おしこーお」

「オーオシコー」

「ほらえー、おしこーお」

「ホォラァヨー　オーオシコー」

北の漁場特有の櫂漕ぎ船から、鰊曇りに淀んだ海面を流れ伝わってくる舟漕ぎ音頭は、鰊場ならではの情感を醸しだす。今村は音頭をなぞらえている自分に気がつき「俺も鰊場生活になじんできたな」と、やや感傷的になりながら思った。

やがて船列が整い、曳船は漁場に向かって進みだした。また夜を徹しての鰊待ちが始まるのだ。しかし、この夜も鰊の姿はなかった。

陸での今村たちは、網仕事を手伝うかたわら、操業記録の記入や水温観測のグラフ作り、仕切伝票の整理などにあたった。また、この町にある北海道の中央水産試験場を訪れて、鰊情報を聞いてくるのも仕事の一つだった。それで昼間も結構、忙しかった。

余市に来て一週間あまりが過ぎた日、網換えで朝から全員が沖に出ていたが、今村は鰊情報当番だったので陸に残っていた。情報を聞いてきて事業場長に報告すると、伝票の整理を手伝った。しばらくして事業場長が出ていったので、以前から気になっていたことを事務員に聞いてみた。

「事業場長は言葉使いが違っているし、インテリっぽいところもあるけど、会社ではどういう地位の人なんですか」

老事務員はそれまで記帳していた帳簿から目を離すと、ちょび髭を指でなぞってから話しだした。

「あの人は、ここではただ一人の正社員だども、もとはこの漁場の持主だった梨元家の跡取りなんだせ。梨元家だば、余市きっての親方（網元）だったんだども、あの人は鰊場仕事を嫌って小樽の商業学校ば終えると銀行さ務めたんだ。したども、十年も務めねえうちに漁場ば任せていた弟が病死してしまった。仕方なく余市さ帰って引継いだんだども、不漁続きで経営があんべ悪くなって、戦争中に今の会社へ漁業権もろとも身売りしたんだ。この漁場の事業場長という身分ととっかえにな。したども、いまだもって役員でもなく唯の社員にすぎないさけ、肝の灼けることが多かんべさ」

事務員はさらに続ける。

「もっとも、いまの余市だば単独で鰊網を経営している親方は一人もいねえ。ほとんどが身売りしてしまったし、残っている者も漁業会社や商社との共同経営だ。昔は「仕込み親方」といって、漁期前に金を出して配当ば受ける金持ちがいたもんだ。その金が親方の仕込み資金となったんだども、漁があんべ悪くなってから金を出す者がいねくなった。親方だけの資金では回っていかねえ。銀行も金貸さねえ。単独では切り回しできねくなったわけさ。したども、余市の鰊もいつまで続くことやら。結局、あの人は旧幕時代から続いてきた梨元漁場の幕ば、自分の手で下ろすことになるんだべな。もっとも、それまでに会社を首にならなければだがなし」

事業場長は鰊に運命を操られた人なのだ。今村は事業場長が不機嫌そうにつくねんと椅子に座っている姿を思い出した。

幾らもない伝票整理はじきに終わった。することもないまま、事業場の中を見物してみよう、と思いたって事務所を出た。

余市でも指折りの漁場だと事務員が言ったこの事業場は、波打ち際から丘陵の際までを一杯に使った幅百五十メートル、奥行き百二十メートルほどの広大な敷地を持ち、事務所、番屋、製品保蔵倉、漁具倉庫などが建ち並んでおり、身欠き鰊や鰊粕の製造場と干し場も広大な面積を占めている。

製品保蔵倉の裏手にある身欠き鰊干し場まできたとき、丘の方から炊事婦のゆきが、樽を引きずるようにしてやってくるのが見えた。樽は小柄な彼女の手にあまる重さらしく、しばらく進むと立ち止まって樽を下ろし、腕をさすってから腰の手拭いで顔の汗を拭った。米・味噌倉は火災から守るために丘の下にあり、番屋からかなり離れている。二十キロはありそうな味噌樽で、彼女には過酷な仕事らしかった。

「持っていってやろうか」

今村が言うと、ゆきは真剣な顔になって頭を大きく横に振った。しかし重ねて言うと、嬉しそうに見あげてこっくりと頭をさげた。樽を下げて歩きだした今村が、後ろに付いてくるゆきに聞いた。

「君のような子が、こんな番屋で働くのは大変なことだろうなあ」

「なみ子さんがいろいろ助けてけるし、若い衆もみんな優しくしてくれるはんで、辛いことはなんもないせ」

ゆきは言ったが、声の低さが言葉とは反対に苦労を裏付けているようだった。三十人を超える人数の食事をなみ子と二人でやっているのだ。それだけでも大変でないはずがない。それに彼女は一人で来ているようだった。

「君のお父さんは一緒に来ていないようだけど、津軽にいるのかい」
ゆきは頭を小さく横に振った。
「鰊場もあまり景気がいいようじゃないから、他の仕事場の方がいいかもしれないね。きっと元気で働いて見えるのだろう」
そのとき、ゆきの歩みが止まったような感じがした。今村が振り向くと、ゆきは顔をくしゃくしゃにして立っていた。それから彼女は手拭いで顔を押さえた。
「ごめん、ごめん。なにか気にさわるようなことを言ったかい」
訳がわからないまま今村は聞いた。ゆきは目頭を拭うと、顔を伏せたまま再び頭を横に振った。
番屋の裏口まで来ると、なみ子が出てきて、
「おや、ゆき。早速、運び屋をつかまえたてば」
と言った。ゆきは恥ずかしそうに今村の後ろに隠れた。炊事婦にいいところを見せようと、若いヤン衆が樽や米俵運びを買って出ることが番屋の習いだった。
ゆきを泣かせたことに気を重くした今村は、船長に彼女の身の上を聞いてみた。
「ゆきも可哀そんだ娘でな。去年の春に、父親が留萌の鰊場で事故死したんだ。母親は身体あんべいくなくて十分働けねえうえに、弟や妹がずっぱしいる。そんで中学二年生のゆきが、学校ば休んで出稼ぎさ出たんだ」
ゆきも鰊に人生をくるわされた一人だった。今村は自分の心ない言葉が、彼女に父親のことを思い出させたことに気がついて後悔した。そして、ゆきが中学校を出てもいないことに驚くとともに、こんな少女が出稼ぎしなければならない漁村の実情に鬱屈を感じた。
そのころにはヤン衆のこともわかってきた。この漁場のヤン衆は、津軽の日本海に面した漁村からの出稼ぎだった。大船頭以下副船頭、起し舟船頭、陸回りなどの役付きと平漁師あわせて三十人ほどが来ていた。ごわごわの作業服を着て、ネルの風呂敷で頭と顔を覆った上から鉢巻きをし、声高の津軽弁で怒鳴り合う。今村には何となく馴染めない連中だった。
しかし、その厳つい外見とは似つかぬ純朴さを備えていることにも気付かされていた。それは、炊事婦への心配りや厳しい労働のときの助け合いなど、ちょっとしたときに滲みでてくるものだった。
ヤン衆から炊事婦までが一つの村で固められている中で、曳船の船長だけは隣村の人だった。そのせいか、他のヤン衆と接する態度もやや他人行儀なところがあった。曳船で網起しの終わるのを待つ合間に船長が話した。
「この漁場だば、二年この方まとまった漁がねえ。僅かばかりの鰊と雑魚の売上げだけで赤字続きだ。今年も不漁だったら漁場を続けられるのかな。我どらが村だば土地が狭くて田圃は猫っこの額ほどだし、畑もジャガイモかカボチャぐらいしか育たねえ。漁師をしようにも港がねえから地曳網ぐれいしかできねえ。現金稼ぐにゃ出稼ぎしかねえべども、戦前の出稼ぎ先だったカムチャッカでのサケやカニ漁がねくなったうえに、鰊場がこっだら有様だば、これからどうして暮らしていったらえかべかなあ」
船長はさらに続ける。
「しだで、嫁っこ貰うべと思うども、もちゃずくばかりだ」
「船長みたいなハンサムには、嫁に来たいという女がわんさといるでしょうに」
今村が冷やかした。船長はひきしまった顔立ちで好男子といえた。
「我にも結婚してもいいと思う女子がいるんだども、このあんべいじゃどもなんね」
船長は溜息をついて言った。
「ほう、その人は余程美人なんでしょうね」
今村が聞いた。船長はしばらくしてから、くすぐったそうな顔をして言った。
「君も知ってる人だでば」
「えっ。だれだろう」
今村が驚いて聞いた。
「番屋で炊事をやってる人だてば」
「なみ子さんですか」
今村はおずおずと尋ねた。船長は頷くと、
「君ら都会者にはどう見えるかは知らねえども、我どにはあの人があんべいく思えるんだ。たしかに、おなごよしではねえども、やんちゃでめんこい人だ。したども、ここの若い衆だばあの人に目を付けているもんがずっぱりいるし、我だば隣村の出だはんで、なかなかゆるくない話だでば」
と気落ちした口調で言った。
確かになみ子は快活で元気者だった。小柄ながらも肩を振って場内をのし歩き、若いヤン衆がからかったりすると少々年上でもポンポンと啖呵を切ってやりこめる。しかし笑顔は絶やさない。
「ああ、あの人は元気で愉快な人だ。きっと彼女も船長のことを好ましく思っているのじゃないかな。うまく纏まるといいがなあ」
今村は慌てて元気づけた。
「そんだべか。だども今の話は、ここだけのことにしてけせ」
船長は日焼けした顔を赤らめて言った。隣村集団の中で語る相手とてない恋の悩みを今村に打ち明けて、心の憂さ

を晴らしたかったのだろう。
どう見ても美人とはいえない炊事婦に船長は胸を焦がしている。しかし、彼が身を置く漁村の中では、健康で快活な人を嫁にすることが健全で理想的なことなのだ。だが、今村は船長が結婚を申し込みかねている事情を理解できるように思った。
ヤン衆は貧しかった。鰊場での賃金体系は、都市労働者の半分にも満たない額の固定給と、鰊の漁獲量に応じて支払われる歩合金とからなっていた。固定給のうち三分の二は前払だが、ヤン衆はその大半を家族の生活費や借金の返済にあて、ほとんど無一文できていた。だから生活は極めて質素で、自前で酒を飲んだり菓子を買うことはなく、服装も繕いだらけの粗末なものだった。たまに時化で休みとなっても、番屋でごろごろしているだけだった。そんな生活を四か月送っても、鰊が獲れなければ歩合金は支払われず、固定給の三分の一を貰うだけで帰らなければならない。
述懐したように船長は、経済的に行き詰まっている漁村の実情と漁業の先行き不安の中で、どうしても自分の意にそう結婚生活の設計図を描けないのだ。たしかに家庭を築くうえで経済の安定は重要な要件だ。しかし家庭の幸福の基準は、結婚する二人のスケールが落ち合ったところで決まるはずだ。そこにはお互いへの愛といたわりとが譲歩させる何がしかの目盛りがあるはずだ。若い今村は、結婚についてそう思いたかった。
もし、なみ子にも船長を思う気持ちがあるならば、話し合えば道が開けるだろう。万人の目が光っている番屋の中で、二人を話し合わせる方法はないものだろうか。考え込んだ今村の瞼の奥に、ゆきの色白な顔が浮かんできた。いずれ彼女も若く逞しい漁師と結婚するのだろうか。今村は寂しい気持ちになっている自分を見つけて驚いた。
三月も終わりに近づいた。その後も群来はなく、はぐれ鰊が雑魚に混じって漁獲されるだけだった。夜中にたたき起こされることにも馴れ、昼間の網仕事にも柳川の手伝いをすることでぼろを出さずにすんでいた。
そんなある日のことだった。めずらしく網仕事がなく事務所の仕事も午前中で済んだ。ヤン衆も皆、番屋で寝ころんでいる。今村はリュックサックの奥にしまい込んでいたスケッチブックを取りだし、番屋の前の石垣に腰を降ろした。
事業場の前浜には、小さな岩礁が二見浦の夫婦岩のように立ち並び、その岩礁を見越した先には縹(はなだ)色に若やいだ早春の海がたゆたうており、シリバ岬が黒々と影を落としている。絵を描くことが好きで、高校時代には絵画部に所属した今村が、ここへ来たときから絵心を誘われていた景色

だった。
ほぼ描きあがったころ、後ろに人の気配がした。振り向くと、ゆきがスケッチブックをのぞき込んでいた。
「まんず、じょうずだこと」
ゆきは感心したように言ってから、
「それコンテだすべ。クレヨンと違って、ほっこりした線が描けるんだべ」
と聞いた。
「そうだ。よく知っているな」
「中学校で先生に貸して貰ったことがあるんだ。それでチューリップば描いたら、先生が教室に張りだしてくれた」
ゆきは少し、はにかんだ口調で言った。
「ほう、絵が上手だったんだ」
今村は言ってから思いついて、
「他にもあるから、一本あげよう」
黒のコンテを差しだした。
「まぁんず、嬉しいこと。ほんとに貰っていがべか」
今村が頷いた。ゆきはコンテを受け取ると、大事そうに両手でくるみこんでから頬にそっと当てた。
「ここでも絵を描いているんかい」
今村が聞くと、ゆきは寂しげな顔になってゆっくりと首を振った。聞いた今村も、ゆきが絵を描く余裕のないことがわかっていた。
「でも、漁終わって村帰れば学校さ戻れる。したら、おら、ずっぱり絵ば描くんだ。そんだ。今村さんのように余市の景色も描かねばなんね」
ゆきは遠くを見る目になって言った。ほっそりした体を紺絣の筒袖に包み、幼さの消えていない色白の顔をやや固くしたゆきは、和紙で作られた雪国人形のようにか細く痛々しかった。今村は、そんな彼女を慰めてやりたくなった。
「学校での参考にはならんかもしれんが、これをもっていくかい」
今村は、いま描いたデッサンをスケッチブックから剥がして、ゆきに差し出した。自分でもまずまずの出来だと思えるものだった。
「あれ、どうすべ。たんだでねえことだ。でも貰うにいいだば、おらこんなに上手に描けねえども、手本にして一所懸命やってみる」
ゆきは嬉しそうに言ってから、慌てて、
「ああ、こんな事してられね。なみ子さんに見られたら叱られる。これ大事に使うすけ」
と言うと、デッサンとコンテを胸に抱えて、急ぎ足で帰っていった。絵が好きらしいゆきが、ここではデッサンすることすら許されない。今村は続ける気を失ってスケッチブックを閉じた。

四月に入ったが鰊の訪れはなかった。水産試験場の情報を聞く事業場長の顔が尖ってきた。情報は「試験船の観測結果や他漁場の報告を見ても、まだ来遊があるとは思えない」の繰り返しだった。

ある日も判で押したような情報を報告すると、事業場長は目を三角にして怒鳴った。

「そっだら馬鹿な話があるものか。今年は豊漁年だという水試の話だった。水温だっていまだに五度だべ。きっと来るはずだ。君は鰊博士に直接会って聞いてきたのか。ペイペイの話を聞いてきてもなんにもならんぞ」

「研究室長にではありませんが、資源研究室で聞いてきたのですから……」

今村は事業場長の剣幕に驚いて弁解した。

「駄目だ、駄目だ。鰊博士にじかに聞いてこい。あの人は君らの学校の先輩だろう」

その声の大きさにあわてて今村は水産試験場に走った。事業場長が鰊博士と称した資源研究室長に面接し、事情を話して鰊の状況を説明してくれるように頼んだ。

「事業場長が焦るのはわかるが、今のところ鰊が近づいている兆候は認め難いのだ。ただ今年は、豊漁だった昭和二十一年の孵化魚が卓越群で産卵期を迎えているので期待は持てる。今の水温から見て来遊は近いかもしれない。もう少し様子を見るように伝えてくれ」

室長はやや心苦しそうに云った。今村は思いきって聞いてみた。

「鰊が減った理由は何によるものでしょう」

室長は今村の顔を見つめると、少し姿勢を正して大学の講義でもあるかのように話しだした。

「鰊の減少理由の一つに乱獲がある。漁業者の減った終戦前後は漁獲量が回復した。だが乱獲だけでは割り切れない点もある。江戸時代から大正末期まで、今と大差のない漁法で大漁を続けてきている。そこでもう一つ考えられるのは、鰊の生息を困難にする環境の悪化だ。すなわち、水温上昇や潮流変化などの海況変動と工場廃水やダム開発などによる水質の悪化だ。ただ、実際にはもっと複雑な要素が絡み合っているのだが、それは君も追々勉強したまえ。しかし基本的には、乱獲や環境変化などが改善されない限り鰊は減り続けていくだろう」

室長の言葉には、苦いものを飲み込んだような響きがあった。

事業場に帰って今村が室長の話を報告すると「来遊が近いかもしれない」というところで事業場長の目が光った。

事業場長は、老事務員の言うように今年も不漁ならば、漁場の総括者としての地位を失うのかもしれない。それはまた、父祖代々の漁場が彼の手を離れることなのだ。

しかし、事業場長自身が鰊の群来をどこまで信じているのだろう。銀行で近代的な経営感覚を養ってきた彼には、鰊漁業の先行きは見えているはずだ。その結果、心の中に巣くっている鰊の復活を否定する考えが、群来を仰望しているもう一人の自分の思いと交錯して、苛立ちとなって吹きでてくるのだろう。

とすれば事業場長の感情の高ぶりは、この矛盾の深まりを反映しているものでもあるはずだった。あるいは、古き良き時代の栄光を染みこませている事業場長の血が鰊の接近を知って騒ぎだし、相克を深めているのかもしれない。鰊は来るのではなかろうか。今村はそう思った。

そして鰊はやって来た。その前日はヤン衆が「アイタマカゼ」と呼ぶ北西風がかなり強く吹いた。この風の後に鰊の群来があるという言い伝えがある。

「アイタマカゼ」が治まった翌朝、今村が事務所に入ると事業場長が大船頭に話していた。

「昨夜、美国から古平かけて纏まった漁があったそうだ」

「え？　積丹で！」

「うんだ。全部で二百石はきらねえらしい。こっちにも来るぞ」

事業場長は初めてみる笑顔で言った。余市の南隣である積丹地区での漁に事業場内は色めきたった。

その日は早めに出漁した。夕方近くになって風がなぎ、空は重く垂れさがるように曇ってきた。薄い靄に覆われた海面はさざ波すらたたず、粘りつくような鈍色に淀んでいる。ゴメも高く低く飛び交わして、物欲しげに鳴いている。

「鰊曇りだでば。これで群来ねぐば、この鰊場はもう駄目だ」

船長が空と海をにらんで言った。しかし夜に入っても鰊の姿はなかった。八時を過ぎて北東の風が海面にさざ波をたて始めた。この風はシモ風と呼ばれて鰊を運んでくるといわれているが、一方では大時化となることもある風である。

十一時を回った頃、起し舟で「起こすぞ」という大声が聞こえ、カンテラが一斉に点灯した。続いて「ヤーセイ」

「ヤーセイ」と掛け声があがった。

「来たぞ。機関長、シタンバイしてけれ」

船橋から顔をだして起し舟をうかがっていた船長が叫んだ。海は雄鰊が放出した白子で白濁しているはずだが、機関が始動して点灯した船灯に淡く照らされた海面は、銀鉛色にしか見えない。しかしよく見ると、鱗をすり合うように押し詰め合った鰊の群が、後から後から無限に押し寄せてくる。大量の鰊で海面が銀鉛色に見えるのだ。それは壮観というより壮絶と喩えるべき自然の営みだった。

起し舟の上は戦場となっていた。網起こし音頭のかけ声が「えんやせ」に変わった。その合間に大船頭や起し舟船頭の罵声が混じる。そのとき起し舟からホラ貝の音が聞こえた。

「起し舟船頭が呼んでいる。船を寄せるぞ」

船長が言って曳船を起し舟に近づけた。

「手が足りねえ。学生ば乗り移せ」

船首に突っ立っていた起し舟船頭が言った。

「いってけれ」

即座に船長が言った。今村が起し舟に飛び移ると、船頭は網起こしへ加わるように命じた。指示された場所に割り込んで、左右のヤン衆を見習いながら網起こしを始めた。網目に突っ込んでくる鰊を払いながら、体全体を後ろに反らして渾身の力で網を手繰る。いっぱい引き寄せたところで船縁で網を押さえながら、代わる手を前に伸ばして次の網を引き寄せる。今村はたちまち指先の感触がなくなった。しかし力負けして一人でも網を放せば、そこに鰊が集中してきて支えられなくなり魚群を逃がしてしまう。

網の中は鰊の群で沸き立っている。頭から水しぶきを浴びているが、冷たいという感触もなかった。全員が必死になって作業を続けているが、網はなかなか手繰られてこない。相当の大漁なのだ。

ヤン衆たちに疲れが見え始めた頃、頃合いをみはからっていた大船頭が「キリ声」をかけた。「キリ声」は、大漁のときに大船頭だけが唱えることができる「ハオイ」である。

「どっとこーお　どっとこーせいのこーら　よーいやさ」

朗々と響く大船頭の「キリ声」にあわせてヤン衆が「シタ声」で応える。

「アラ　ヨーイヤサー」

さらに音頭は進む。

「ほーらーえーえ　この網おこせば　やーあえい」

「ヤートコセー　ヨーイヤサ」

「千両、万両の金じゃもの　よーいとなー」

「ホーラエンヤー　アラアラ　ドッコイ　ヨーイトコナー」

網起こし音頭の「キリ声」は勝鬨（かちどき）の歌でもある。待ちに待った鰊が網に入り、収獲が目の前に迫っているのだ。ヤン衆は雄叫びをあげ続け、意気はいやが上にも高まっていく。その勢いに乗って鰊は魚捕り部まで追いつめられた。残りの力を振り絞って身網から枠網へ鰊を落とし込んでいく。

漁獲量は四十石（三十トン）ほどだった。しかし、この頃から風がやや強まって波が出てきた。大船頭が風の吹いてくる方向を見ながら不安そうに言った。

「どんも、あずましくねえな。吹いてくるかもしれねえ。とりあえず枠を帰すべ」

枠網は百石あまり積めるのでまだ半分も埋まってはいないが、大船頭は時化てくることを予想して、今の漁獲だけでも陸揚げしておこうと考えたのだ。

枠舟が交代している間に、起し舟は立場に戻って鰊の入網を待った。二十分ほどで二回目の入網があり、網起こしが始まったが「キリ声」がかかった頃から波が高くなってきた。魚捕り部まで追い込んだとき、波は一メーター近くなっていた。起し舟と枠舟の双方が大きく揺れているので、枠網へ鰊を落とし込む作業がうまく進まない。大船頭や枠舟船頭の怒声が飛び交うが、作業は一向に捗らなかった。その間にも風と波はさらに強まっており、身網を支えているだけでも大変だった。

やがて船端を越えた波が船内に打ち込んできだした。ヤン衆の顔が少し険しくなっている。副船頭が大船頭に何か言った。大船頭は厳しい顔をして頭を強く横に数回振った。副船頭は操業を続けるか聞いたのだが、大船頭は継続を指示したのだ。不漁続きのこの漁場（さばば）で千載一遇の大漁である。大船頭としてはぎりぎりまで操業を続けるつもりなのだ。

しかし、打ち込んでくる海水はますます激しくなった。船底ではあか水がダブン、ダブンと波を打ち、板子の間から噴きだしてくる。鰊の落とし込みは遅々として進まない。今村は体力の限界を感じていた。腕は千切れんばかりだし、腰は今にも折れそうだった。

ドーンと大きな波が起し舟を突きあげた。今村は支えきれずに網を持ったまま後ろに倒れたが、彼だけではなくヤン衆も数人が倒れたようだった。傾いた舟に波がどっと躍り込んできた。

「打切り。これまでだ」

大船頭の悲痛な声が聞こえた。身網と枠網を連結していたロープが断ち切られた。開口から鰊の群が逃げ出していく。網の抵抗が見る見るうちに軽くなった。

「畜生！」

誰かが絞りあげるような声で怒鳴った。ヤン衆は皆、強ばった顔で逃げていく鰊をにらんでいる。

鰊が消えた後、網を守るための応急処置が激浪の中で続けられた。

ようやく作業が終わったのは三時過ぎだった。曳船が網舟を曳いて港に向かったときには、波は三メートル近くになっていた。シリバ岬を回るまで、波は船首方向から襲ってくる。舳先が波に突っ込み、すくいあげた海水が舟の中になだれ込んでくる。甲板がないので海水は打ち込み放題だ。手当たり次第のものでくみ出しているが、一向に水嵩

は減らない。今村も飯の桶をあてがわされていた。
暗いうえに雨が降っているので視界は極端に悪く、舟がどこにいるのかわからない。漁場を離れてから三十分以上経過したが、波は引き続いて船首方向から襲ってくる。まだシリバ岬を回っていないのだ。むしろ岬に押し寄せられているのかもしれない。ようやく今村に恐怖心が沸き起こってきた。シリバ岬ならずとも、この辺りの岩礁だらけの海岸に打ち寄せられたら舟はひとたまりもない。実習で遭難死するなんて何ともやりきれない。気落ちした気持ちに疲れが加わって、意識が霞んできた。
「このどんけ野郎。何をぼけーっとしてるじゃ。海に落ちて死にてーんだか」
という声とともに横面を張り飛ばされた。それで「ハッ」と気が付いて水汲みに戻った。
そんな苦闘がさらに一時間余り続き、かすかに辺りが見回せるようになった。今村が岸寄りに目を凝らしていると、かなり遠くに波が白く打っている海岸線らしいものが認められた。それと同時に、曳船が陸の方に船首を向け始めた。曳船の船長は、位置がつかめない中でむやみな変針を避け、明るくなるのを待って、船を波に突かせていたのだ。すなわち、船首を波に向け速力を落とし、波の衝撃を最小限にして時化を乗り切る操船法である。それがもっとも賢明な判断で、三十分後には全船を港に帰すことができたのだ。
港には事業場長、老事務員、陸回りらが待っていた。夜を徹して消息を案じていたのだろう。事業場長は全員の安全を確認してから、
「残念だったな」
と大船頭の顔を見つめて言った。その言葉に事業場長のやるかたない思いが感じとれた。
網舟が係留を終わると、ヤン衆たちは取りあえず食事に行った。今村は持ち場である曳船が最後に接岸したので、船長一人でやっていた係留作業を手伝った。
船長は作業を終えると、崩れるようにデッキに座り込んだ。過酷な嵐の一夜、船長はただ一人せまい船橋で波との孤独の闘いを続けてきたのだ。彼の腕には、三十人近い男たちの命がかかっていた。胸を締めつけられるような重圧感にも堪えなければならなかったであろう。体力の限界にも挑戦しなければならなかったはずだ。今となってみれば、大船頭が隣村出身の彼を曳船船長として連れてきた訳がわかる。温厚さの中に強い精神力と体力とを兼ねそなえた正真正銘の海の男だった。
今村は船長を抱き起こして言った。
「食事に行きましょう」
今村は、ようやく起きあがった船長と番屋に向かいながら、歩いている自分が本当に自分であるのか、信じられない思いにとらわれていた。しかし、揺れない大地を一歩、

また一歩と踏んでいくうちに、生きていることが実感となって伝わってきた。それは今まで味わったことのない新鮮な感情だった。
手洗いに寄ったので遅れた今村が番屋の裏口から入ると、ゆきが炊事場の外で洗いものをしていた。その後ろ姿には何事かに気を取られているような虚ろさが感じられた。人の気配に振り返ったゆきは、それが今村だと認めると棒立ちとなって彼を見つめ、いやいやをするように体を揺すった。それから顔を両手で覆った。
「酷い時化だったが皆無事に帰ってきたよ」
今村は、自分がヤン衆と一緒に帰ってこなかったので、心配してくれていたのだろうと思って言うと、ゆきは体を捩るようにして泣きだした。そのとき、なみ子がやってきて二人を不審そうに眺めると言った。
「ゆき、手を休めている暇はないべ。早く片づけてしまわねばならね」
鰊の陸揚げに従事する人夫らの夜食があるので、炊事婦は夜っぴて飯を炊いていたはずだった。ゆきは目をぬぐうと洗い仕事に戻った。今村は暫く呆然として突っ立っていたが、なみ子の目を感じて慌ててその場を去った。
朝食が終わると、応急的に引き揚げてきた網の修理が始まった。ヤン衆は皆、黙々と網修理にあたっている。いま彼らの胸の中は、どのような思いで満たされているのだろう。
結局、昨夜の水揚げは二隻の枠舟分をあわせても四十トンそこそこだった。あの時化がなければ、網に残っていた魚だけでも三十トンはくだらなかったし、その後も入網があったはずだから、百トンを超える水揚げがあっただろう。当時の鰊建網は百石（七十五トン）獲れれば収支トントンで、それ以上ならばヤン衆にも歩合金が支払われる。諦めきれない時化だったが、彼らはそれを口にしようとはしない。海という気まぐれな自然と対峙してきた彼らには、ただ黙って堪えなければならない成り行きの一つにすぎないのだ。
今村は、網仕事を手伝いながら昨夜来の苦闘を思いかえしていた。しかし、それが夢の中の出来事だったかのように現実感がなかった。舟で水汲みの最中、無事に帰れたら実習を打ち切って帰ろう。そんな思いが胸を満たしていたことはたしかだった。だが今、その思いは遠くに追いやられていた。
千載一遇の大漁を前に操業を打ち切った大船頭、あせって陸に向かわずに舟の列を波に突かせた曳船の船長、そして死力を尽くして舟の浸水や転覆と闘ったヤン衆。生き延びるためとはいえ、その判断と行動は心服に値するものだった。
そして、俺も彼らと一緒に闘ってきたのだ。今村は、い

ま初めてヤン衆への仲間意識を感じていた。残された実習期間の間だけでも彼らとともに過ごしたい。そして、大漁に湧く彼らの笑顔を見てみたい。そんな思いで胸がふくれあがっているのだ。

時化はその日の昼過ぎには治まった。昼少し前から風が西に回りだし、そのあと南西風が強吹した。この風は鰊を沖に追いやる風として、鰊漁師たちに嫌われている風だった。午後から網を見回りに行ったが、大きな損傷はなかったので補修を行い、そのまま操業体制に入った。しかし鰊は姿を消していた。

さすがに夜半の空網起こしは、一回しか行われなかった。曳船でも魚艙に入って仮眠することができた。今村は横になると同時に眠りに落ちたが、体のどこかで時化のときの体験と帰ってきた彼を見て泣いたゆきの顔とをよみがえらせていた。

学校へ帰る日が近づいていた。四月も半ばを過ぎていたが、その後も鰊の姿はなかった。操業打切りが早い南部漁場（ぎょじょう）の余市では、五月初めまでが勝負である。このまま漁が終われば歩合金は出ないだろう。事業場にはとげとげしい空気が広がり始めていた。

朝、今村が船へ行くため炊事場の横に通りかかると、ゆきが年寄りの陸回りに叱られていた。彼女は俯いてなにか弁解しているようだったが、陸回りはいきりたって許そうとはしなかった。どうしたものかと思っていると、炊事場からなみ子が出てきてゆきに話しかけた。ゆきが小声で答えると、なみ子は陸回りをにらみつけた。

「はんかくせ。そっだらこめえことに文句つけて、それでも爺っさまは陸回りなんだか」

なみ子が啖呵をきった。陸回りが強い口調でなにか言ったが、あまりにも訛りがひどくて今村にはさっぱり内容が分からなかった。

「そりゃ人間だばって間違いもあるべさ。だども、ゆきは鰊場は初めてなんだ。知らねくてやったことだはんで、勘弁してけたっていいべ」

なみ子は、ゆきをかばって一歩も引かなかった。事のおこりは、ゆきが誤って陸回りの持ち物を捨てたことらしかった。結局、陸回りが折れ、捨てぜりふを残して去っていった。

港へ向かいながら今村は思った。なみ子は快活でやんちゃな娘だとばかり思ってきたが、年下の子をかばって敢然と上役に立ち向かう、優しさと芯の強さを兼ね備えた娘だった。だからこそ、あの若さでオオナベとして番屋の食事を任されているのだ。漁村の女の力強さを知らされた気がした。

余市を去るに当たって今村は、忘れ物があるような思いがしてならなかった。

たしかに、鰊場というものの一端を見ることができた。それは、漁業の不安定さと、出稼ぎに縋（すが）って生きていかなければならない漁村の貧しさを教えた。その根底には、漁村の過剰な人口と生産基盤の乏しさなど、構造的な矛盾が横たわっているのだ。それは水産学生として初めて抱いた問題意識だった。でも、この問題をどう考えたらよいのか取っ掛かりすら見つからない。その自責の念が、この地に心を残すのだ。

いま一つは、ゆきのことだった。理性では行きずりの少女としてはいるが、時化の翌朝に泣いた彼女の姿が蘇ってくると、胸の奥に疼いてくるものがあった。かといって、彼女は余りにも幼かったし、心の中では彼女の貧しさへのこだわりも燻っていた。そんな宙ぶらりんな感情も、この地に心を残させるのだ。

明日は余市を発つという日の午後、事業場長が柳川と今村を呼んだ。

「いろいろとご苦労さんだった。今日も漁はなさそうだから、沖へ行くのを止めてゆっくり休んでくれ。せめて小遣い程度は、と思っていたが、この漁ではそれもできなかった。これは少ないが旅費の足しにでもしてくれ」

事業場長は封筒を渡しながら言った。部屋へ帰って中を見ると、学校まで帰る旅費としては十分すぎる金額が入っていた。あとで老事務員にも礼を言うと、

「あの金は事業場長のポケットマネーなんだ。なんせ事業所には余分な金が全然ないからな。事業場長に、よく礼を言っておけてば」

にが笑いしながら言った。

明朝は七時前の一番列車で発つので、夕方、港で沖へ行く曳船と網舟を見送った。

「また来年もここさこいてば。もっとも来年までこの漁場（ぎょば）が持つかは保障できねがな」

別れを告げる今村に、船長はややくすんだ顔をして言った。

「学校さ帰ったらしっかり勉強して、鰊が殖える方法ば発明してけれ」

起し舟で今村を殴ったヤン衆も言った。

「漁が少なくて、あずましくねかったなあ。だども、鰊場というものが少しはわかっただべさ。それに大時化も経験したしな」

大船頭の別れの言葉だった。二人は世話になった礼を言ってから「大漁を祈ります」と言い足した。

そしてもう一つ、今村にはどうしても片づけなければならないことがあった。なみ子に船長の気持ちを伝えることだった。温厚ながら強い精神力と体力を持つ男、そして

快活で優しさと芯の強さを兼ね備えた娘。これからの漁村で、二人が理想の夫婦となることには疑いがなかった。

番屋に帰ると、ちょうどなみ子が洗い場にでてきたところだった。

「なみ子さん、ちょっと話があるんだ」

立ち止まったなみ子に今村は続けた。

「実は、曳船の船長なんだが、なみ子さんを好きなんだ。できることなら結婚したいと思っているようだ。一度、船長と話し合ってみたらどうだい」

なみ子は俯いて聞いていたが、顔をあげて今村の顔を見つめた。

「おらも船長さんが嫌いではね。だども、あの人だば、おらと会ってもなんも言わねんだ。ほんとに、おらのこと好きなんだべか」

「嘘じゃない。俺は船長からじかになみ子さんのことを聞かされたんだ。あんたもその気なら、俺から聞いたと言って船長に当たってみたらどうだい。船長は恥ずかしがり屋のうえに、自分が隣村の出だからと思って遠慮してるんだ。このままではいつまでたっても、自分の口から切りだしそうもないからな」

「ありがとう。そうしてみるべ」

なみ子は嬉しそうに微笑んで言った。そして、

「今村さん。ゆきのことどう思う」

と、少し言いよどむようにして聞いた。

「ゆきのこと？　別に、何とも思ってはいないよ」

今村はチクリと心が痛んだが、そう答えた。

「そんだべね。ゆきもいい子だばって子供だし、学生さんとだば、めずね話っこだでな」

なみ子は頷いた。

その夜、炊事場の横を通ったとき、なみ子がゆきに話す声が聞こえた。

「いいかや。汝が、どんなに学生さんのことを想ったども、住まってる世界が違う人なんだはんで、なんとしてもわかんねえことだ。早く諦めるべし、諦めるべし」

今村は耳を塞ぎ、そっとその場を離れた。

翌朝六時、今村と柳川が事務所を出ようとすると、玄関の横に包みを抱えたゆきがいた。彼女は包みを二人の方へ差しだして言った。

「これ、昼のお弁当です。なみ子さんが渡してこうって」

「ありがとう」

今村がゆきの顔を見つめて言うと、彼女はようやく聞き取れるほどのか細い声で言った。

「また来年も余市さ来てけろ」

それが彼女の精一杯な愛情表現だったのだろう。ゆきは二人が歩きだしても、その場に立ちつくしていた。

「今村、お前ゆきに惚れられたな」

と柳川が言った。

余市駅に向かう道すがら、今村はゆきのことを考え続けていた。少女である彼女が異性に恋に近い感情を抱いたのは、母や兄弟と別れて男所帯の中で暮らしている辛さの裏返しなのだろう。あんな年端もいかない子が出稼ぎしなければならない漁村の貧しさは、何としても正されなければならない。

別れのとき「学校へ帰ったら、鰊が殖える方法を発明してくれ」とヤン衆の一人が言った。鰊に埋めつくされた銀鉛色の海。それは人智を超えた自然の営みだった。鰊博士の言葉どおり、このままでは北海道から鰊は消えていく。鰊だけではない。日本近海の魚の多くは、同じ道を辿ることになるのだろう。

それを防ぐためには、漁場環境を保全し、資源を増殖しなければならない。だが、臨海開発は進められているし、増殖技術も開発途上にある。また、貧しさゆえに目の前にいる魚を取り尽くそうとする漁業者感情も、一朝一夕には改められないだろう。

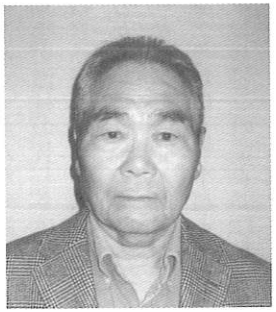
しかし、この努力こそが漁業と漁村を救う唯一の道なのだ。人間の叡智がどこまで自然の営みに接近できるのだろうか。その限界に挑戦してみたい。自らの将来を思い定めた今村は、春の縹色に移りつつある海を、今までとは違った目で眺めながら歩いていった。

この後、北海道の鰊漁業は不振を極めた。余市鰊場所も、昭和二十九年（一九五四年）に見られた一回だけの群来を最後として、安永二年（一七七二年）以来の歴史を閉じた。日水産余市事業場のその後は不明だが、このときまで持ちこたえられたとは考えられない。

そして今、北海道では道産鰊復活の声が高まり、道の中央水産試験場を中心に「ニシン増大プロジェクト」が進められている。余市にも銀鉛色の海が戻ってくるのだろうか。鰊漁業の崩壊とともに再び鰊との接点を持てなかった今村ならずとも、このプロジェクトの成功を祈らずにはいられない。

※参考資料等

この作品はフィクションであるが、歴史的事実や鰊漁場の状況などについては、よいち水産博物館発行の「鯡が群来たころ」および「にしん漁撈具と生活用品」ならびに同館から提供を受けた北海道開拓記念館調査報告「余市地方における鰊定置漁業権の変遷」と、内田五郎氏著「鰊場物語」（北海道新聞社刊）を参考にさせていただいた。



山下悦夫

やました　えつお

1931年生まれ　76歳

第一水産講習所（後の東京水産大学、現東京海洋大学）卒業

三重県庁、漁業団体勤務を経て現在無職

第3回、第9回鳥羽市マリン文学賞、第3回伊豆文学賞入賞

受賞の言葉　山下悦夫

過ぐる年、水産を学んだ同級生三人で北海道旅行をしたとき、在学中に鰊漁業実習をしたことのある余市を訪問先に加えて貰った。

半世紀以上が過ぎた余市は大きく様変わりしていたが、思いもかけなかったことには鰊漁場が一つ保存されていた。

訪れた漁場は、かつてのものではなく規模もやや小さかったが、それでも一万五千平方㍍の敷地に、ヤン衆たちが寝泊まりする番屋のほか網倉と保蔵倉さらには味噌・米倉まで残されており、空気すらも当時と同じものが流れているようだった。

佇んでいると、鰊曇りの空に流れる船漕ぎ音頭や真夜中の網揚げ音頭、そしてヤン衆の津軽訛や炊事婦の長靴姿が昨日のことのように蘇ってくる。曳船の夜、船長の炊事婦に寄せる想いを聞かされたのも、この漁場だった。

その思いを込めたこの小説は、昨年、漁船保険組合の機関誌に発表した同名の作品を今回の応募に当たって手を入れ、枚数も三分の二に縮小したもので、前作より纏まりが良くなったかと思っている。

海のことを書き続けて二十年。ところを得た作品は数少ない。七十歳の半ばを越え「日暮れて道なお遠し」の感が強いが、息の続く限り頑張ろうと思っている。従って、この度の選考委員と編集部の皆様方のご好意を、心底より感謝申しあげている次第である。

第四回　銀華文学賞優秀賞

クズの葉が揺れる

伊藤伸太朗

一

正午を少し過ぎた頃、団地上空にヘリコプターが近付き、高く低く執拗に旋回した。

マイクから流れる女性の声は時々キーンと割れた。来週の九月最初の日曜日、低い丘陵を一つ越えたJR駅近くの旧国鉄再開発用地に新築された多目的ビルに、大手デパートがいよいよ新規開店すると言うのだ。

その時、七階に住む水沼遼一は夏なのに窓ガラスを閉め、部屋の奥で両耳をきつく抑えていた。デパート開店を知ってはいたが関心の持ちようがなく、ただ爆音とマイクの音声に耐えられなかった。

ヘリコプターが去った後、青ざめた顔で水を飲み、久しぶりに自転車で走ってくると妻に言った。見送る咲恵の目は、確かに病人を気遣う者のそれだった。出掛けようとしてエレベーターホールに向かう遼一には、それがわかっていた。

三輪車やベビーカーが乱雑に放置された出入口脇の郵便箱を覗くと彼宛の封書があり、差出人は珍しいことに故郷の村にほど近い町で有料老人ホームに入っている母親だ。彼は手紙を尻ポケットに突っ込み、自転車置場へ歩いた。

遼一は雛壇状に高まっている住宅地を南北に貫く坂を下

り、寺の裏に広がる雑木林まで走った。角地に建つ保育園の敷地を迂回して山裾の道に出た時、ようやく緊張がほぐれたというように眉根をゆるめた。

先週の月曜日の朝、どうしても布団から起き上がることができず、そのまま今日まで休んでいるのだが、回復の兆しは一向に現れず、かえって悪化しているようなのだ。

職場で働く自分の姿や同僚、上司の誰彼を思い浮かべるだけで激しい吐き気に襲われ、胸が苦しくなった。

鬱病かもしれないと思う時があったが、不安からか、深く考えることができなかった。来年三月末まで有給休暇を六日間残してはいるものの、すぐなくなりそうだった。その後はなるようになると、漠然と思ってもいた。

早くも土曜日となり、明後日の月曜日にはどうしても出社するつもりだった。

思い返してみると兆候らしいものは、あの月曜日の朝のほぼ一ヶ月まえから、特に両方の耳に現れていた。

聴覚が過敏になり、何でもない人声やテレビの音声がひどくこたえるようになったばかりでなく、彼自身の話し声が幾倍にも増幅されて響いた。そのため、自ずと小声で話すようになり、相手を聞き苦しくさせることになった。

妻の明るい声も、もうじき三歳になる章の笑い声も、好きな音楽もすべて騒音に等しかった。赤剥けになった鼓膜が、無防備にひりひりと震えているようで、耳の奥が実際に痛んだ。部屋の窓を閉め切り、外界の物音を遮断しても無駄なことだった。

音は到るところに遍在し、鼓膜をめがけて降り注いだ。やがて耳は意識の制御を越え、勝手に音を求めてひくひくと震えるようになり、熟睡できない夜が続いた。

遼一は雑木林を離れ、丘陵の裏側を緩傾斜のまま大きく迂回しながらJR駅とは反対の方向へ走った。

一度入ってみたかった谷地が、クズの葉に埋め尽くされている筈だ。

谷地の入り口に製材工場があった。水沼遼一が自転車を停め、立ちこめている樹脂の匂いを嗅いでいると機械の音が消え、暗い工場の中から男達が出て来た。

年寄りばかりだ。誰ひとり、彼を見ようともしない。樹脂の濃い匂いの中に年寄り達の汗が紛れて、空気も濃くなった。

彼等は斜面に差し掛けた屋根の下で、静かに弁当を食べ始めた。作業衣を脱いだ男達は急速に老け込んだように見える。遼一はそれだけを目的にしてここまで来たように、弁当を食べる年寄り達を眺め続けた。

差し掛け小屋の土間には炉が切ってあり、火もあるようだ。年寄り達が黒い大ヤカンを傾けるたびにふっと立ち昇る湯気でそのことがわかった。

やがて彼等は各々横になり、周囲の静けさが一層深まる。突然、遼一は空腹を感じた。樹脂の清潔な匂いが、ひどくこたえた。

工場の脇の夏草に覆われた細い砂利道は、谷地の奥まで続いているのかもしれない。彼は自分を追い込むような気持ちで砂利道に入った。二十メートルも行くと道はすっかりクズの葉に覆われ、自転車を押して行けるだけの幅もなくなる。彼は自転車を斜面の木陰に倒し、膝で草を分けて歩いた。

両側の斜面の傾斜が険しくなるにつれて谷地は狭くなり、道ともいえぬ踏み跡を覆うクズの葉が、踏み出す足を深く呑み込む。

振り返ると、下方の雑木林の間に製材工場の杉皮葺きの屋根が見えた。老人達はまだ小屋の中で眠っているのだろう、耳を澄ませても機械音らしい音は届かない。クズの葉と蔓に足を取られたまま立っている遼一は、自分が一本の雑木か丈高い草に変わってしまったかのように感じた。

じゅくじゅくした湿地に水が溜まっている。低い山間の傾斜地から滲み出すのだろう。ふと白い漏斗状のものが何本も咲いているのが目に留まった。遼一はそれをじっと見ずにおれなかった。里芋に似た濃緑色の葉、くるりと渦状に巻いて開きながら咲いていく真っ白い花と黄色の芯……。

この谷地で暮らした人が栽培していたに違いない。彼は何という名前なのか知らなかったが、子供の頃は花の形から〈ラッパ〉と呼んでいた。くるくると巻いてまだ開ききっていない花の匂いを嗅ぐと芳香がした。

『……ラッパだ、確かにそうだ。田舎で見たんだ。あの不気味な底無し池の周りに沢山生えていた。二十年振りにこんな場所で見るとは。……しかし懐かしい』

山麓にほど近い湿田の隣りにその池はあった。晴れた空と雲が水面にくっきりと映るため、池ではなく空に釣糸を垂らしているように錯覚した。

大雨でも降らない限り水面は地面より低いのが普通だが、その池は真夏の干天時でさえ田の縁すれすれに水をたたえていた。

あの植物は湿地を好むのだろう、濃緑色の大きな葉や白い漏斗状の蕾、黄色い棒状の芯を付けたまま枯れて茶色くなった花が池の周りにいっぱい植わっていた。

池の底に湧き水があったのか、濁りのない水はラムネ壜の緑を幾重にも重ねた透明な蒼黒さを帯びて見え、空と雲を映してハガネのように黒光りする水面には見る者を誘いこむ魔力が確かにあった。

何も釣れない不毛な池であったが、小学生の遼一は魅入られでもしたように何度も引き寄せられ、池にではなく無限の高みの天空に向けて釣竿を差し出しているような、倒

錯した感覚を味わった。

ときたま通りかかる大人達の言によれば、池は実際に底無しらしく、子供の持つ短い竿のウキ下をいっぱいに伸ばしても水深のどれほどにもならなかったに違いない。

動かないウキを見つめていると不意に背筋が冷たく痺れたようになり、水面に映る空に向かってためらいもなく一歩を踏み出してしまいそうになるのだった。あわてて水際から離れ、真にぞっとする感覚のなかで辺りを見廻しても人影はなく、苗代の稲が陽炎の底で揺らめいているばかりだ。

あまりの静けさに身動きさえできず、息苦しさだけが募った。行き場のない思いが心を鮮明に捉えるなか、今にも池の水面が盛り上がり、呑み込まれるかのような恐怖に駆られて竿をしまい池から離れる。そして一週間もするとまた無気味な水辺に立っていた。

遼一の心に空を映して黒々と静まる水面が浮かび、かつて引き寄せられた時の冷たい震えがまざまざと蘇る。

汗が流れ、風が皮膚をなぶる。陽を浴び、羽虫が触れるままにしていると、背中の方から土と化していくようだ。遼一は〈ラッパ〉の花からようやく視線を移した。

そのまま視線を廻らせると、微かにそれとわかる踏み跡は、両側の斜面が馬蹄型に合わさる辺りで自然に消えている。馬蹄型の凹部の裾は丸くテラス状に張り出した平地になっており、柱も壁も朽ち果てた半壊の小屋がクズの葉に埋もれていた。

なぜかぼろぼろのトタン屋根だけが傾きもせず、古血に似た錆を吹いて宙に浮かんでいる。それは奇妙に生々しい印象を与えた。屋根はあと半月もすれば、クズの葉の波の下に没するに違いない。そしてクズは花が開き、谷地全体を覆い尽くすのだ。

熱気と、どこからともなくひたひたと押し寄せる葉ずれの中で、自分の呼吸音だけが際立つ。それは何か得体の知れないものの息の音のように遼一を包む。谷地と斜面、そして崩れた小屋。これらの全体を覆って小止みもなく波立つ、いかにも生命力の強そうな葉の丸い部厚な広がり……。

彼は小屋を自分になぞらえようとして止めた。自分を崩壊した小屋にたとえる以上、次に来る連想の内容は見え透いている。

何か鋭敏な触手のようなものが、全身の皮膚のすぐ内側にくすぐるようにも撫でるようにも揺れ動いて、彼をとらえどころのない落ち着きなさへ誘おうとする。

湿地を浸す水に似たもの……。

どこからともなく訪れて意識を蝕み、不安とも苛立ちともつかぬ執拗なざわめきそのものに化そうとするもの……。

これらは一体何なのだろう。

胸の奥底一面にびっしりと繊毛が生えている。それが前触れもなく一斉にそよぎ始めると、遼一は意識を殆ど何事にも集中させることができなくなってしまう。嵐を避ける山鳥のように姿勢を低くし、荒くなろうとする呼吸を抑えてじっとうずくまっている以外、この内奥のざわめきから自分を守る方法はなかった。それよりもクズに自分をなぞらえたいと思った。

クズに捉えられた両足に力を込めて立ち、目を閉じると、網膜の奥の赤黒い流れに向き合う。流れが極彩色の油膜に似た斑紋から薄い墨色へと収束するにつれて、皮膚の内側の触手の揺れもまたゆっくりと消えていく。

遼一は目を開き、クズの葉の堆積のために宙に押し上げられたかのように見える、赤錆びたトタン屋根に向かって進んだ。

慎重に歩いた。触手がいつ再び震え始めるか、皆目予想できないのだ。屋根までの距離はほぼ三十メートルだろうか、反応しやすい爆発物でも抱いたような緊張感に支配され、汗を滴らせ、クズの葉と蔓に難渋しつつ小屋に近付いた。

狭い谷地は風の道になっているらしい。時折斜面に向かって吹き上がる風が、葉を一斉に揺らめかせ、すると緑色に輝く無数の丸い光と葉裏の影が反転する。斜面全体が声のない嘲笑と哄笑にざわめくようだ。

おそらく山仕事のための作業場でもあったのだろう、小屋は四本の柱とトタン屋根だけの極く簡単なものだ。遼一は葉と蔓の隙間をくぐって中に入った。

古びた、人を無気力にさせる匂いが立ちこめていたが、静かで涼しかった。蔓が這い込んでいる褐色の土間の中央に小さな炉の跡があり、燃え残った木屑が散らばっている。

彼は炉の前に立ち、黒く固まった灰を見、すぐ視線を上げて四方を幕のように囲むクズの葉を見廻した。無数の蔓が、小屋の空洞に向かって、青白い先端を伸ばしている。細毛に覆われ、それ自身の重みと生長のためにひくひくと震える植物は、遼一を狙って進む意志を秘めているようだ。

全身を葉と蔓に絡み取られ、為す術もなく横たわる姿を想像するのはたやすいことだった。想像の中で遼一自身が繁茂する植物であり、頭部といわず胸、腹の到る所から濡れた濃緑色の蔓と葉が生え出しているのだ。季節とともに枯れ、また蘇り、意識も無意識もなくはびこり続ける獰猛な生命力を持ったクズ……。彼は恍惚として白昼夢にふけった。

不意に風が吹いた。四囲のクズの幕が揺れ、遼一に向かって伸び続ける青白い触手の群れが静かに震える。彼は鈍

い、何かしら痺れるような恐怖に駆られた。葉と蔓を掻き分けて小屋を出ると、光と熱気がぶわっと音を立てる具合に押し寄せた。

谷地から吹き上がる風の中で、クズの葉は群がり寄る無数の小動物の背のように、遼一ひとりを目掛けてびらびらと翻転していた。

斜面全体が鋭く逆立って見えるために、つい今し方、辿って来た道がどこだったのかわからなくなっていた。明るい灰緑色に波立つ斜面を見つめていると、閉じこめられた気分が昂じ、やがて粘りつくような怒りに変わる。

遼一は振り向き、赤錆びた屋根と、屋根に這い上がるクズを見た。そうしながら自分が何か強ばった針金細工の人形でもあるような、冷たい無感覚の中にいることを感じた。ざらついた刺だらけの蔓の束を握り、力まかせに引いた。

一瞬、植物の青臭い匂いが立ちこめる。弾力ある手応えが腕と肩に走る。なおも力をこめて引くと、際限もないずるずるした感じで蔓がたぐり寄せられて来た。二度、三度と繰り返すうち、遼一は次第に夢中になり、屋根に絡まる蔓草を引っ張り続けた。

汗まみれになり息を喘がせながらも、彼は冷たい無感覚に支配されていた。露わになった細い朽ちかけた柱を押し倒し、屋根が埃と鉄粉を舞い上がらせて崩れ落ちた時、始めて疲れを覚えた。

風と陽を受けて単調に波打つクズの原を見下ろす。うつろなざわめきが、胸壁の内側を静かに執拗に掻きむしった。

『魂が病んでいる。俺はどうすればいいんだ……』

彼は心の深みに降りたかった。だが怖かった。

『……俺はいま、言いようもなく希薄だ。吹きっさらしの風に晒された荒地みたいだ。強く生きたいのに、生命力を感じないのはどうしてなんだ。俺は強く生きたいんだ』

遼一は何ものかに向けて祈るようにそう尋ね、心の深部に何も考えずに降りて行ければ、必ず救われると思った。

二

水沼遼一は低い丘陵の頂上で自転車を停め、送電塔のコンクリート土台に寄り掛かって座った。

首筋と肩を灼く陽射しの激しい熱は、殆ど裸で田や川辺を駆け廻っていた遠い過去の夏を鮮やかに蘇らせ、蓄積した鬱屈の毒が融けていく。遼一はうっとりと陽にあぶられた。

標高が三百メートルで周辺の丘のうち最も高いここは、ほぼ百八十度の眺望があり、快晴の日には遠くに二千メートル級の山々が見えた。

うねうねと連なる低い丘々。その斜面に突っ立つ高圧鉄

塔の列を目で追うと、遼一の住む高層団地の灰色の建物が青空の下に平べったく聳えている。

果樹園と畑地の間を西に下る坂道から、灼けたアスファルトの臭いを含んだ風がむうっと吹き上がっていた。遼一は木陰へ行こうと思い、自転車に乗った。

野菜の出荷作業場を兼ねるポンプ小屋に着いた。ここなら静かだろうと思い、遼一は自転車を降りた。

水道の栓をひねった。熱い水がほとばしった。暫く待って生ぬるい水を飲み、屋根の下の日陰に座った。目の前にまだ若いススキが生えている。

遼一は尻ポケットの手紙を取り出して封を切った。久し振りに見る母親のちんまりとした筆跡のためか、笑いとも懐かしさともつかぬものが胸の底に動く。

母親は時候の挨拶や老人ホームでの暮らしを短く記した後、彼の小学校時代の友人奥村秀明について述べていた。

《……実は奇妙な噂をひとつお知らせしたく思い筆を取りました。村から離れて暮らしていても縁はなかなか切れるものではありません。この話も思いがけない人の口から伝わりました。

遼一と同級だった方円寺の秀明さんのことは覚えているでしょう。仏教大学在学中に神経をわずらって長いことK市の病院に入院していたとか、そうではなくて離れ屋にこもっていたとか聞いていましたが、その人の話では今はぶらぶらしているということでした。その秀明さんが遼一のことを本家の嫁の和代さんにたずねたというのです。

和代さんは出身が村ではありませんから、遼一のことも秀明さんのことも直接には知りません。秀明さんが行ったのは六月半ばのことですが、和代さんは赤ちゃんに乳を飲ませていました。

水沼遼一はどこにいるのか、と秀明さんはまるで物でも投げつけるようなきつい調子で問うたそうです。人一倍上背のある秀明さんは伸び放題の坊主頭で顔は青白く、薄汚れた法衣を着ていました。和代さんは恐ろしくて口も利けず、赤ちゃんを抱いたまま動くこともできなかった。秀明さんは知らん筈はない、水沼遼一を呼べと何度も言って家の奥を覗いたり縁側に上がろうとしたそうです。和代さんは泣き出した赤ちゃんをあやすこともできずに秀明さんを見ているばかり。

秀明さんはうつろな目をして遼一のことをしつこく聞き続けますが、和代さんは何一つ答えることができません。いつのまにか秀明さんは袂から出刃包丁を取り出して脅すように振ってみせたと和代さんは言っているそうですが本当かどうか。

でも遼一がいないことがわかったのでしょうか、秀明さんは黙って帰って行き、和代さんは腰が抜けたようになったまま長いこと動けなかったそうです。

あとで和代さんが騒いだのでこの話は村じゅうに広がり、そうこうするうちに秀明さんはお寺の御長男、水沼遼一は分家の者とわかって騒ぎは収まりましたが、一時は警察沙汰になりそうな勢いだったそうです。

秀明さんはなぜ今頃になって遼一の消息をたずねたのか理由がわかりません。秀明さんの神経は本当に狂っているのでしょうか。遼一はこの話をどう思いますか。

噂を伝えてくれた人も言っていたことですが、事がお寺の跡取り様のことだけに村の人達はあからさまに口にはしませんが、それだけにまた陰にこもった噂もあるらしく、狭い村の中で神経を病んだ人が暮らしていくのはさぞ辛いことでしょう。

村に居た頃、遼一は秀明さんには親しくしていただいたのですから、一度お手紙なり差し上げたらと思います。……》

視野の隅に陽を受けて揺れ動く長い強そうな葉が邪魔だった。

染み出る液汁のようにまといついてくるものがあった。当人が忘れ去っていようと過去の方では決してそうではないことを不意に突きつけられ、遼一は一挙に歳を取ったようにも躰が重くなったようにも感じて、視線をあてどなくさまよわせた。

母親が聞いた噂の通り、奥村秀明が神経を病んでいようとも、そのこと自体は遼一に遠いことであり、病んでいることは陰影の濃淡の差に過ぎないと思われた。

このような形で消息の一端を知らされてみると、かつて名前すら思い浮かべたことがない奥村秀明に極く自然に親しみが湧いてくるのが不思議だった。同時に過去が懐かしい温もりとともに浮かび上がり、親密な気分さえ動いた。

遼一は遠い記憶から浮かび上がった微かな震えを捉える。ひたすら忘れようとしてきた村での五歳より十歳までの生の断片が、雨の降る白黒映画の白茶けた画面に似てカタカタと像を送り、それに連れて秀明の像もまた次第に細部を取り戻し始める。

境内の一角に枝を張ったサルスベリの巨木によじ登る影。

見上げる目の中に広がる満開の花房の、紅い塊り。

叫びつつ落ちる影。

地面に叩きつけられた肉体の鈍い響きが、一瞬のうちに境内の空気を凍りつかせる。

奥村秀明の後頭部を染める血の色……。

『あの時、サルスベリに登れと指図したのは俺ではなかったか？』

だが確かめようもない情景は他者の夢の記憶を聞くような索漠さのなかに消え、記憶の映写機は色彩のない途切れ

途切れの回転を続ける。

大きな蛙が棲む沼があった。周囲をヤナギに囲まれているために風が強い日にも水面は無表情に澱み、数は出ないが型のよい鮒や鯉の釣れる沼だった……。

ウキを凝視していると、不意に水面を割ってウシガエルが泥色の頭を出す……。

そんな具合に、何かの拍子にぶわっと浮かび上がる言葉がある。遼一は思わず溜息を吐いた。

『あの時も奥村秀明がいた……』

三

村道から竹藪沿いの細い砂利道に入ると空気が変わった。冷んやりした中に竹の朽ち葉の匂いが混ざり、さわさわと葉ずれの音が幾層にも重なって鳴る。

遼一は古びた大きな屋根付き門をくぐって立ち止まり、元庄屋だった家主の広い庭と屋敷に視線を走らせ、誰もいないことを確かめると左手の柿の幹に手を触れた。

色づいた無数の実はどれも高過ぎて手が届かなかったが、見上げていると何となく満ち足りた気分になってくる。

屋敷と反対側の、畑の隅にある物置小屋を改造した小屋が遼一の家だ。

彼が一歳半の時、父親が戦病死したので母親は戦争未亡人だった。

菊花の紋章の上に《遺族の家》と印された陶製の小さな円盤が、小屋の入り口の柱に釘で打ちつけてあった。

暗い縁台に学校鞄を置くと、

「遼一かい？」

という声がし、莫蓙を敷いた部屋に上がると仕事の手を休めた母親がお帰りという。

テニスのラケット枠のつんとする塗料の匂いが漂っている。隣り町の工場が内職に寄越すガット張りが母親の仕事だ。

壁にクジラの繊維から作った糸の丸い束が幾つも掛かり、仕上がったラケットは部屋の隅にきちんと積んである。

「ようけできたね」

遼一は言う。

「手間の掛かる割にお金にならないんだよ。ほら、手がこんなに腫れてしまったよ、見てごらん」

「釣りに行ってくる」

遼一は立ったまま母親を見下ろして言う。

「宿題は？」

両手を揉みほぐしながら母親が言う。

「夜やる。大きな奴を釣ってきて食べさせてやるよ」

「じゃあ、鍋を洗って待っていようかね。危ない所へ行くんじゃないよ。……」

堤防から眺める小屋はいかにも小さい。今し方、そこを潜ってきた横垣越しに半分見えている藁の雨よけも屋根も、光の中で固まってしまったようにちっぽけだ。

遼一は小屋に向かっておーいと呼んだ。声は小さく震える尾を曳いて消え、やがて谺が右方向の空に聳えている方円寺の大屋根の辺りからオーオーオーと返ってきた。村の方からはそれきり何の物音も聞こえず、しんとした光の中に立っていると背が妙に冷えびえとした。

遼一は躰をぶるっと震わせ、釣り竿とバケツを持ち上げると堤防の向こう側の斜面を降りた。水量がこの前来たときより少ないのはきっと晴天が続いているからだ。

彼はいつもそうするように淵の状態を注意深く観察し、対岸のネコヤナギの茂みの下を狙うことに決めた。

魚信はすぐに来た。二十センチほどのよく肥えたウグイだ。腹這いになってバケツに水を汲みウグイを入れた。

水はびっくりするほど冷たく、夏の冷たさとは感覚が全然違っていた。針に新しいミミズを刺して同じ場所に投げた。

ウキが澱みと流心が接する所へ来た時、軽くちょんちょんと沈んだ。遼一はいっぱしの釣り師気分でチョッと舌打ちした。

きっとアブラハヤがつついているのだ。そう思った時、ウキが横に走った。慌てて引いた竿先から手首へ重い手ごたえが伝わり、竿を握り直した瞬間、青黒い大きなハヤが水面に跳んだ。

尻餅をつきそうになって態勢を立て直した僅か数秒に勝負はついていた。水音の余韻が消えると、動悸が躰じゅうに響いているのがわかった。

「あんな奴、始めてや……！」

呟いた声も震えていた。

あいつは引きちぎった針を口に刺したまま深みに隠れてもう二度と食いついてこないと思うと、言いようもない口惜しさが湧いた。遼一はまだ細かく震え続けている指で針を結び、大きく呼吸した。足場を確かめ、再びネコヤナギの下に仕掛けを投げた。

その時、背後の斜面にがさがさと音がして、

「お、山根さんのマガリの子か？」

という声が上がり、

「そうや、栄二さんの息子や。あの人も釣りが好きやったからな」

と別の声が遼一の父親の名を言った。

針のミミズが水の中の渦に巻かれて身悶えする具合に浮き上がるのが見えた。背後の声はそれきり黙り、遼一は初めて耳にしたマガリという言葉の意味を考えていた。

ウキがすっと沈み、ちぐはぐな間合いで竿を上げると十センチ足らずの黒っぽい魚が掛かっていた。アブラハヤ

だ。

「なんや、アブラタンかい！」

斜面の声が言った。

遼一は侮辱されたと感じた。食べてみれば鮎に似た味がして決してまずくはないが、黒いべとべとする体表の魚は貪食な性質も手伝ってか、近在では毛嫌いされている。

いったん川に戻そうとした小魚を遼一はバケツに入れた。背後で見ている男達に対する精一杯の反抗のつもりだった。

「坊よ、そんなアブラタン持って帰ってどうするんや？喰うのか？」

声には露骨なからかいの調子があった。

遼一は背を硬くして答えず、餌を替え、ウキ下を長くして澱みと流心の境界を狙った。今度またアブラハヤだったら諦めて帰ろうと考えた時、ウキが見るからに不自然な沈み方をした。竿先を少し引いた。ごつんという鈍い手応えがあり、おっという声が背後に聞こえた。

淵では滅多に釣れない型の良い鮒だった。こみ上げる動悸を飲み込み、意志に反して震える両手で獲物をしっかりつかんでからバケツに入れた。

「ほう、なかなか上手いもんやな。坊は何年生や？」

その声は父親の名を言った男のもののようだった。

「三年や……」

遼一は振り向き、男達を見た。

二人とも村では見掛けない顔だったが、はっきりとはわからなかった。

村の男達は誰も彼もが陽に灼け、互いに似通って見えるからだ。

「坊は栄二さんの息子か？」

茶色いトックリセーターの男が訊ねた。

「おじさん達は誰や。村の人か？」

遼一は言った。

「母ちゃんは元気か？」

丸首シャツの上に黒い背広を着た男は遼一の言葉が聞こえなかったように別のことを訊ねた。

するとトックリセーターの男がふふと低く笑った。

「誰や、おじさん達は？」

遼一は繰り返した。

「あの小屋に住んどって気持ち悪うないか？　あそこでな、坊よ、山根さんの脳天パアが首吊って死んだこと知っとるか？」

トックリセーターの男は、ことさら声を潜めた。

「ヨシマサ、つまらんこと喋るな！」

背広の男は強い声で制した。

「そんなこと知らん。嘘や……」

遼一はとっさに知らんと言った。

「ああ、嘘や。坊よ、頑張ってようけ釣って帰れや。母ちゃんが喜ぶでな」
背広の男はにこりともせずに言う。
連れを促すと女竹の茂みを躰全体で掻き分けるようにして斜面を登った。トックリセーターの男は力まかせに折りちぎった女竹を水面に投げ入れ、ふざけた声で、
「母ちゃん、母ちゃん、か……」
と言った。
見知らぬ男達が去った後、遼一はぼんやりと水面を眺めた。トックリセーターの男が投げた女竹が渦にゆるく巻かれて淵の中ほどを流れていた。
胸の奥にクモの巣がこびり付いたようで苦しかった。淵が男達のために汚されてしまったからではなかった。どす黒いような口惜しさが動作を荒くさせていた。
手早く釣り道具を片付けて斜面を登った。すると堤防の上に自転車にまたがった奥村秀明がいたのだ。
「なんや、遼一か。釣れたか?」
秀明はびっくりした顔で言い、自転車を降りてバケツを覗いた。
「二匹だけや。……誰なんや、あいつら?」
遼一はバケツを手渡し、農道を遠ざかって行く二人を指差した。
「東ンジョの善さんと義政さんや。お前知らへんのか?」
秀明はバケツを覗き込んだまま言う。
「三匹おるぞ……。小さいのはアブラタンやな。もう止めるのか、釣れるのはこれからやのに」
「マガリいうのは何のことや。秀明は知っとるか?」
遼一は母親のいる小屋の小さな屋根に目を向けたまま言った。
「え。マガリやと。……何や、それ?」
秀明は顔を上げた。
「聞いたことあらへんな、そんなもん……」
心に片仮名で焼き付けられた言葉が〈間借り〉だとわかった数年後、遼一は何かが氷解したように感じた。
それもまた遠い過去のことだ。

四

不意に右手に鋭い痛みが走った。いつの間に折り取ったものか、座ったポンプ小屋の周囲に生えているススキの葉をもてあそんでいた指が傷付いていた。
人差し指の腹に血が盛り上がり、崩れて滴った。傷は意外に深く、吸うそばから吹き出す血を凝視していると、流動する記憶の断片が光の中の羽虫のようにちらちらと輝きながら現れる。
竹藪。

神社の暗い森。
幹に虚(うろ)があるハンノキの巨木。
刈り残された彼岸花。
青黒い澱みと水底に揺れる藻。
凍った田んぼの土。
肥後守の小刀……。
一瞬、小刀が記憶を断ち切る。
軒下の縁台に立つ母親と顔を仰向けた男を小学生の遼一が柿の木に隠れて見ていると、茶色に変色した麦藁帽子を被った家主の山根某は、両手を今にも母親の腰に廻そうとするように上げた。
縁台に立ち、上方から男の顔を覗き込む母親はふっと爪先立ちになって揺れ、その度に片手を男の肩に置いて躰を支えた。
「目のゴミは舌で舐めると、じき取れると言うがなあ」
山根某が言うと母親は遼一がついぞ耳にしたこともない汚れた大袈裟な声で笑い、小さく尖らせた手拭いの先端を舌で湿らせた。
「旦那さん、動いたらいけませんがな。もう少しで取れますに」
母親の声で、男は目に入ったゴミを取ってもらっているのだとわかったが、遼一は何かそれ以上のものを二人に感じて身動きができなかった。
そして数日後、遼一は明確な殺意を抱いて山根某を待ち受けていたのだ。
湿って黴臭い藁塚に隠れて待っていると小便がしたくなったので前ボタンを外した。田螺(たにし)のひからびた灰色の殻を狙ったが小便は風に吹き飛ばされて大きく流れた。ちょろちょろといつまでも出る滴がゴム長靴に掛かり、鮮やかな斑点を描いた。
雑草の芽が、冬枯れた田んぼに融け残っているザラメ状の雪の表面を丸く窪ませて、透き通るような初々しい緑色を見せていた。
道路と藁塚との距離を全力で駆けて五十歩と目算し、すでに幾度目にもなる想像の全力疾走を繰り返した。すると寒さに縮かんでいた躰が熱く火照り、動悸が早くなる。
高ぶった気持ちを抑えるため、ポケットに手を突っ込んで肥後守を握り締めた。使い慣れて手になじんだ小刀は、決意を逃れようのない場所へと導こうとするように掌の中でじっとりと重く熱い。
だが待ち受ける山根某は遂に姿を見せず、遼一は寒さのために凍え、表情も失せた顔を俯けて帰ったのだ。あの時、男が現れ、彼が刺していたら村での生活はがらりと色彩を変えていたに違いない。恐らく何もかも一切が変わっていたのだ。
母親と男を数メートル離れた柿の木の陰から窺いながら

ら遼一が感じた説明のつかない憎しみ。今考えればあれは男、山根某に対してではなく母親に向けられていたに違いない。見捨てられたような寂しさと男への嫉妬とともに……。

ススキの葉を小刀肥後守のように握り締めたまま、遼一は炙り出しのように浮かび上がってくるものに見入った。

すると何か索漠として手応えのない気分が広がり、藁塚も凍った田んぼに融け残る雪も芽吹き始めた雑草も急速に色褪せ始める。

寒さに縮かんだ顔を村外れの農道に向け、ポケットの小刀を握り締める子供の存在から熱が、匂いが、色彩が次々に消え失せ、灰色のひからびた抜け殻が侘びしく影を揺らす。

『そんな筈はない……』

遼一は揺れる影を否定する。

『確かにあの時、俺は藁塚の湿った匂いを嗅ぎ、小刀を握り締め、足許から這い上がる冷気に足踏みしながらあの男、山根某を刺そうと待ち構えていた……』

だが一度消えた生彩は戻らず、不意に遼一はぼんやりした自己不信に陥った。

自分というものが水底に揺れる影のようにとらえどころなく思われ、できることなら五歳から十歳までの村での生活をやり直したいものだと夢のようなことを願った。

ポンプ小屋の日陰から柿や栗の果樹園を眺めると、降り注ぐ陽射しは余りにも明るかった。遼一は熱気に誘われるように立ち上がると、自転車に乗った。

午後四時に近かった。斜光は余りにも明るく、陽の当たる場所を走ると眩しくて空を見上げることができなかった。遼一は自転車の位置を変え、日陰に移った。

だが日陰は驚くほど暗く、ひんやりしていた。樹々や植物は葉も幹も一様に黒ずんで見えた。再び遼一は日向に戻った。

白っぽく見えるだけの太陽がこれほど眩しくしかも陰翳深く輝くのは晩夏特有の、光と影の強さだった。

低い丘陵の果樹園に挟まれたアスファルト道を下りながら、夏の底へ底へと近寄って行くようだと遼一は思った。

五

夜が更けても集合住宅は物音が絶えない。向かいの棟から届く風呂場の音、子供の泣き声、壁越しに響く水道の音……。これらのおおむね密かな物音はしかし容赦なく水沼遼一の感じ易くなっている鼓膜を咬んだ。

章を寝かせ、自分も眠ってしまった咲恵が起きてきた。遼一は食事を済ませ風呂にも入った後、自室の襖も窓も閉め切り、物音に耐えていた。

「月曜日は会社へ行くんでしょう。大丈夫?」

咲恵は襖の向こうから聞いた。

「ああ、心配するなよ。誰とも無理に話さなければいいんだ。もうじき治るさ」

遼一は努めて元気そうに応じた。

「そうね、私が心配しても仕方ないものね。私、テレビ見るから」

咲恵は明るい声で言った。

鼓膜はどうかすると持ち上げたグラスの中で揺れる氷の音にも反応し痛んだ。遠く微かに届くサイレンを聞くともなく聞いていた。

遼一は机の上に母親からの手紙を開くと、ただ字面だけを辿った。

今この時刻、奥村秀明は何を考えているのか。薄暗い本堂の隅にうずくまる影。汚れた法衣を着けた男は青白い顔をぼんやりと中空に向けたまま身動きもしない。

『秀明……』

と彼は呟いた。

『お前はあのサルスベリを憶えている筈だ』

本堂の薄闇にうずくまる影がゆっくりと振り向く。高い天井を掠めて蝙蝠が飛び、羽音がばさばさと鳴る。

『ほら、お前が落ちて怪我した……。後頭部に傷跡が残っているだろう?』

振り向いた影は天井の暗がりを見上げ、袂から取り出した懐中電灯を闇に向ける。いつも障子が閉まっていた本堂の広い空間を領していた闇と匂いが不意に立ちこめ、遼一は喉元にこみ上げる吐き気をこらえた。

金泥の蓮華座や仏像を沈める奇妙に猥雑で奥深い暗闇を手探りで進み、ようやく目が慣れる頃に急勾配の狭い段梯子に辿り着く。そして躰全体で足掛かりを探り登って、天井裏に上がる。蝙蝠を捕らえるのだ。

この時ばかりはリーダー格の奥村秀明が暗がりの中へ懐中電灯の光を走らせる。黄色い光の中を羽ばたいて横切る翼の形が、目の底に喰い込んでいつまでも残る。

先端に捕虫網をくくり付けた長い竹竿で暗闇を掻き回す。闇は漆黒のどろりとした液体のように重い。

そこここに流れる鋭い小さな叫び声と生臭い風。竹竿が掌の中でぶるぶる震え、思わず投げ出したくなる。

光の輪の中で輝く丸い目。

ネズミそっくりに剥き出された歯。

ビロードのように黒光る胴体……。

捕虫網に生々しい手応えが伝わった時、失禁しそうになったのは遼一だけではなかった筈だ。

『秀明、お前はあのサルスベリを憶えているだろう?』

目の前のカーテンを閉ざした窓の向こう側の暗がりの中に、法衣姿の背の高い男がうずくまっているかのように呼

び掛ける。
——夜中ニナ、眠レンママニナ、イロイロナコトヲ考エルトナ、本当ニ狂ッテシマウノヤナイカト不安ニナルンヤ。
——出刃包丁ヲ振リ回シタカモシレン、赤ン坊ハ泣イタノカモシレント思エテクルンヤ。
声は闇の中から低く静かに流れる。遼一は懸命に耳をそばだてる。
『あの時、なぜお前がサルスベリに登ったのか、もう俺には思い出すことができない。確か夏休みの事だったが……』
——赤ン坊ハ元気ヨク笑ットッタヨ。
——アノ家ノ嫁ヤトイウ女ガ乳ヲ含マセトッタ。植物ノ蔓ミタイナ静脈ガ幾本モ透ケテ乳房ヤナイミタイヤッタナ。
——遼一ガドコカニオルヤロウ。
——ソンナ人ハ知リマセン。
——知ラン筈ハナイ、ドコニオルノヤ。ワシガ女ト話シタノハコレダケヤッタ……。
『俺が知りたいのはなぜお前はサルスベリに登ったかということだよ。俺が調子良くそそのかした、そしてお前は高い所から落ちて怪我をした。後頭部から血を流して仰向けに倒れたお前の躰から、麻酔ガスのようなものが流れてきて俺を縛っていた……』
——遼一ハドコニオルンヤ。ワシガ訊ネルト、女ハソンナ人ハ知リマセント言ウタ。
——知ラン筈ハナイトワシハ言ウタ。本当ニソレダケヤッタ……。
遼一は頭蓋の深部が崩れて融け出して来るような戦慄の中で、聞こえる筈のない奥村秀明の声を聞いていた。
声が途切れると猛烈に眠くなり、夢うつつに近い意識の表面をぐしゃぐしゃに崩れた記憶の断面が影絵のように踊る。
岩で組まれた神社の御手洗の井戸。
殆ど黒色に見えるのに木漏れ日が射すと息を呑むような鮮緑色に変わる岩を覆った苔と湧き上がる水。
夕立の後の夏空を映して底無しの深さを錯覚させる水溜まり。
小屋の土間に置いたネズミ獲り。
掛かったネズミを呑んでだるそうにくねる青大将の腹。
母親が一時期常用していた抗結核剤パスのペンキ缶に似た容器。
飼うことを許されず捨てに行った山の麓で泣きながら石をぶつけて殺した仔犬……。
遼一は今にも沈みそうになる意識の底でゆるやかに飛び交う記憶の影絵を追った。
できることなら今夜にでも奥村秀明を訪ね、かつて共有したものを闇の中へ捕虫網を差し延べるようにして探り当てたいと思った。

六

時折すれ違う対向車のライトが、路肩の雑草を明るく照らし出す。まるで蛍光塗料をまぶしたようなどぎつい鮮緑色に輝くたびに、車内の薄暗さが際立った。
水沼遼一はバスの最後部右端の座席に掛け、真っ暗な窓外に目を凝らし続けた。
先週の月曜日から一週間休んだのは風邪気味だったからだと上司には説明し、数時間の残業もした。一日中緊張していたのか、瞼がぴくぴくと震える。
木立が途切れると闇は茫漠とした奥行きを加えた。夜の海にも似た手応えのない広がりが造成地のそれだとわかってはいても、闇の底を走るバスの存在そのものが何とも心許なく感じられる。
後部座席に掛ける八人の乗客は申し合わせたように頭を垂れ、両脚を深く引いて目を閉じている。前方の一人掛けの席の男達も、顔こそ見えないが同じように目を閉じ、半ば眠っているに違いない。
つづら折りの坂をバスは喘ぎながら登っている。背凭れに背中を押し付け、窓外の奥行きも定かでない闇に目を向けていると、彼は次第に自分の形が融け崩れ、その果てには水の染みのようなものがシートに残るのではないかという、不安とも願望ともつかぬ退行した気分がうごめくのがわかった。
バスは内科・精神科病院のやや前方に停まった。下車した背広姿の初老の男は、いったん闇に紛れたが、すぐに病院玄関の軒灯の中に現れ、白い影に似た後ろ姿を残して再び消えた。
その一瞬、遼一は自分が闇に呑まれたと感じた。
男の残した白い影に重なった自分が、闇の奥へ立ち去って行く……。
彼は背後の闇に目を凝らした。
『病院以外にあの付近に住宅らしい建物は何もない。あの男はきっと病院に帰ったのだ。それとも何もない筈の造成地に、あの人の家があるのだろうか。それともクズの葉に抱かれて……』
遼一は白い影を残して消えた初老の男のことを、ぼんやりと想った。闇の中を進む男の姿が、現実と空想の入り乱れた心の内を遠ざかってゆく。
弱々しく瞬く軒灯の光はたちまち遠退き、スピードを上げ始めたバスの窓ガラスに映る自身のうつけた表情と車内の光景が、古い夢に似た懐かしさで見返して来るばかりだ。
遠く近くの丘陵の樹木が熱っぽい暗褐色に膨らみ、重く垂れる星空に向けて奔放な影を描いている。それは、谷地

と斜面に凝縮する真の闇が丘陵の頂きに向けて迫り上がり、そのまま一気に激しく炸裂したかのように真っ黒く、天上に喰い込んでいるからだ。

右前方の深い谷地に続く斜面の一部が、オレンジ色に浮き上がっていた。誘蛾燈だ。果樹園の樹木の一本毎に、五十センチほどの棒状の電球が取り付けられている。

濡れたような光が全体に立体感のある透明なドームとなって、周囲から押し寄せる濃い闇を押し返している。薄暗い車内にもそれは反映し、乗客の肩や背、後頭部がくすんだ橙色に染まった。

ほの明るい果樹園の向こうに視線を伸ばすと、真っ暗な谷地と斜面が幾層にも続く。昨日、クズを引きちぎった谷地はこの辺りかもしれない。

その後方の薄闇に、遼一の住む高層団地が灯火を煌々と輝かせて聳えている。彼は座席に背を押し付け、光り輝く建物にじっと目を据え続けた。

バスは急な坂道を怖いようなスピードで下っている。

『このまま、どこまでも走り続けてくれ！』

彼は白い影の自分を追い求める気持ちで、声もなく叫んだ。

外灯が輝く団地は、闇の中を運ばれてきた目に眩しく映る。終点のターミナルで下車した十人ほどの乗客は瞬く間に姿を消した。

遼一は独り取り残された当て所ない気分で、聳え立つ建物群を見上げた。いったん広場を横切り、団地を円周状に取り巻く歩道に出ると、不意に植物の匂いが濃くなった。

刈り込まれることもなく、奔放な感じに枝葉を伸ばした潅木が、肩や腕に触れ、樹冠全体に点々と浮かぶ白っぽい花が、ゆさゆさと揺れる。

遼一は樹木の名が何であったのか思い出そうとしながら、花の酸いような苦いような匂いを嗅ぎ続けた。

漂っている植物の匂いは、幾つかの情景を引き出す。

母親からの手紙。

遙かな過去の友人奥村秀明の記憶。

ススキで傷付いた人差し指の血。

熱風に揺れるクズの葉の群れ……。

生々しく浮かび上がる像を追いながら、遼一は不意に思った。

『クズの持つ激しいまでの生命力、それに霊力とでも言うしかない不思議な力……。なぜだか知らないが魂が弱り果てている。だが、クズの持つ生命力を自分のものにできれば、俺も強くなれるに違いない……』

だがそう思う根拠はどこにもなかった。直感というよりもむしろ願望だった。

遼一はツクバネウツギが匂う暗い歩道をゆっくり歩きながら、懸命に考える。

『クズは単なる雑草じゃない、ぎりぎりまで弱った俺を必ず強くしてくれる。そのためにまず俺が生活を立て直すことだ。もうじき三歳になるあの子のためにも、咲恵のためにもそれが一番いい。俺の生き方も変わるだろう。いや、変えなければ……』

遼一はブランコと鉄棒、それに砂場の中に立つ滑り台の黒い影を避けて児童公園を突っ切り、そこだけぽっかりと明るく輝いているエレベーターホールを目差して走った。

咲恵と章の顔を一刻も早く見たかった。

伊藤伸太朗

いとう　しんたろう

1948年　岐阜県・養老山脈の麓に生まれる。
1977年8月、作家井上光晴が長崎県佐世保市に開設した第一期文学伝習所に参加。
1978年8月、第三期伝習所に参加。
1997年6月、水泳中に脳出血で昏倒、死に近付く。リハビリが功を奏し9月退院。
1999年夏より詩（らしきもの）を書き始める。
2004年9月、詩集『野薔薇忌』（影書房）を刊行。
千葉県・松戸市在住。

受賞の言葉　伊藤伸太朗

現代詩賞とエッセイ賞が落選し、銀華文学賞が優秀賞に選ばれました。残念な思いとともにホッとした感情が湧き、改めて詩の困難さが意識を占めました。

ある日、夕刊を読んでいるとアレクサンドル・タローというピアニストが紹介されていました。記事は「……他ジャンルの芸術家とのコラボレーションも多い。昨年六月にはバルタバス率いる騎馬の舞台芸術集団『ジンガロ』と共演し、話題になった」とあり、ピアニストは次のように語っています。

「馬たちの足取りの静寂感は信じがたいほどで、バッハを弾く僕を、彼らの存在感が支えてくれた。対位法のような形で馬の重量感が加わる。まさにバッハの世界でした」

幼時に暮らした農村で僕は和牛や馬を日常的に見慣れていましたが、その表情の静謐さや力感、存在の重量感を思い出すたびにある種の畏怖を感じていました。そうだ、俺が表現したいのもこれだ！　ピアニストの言葉を何度も読みながら、久しぶりに元気づけられたのです。

第四回　銀華文学賞優秀賞

船渠（ドック）のメモリアル

山﨑　敢造

クレーンに吊られた遺体が、昼でも暗い船倉から、ゆっくり回転しながら上がって行った。鉄パイプ製の担架に乗り、頭から毛布を被され、ロープでグルグル巻きにされていた。耳栓をしなければ一時も過ごせないドックでも、時間が止まったように静まり返った。

デッキの溶接工や甲板仕上工も、外板で錆び落としの者までも、何らかの音を立てるが、ドックに従事する人達は手を止め、能面を被ったように無表情になる。

横で彦爺と啓次は、呆然と見送り言葉も出ない。急に思い出したように、「ハッチから落ちたら助からないよ」と啓次が呟いた。自分たち三人は落ちる瞬間を見たので、度肝を抜かれた。勤めて間もない啓次は臆病風に吹かれたのか、一人で騒ぎ立て、その後は黙り込むと直立不動のままだ。怯える表情は、明日から仕事に来ない心配もある。彦爺は深いしわの顔を撫で下ろし、

「どこの組の誰かも知らんが、若いのに哀れだな」

夏の日差しを避けるように、顔をそむけた。ビルにしたら七階はあろうか、大型クレーンはT字型で、火の見やぐらの怪物にも見える。威風堂々と鉄のアングルで組まれた屋台骨に、整理整頓と安全第一の衣服を纏い、ドックのシンボルタワーが、厳かに動き出した。何の邪魔もないのに警告ブザーを鳴らし、霊柩車が出るような悲しい警笛になる、そのレールの先に古びたトラックが待っていた。クレーンの怪鳥のような黒い影が、不気味にも頭上を通過した、

深い絶壁のドックにモーター音が木霊して、もの悲しく響いてくる。罪もないのに人間の終焉にしては余りにも呆気なく、彦爺の言う哀れの一言に尽きる。いずれ徹夜とか残業を強いられ、無理を重ねた結果なので、宙吊りの遺体を眺めるのも心許なかった。

戦後、日本の経済が立ち直り、昭和三十六年造船高はイギリスを追い越し、世界一に君臨して、貴重な外貨獲得に役立った。勤勉な日本人の努力の結晶だろうが、戦勝国に追い着き追い抜くために、ひとかたならぬ人間性を欠いた酷使がもたらしたもので、安全第一の標語すら色あせてくる。といって自分が希望した仕事だし、職場を変えようなんて思わないが、見上げた首が痛いほど、強い衝撃を受けた。墜落した者は幾つだったろうか、同年代に見えたので、二十歳（はたち）だろうか。

同じ甲板で作業をしていただけに、気になった。または独身か妻帯者か、どちらにしても気の毒でならない。それと言うのも父が病で倒れ、長男の自分が横浜で一番日当の高いドックへ入り、暮らしを立てているからだ。意地っ張りの父が「一郎、頼む」というのを聞いて、やらざるを得ないと直感した。なぜなら母方の祖母を含め、父と母、兄妹五人の八人家族で、自分の下は就学の身になる。墜落した彼が、一家の大黒柱ではなかったろうか、しばらく頭から離れなかった。

横浜のAドックは大型船の修理専門工場で、ドックに入り切れない貨物船や貨客船が、ブイに繋がれ順番待ちの盛況だが、世の中は逆に、鍋底景気の最中でもあった。

父の話では従業員を千人も抱えるAドックは、膨らむ受注にも慎重で、急場しのぎに臨時工で対処し、季節労働者のように扱われる。安全弁的な雇用に、いつ解雇されるか不安もある。ただ、六ヶ月間、精勤できれば本工（職員）の道も開けると言う。自分の聞きかじりだが、本工の採用は金の卵（中卒）に限られると聞き、高卒の身は一抹の不安もあった。

臨時工を断念した時、父の知り合いで近所に住む、友野組の親方に拾われた。本工の使い走りを何年やっても、一人前にはなれないと聞いて、仕事を覚える方が有利と判断した。

ドックの工員組織は本工の下に臨時工、その下が組の者になり、本工が手も染めない、汚く危険な仕事を受け持つので、Aドックでは縁の下の力持ちといえる。遺体を見上げ、明日は我が身かと思えば緊張もするが、臨時工より日当が高く、危険手当と受け取れば納得もできた。短納期の修理も勢い下請けに委ねられ、Aドックには甲板仕上げだけでも、六つの組がある。どこも二十人の単位で、お互い競い合い、危険な仕事も顧みず、徹夜をしても間に合わすから、会社にとって都合のよい存在だろう。また船が入ら

なければあぶれるし、その間の保障は一切ない。親方が京浜地域の造船所を回り、仕事を請け、一族を引き連れ移動する、言わばジプシー集団でもある。

デッキにたたずむ三人も友野組に属し、この半年は移動もなく落ち着いていた。それというのも親方が何でも引き受けることから、甲板仕上げとは名ばかりで、危険を請け負う友野組と呼ばれていた。自分も六ヶ月経過して、舷窓の水漏れとか、水密ドアのパッキン取替えに携わり、船から外し工場内の作業場で済まされた。だが、出入りの激しい組では一人前に扱われて、緊張の毎日でもある。親方は危険を承知でも、ビルジ（船底）のバルブ修理や、高いマストのボルト取替えに向けるので、作業内容は雲泥の差となり、聞いたこともない現場へ連れ出される。仕事を覚えたいし、残業もしたくて「何でもさせて下さい」と言ったのが災いを招き、常に矢面に立たされた。

しかし、何より手に職を付け、独り立ちの仕上工になれたら、四方が海に囲まれた国だ、日本全土を渡り歩けるので、あぶれる心配はないと思った。親方は船を知らない者より、教える手間が省けるだろう。だが、半年の浅い経験では、どこに何があるかの程度で、複雑な船の構造に面食らう毎日だった。慣れない啓次の手前、弱音は吐けないし、危険が伴う現場は知ったかぶりも許されない。二つ年下の啓次は自分より小柄で、皆から臆病者のレッテルを貼られ、補佐役にも使って貰えない。それを知ってか知らずか反動として、不良まがいの態度が出る。

毎朝、親方が仕事の内容でコンビを決めていた。啓次は親方の親戚で大事にされるらしく、または見込みがないと爪弾きされるのか、殊の外売れ残る。そんな役立たずの手合いでも、親戚とあれば誰も文句を言えず、気まずい雰囲気が漂っていた。

友野組の脱衣場はドックから二百メートル離れた場所にあり、見るからに粗末な小屋になる。薄汚れたカーテンで六つに仕切られ、各組がしのぎを削る狭い空間だった。話し声は聞こえるし、喧嘩でもあれば手に取るように知れる。事務所を兼ねるので、汗とグリスの作業衣が下がり、銭湯の脱衣場のような箱がロッカーになる、それが堪らないほど異臭を放っていた。一つの裸電球は親方の机にあって、離れると相手の顔すら判別できない。誰かが「刑務所よりひどい」と言えば、「お前は行ったのか」と、親方に揚げ足を取られていた。

仕事の始まりはその机に集まり、親方の指示を仰ぐ。やり掛けの者は現場へ向かい、昨日で終わったコンビは新しい現場の指示を受ける、そんな時、啓次は輪を離れ、いじらしく目を伏せる姿があった。哀れにも誰も連れ出そうとしないので、彦爺が毎度のように「道具箱を持って付いて来い」の台詞で救われる。

啓次が入って以来、危険が隣り合わせの現場は、無口の彦爺も我慢の限界で、しゃがれた罵声も飛んでいた。啓次は何事にもためらう質で、ハンマーを打つにも加減して、力を入れないから叱られた。彦爺も仕事になれば、親戚だろうが委細かまわず叱るので、上辺を繕う人ではない。ハンマーとタガネ（手工具）は毎日手にするので、仕上工には必要不可欠なのだ。

左手にタガネを持ち、右手でハンマーを打つから、慣れない者は的を外し、痛い目に遭う、それが怖くて力が入らない。自分も痛い目に遭って打てるようになったが、彦爺の目に適うかどうか判らない。また、親方がピンはねする分と、その日給にも理由があって、啓次は親戚だけに皆から八つ当たりされていた。ただ彦爺はそんな了見の狭い人ではなく、余計なことは言わないし、泰然と構えるので救われている。組の者は彦爺を偏屈と言い、コンビになるのを嫌うから不思議だった。入った当初は仕事を覚えるのが先決で、人間関係など度外視して、誰彼となく教えて貰わなければ通用しなかった。慣れると同時に周囲が見えて、中でも彦爺は誰より船に精通して、他の者が嫌う現場も、文句を言わずに引き受ける。それを逸早く見届け、自らコンビになりたく、申し出た。高齢だけに重い物を持たせる訳にいかないし、大ハンマーも振らせたくない。だから彦爺とコンビを組むと苦労するので、熟練工はなり手がなく、自分が入るまで孤軍奮闘したらしい。黙々と取り組む姿勢に職人気質を感じ、仕事を覚えるなら彦爺しかいない、教えて貰うのと同時に右腕になろうとした。しかし、啓次を見ていると、自分はいつも人の役に立っても、目標より懸け離れる気がして、気持ちの葛藤に悩んだ。損な質と自分でも承知だが、性格は変えようもないし、自分では施しようもない。半年の少ない経験でも率先してマストに登り、ビルジに潜り、助手としているところへ啓次が入り、なりたくもないトリオになった。

遺体は収容されたらしく、遠くでエアーハンマーの音がした。それを合図に船首から、発電機の気だるい音が、周囲を気遣うように聞こえてくる、銘々が動き出すとドック本来の雰囲気に戻った。彦爺はその騒音を待っていたように、

「マストを中止して、二番ホールド（船倉）の作業に掛かる」

二人の部下に命じた。言われるまでもなく、啓次は重い彦爺の道具箱を背負い、後に続いた。作業を中断した理由は、死者が出たからか、それとも急ぎを引き受けたのか、盗み見してもポーカーフェイスに変わりない。だが、彦爺だって、転落にはショックを受けたに違いない。マストの高い足場から抜けられても、いずれ自分が登ることになる。命綱もないマストの作業は、潮と風雨に晒されたボルトを

外すので、至難の技だった。年寄りが何度もマストを上下するのは辛いだろうし、啓次は当てにはならない。自分が足場まで、道具を運ぶよりないが、錆び付いたナットはびくともしなかった。中断後に掛かるにも、大ハンマーを空振りでもしたら、二枚板の足場から飛び出し、真っ逆さまに転落するだろう。啓次はそのマストすら登れないので、道具箱を申し訳なさそうに背負っていた。本工の道具箱は手提げで済まされても、組の者は背負うか肩から提げて、両手を使える状態にする。なぜならマストにも登るし、深い船底へも降りるからだ、手提げで済まされる本工を、お嬢さん仕事と陰口を叩いた。

船尾のマストから二番船倉へ移動するにも、ジャングルを歩く注意がいる。甲板上は各組が持ち込んだ資材や、道具が積まれ、歩行をさまたげるエヤーホース、ガス、電気溶接のコードが入り乱れる。足の踏み場もなく、騒音と溶接の閃光する中は、煙が舞い上がり、あたかも戦場さながらなのだ。後ろを振り向くと、遅れる啓次は案山子（かかし）の格好で、両手を広げて歩いている。ジャングルの枝を払う仕草で、垂れ下がるホースや電線を気にするから足元がおぼつかない。修理中の甲板は凹凸があって、どこで怪我をするか判らない、穴でもあったらクレーンで運ばれる憂き目に遭う。彦爺は振り向きざまに「啓次、身を屈めて歩け！」の注意が飛ぶ、彼は仕事を覚える前に歩き方だが、彦爺は後ろに目が付いているようで驚く。そうは思っても、以前の自分を見るようで、からかう言葉を飲み込んだ。

二番ホールドの倉口（荷を出し入れする口）で、スチール・ハッチカバーの水漏れテストを行なっていた。放水して試験官が調べる最中は、三人とも足止めを食う。別の組の者や掃除屋も行列を作り、運動会の順番待ちみたいで、登場門の足踏みなのだ。ハッチカバーが開かない内は入れなく、他の組の仕事を拝見することになる。ウインチのワイヤーで開閉するので、人手と時間が省ける便利さはあっても、一度トラブルと鉄製の蓋は重量物だけに始末が悪い。

余所の親方が彦爺を見付け、思案に暮れた顔で寄って来た。何度削っても叩いても、水漏れが止まらないと嘆く。彦爺はカバーに両手を置き、身を屈めて片目を閉じる、その姿勢で前方を見透かした。「歪みが出ている、捩じれを直せば水は止まる」さりげなく言った。だが、何度となく頭を下げ「すぐスタンバイをします」と、離れて行った。脇で見ていた啓次は目を丸くして、

「彦爺はあの親方に教えているよ」

と、驚くより、呆れていた。

「当然だ、伊達に年を取っちゃいない」

自分が決めた師匠だけに、思惑通りの展開が誇らしい。

「お前たちも基本が大事なことを覚えておけ。あの親方だって歪みは承知でも、急がれると手間を省きたくなる、判っていても決断が付かないのだ。面倒でも工場へ運び、歪みの修正をすれば、削らなくてもよかった」

四枚のハッチカバーはバラされ、クレーンで陸揚げされた。テストには船のチーフか、三等航海士が立ち会うが、肩に一本線の人は、「無駄なことを……」という表情だった。なぜなら削った部分はガタが出るので、満遍なく削る必要がある。案の定、その親方は通訳に呼ばれ、叱責されていた。

貨客船R号はオランダ船籍で、姉妹船も数隻入る。取り分けR号は貨客船だけに厳しく、王冠マークは手が抜けないと、もっぱらの評判だった。彦爺も知らないはずはないが、改まった様子はなく、どの船も普段通りだから感心する。経験豊富というか、腕に自信がある表れだろう。

ただ、啓次が関心を示した、彦爺の年は誰も知らなかった。いつの日だったか、啓次が調子にのり「幾つですか」と聞いた時、一瞬、険しい表情に変わり、「年など聞いて何になる」と叱られた。

自分も薄々気になったが、半端な仕事しかできない者に許される質問ではなく、見当も付かない年は失礼になるし、また聞けない威厳もあった。大体、ハンマーも加減するくせに、啓次の口は控え目ではない。どこかの造船所で定年を迎え、友野組へ入ったと聞いたが、五十五の定年か、六十なのか、組に何年居るのか聞いたこともない。ただ、知りたい理由はこの先、何年一緒に働けるかが問題で、どうしても知る必要があった。ドックに慣れても一人前ではないし、明日にでも辞められたら元の木阿弥で、仕事のできない木偶の坊で終わる。といって一人前になるまで、居てくれる保証もない。しかし、ひょんなことから遠回りの甲斐があって、彦爺に知られず知ることができた。あれは冬場だった。寒い吹き晒しの甲板で、彦爺とデリック・ポスト（荷役装置）のブロック（滑車）を、オーバーホールしていた。何気なく顔を向けると、鼻水を垂らしている。気の毒で見て見ぬ振りだが、仕事に夢中で気が付かない。風で揺れて判ったらしく、親指で片方の鼻を塞ぎ、強い鼻息で吹き飛ばした。仕事は立派でも鼻の感覚が鈍いのは、それ相当の年だと判る。六十を過ぎなければ恥も外聞もなく手鼻などかまないだろう。また、啓次みたいに単刀直入に聞かなくても、脇に居れば年など自然に知らされるものだ。

宗谷がドック入りした日だった。彦爺は手放しで喜び、まるで初恋の人に逢えたように立ち尽くし、目には涙すら浮かべていた。高がちっぽけな貨物船と思ったが、それには訳があって以前からの顔見知りだった。砕氷船に改良するためのドック入りで、長期の停泊になる。懐かしそうに眺め、鼻水が下がるのも忘れ、子供のように驚きの目で見

張っていた。

無口な人が聞きもしないのに、昭和十三年、ソ連（ロシア）からの受注で、三千トン以内の耐氷型貨物船として建造され、彦爺も甲板仕上げで携わり、思い出のある船という。その後、先方の契約破棄で日本の船となり、戦時中は海軍の特務艦として、輸送の任務に就いたが、戦後の動向は彦爺も知らなかった。戦争で多くの船を失ったので、よくぞ生き残ったと、狐につままれた顔を向ける。彦爺が四十五の時、病気で奥さんを亡くし、その当日、宗谷が進水したので、生まれ変わりと言った。南極観測船（昭和三十二年、第一次）の改造で、砕氷船も兼ねた工事になる。本来、氷に船を乗り上げて割るが、宗谷は両舷に海水を入れるタンクを取り付け、右舷を満タンにして右へ傾かせ、または左舷へ傾かせ、船自体を交互に傾かせて、厚さ一メートルの氷を割る設計なのだ。他に後部楼を取り払い、ヘリの発着をする甲板も造る。長期の仕事にあり付けて喜ぶのか、それとも奥さんの思い出に浸るのか、口の重い人が至極ご機嫌で話し、その日始めて年を知った。

昭和十三年に四十五であれば、いとも簡単に年が判る。組には社則はないし定年もない。有給休暇も社会保険もない。仕事がなければ休暇で、それも有給ではなく、働けなくなったら定年になる、組の規則とはそんなものだ。六十七の彦爺は、いつ辞めてもおかしくない。年を知っても誰にも言えないし、言う積もりもないが、ただ、勝手に知って、いささか後悔もした。時々手を休め、顔をしかめる時は神経痛で、煙草を吸わない日は喘息が出る。年から推して長く勤まらないが、宗谷が来て「日本が南極へ送り出す船」と喜ぶ横顔から、改造が終わるまで辞めないだろう。

「ホールドに入るぞ」

彦爺の一声で我に返った。気が付けば啓次は深い船倉を覗いていた。慣れた者は船倉のはしごなど平気で昇降するが、啓次は遅いので、後の者に追い着かれて、迷惑を掛けた。誰でも先を急ぐから、組の者はまだしも、他の連中は怒鳴り散らすので、彦爺は行列がなくなるまで待ってくれた。

先頭を切って彦爺が降りて行った。暗い船倉は底なし沼のように不気味で、真っ暗闇に吸い込まれる感じだ。次に啓次がオドオドと足を出し、決死の形相で降りて行く。はしごは鉄の丸棒をコの字に曲げ、その端末を隔壁に溶接したものだ。船底までの長さはマスト程あって、自分も当初は戸惑った。下が見えないから足で丸棒を探り、一度確かめないと降りられない。それも荷の出し入れで、ぶつけたらしく、曲がったり潰れたりして、ひどいのは抜けて無いから恐ろしい。慣れるまで不安だが、十回も上下したら余裕も出る。ところが十回を超えても啓次は慎重で、あの転

落事故を見たから、より慎重になった。先に下りた彦爺は懐中電灯で左舷の壁にライトを当てていた。上から伸びる三本のパイプが、一本の太い方へ集積されている。根元は板材で覆われ、ビア樽みたいに膨らみ、船倉の底から四メートル上の位置にある。ライトは何度もその辺りを上下して、彦爺は苦り切った顔だった。自分も初めての仕事で、何をどうするのか見当も付かない。

「何の仕事ですか」

「スカッパーだ。と言っても初めてじゃ判るまいが、排水口のバルブ修理だ」

すでに親方が見回ったらしく、足場も整い即刻作業に掛かれる状態だが、彦爺は段取りを考えて動こうともしない。新規の現場はいつもそうだが、苦虫を噛み潰した表情で腕を組む、更に厄介な仕事と伺えた。

「明日の検査に合わせるには、徹夜になるぞ」

「えっ！　徹夜ですか」

啓次が透かさず、不満そうに告げた。徹夜を嫌う彦爺にしては、珍しいと思った。ご老体だから徹夜をしない人で知られているし、コンビになりたがらない理由でもあった。日当が四百円で、徹夜なら八百円になる。誰もが稼ぎたいから組へ入るので、汚く危険な仕事も承知だから、徹夜もしたいのだ。急がれても間に合わせると言い、実際に納期通り上げるので、皆は稼げない人とのコンビは避けていた。だが今日は状況が違って、マストのボルトは抜けないし、スカッパーは手付かずで、とうの立った熟練工と、半端なトリオだから何とも頼りなく、徹夜に踏み切ったと思われる。

「啓次、嫌なら定時で上がっていいぞ。一郎はどうする？」

「やります」

「頼む」と呟き、彦爺はそれっきり、啓次の方へ見向きもしなかった。親方の親戚だから、「無理をさせるな」と言われたのか、彦爺には啓次など眼中にないようだ。机に集まり指示を待つ時と同じで、うつむく姿が哀れになる。道具を揃える彦爺の後ろを通り、啓次と向き合う、おのずと小声になった。

「お前もやってくれ。マストも途中だし、検査に遅れたら親方が叱られるのだ。ハッチカバーで余所の親方を見たろう？」

「でも俺は何にもできないのに、同じ金額を貰うから申し訳なくって……」

随分とまともな返事をする。

「できることをやればいい。道具を運ぶだけでも、彦爺は助かっている」

「違うよ。彦爺も先輩も四百円で、俺も同じ四百円じゃ申し訳なくって、気が重いよ」

「なに、日当を気にして徹夜をしないのか？」
「だって、皆は給料泥棒って言うから、辛いんだ」
そうだった、知らない訳ではない、半年前の日当は熟練工と、そうでない者との差があった。だが親方の独断で決めたから揉めて、怒った親方は全員一律にしてしまい、その後遺症がくすぶっている。ピンはねと矛盾した賃金で、皆は直接言えない分、啓次に八つ当りしていた。
自分が四百円で、マストに登れない者も四百円では、誰だって面白くない。それは彦爺にも言えて、自分以上に面白くないはずだ。ごたごたを嫌い友野組に見切りを付け、当て付けに隣の組へ行く者も居る。親方も去る者は追わずで、やる気をなくし逃げ出す者は跡を絶たない。親方も親方で、どこで人足を集めるのか、後釜は一日として欠員を出さないから不思議だ。組を維持するのに最低十人のピンはねが必要と聞くので、現場を回るより人集めに奔走するのだろう。
金銭に口を挟まない彦爺なので、「見習え」とでも言うように取れる。啓次が四百円なら八百円の価値はあっても、何も言わないから無頓着なのか、金銭欲がないのか信じられない人で、仕事は真似られても、そこまで真似られない気がした。
「彦爺が言うならともかく、他の者なら気にするな」
「だけど先輩も気にしているだろ？」
「親方が決めたので、友野組に居る以上、従うよりないのだ」
「よかった、俺は彦爺より先輩の方が不安だった」
気にしないどころか正直に言えば、彼も気まずくなり、徹夜をしないで帰るはずだ。心の内を誰にでも判る質問で、安心するのか。無神経というか幼稚というか、単純に結び付ける言動に利己的だと思った。自分は彦爺に、同じ質問を向けられるかどうか自信がない。気にしないかと問われ、しているとは言えないし、それで気が済むなら短絡的で、子供としか言いようがない。それに聞く相手が違うだろう。同じ日当なら彦爺に神経を使うべきで、先輩どころではないはずだ。彦爺を軽々しく思うのか、無視したようでならない。三ヶ月では慣れないにしても、年寄りを敬うとか、へりくだる気持ちを持ち合わせないのだ。話し易い自分に同意を求め、気休めにしたとしか思えなかった。そのくせ彦爺が、「休憩しよう」と言う前からしゃがみ込み、煙草を吸えない年で吸っている。ふてぶてしい態度は大人なのだと言いたいようだが、マストに登れない者にしては身勝手すぎる。影で親方をタヌキと呼び、ピンはねを嫌い、「俺たちが働けば働くほど、タヌキが儲かる」と、いかにも純粋ぶって指摘するが、そのタヌキのお陰で、のうのうと過ごせるのは誰なのだ。仕事を覚えようとか本工になろうなんて気持ちもなく、日々ドックへ出れば金になると、

気楽に考えるからやり切れない。親方も彦爺も、やる気のない啓次を見抜き、危険なことは注意しても、手を取って教えるほど、お人好しでもない。ろくに仕事ができなくても、一丁前に四百円を手にするから、啓次に異存はないにしても、疎外されているのも気が付かない。どこの現場も道具箱では足りない工具が出て、事務所や工具倉庫へ使い走りが必要になり、啓次はもっぱら運び屋とか、連絡係だった。クレーンの遺体を見たので、矛盾した日当や組の異常な雰囲気を察し、明日から来ない恐れも出た。そう考えると、しわ寄せが自分に来て、運び屋になり兼ねない。連絡係では臨時工より覚えられないし、啓次に辞められたら困るのは自分だった。一方、三ヶ月も一緒に過ごすと、そんな啓次が哀れになる。組の皆から相手にされなくても、しおらしく先輩と呼び、唯一頼りにされるので、冷淡にもできず、救いの手を差し伸べたい気持ちもある。
「啓次も徹夜をやりますよ」
彦爺へ向いて、大声になった。
「そうか。夜食と朝食の食券を三人分、事務所から貰ってくれ。それから工具倉庫から、バールとチェーンブロックを借りて来い」
「判りました！」
確かめもしないで言ったのに、かえって喜ぶ声で返事をした。悪く言えば遊んでいて八百円だ、本音は聞かなくても稼ぎたいのは判る。
啓次が戻る間、足場に上がり、彦爺の指示で、覆われた板材をばらした。中はコンクリートで固まり、漏れの応急処置は明白だった。
「この中に修理するバルブがある。バールがくる間、ハンマーでコンクリの部分を剥がしてくれ」
「ハイ、この位置は喫水線より下ですから、海水の漏れですか？」
「漏れに違いないが、大方バルブに原因がある。航海中は荷を満載するので、船倉内を汚さないよう、コンクリで塞いだ訳だ」
「荷崩れか、何かをぶっつけた衝撃で、バルブ本体に亀裂が入ったのですね」
「亀裂かジョイント（繋ぎ目）だろうな」
話しながらコンクリートを砕いていた。暗い船倉内で、彦爺が懐中電灯を向けている。片手ハンマーで叩いても、一向に捗らない。大ハンマーを取り出すと、バルブの損傷を懸念して、時間を掛けても続行するよう注意された。コツコツと叩く内、徐々に片鱗が現れた。バルブを取り出せば修理は可能なので、啓次も加われば早いと思った。だが、待てど暮らせど戻らない。
「啓次は鉄砲玉だな」
しびれを切らした彦爺は、何も見えない上を見上げ、ポ

ツリとこぼした。自分の持つ懐中電灯が偶然にも彦爺の喉元に当り、そこだけが鮮明に見えてギクッとした。亀が甲羅から首を出したように、しわだらけの首が気持ち悪く、人間の首とは思えない、まるで爬虫類としか映らなかった。ほんの一瞬でも、鋭いライトの光線は、無情にも寄る年波を知らせている。足が痛いとか疲れたとか、弱音を吐かなくても、体が悲鳴を上げ、長く勤められないとの暗示だ。はしごを登り、啓次を探しに出ようとしたので、更に難儀と察して、

「事務所まで、自分が行って来ます」

「あぁ、頼む。食券が無くちゃ飯も食えねぇ」

そうは言っても「啓次の役立たず」と聞こえた。

「コンクリは自分が崩しますから、今の内に休んで下さい。徹夜仕事は長いですよ」

「判っている」小声でうなずいてくれた。

暗い船倉のはしごは、登っても、登ってもまだ先に、はしごがあるように感じた。すでに日は落ちて夕闇が迫り、クレーンの遺体を見送ったのは、四時だったと思い出し、外が暗いのも当然だった。定時を知らせるサイレンも、外板の錆落しに消され、船倉の底まで届かないのだ。

甲板を何歩も歩かない所に啓次が居て、目を疑った。恰幅のいい二人の男に絡まれている、それも本工のシャツを着ていた。

「何をするんだ！」

胸を突くのを見て、思わず離れた場所から叫んだ。彼らはこっちへ振り向き、一人がつかつかと歩み寄る。

「同じ組の者か？」

「そうだ」

「じゃ、聞くがどこの組で、彼の名は何ていうのだ」

「その前に彼が何をした？」

薄暗い中でもシャツの腕に安全委員の腕章を見て、しまった！　と咄嗟に思った。ドック内では警察より怖い存在だが、啓次は知らないようで、向こう見ずにも楯突いていた。下手をすれば追い出されるか、組の出入りまで禁止になる。

「禁煙の場所で吸っていたのだ。名前と組を聞いても言わないし、煙草とマッチを取り上げようにも渡さないのだ、本部まで連れて行く」

啓次は手を取られても減らず口を叩き「言うな！　喋るな！」と騒ぎ立てる。臆病な犬ほど吠えるものだ。相手は小柄な啓次を振り回し、抵抗する腕を押さえ付ける。とても許される状態ではなかった。

「判った、それは彼が悪い。組は友野組で、彼の名は……笠井一郎。組に入ったばかりで、何日も経っていない。禁煙の場所も知らないので、許して貰いたい。後は俺が責任持つから放してくれ」

二人は相談していたが、啓次の背中を押し、

「今回は記録に残すだけにするが、次回はドックから追放する。責任持つというあんたの名は？」

「田中啓次だ！」

手帳に記し、二人は引き上げてくれた。啓次はポカンとして、遺体を見上げた顔をしていた。

「バールとチェーンブロックをロープで縛り、ゆっくり下ろせ。俺が下で受け取る」

何を考えているのか、未だに口を開けたままだった。

「聞いているのか。ロープでしっかり縛らないと、抜け落ちたら下にいる者を殺す破目になるんだ」

「判っている、でも先輩、どうして嘘を言ったのですか？」

「終わったことだ、どうでもいい」

「よくないよ。二十歳（はたち）までなら組の者だって、会社の課長が認めれば本工になれるのに。……あのブラックリストに載ったら、もう永久にだめだよ。だから名前や組も言わなかったんだ」

「言わないで済むのか。貨物船のビルジは二重底で、ガスは溜まるし、甲板はボンベがゴロゴロ転がっている。引火でもしたら船が吹っ飛ぶぞ。一人や二人の死傷者で済まされない。だから警察以上に厳しくなり、安全委員は権限を持たされているのだ」

「親方から聞いたよ。けど、どうして俺をかばってくれた？」

「啓次は中卒で親方の親戚でもあるし、顔の広い親方だ、臨時工にならなくても、健康診断書一枚で、本工になれる道がある。煙草ぐらいでドジを踏むな」

「じゃ、先輩はどうするの。本工になりたいんだろう？組と名を言った以上、Aドックにいても望みはなくなったよ」

「まぁ～な、俺は甲板仕上げの修行をしたい。いつの時代も下請けはあるから、親方になって方々を回り、友野組より増しな組にするんだ。だからAドックに拘っていない」

「そう言っても先の話だ。皆は口達者な不良と相手にしないのに、庇ってくれたのは先輩だけだ、生まれて始めての気がする。それも本工の望みを絶ってまで俺の犠牲になってしまった」

「気にするな。下で彦爺が待っている、この件は誰にも言うな」

「……、ありがとう、先輩」

道具を下ろし、啓次と揃って足場へ上がった。彦爺は啓次に一瞥したが、「遅い！」の一言もなく、助かった。思った通り、彦爺はコンクリを砕き、だるまストーブほどのバルブが見えていた。自分が崩すと言っても手を出す人で、目の前に仕事がぶら下がると、人参に見えるらしい。端で

気にするほど年を感じないから困る。そのお陰で上部にチェーンブロックを設置して、バルブを巻くようにワイヤーを掛ける、繋がるボルトを外せばバラせるまでになった。バルブの下の部分を外し、啓次はやり易いパイプと繋がるボルトを外していた。

「先輩、何か嫌な匂いがします」

「確かにナットが緩む度にひどくなるな」

「ちょっと待て」

彦爺のドクターストップだ。胸を診断するように、テストハンマーで、太いパイプからバルブに沿って、打診していた。

「これは一筋縄ではいかない。漏れと見たが、これほど詰まっているとは思わなかった」

「何が詰まっているのです」

口達者な啓次が、すかさず聞く。

「糞尿だ」

「エッ！　糞尿？」

そう言って、モンキースパナを放り出した。

「あ～、嫌だ、嫌だ！　こんな仕事をするために、ドックへ来たんじゃねぇ」

自分も同感だが、啓次は足場にある道具箱を蹴った。それを見た彦爺は血相変えた。

「じゃ、何しに来たんだ！　組の仕事は汚く危険なのは承知だろう。親方が請け負った仕事だ、文句があるなら親方に言え！」

そう言って咳き込み、自分の方を睨んだ。後は一郎が取り持て、との合図だが、

「あのタヌキ親父、汚いピンはねの上に、汚い仕事を押し付け、掃除屋だってやらない便所掃除じゃないか。最低だよ」

「啓次の言うのは判るが、組の仕事はこんなものだ」

「まだ、お嬢さん仕事の方がいいよ」

「嫌なら本工になるんだな」

「エッ！」啓次はまた、遺体を見上げる口になり、黙ってしまった。会話は彦爺に聞こえても、問題外というように、もう相手にしなかった。

「単なる亀裂や漏れではない。これは航行中にトイレが詰まり、喫水線より下のバルブは手も付けられず、応急処置をしたものだ。だからバルブを外すと、噴水のように溢れ出る」

その言葉で、啓次は爆発物から離れるように、足場の上で後退りして、用心深く足場から下りる。離れた位置に立ち、こわごわ振り向いた。皆から臆病者と言われるゆえんなのだ。

「まず溜まったモノを抜かなければ作業にならない。スカッパーは板状の弁とボールの二種類で、この手の物はボールが入っている。喫水線の下に穴があって、海水の圧でボールが押され、バルブの中で閉まる状態だが、トイレを使うと上からの圧がまさり、ボールを押して汚物を海へ流す。また海水に押されボールは元に戻る仕組みなので、バルブの中で繰り返される」

「そんな簡単な作動で詰まるのですか」

「長い航海でボールがすり減ると、バルブ口に入り込み、上からの圧では抜けなくなり、詰まってしまうのだ」

「それも三本のパイプが集積されています」

「いや、見える範囲は三本でも、その上は部屋の数ほどパイプがある」

「では上まで詰まっているのですか？」

「そう考えるべきだ」

「どうやって溜まったモノを抜くのですか？」

「ここでバルブを外せば、ドラム缶で何十本も出るから、我々は汚物を頭から被ることになる。船倉を汚すし、片付けるのも大変だ。基本は面倒でも外へ出て、外板にある排水口の穴からボールを取り出せば、汚物は外へ流れる。仕事の手始めはそれからだ」

「判りました。外へ回って取り除きますが、船には穴が多いし、夜はどの穴か見当も付きません」

「俺も行く。啓次はこの排水口を、ハンマーで叩いてくれ。暗いので外からでは音に頼るしかない。判り次第合図をする、その間、音で知らせてくれ」

啓次は渡されたテストハンマーを手に、足場に上がり、お坊さんが木魚に向かうように座ると、渋々叩き出した。隔壁を這うように、彦爺が先にはしごを登って行った。排水口を間違えたら大変な事態になる、そんな思惑からだろう。後に続くが、ヤモリの這う格好は、いかにも辛そうで、自分が熟練工なら楽にさせられるのに、気の毒でならない。足に持病があるので、はしごの昇降で引退を決意する気がした。それにしても啓次だ。二人がデッキに上がり、一度、船を出て深いドックの中へ入る。底まで下りてから船の土手腹に沿って、また足場を登り、排水口まで辿り着くには時間がかかる。それを見計らって打てばいいのに、二人が船倉に居る内からコン、コン打ち出し、「便所掃除は嫌だ、嫌だ」と、お題目でも唱えるように打っている。彦爺も気が付くはずで、デッキに上がるなり、

「あの野郎、救いようのない奴だ。本工になりたいと聞いたので、毎度、連れ出すが、やる気があるのか、さっぱり判らない。居眠りしなければいいが」

また吐き捨てた。啓次の叩く単調な響きは、子供が駄々をこねるように聞こえる。それとも彦爺に逆らうのか、おぼつかない足をバカにするような、そんな音にしか聞こえなかった。

昼間と違って夕闇は、ペンキ塗りも錆び落としも姿を消し、外板は嘘のように、ひっそりとしている。遺体を吊り上げた大型クレーンも、夜のとばりに包まれ、黒い姿で浮かび立ち、高い位置で赤いランプが点滅していた。悪魔が人を飲み込み、満腹そうに片目をパチクリ、まばたきしている。　船の外側は鉄パイプで組み上げた足場があって、何度となく手を伸ばし、彦爺を引っ張り上げ、啓次の叩く排水口を探し当てた。十ミリの分厚い鉄板をリベットで合わせた裏に啓次が居て、一メートルも離れていないが、話が通じないのは何百メートルも離れているようだ。無造作に排水口に手を突っ込み、彦爺はあらぬ方向を見詰め、ボールを探していた。

「手に触れるが動きそうもない。バールでボールを持ち上げるか、左右に動かしてくれ、少しでも動けば上の圧で吐き出すだろう」

どの位置にボールがあるのか、抵抗もあるけど、確認しなければ無闇に突けない。彦爺は素手で探したから、汚いとか臭いとかも口に出せなかった。バールを何度か上下させ、反応を見る。ソフトボールより大き目で、空気の入らないゴムのかたまりは、石のように微動だにせず、手に負えそうもない。

「ボールを壊してもいいから、突いてみろ」

何度か力任せに突く内、異様な音と同時に玉が動き、臭気を伴い押し出される。彦爺はすかさず手を伸ばし、素手でボールを受け取った、その後は勢いよく汚物が流れた。

「朝になったら船体と足場を、ホースで水洗いしてくれ」

「はい、……それで徹夜をしたんですね」

「こんな事態になるとは思わなかったが、徹夜でよかった。昼間はペンキ塗りや錆び落としの者が、この場にうようよ居る。上で汚物でも流したら喧嘩になる。また、船内でばら撒けば、行列した掃除屋とも喧嘩だった」

修理なんてハプニングが付きものだ、汚物を出したので、彦爺は心なし清々している。そうか、夜間にしかできない仕事で、周囲の気配りも大事なのだと心得る。二人で二番船倉へ戻り、吊られたバルブを外す作業に掛かった。啓次は低い声で「彦爺は臭いよ」と言い、顔をしかめた。ボールを素手で取ったのは、明日の検査に並べるためだった。ノギス（測定工具）で、すり減った部分を調べて、新規のボールと取替えになる。誰も好きこのんで素手など伸ばさないが、検査を受けるルールだからやむを得ない。彦爺が自ら手を出し、自分にはさせなかったと知らせてやった。彼は珍しく神妙に聞いていたが……。空のバルブは楽に外れると思ったが、残り一個に啓次は手を焼き、モンキースパナを滑らせていた。六分の六角ナットは錆びもあって、角が欠けてスパナに引っ掛からない。後ろで見ていた彦爺から「一郎と代われ」の声がかかる。啓次にも聞こえたようで、スパナを飛ばすほど力が入るが、丸くなったナットは交替しても動かなかった。彦爺は見兼ねて懐中電灯を当て、指の感触で調べていた。「割るよりない」という。「割る？」ナットはボルトと一対になり、ねじで回すものだが、割るなんて考えもしなかった。タガネをナットに当て、ハンマーで叩き、分厚い六分のナットを、時間を掛けて割った。

ボルトを抜くと同時に重みで、バルブはパイプから離れるが、汚物は抜いたし、臭いは免れないまでも被ることはない。それにチェーンで吊られたバルブは、二枚板の足場から落とす心配もなかった。これが余所の性急な親方なら、どうだったか想像もしたくない。職業に貴賤はなくても汚物を被ろうものなら、啓次のいう最低の仕事になる。横たえたバルブの上にボールをのせ、後は試験官が見回りに来るまでにした。三人で二番船倉を出た。

「腹が減った～」と言う啓次を先頭に、食堂へ連れ立った。昼時のような混雑はなく、静かな広い場所に変わっていた。テーブルに彦爺と向き合うと、即座に質問が飛んできた。

「マストはどんな具合だ」

「潮で錆び付いたナットは、溶接でもしたように固く、ビクともしません」

「俺も上がって様子を見る」

夜食を食べながら段取りをしていた。マストから両舷へ各二本のワイヤーが伸びる。上はシャックル（U字型の止め金具）で吊られ、二インチのお化けみたいなボルトで止まる。下は甲板のタンバックル（両ねじボルト）で繋がり、甲板で外せても、上のナットはお化けなので、スパナやモンキースパナでは間に合わなく、パイプレンチで行った。しかし、渾身の力を入れても、ビクともしないのだ。

ボルトの減り具合を調べる定期検査で、これも明朝までにマストの下へ並べる決まりだった。

「今度はパイプレンチの柄に、鉄パイプを突っ込み、長くして回してみます」

「梃子の原理は確かに力が入るが、パイプレンチを滑らせたら命取りだぞ。それに柄が抜けたら、足場は危険が伴う。深夜でもあるし、高い場所も考えろよ」

ナットがビクともしないので、憂鬱だった。力を入れてもネジのない一対の物に感じたから、彦爺に策がなければ手に負えない。スカッパーみたいに、六分と違ってお化けだ。ナットを割るにも、三人で朝までかかっても割れないし、明日の検査に間に合わない。といって再度、パイプレンチで挑戦するよりないのだが。食堂を出て、道具を担ぎ船へ向かう。まばらにあるドックの街灯が、三人の影を浮き立たせる。鉄パイプやロープ、チェーンブロック等は、歩く度にガチャガチャ音がした。鎖が垂れ下がるシルエットは、戦国の武将並みに厳（いか）ついものだが、難攻不落の敵に

挑んでも、老武将と半端な足軽で、陥落できるのか、納期を気にする親方の顔が浮かび、舌打ちするのも見えてくる。

マストは暗闇を突き刺し、伸びた先端は闇に消えていた。幽霊船のように緩めたワイヤーは、締まりのないコールマン髭となり、両舷へ伸びている。張りのないのはボルトのテンションを、彦爺が抜け易いよう緩めたものだが、肝心のナットが回らなければ、それも意味がないのだ。

「俺が一通り見て来る。二人は待機だ」

そう言い残し、彦爺はハンマーとパイプレンチを腰に差し、両手に唾をして登って行った。ヤモリが手を伸ばし、足を繰り出すから、威勢のいい言葉とは裏腹に、それ相当の時間を要した。

啓次はマストの仕事になると借りてきた猫で、無駄口を叩かず神妙にしている。安全帽のあみだ被りや、あご紐をだらしなくぶら下げる姿はなく、どこへ置いてきたのか可笑しくなる。

彦爺がマストに登るのは、遣り遂げようとする意気込みの表れで、口で言うより彦爺が登るだけで真剣にさせ、それは啓次にも伝わるはずだ。

高い足場でハンマーを小刻みに叩く、夜空を音が独占したように、しばらく続いていた。自分と啓次はなす術がなく、見上げていた。錆びたナットを回すには、緩める方へ三度叩き、締める方へ一度、六角の面を満遍なくたたく。ネジを戻す方法だが、音から察せられた。でも、黙って蟹股で下りるのを見ると、芳しい結果ではなさそうだ。

「どうにもならん。グリスも防錆油も切れ、錆び止めペイントもないボルトは、丸ごと錆びている」

そう言われてホッとした。時間を掛けても回らなかったが、彦爺の手で簡単に回れば、技量の程度を問われるからだ。しかし、悠長な思いに耽る場合ではない。む抜けなければ抜けないで悩みもある。彦爺の面目というか体面を無視して、親方は別の熟練工をマストへ向けるからだ。

「他に手はないのですか」

「……この時間では工具倉庫も閉まり、借りたい物も借りられないし、万事休すだな」

「何が必要ですか？」

啓次が取り次ぐ。口の早いのは別にしても、積極的な姿勢が見えた。

「残された手段はガスであぶるのだが、三人の手も要る。ナットを真っ赤にしたら回るはずだ」

「あぶるって、じゃ、ガスのバーナーとホースが要るんですね」

彦爺は軽くうなずくが、夜間なので望みはない。啓次は「見て来る」と言い、走り出した。マストの仕事は手も足も出ないので、手伝える範囲と心得たらしい。自分は提案した鉄パイプを実行したく、マストに手を掛けると、彦爺は「パイプを使うのは心配だ」と、後に続いてくれた。

ナットを叩いた衝撃で、錆が多少でも落ちれば長い柄だから力を発揮して、回るのではないかと、一抹の望みがあった。狭い足場の上で、彦爺がレンチを押え、四十五度のパイプの柄に、力を加えた。だが、頑固にも微動だもしない。位置を変え、柄を水平にして片足を乗せた。手は足場を吊るワイヤーに掴まり、何度キックをしても緩むどころか反動で、柄が跳ね上がる。思い余って両足をのせようとした時、「危険だ、やめろ！」しゃがれ声が飛んだ。両手はワイヤーにあっても、レンチが外れるかパイプが抜け落ちれば、ぶら下がるだけの宙吊りになる。下はマスト灯もなく、真夜中を暗示する深い闇が広がっていた。「もう、いい。やるだけやったんだ」独り言のように呟き、マストを下りる支度を始めた。確かにできる範囲、全てを試みたが、ナットを緩められなかった。彦爺のいうバーナーであぶり、真っ赤にすれば錆びも取れ、ネジは回るだろうが、真夜中は倉庫が開いている訳がない。彦爺は諦め、道具を片付けている時だった。

「オーイ、ロープを下ろしてくれ」

下から声がする。怪訝な顔を見合わせ、懐中電灯を向けると、ガスホースを担ぎ、手にはバーナーを振る啓次がいた。

「啓次じゃないか、よく借りられたな」

と大声で聞けば、

「黙って借りてきた！」

不良らしい返事で、怒鳴り返した。彦爺は鉄砲玉と思ったのか、下を向いたまま、

「驚いた、あの野郎、どういう心境の変化なのか、やる気になってくれた」

満足そうな横顔があった。二本のホース（酸素と水素）の先端を、啓次が縛り、自分が引っ張り上げた。ただ、ガスを扱えるのは彦爺しかいない、長い柄を回すのは自分がしても、押える者も必要で、彦爺は三人の手がいるといった。そう思いながら何気なく下を見ると、啓次がバーナーを口にくわえ、ゆっくり、ゆっくり、マストを登って来る。エッ！……啓次が？　自分の目を疑った。「まさか！　そんな……」バカな、と言うのを彦爺は省いた。ライトの中に、見たこともない顔があった。真剣な眼差しで、恐々手を伸ばし、鉄の丸棒に掴まった。這いつくばって体を持ち上げ、先に足を掛けた丸棒に、後の足を下ろした。足踏みのような一歩一歩はヤモリより遅いが、彦爺は驚きの目で絶句している。自分も釘付けになり、見守るだけだった。口までも動かなく「しっかり掴まれ」を言うにも言葉が出ない。いや、そんな台詞など吹き飛ばす、迫力ある顔付きになった。歯を食いしばり、バーナーを落とすまいと、必死の形相で上を睨み、また手を伸ばした。転落事故を見た

だけに真剣だが、自分には「先輩の分、俺は本工になるんだ」
という、決意にも取れた。

山崎敢造

やまざき　かんぞう

1936年　群馬県安中市生まれ
高卒後、父が横須賀で経営する米軍相手の土産店パイロット商会へ就職するが、火事で焼失。
1959　横浜の浅野ドック入社（下請け）
東京のバネ製造業で、37年勤務、定年を迎える。
現在　茨城県　守谷市に在住。
職業　アルバイト。

受賞の言葉

山崎敢造

勤めから戻り、愚妻から入賞の知らせを聞き、辺り構わず「ヤッター」と叫びました。孫達の受け売りですが、快挙に思わず口から飛び出しました。小、中学校を通して、作文と絵は得意でした。NHKの「私たちの言葉」で放送されて、アルバムを頂いた思い出があります。国語の先生から、「お前ほど嘘が上手なら、小説家になれる」と、けなされたのか、褒められたのか、当時は喜べない言葉を聞いて、釈然としませんでした。

サラリーマンで定年を迎え、自叙伝を書く気になったのはそんな経緯です。こんな大きな賞を頂き、今後の励みになります。編集長をはじめ、諸先生方、ありがとうございました。

第４回　文芸思潮エッセイ賞　作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定● 400次詰原稿用紙５～10枚（手書き原稿用紙使用の場合は必ずＡ４原稿用紙を使用のこと）。
ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。
別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。
応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢７－15－13 アジア文化社
「文芸思潮」エッセイ賞係
TEL & FAX 03－5706－7848
E－mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金３万円
優秀作■賞状・賞メダル・賞金１万円
奨励賞■賞状・賞メダル　入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切● 2008年４月30日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2008年７月発売の「文芸思潮」ウェーブ24号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2008年９月発売の「文芸思潮」25号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から　日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

第四回　銀華文学賞優秀賞

空蝉

片山郷子

瑞子（みずこ）の耳の中でセミが鳴き出したのはそれ程前のことではない。

朝も昼も夜も、夏が終っても鳴いていた。ジーと被さるような鳴き声がしているのは耳の奥の方であるが、ときには頭のてっぺんで鳴いているときもある。

人差し指を両耳に突っ込んで、掻き回してみた。がさがさと大きな音がするが、セミの鳴き声は消えない。両手で頭を抱えてみても、げんこで軽く叩いてみても、同じである。勿論耳掻きでそうじを一番にした。房の付いた竹製の耳掻きは改めて眺めると形が面白い。くるくる廻して考え込んだ。これは乳癌の手術後の現象だ。

「……あなた、聞こえない？」

朝食のとき、夫が顔の前に広げている新聞を瑞子は手を伸ばして動かし夫の顔を覗いた。

「うん、聞こえない」

夫は鸚鵡返しに答えて新聞の位置を元に戻した。もう一度新聞に触れれば、眉間に縦皺を深く刻んで、不快な表情を示すだろう。瑞子は長年それを見続けてきた。

新聞から目を離して食事をして下さい。

結婚以来、何十年もその言葉を繰り返してきた。だが、成長した二人の子供が結婚をして家を出て、夫婦二人だけの生活になったいま、もう瑞子はその言葉を言わない。

もうこの言葉は卒業しよう。

と何度も決心しながら、いつも崩れてきた。だが、相手は一生変わらない。自分の方が変わろう、と気がついたとき、瑞子の心に、ふいに虚しい努力を永年重ねてきた悲しみが湧き上がってきた。瑞子の口から再び同じ言葉は出なくなった。

新聞の記事を横から覗くと夫は主要な部分を読み終えて、スポーツ記事に移っている。

瑞子は新聞の横から覗いている夫の頬の、茶色く浮き出た染みをつくづくと眺めた。

「お茶……」

と言う夫の声を聞いた途端、テレビの画面に目を移し、暫く聞こえない振りをした。またお茶という次の言葉がかかるまで。

勤務先を定年退職した夫は傍系の小さな会社に再就職をした。零細企業に近い内容で、そんな所へ行くのなら年金生活をした方がましだと言っていた。だが、傾いた経営を立て直すための実質的な責任者になると、がぜん生き返った。四十代五十代の仕事一筋の生活が復活していた。名実共に代表取締役になって、あと四、五年は現役で働きたい、いや出来れば十年と抱負を語った。

瑞子は複雑な気持ちでそれを聞いた。

夫は瑞子より二歳年下である。体力もだが気力が瑞子よりずっと上まわった。そして「やりたいこと」を持っていた。そのためには家庭を顧みなかった。しかし、瑞子はお前のしたいことは何だ、と人に聞かれてすぐ答えられない自分を知っていた。夫の定年後に夫婦で国内や海外へのんびりと旅行をしたいと心の隅で思っていたが、そのように夫を頼る考えに自己嫌悪を抱くこともあった。働き蜂の夫に反感を抱きながら密かな羨望があった。自分は何もない……。

定年退職後、夫がずっと家に居る友達の愚痴を電話でいつも聞かされていた。大きな、なめくじが通った跡に出来るでしょう、ぬるっとしたべたべた、今の夫がそんな感触なのよ。からっとしないのね。口では相変わらず威張っているけれど、どこかおずおずとしているのよ。そんな夫の気配を四六時中、感じていると息が詰まってくる。仕事がなくなった男の関心が今まで放っておいた妻に向かうのね。妻がそれを喜ぶと思っているのが嫌だわ。今までの罪滅ぼしみたいな意識を持っているのが、たまらないわ。なによ、今さら。妻はいつまでも待っていないわ。

そのような話を聞いて、瑞子は夫が外で働くことはとてもいいことなのだと考えを変えた。そして、あと四、五年、夫は外を向いて生きるのだと思った。外で働けなくなる何かが、ふいに訪れなければ。そしてそれまで、自分は自分のものを持たなくてはならない。

夫が新聞を置いて立ち上がった。傍目には仲の良い夫婦のように瑞子は門まで出て夫を見送り、笑顔で言った。

「いってらっしゃい。傘はいらないのね」

夫は無言で瑞子に背を向ける。瑞子は夫の背中を見送った。その顔にもう、笑みはない。

空がどんよりと曇っていたが洗濯物を干した。耳にセミの声を聞きながら。

瑞子は短歌の会に入っていた。もう二十年くらい続いている。月二度の集りに殆ど出席をしていた。会の主催者の歌人に歌集上梓を薦められて、第一回作品集を三年前に出版していた。人生の大きな転機だと瑞子は思った。丁度乳癌の手術をした年である。

家事をしながら頭の中で歌をあれこれと推敲するのが習慣になっていた。だが今日はただセミの声に聞き入って洗濯物を干していた。

形を整えるため洗濯物を習慣的に叩いているが、その音に勢いがない。夫の肌着を干しながら数年前から途絶えてしまった夫婦生活を心の底でちらっと思った。

もう、ああいうことも終りになった。手術のとき以来だ……。

別の言葉が瑞子を追いかける。

本当はそうじゃない。それより前からだが、今は乳癌のせいにしている。

八月の終り、秋を思わせる涼しい日があった。夕方、家族揃って近くの公園を歩いた。その公園は人工の川があり、透明な水が音を立てて流れ、その中程に水車がゆったりと回っていた。

家族揃って散歩をすることなど絶えて久しい、頭の中で皆がそう思っていたが、誰も口に出さない。息子の婚約者が来たので家の近くを案内したい、誰かがそう言い出して家族全員が揃って家を出た。

そういう事に気を使ったことがない夫が言った。

「家の鍵、ちゃんと閉めたか」

「はいはい」

家族は照れ臭さも手伝って思い思いに歩いている。しかし軸は瑞子にあった。瑞子はそれを充分感じていて、心が温まっていた。

茂った樹木の下へ行くと、頭上に降るようなセミの声を聞いた。

「蝉時雨……」

手を繋いで歩いていた娘のところの孫に瑞子は何度も繰り返してその言葉を教えた。幼く柔らかな頭脳へ叩き込むようにした。彼が少年になったころ蝉時雨という言葉とともに死んだ祖母を思い出すこともあろうかとふと、考えた。

「オバアチャン、チェミ、シグレ……」

「そうよ、そう、蝉時雨」

死んだ祖母……。

乳癌の手術をしたのはその半年前である。丁度瑞子の六十歳の誕生月であった。ほぼ一か月の入院で無事退院をした。

瑞子は乳癌と分かったとき、死を思うことはなかった。現代の医学を信じていた。手術を終えて乳癌は完治したであろう。だが、この幼児が少年になるころ、自分が生きているかどうかはわからない。このように家族に囲まれて、一種の平穏の中で生活をしているとは思えない。もっと別な形で生きているか、それとも思いもかけない方法で死を迎えているのではあるまいか……。

瑞子は少女のころ、『死』について、たわいない幼稚な空想をすることが好きであった。瑞子が死んだ後の家族の哀しみがどのようなものであるか、父、母、妹はどのような反応をするのか、空想をした。瑞子自身の葬式の仕方、死に方について、主に自殺の方法について考えた。首吊り、電車など乗り物への飛び込み、高い崖から海への飛び込み、歩いて浅瀬から大きな波の中へ入り、溺れる、服毒……。

また瑞子は好きな人、家族、同性異性の友達を空想で殺して涙した。瑞子の中で年齢と共に『死』は勿論、変化をしていったが『死』に興味を抱く傾向は変わらなかった。それは多分、死の上っ面を微かに撫ぜている観念的なものであろうと瑞子自身思っていた。本当の死は、孤独で暗く、どろどろとした恐ろしい、痛いものであろう。瑞子は出産のときを思い出した。人は血塗れで胎内からこの世へ這い出てくる。人を排泄する母胎も痛みの悲鳴を上げる。神は忘れることを人間に与えてくれたが、人が死を迎えて別の次元へ行こうとするとき、血塗れになって、のたうち回るのが当然であろう、生れたときもそうであったのだから。ただ、人は産まれたときのことは忘れ、これからのことはいろいろと想像する。想像することで不安は生まれる。不安は増殖する……。

蝉時雨の下を瑞子は孫に手を引かれて走り出した。彼女は薄いピンクの帽子を被っていた。抗癌剤の副作用で髪の毛が少し抜けた。未だ元に戻っていない。退院するとき病院の地下の美容室でウイッグを誂えたが、夏が来てからは帽子を愛用していた。

瑞子は紺地にブルーの花柄のワンピースを着て、その上に白の長袖のボレロを羽織っている。孫と共に木陰に見え隠れする後姿は、遠目には母子連れのような軽やかさがあった。

瑞子は木陰に立ち止まって家族を振り返った。木の葉が顔に陰影を造り、目を大きく見せていた。

痩せたな……、
婿と歩いていた夫の目がそう言っていた。婚約者とふたり、皆から少し離れて歩いている息子の目も同じだ。
瑞子は自らを死んだ祖母と表現したことに満足した。癌という呼び名に伴う死の世界からは遠のいた。いま、死はまだ遠いところにあった。だが、反面、死は瑞子の心により深く寄り添ってきているようであった。共存しましょうと囁いている。
「どこへも転移していません。再発の心配はまずありません。半年か一年、薬を飲み、その後も定期検診が必要ですが……」
術後の経過について担当医はそう説明した。瑞子はそれを素直に信じている。左の乳房を根元から抉るように全部切り落としてあった。
ひとつの乳房を切り落として片方の乳房だけになった瑞子は乳房が意外に重いことを知った。いま、幼い孫に乳房のある方の片手を引かれていると、その乳房は重く垂れ、ない方の腕が奇形のような形をもって、上に浮いてくるような感覚を味わった。
瑞子はふと若いときのぴんと張った乳房を思い出す。切り取った乳房はもう衰えかけたものだ。閉経を迎えたころから瑞子の乳房は年々、下に下がり、その厚身のある肉を減らしていった。背や腹に余分な肉が付いてくるのに、厚い乳房の肉がどこへ消えていくのか、吸収されるのか、不思議であった。それは女の衰えを如実に目の前に突きつけられているようであった。
だがそんな乳房でも、あって欲しかった。
切り落として存在感を知った。
瑞子は動き回る孫に笑いかけた。笑顔の中に諦めの表情が素早く過ぎる。
乳房を切り取った跡を見たとき、目がそこに吸い込まれた。平らな、やや窪んだ胸に赤い傷跡が不気味な線を描いていた。乳首がない。誰にも、人に見せられないとすぐに思った。人の中には夫も入っている。
夫とは数年前から寝室を別にしていた。
「夫婦生活のない人は乳癌になり易いって聞いたけれど本当？　もっともわたしたち、そんなこと、もう面倒臭い歳だけれど、ね」
病院へ見舞いに来た友達が好奇心の溢れた顔で囁いた。夫が乳房を丹念に揉んでくれれば小さなしこりも見付け易い。
「そんなこと、嘘よ……」
瑞子は答えながら夫婦生活のない自分を思った。瑞子と夫は各々の部屋に電話を引き、疲れたときにすぐ横になれるベッドを置いた。そのベッドは夜眠るときもそのまま使われた。それは快適な住居であった。その快適さと引き替

えに二人は夫婦生活を失った。中年の夫婦にとってドアを開けて隣室へ行くことは面倒なことであった。やがて、ないことが習慣になった夫婦は元に戻れないことを知った。大きな川のような羞恥や拘りが夫婦の中にいつの間にか横たわっている。性に関した会話は行為以上に照れ臭い、避けて通りたいものになっていた。触れないことが当たり前の生活になると夫に触れることは頭の中で考える近親相姦のような嫌悪を感じるものになった。そして妻の瑞子には夫がこのことをどう考えているのか、全く見当がつかなかった。『汚物入れ』に捨てられた瑞子の片方の乳房を夫は長いこと触っていない。そして永遠に触ることが出来なくなった。夫はそのことに何の感慨も持っていないように瑞子の目には見えた。目の前の現実しか見ない夫にとって、それは汚れた肉片にしか過ぎないのだろう。その乳房が元の居場所へ帰りたがっていることが想像出来ない。
瑞子は汚物入れの蓋を開けて失った自分の乳房を捜して歩いている夢をみた。同じ色と形をもった汚物入れが幾つも並んでいた。瑞子は「わたしのお乳」と呟きながら歩き回っていた。瑞子が探しているのは、若いときの張りと重みのある乳房のようであった。夢で永遠に失われたものを探し歩いていた。夢の中で全身が小刻みに震えた。
「こら、こら、そっちへ行っちゃ駄目よ」
瑞子は走り回る孫を掴まえた。
「オバアチャン、ボク、チェミ、シグレ。トベマチュヨ」
二人は無邪気な笑い声を立てている。
幼い児を両手で引っ張ったとき、喪った乳房が元の場所にあって、大きな男の手がそれをむんずと掴んだような気がした。瑞子はぎょっとして、立ち竦んだ。咄嗟に、孫の手を振りほどいていた。まるで切り取った乳房が元の場所に存在しているような感覚を味わった。
無数のセミが喧しい鳴き声を発している。
幼児が不審そうな瞳で瑞子を見上げる。瑞子は頬を赤らめて、小さな丸い肉片のような孫の手を引いた。
「瑞子、疲れないか。少し早いけれど、このまま皆で夕食を食べに行こう」
夫の言葉で家族は瑞子を中にして公園を出てタクシー乗り場へ向かった。セミは鳴き続けていた。
瑞子が順調に回復をしていることで息子の結婚式は予定通り、その秋に行われた。息子は瑞子の家より妻の実家に近い所へマンションを借り、移って行った。
息子が独断でペットショップから猫を買ってきて自分の代わりに家へ置いていった。動く玩具をあてがわれたようで瑞子は笑ったが、猫は飼ってみると結構可愛く、一方的ではあるが話し相手になった。夫婦ふたりと一匹の猫との生活になった。
三十歳を過ぎても結婚をしようとしない息子は瑞子の大

きな心配事であった。
その心配事が取り省かれた。そしてその空いた場所にまた別の何かが居座り出した。瑞子はシンプルな額縁の中に愛らしい幼児たちに囲まれた老婦人の絵を嵌めてみる。それは温かくて居心地がいい。瑞子は額縁を抱き締めて頬擦りをした。しかし、その絵を外した。
何を嵌めようか……。
嵌めたいものは分かっていた。それは年月を逆さに繰ることで、不可能なことだった。失った時を額縁に嵌めたい、失った時を逆さに巻きたい、失った時をもう一度わが手の中へ戻したい。
左の乳房の乳首の横に数ミリに満たないしこりのようなものを感じてから、瑞子が病院へ行くまで、三か月あまりの期間があった。
そうかな……、
疑いを持ってから、しこりだと確信するまで約一か月かかった。病院へ行こうと思ったのにぐずぐずしていて行かなかった。五十代で癌になりたくない、そのような理屈にならない理屈があった。また姪が銀座の地下に店舗を借りて小物店を開いた。海外から直輸入した皮の袋物やベルト、アクセサリーなどを売った。若いとき経理の仕事をした経験のある瑞子は、半年間だけの約束で帳面付けなど経理面を手伝うことになった。時々書類や伝票を家に持ち帰った

り、値札付けを手伝った。姪が店を空けたとき、店に立って小物を売った。勤めを退職してから長年主婦業をしていた瑞子にとってそれは新鮮な体験だった。お客とひと言ふた言交わす言葉が弾んだ。流行の服を身に付け出した瑞子は若返っていった。夫が生き生きとしてきた妻を見て、ふんという顔をしたのを瑞子は見逃さない。
「随分楽しそうだね。何かいいことがあるのかね」
夫が余所事のように呟いていた。
仕事っていいものだわ。
小さな経験だが夫の仕事好きが少し理解出来た気が、そのときはした。
「控え目なソフトムードで客あしらいが上手い、見直したわ」
姪に褒められたとき、瑞子は半年だけでなくもっと長く店を手伝いたいと内心思った。店舗は三坪の小ささだが権利金が高く銀行から借入があった。無事それを返済するのを見届けたい気持ちがあった。
そのようなとき、しこりを自覚した。
とにかく約束の半年が終わってから病院へ行こうと瑞子は決心をした。
今行けば必ず癌と言われて入院になる。
何度も繰り返してそう思った。夫にも子供達にも瑞子は異変を話さなかった。

特に夫に話す気になれなかった……。
いや話をしたいと思って毎晩々々遅い帰りを待っていたが、帰宅した夫の顔を見ると肝心な話が口から出なくなった。大切な話は新聞を読んでいる顔にではなく、妻を真っ直ぐに見ている夫にしたかった。忙しそうな顔の前へ大切なものを取り出す気持ちになれない。夫は妻がいつでも健康で、妻の興味の対象がどうでもいいことであると信じて疑わないようだ。
乳房の中で小さなしこりがはっきりとした形を持ち、薄く色づき始めたのを瑞子は自虐的な気持ちで眺めていた。少女の頃にした自分の死について、空想を始めた。夫に話さないことは、何かに復讐をしているような気持ちがどこかにあった。
親友に電話をして一時間も喋った後、瑞子はしこりのことを何気ないふうに口にした。
「すぐ病院へ行きなさいよ」
友が強い言葉で即座に言ったとき、電話口で瑞子は涙が出た。長話などしたいわけではなく、乳房の事が話したかったのだ。しかし仕事の予定を変える気にはなれない。乳癌について瑞子は無知であった。発生率死亡率が上昇していることを知らなかった。心の底では癌を恐れていたので、それをはっきりとさせることに躊躇いがあった。夫に言いそびれたという感じもあった。やがて、肝心なことを夫に話さない自分自身に拘った。
実質的な夫婦でないから……。
たしかにベッドを共にしていたら、夫が瑞子の裸の胸を開いていたら、赤く色付き始めた斑点を見逃す筈がない。
人生に開き直ったような、自棄気味な気持ちを奥に、瑞子は銀座の洒落た小店で明るく楽しそうに振るまっていた。
「この皮、とても深い色をしているでしょう。手触りもとてもいいわ。いかがですか」
そのときだけ乳房のことを忘れていられた。
息子が突然、婚約者を家へ連れて来たとき瑞子はあわてた。楽観視する気持ちが崩れた。
手遅れになる、結婚式に元気で出なくてはならない。
翌朝、大学病院へ駆け付けた。
生検の結果、医者からはっきりと癌の宣告を受けた日の夜、瑞子は娘夫婦を家へ呼んだ。夫と息子にも娘夫婦が来るので早めに帰宅してくれるように頼んだ。みなが揃うのを待って、乳癌であること、手術のため、ベッドが空き次第入院することなどを告げた。
「大丈夫、死ぬことはないわ……」
乳癌での死など考えていなかったのに、死という言葉が出た。途端に瑞子は涙が溢れ出て止まらなくなった。今まで黙っていたことを咎めていた夫が口を噤んだ。同じこと

を繰り返し語り終えた瑞子は声をあげて泣き伏した。その涙に誘われて、娘が泣き、男たちも目に涙を滲ませ、大袈裟に言えば家族全員が手を取り合って泣いた。それはどれ程瑞子を慰めたことだろう。その夜、瑞子は興奮して眠れなかったが家族に包まれた幸せな気分を味わっていた。

「ごみ、皆が置いてある所へ出せばいいのだろう。おれがやるよ」

夫が急に優しくなって、ごみ出しなど、ひとつふたつ家事を手伝うようになった。娘が孫を連れてちょくちょくと通ってきた。

ベッドの空きを待っている間、瑞子は家の中を掃除し、夫の衣類など、何が何処にあるのか、誰にでも分かるようにメモを書いた。預貯金などの貴重品は銀行の金庫へ預けた。延命処置をしないように、葬式は家族だけでして欲しいなどと書いた遺言状を作った。他に遺産がある訳ではない。そういうものを書くことは瑞子の好みに合っていた。

再び家へ帰れないことが、万一あるかもしれない……。

手術そのものに信頼をおいていたが、心の底で、すべてのものに危惧と恐怖があった。家の中を片付けても片付けても何か残しているような不安があった。瑞子は同じ所を何度も掃除をした。

十日ほど待たされて都心にある大学病院へ入院した。四人部屋で、全員が女の罹る病気であった。

傍に大きな公園がある。冬の木立が病室から見えて瑞子を慰めた。葉を落として露になった幹や枝は何かを語っているようで見飽きない。細い枝に小鳥が羽を休めている。晴れた日に病院の廊下の突き当たりの窓から富士山がうっすらと見えた。夫が殆ど毎日のように病室を訪れて、短い時間だったがベッドの横に座っていた。それが一番瑞子を慰めた。大抵帰宅途中に寄って十五分くらい居て帰った。夫は七時半ころ家へ帰り着くことになり、いつもよりかなり早い帰宅だと瑞子は計算をした。

六十歳にもなって、瑞子は人間の愛情に飢えていた自分を発見した……。

病院の夜は恐ろしいものであった。時間が停滞する。病室のベッドには息を潜めた人間が物体のように横たわっている。廊下は無人で薄暗い。空白の中に何時でも緊急の出番を待つような空気が漂っている。その中に立つと、ひとりだ、という孤独感が押し寄せてくる。壁に映る薄い影は別の星から来た係わりのない別個の人間のようで、存在感がない。

息子の結婚式が終わる頃まで、家族の連帯意識が強い時期であった。しかし瑞子がもう安全だ、病気が治ったと皆が思い始めたころから、家族関係がまた微妙に変わってきた。たまたま娘の連れ合いが大阪転勤になったので、

娘は慌ただしく去って行った。ぷっくりと太った孫の躰に触れられなくなった。新婚の息子は日と共に実家へ戻らなくなった。嫁の方の実家へ行っているらしい。夫も徐々に帰宅が遅くなり、一晩の出張があった。少し間を置いて二晩になり、頻繁になった。やがて、家庭にいる時間の少ない、家事をしない元の亭主に戻っていった。そして瑞子は乳房のしこりをすぐ夫に打ち明けなかった自分自身と、妻の悩みを受け入れる態勢のなかった夫に再び拘り出した。それは瑞子の中で乳房を切除したことと同じくらいの重みを持った。妻が頭痛薬を常用していることも、夜精神安定剤を飲むことも、与かり知らない夫であった。

水車のある公園を家族揃って散歩をしてから三年が経っていた。孫は蝉時雨という言葉をしっかりと覚えた。もうチェミ、シグレなどと、たどたどしい発音をしない。昆虫標本をデパートで買ってやると大喜びをしたと大阪の娘から電話が入った。

公園の裏口が瑞子の家と道ひとつ隔てた所である。二階の瑞子の部屋の窓から樹木がこんもりと見えた。例年よりセミがよく鳴いていた。

晩秋になっても瑞子はセミの鳴き声を聞いた。涼しくなっても頑張っているセミがいるのだと思っていた。やがてセミの鳴き声が違ってきた。

虫の音かしら……、とも思った。だがやはりセミの鳴き声に聞こえる。頭上を覆う蝉時雨の音に聞こえる。瑞子は自分の耳を疑うことをしなかった。だが真夜中、目が覚めてセミの鳴き声を聞いたとき、少しおかしいと気がついた。まず耳鼻科へ行こうと思ったが、乳癌のときと同じようにすぐ医者へ行く気がしない。ただ誰彼構わずにそのことを喋った。娘に電話をして訴えた。娘はふんふんと話を聞いてくれたが、

「暇をみて、そのうち遊びに行くわ。お母さん、頑張ってね」

と言った。乳癌を告白したとき手を取り合って泣いた娘とは思えないお座なりの言葉に、瑞子は感じた。

精神が病んでくるのではないか……。

ふと、不安な思いに囚われた。だが瑞子は自分の心が病むことはないと信じている。時々病んでみたいという思いが浮かぶだけだ。病んでいろいろなことを忘れたい……。

瑞子は台所のテーブルに大学ノートを広げて鉛筆を握っていた。今日は一首も出来ていない。恋の歌も花の歌も旅の歌も満足したものではないが、一応、うたった。乳癌の前後は歌が沢山出来た。最近は命の成長の瑞々しさと、命の衰えを、孫と自分に事寄せてうたった。

今、瑞子の歌いたいものは若さを取り戻す術であり、時を逆さに巻くことであった。不可能を可能にした歌を作り

たかった。初老期に達した者の先への希望を、ほんの小さなものでいいから探し出し、個性的に歌い上げたかった。しっとりと歌いたかった。また確とした信念を持った女を歌い上げたかった。だが瑞子のノートは白紙のままで文字が書かれない。

行き詰まった思いを抱いて窓のカーテンを引いて外を覗くと、雨を包んだ闇が庭木の上に重たく降りている。夫はまだ帰宅していない。何時になるか分からない。瑞子は夜の七時が来るとひとりで食事を始めることにしている。息子が大学へ入ったころから、家人を待たないことに決意をした。もう十年になる。

テレビのニュースを見ながら箸を口に運ぶ。御飯に味噌汁、さわらの糟漬、大根サラダ、おしんこ、みな手のかからないものばかりである。もう一品おかずを足すつもりでいたが途中で瑞子はそれを止めた。帰宅をして食事を摂るかどうか分からない者のおかずを作ることなど馬鹿げている、そう思った。

瑞子は簡単な食事を美味しいと思ってひとり食べていた。テレビが内戦で飢餓に苦しんでいる人々を映し出している。瑞子は棒のような手足の子供の姿を見ながら、茶を飲んだ。そのとき瑞子の躰の中へどうしようもない寂しさが湧き上がってきて、隅々までいきわたった。

……暫く瑞子は虚ろなものを抱き締めていた。そして再び、熱く濃い茶を口に含んだ。

新聞を広げてテレビ欄を見たがニュースの後、特に見たいものがない。ふと遠ざかっていた『ガイドヘルパーの会』に再び入ろうかと思った。目の不自由な人の外出に付き添う仕事で、手術の前、姪の店へ出る前は、週に二回ほど引き受けていた。音楽会、衣類の買物に瑞子を指定してくる五十代の女性の黒いサングラスの顔が浮かぶ。彼女は四十代になってから失明した。過労が一番の原因でしたと言った。失明の前後数年、夫にさんざん当たったそうだ。夫をお前と呼び、ちょっと気に入らないことがあると茶碗を投げ付け、夫を怒鳴った。見えない目で酒を飲んだ。躰の中に溜まっていた何かを全部吐き出してしまうと彼女は自分の方から言い出して離婚をした。夫はあっさりと承知して賃貸のマンションから出て行った、と彼女は頬を引きつらせて笑った。彼女の欲しがる洋服の色の説明が難しかった。黒とか白でさえひとつの言葉では言い表せない。紫色をどのような、と追及してくる彼女に平安時代のような、と答えた記憶があった。

食事の後片付けをした瑞子は再びノートに向かった。心の中の願望とは裏腹に三十一文字に書かれた歌は平凡というより陳腐であった。考え込んでいる耳にセミが鳴いた。瑞子は立ち上がって部屋を歩き回った。だがセミは纏わりついてくる。

救急車のサイレンが近付いて来て、セミの声を押しやった。サイレンの音はふと止まり、また起こり遠ざかって行く。

近所だわ。何処の家かしら……。

慌しい家人の様子や担架に横たわる病人の姿が目に浮かぶ。

静寂が戻るとまたセミが鳴き出した。

台所と居間の境にある低い段差に頭を乗せて、猫が眠っていた。

「ねえ、ゆきちゃん。起きなさいよ。お魚あげるから」

猫は安心しきった姿態で眠り続けていて、起き上がろうとしない。瑞子はゆきの傍へ行って顔や頭をくしゃくしゃに撫ぜた。ゆきは体中をごろごろと鳴らして喜んでいる。最近の瑞子は猫に対して人間に対するような愛情が湧いてくるのを感じ出した。ゆきは生まれて十か月のころ、手術をして子宮をとった。獣医に見せられたゆきの子宮は五センチ足らずの小さなものだが人間と同じ形だった。子宮をとったことでゆきは完全に雌の機能を失い、雄猫が傍へ近付くと恐怖の叫び声を上げる。瑞子は雄を知らないゆきが哀れであったし、人間の勝手で手術をしたことに後ろめたさを覚えた。猫と人の、心の交流を歌に詠もうかとふと思った。きっとそれは老婆と化け猫のおどろおどろとした世界を歌うことになるだろう。人間と住んでいながら猫に愛情を求める孤独な人間を歌うことになるだろう……。

九時を過ぎても夫は帰らなかった。瑞子は電話の受話器を持った。略式のボタンの三を押す。息子の所の番号がセットされている。一は夫の会社、二は娘の所である。息子は会社から帰宅していた。瑞子はセミの鳴き声が一日中、耳の奥で聞こえているの、と少しオーバーな話し方をした。

「直ぐ医者へ行った方がいいよ」

息子は心配そうな声を出した。

「そうかしら」

と瑞子は心配そうな声を真似てみた。

「まず明日、耳鼻科へ行きなよ」

「でも、耳だけじゃなくて、頭の中でも聞こえるのよ。耳が悪くなったとは思えない。だって小さな音も聞こえるし痛くもない」

「お母さん、良く分からないけれど、脳外科か神経科へ行った方がいいかもしれない」

「頭がおかしくなったって言うの」

「違うよ」

瑞子は息子の不安そうな声を聞いただけで満足した。彼がまだ何か喋っているのに唐突に、ありがとう、さようならと言って電話を切った。

戸締りを確かめて風呂場に入った。パット入りのブラジ

ャーを外すと相手のいない乳房がひとつだけ現れる。
猫が身を躱して戸の隙間から中へ入ってきた。ゆきは風呂桶の蓋の上に乗って浴槽の湯を飲むことが好きだ。飲み終わるとそのまま蓋の上に横になって気持ち良さそうに目をつぶる。
瑞子は湯の中へ身を沈めた。
夫はいつも前を見ている。自分の働く仕事を作り出し多くの人に会い、多くの場所へ行き、いつもひたむきに走っている。働くことが彼のライフスタイルのようである。
「おれは七十まで現役で働きたい。体力にも頭にも自信がある。いや動けなくなるまで働くのが理想だ」
と言っている。瑞子はその言葉を聞いたとき、それも一つの生き方だ、と理解出来た。だが夫の生き方には何かが欠けている。自己中心的ではないか。自己の行動が第一で、妻の立場など考えない。思いやる気持はない。まあ、それも譲歩して、と瑞子は思う。夫が仕事を辞めない限り家事にも定年がこないということではないか。瑞子は家事の定年を迎えて別のものにすすみたかった。
浴槽の中でない方の乳房がまるでそこにあるように、むず痒く疼く。瑞子は立ち上がって、裸身を鏡の前に晒した。対のない乳房は小さく萎んでいた。凹凸のある引き締まった体は過去のものとなっている。葱のような白い肌が腹部に僅かに残っているが、身を捩じると臀部が醜く瑞子の目に映った。
瑞子は再び浴槽に身を沈めた。腕を出して猫の頭を撫ぜ、声を出して言った。
「ついてゆけない。ねえ、ゆき。おまえもついていけないわね、おとうさんの生き方に」
ちょっと途絶えていたセミの声がまた聞こえる。セミが狂ったのか、自然が狂ったのか。姿の見えないセミの鳴き声に瑞子は聞き入った。
風呂からあがって、ゆきを連れて二階の自室へ入った。見慣れた室内を改めて見回す。書棚の自分の歌集のとなりに、『乳房喪失』の歌集が並んでいた。ふと手に取ったまま、床のカーペットの上に瑞子は長い間沈んでいた。癌がほぼ完治したのであるから、喜びの歌を歌わなくてはならないのに、喜びはまた、何と早く瑞子の中から消えてしまったことであろう。生ある限り欲望は果てしなく起こり、それに苦しめられる。瑞子は髪の毛をかきむしった。
階下で夫の帰宅をした音がした。本を投げ出し、階段を降りた。台所にいる夫にいつものように言った。
「お帰りなさい、何か食べる？」
「そうだな、お茶を飲むか」
瑞子は茶を入れ、漬物を出した。猫が二階から降りてきて空いた椅子に蹲った。通常瑞子は十一時ころまでなら、夫と一緒に茶を飲み、世間話を少しした。十一時を過ぎて

いると、おやすみなさいを言って二階へ上がってしまう。
少し酒の入っている夫が言った。
「ゆき、おれと寝るか」
「いやよねえ。ゆきちゃんは女の子だものね」
瑞子はことさら猫の体を愛撫した。夫はふんという笑いを片頬に浮かべたが何も言わない。瑞子に抱き上げられた猫はブルーの瞳を見開き、誇り高い顔をして、夫を無視している。
瑞子は自室に戻って猫をカーペットの上に少し乱暴に置いた。それから「乳房喪失」の本を開いた。本を読みながらも、台所でひとり茶を飲み、深夜でも時間をかけて夕刊を読む夫の姿が心の隅のどこかにある。微かに聴こえてくる物音で夫が風呂に入り、瑞子の隣の部屋へ入って眠る様子が伝わってくる。
二人で住むにはやや広いこの家の物音がすべて消えたとき、瑞子の耳にセミの声が新たに蘇る。そして台所のテーブルの上に放置された湯飲みや新聞などの影が瑞子の心の中に暗澹と浮かび上がる……。
瑞子はCDの音楽を聴きながら眠るのが習慣になっていた。音楽がセミの鳴き声を緩和してくれる。いつの間にか音楽に気をとられ、セミの声を忘れる。瑞子はリストの交響詩『前奏曲』を聴いていた。この曲に就いてリストは……人間の一生は生まれたときから、死への前奏曲を奏でている……と書いていた。曲は静から動へと移っていく。猫が瑞子の枕の端に頭を乗せ、鼾をかいて眠っている。瑞子も音楽の中でいつの間にか眠っていた。
真夜中、ベッドの微かな振動で眼を覚ました。午前一時二四分、終電車の通る時刻である。昼間は感じないが夜は電車の振動が地を這って響いてくる。微小な振動が大きな地震の前触れのように瑞子を不安に陥れる。瑞子は全身を硬直させて息を詰め、電車の通過を待った。脳裏に電車で居眠りをしている男達の情景がぼんやりとあった。
突然、瑞子の身内に激情が起こり、両手を硬く握り締め、身を反らした。それは終電車の男たちに向かって、闇の中を閃光のように一直線に走った。
一瞬のことであった。瑞子は性の疲れを伴った心地好い眠りに入っていった。
翌朝、眼を覚ますと夜中の激情を思い出した。そしてそれが、一人の、特定の男に対してではなかったことに虚しい哀しみを覚えた。
やがて目鼻立ちのはっきりとしない男の顔がぼんやりと脳裏に浮かんだ。五十年も前の初恋の人だった。それは何の感慨もない。
淡い、遠い昔……。
瑞子は呟きながらパジャマを脱いで手早く人口乳房を身に着けた。服の上から見れば手術前より胸に膨らみがある

ように見える。手術の後は見慣れた自分の体の一部になってきた。慣れとは恐ろしいものだと思う。

瑞子の家から十分くらいの所に大型のスーパー店が進出してきた。車を四百台も収容できる立体駐車場が付いていて、近隣の小さな商店は存亡の危機に晒されていると言う噂であった。開店当時の安売りで、押すな押すなの人が集まったという話を聞いた。瑞子は混雑を嫌って行くのを避けていたが一か月ほどして、出掛けてみた。そのスーパーが出来たため道は新しく舗装され、近くに高層マンションが幾つか建った。東京の外れの一角が、そこだけ急に都心に近付いたような変わりようであった。

瑞子はスーパーの周りをふらついた。

格子にガラスを嵌めたドアの前に耳鼻咽喉科の看板がかかっているのが目に留まった。瑞子が立ち止まって新しいその看板を眺めていると、ドアを開けて中からまん丸い眼鏡をかけた小男が出てきた。

「あらら、たしか水道屋さんでしょう」

瑞子は明るく声をかけた。彼は鼠色の作業服を着た背中を伸ばすと眼鏡の奥の丸い目で瑞子をじっと見て、

「ああ、たしか、公園の傍の家の奥さんだよね」

と嬉しそうな顔をした。薄くなった頭髪の半分が白くなっている。昔、水道のパッキングが緩んで水漏れがする、外の水道が凍って鉛管が切れたなどという小さな故障の修理に度々彼を呼んでいた。彼は気軽にやってきて、修理を終えると瑞子にお喋りをして帰っていった。建て直した鉄骨の今の家は水道の故障がない。外の水道も東京が暖かくなってきたのか、材料がよくなったのか、凍ることもなくなった。瑞子の家は町の水道屋と縁切れになっていた。

「奥さん、よくおれのこと覚えていたねえ」

「わかるわよ。耳鼻科へ、どうしたの」

「おれ、セミ鳴りがするのよ」

「セミ鳴り?」

「耳の中でジージーって、セミが鳴くんだわ。耳くその奴、溜まったかと思ってかっぽじり出したけど治んない。その内、ガンガン鳴り出した。まるでバイクを走らせているような音よ。べらぼうめ」

彼は道端に止めてある大型のバイクに目をやった。荷台に何やら水道の修理道具がくくり付けてある。

「耳の中で、本当にそんな大きな音が」

「うん、これじゃ、たまらねえから医者へ来た。ガンガンって音はすぐ消えたけど、セミ鳴りは治らない。もう一生治らないんじゃないかなあ」

「どうして鳴るのかしら」

「歳のせいだろ。気を病まない方がいいらしいよ。きっと、治ったり、また鳴ったりだよ」

「誰でも罹るの」

瑞子は陽気な声を出して訊いた。

「さあ、訊いてみると近所の年寄りにも何人かいた。まあ水道屋は定年ねえから、もう少し働いて、後はおだぶつするだけだから、いいけどさ。べらぼうめ」

「フフ、そうねえ。おだぶつするだけならいいわねえ。医者にはまだ通うの」

「一週間に二度来いというけれど一度しか来れないよ。結構仕事があるのよ」

「老後のお金、貯めているんだ」

「ちっぽけな水道屋で金持ちなんて一軒もないよ。奥さん、まだ若いから耳、鳴らないだろう」

「うん、まだ鳴らない」

瑞子は笑顔一杯で、嘘をついた。

「それにしても奥さん、よくおれの顔、わかったねえ」

「あちこちよく直して貰ったからねえ」

「たしか、二十年も前だろ。便所が水洗になる前かな」

「そうだね、そのころね。ウフフ、ウハハ」

瑞子は笑った。久々に笑いが身体の中へ転がり込んできたように愉快だった。水道屋が口をぽかんと開け、半ば怪訝そうな、半ば嬉しそうな顔をして瑞子を眺めて立っていた。瑞子はパーマの伸びてきた髪に手をやっていつまでも笑った。深刻そうな事柄の背中に何でもないことが隠れていそうな気がした。人間嫌いになりそうな自分がこんな些細な事で笑えて、その笑いが自分を救ってくれるように瑞子は感じた。

その夜、家を出ようと決心した。家出というような大袈裟なものではない。五十歳のころから、六十になったら家を出てひとり暮しをしてみたいと思っていた。自分を外へ放り出して試してみたい、そんな願望と、甘い憧れのようなものであった。だが乳癌になって、それどころではなくなった。乳癌にならなくても実行していたかどうか怪しいものだ。だが、今、実行しなければ後がないと追われるように思い始めた。乳癌の術後の三年検診を無事通過していた。そのことは大きな明るい材料であった。

ためらうな、躊躇するな。

耳の中のセミが言葉を持って、そう鳴いていた。瑞子は水道屋の真似をして声を出して言った。

「飯の支度なんか、べらぼうめ、くそ食らえ、だ。アハハのハ」

期間を一か月と決めた。それなら家族と折り合いがつくだろう。もしつかなくても、実行するつもりになっていた。半月もしたら寂しくなって音を上げて帰って来るかもしれない。あるいは、もっと長引くかもしれない。学校を出て、二十年間勤めていたので小額だが厚生年金を貰っている。自分名義の貯金も多少はある。女ひとりが地方で細々となら暮していけるだろう。瑞子は大雑把な見通しを立て

た。

また、姪に電話をして銀座の店のことを聞いた。姪は一、二か月先のことであるが、パリまで行って、手ごろなアクセサリーを仕入れて来る予定なので、その留守の間、店へ来てくれれば助かると言った。幸運なめぐり合わせに瑞子は喜んだ。だが長期旅行の計画は止めなかった。出先から度々電話をかけると姪に約束をした。

行く場所を「鞆の浦」と決めた。以前旅行したことがある。泊った宿から朝日が海に映え、波が銀色に輝いて揺れていた。町のあちこちに点在する歴史のある小さな寺を見に行った。そのとき通った坂のある細い路地が懐かしい。そこから見た民家の一室を借りて自炊ができないものだろうかと考えた。海側の道にはそこで捕れた魚たちが綱に並んで干してあった。その一匹を譲ってもらえば夕食のおかずは十分に間に合う。

半月ほどして瑞子は『家出』を決行した。

ホテルは取りあえず五泊予約した。夫が会社へ出掛けた後家を出て、新幹線に乗った。それとなく話すと夫からはかなりの抵抗があったので、実行する日は告げなかった。今まで軌道を外さないで生きてきた。いま軌道を外した自分の行動が瑞子は嬉しかった。行く先を書いたメモの横に猫の世話をくれぐれも頼むと書き添えた。山のようにゆきの好きな缶詰を買って来て置いた。留守中の猫のことが一番心配だ。あとは自立したオトナの男である……。

新幹線が東京駅を離れたとき、胸が膨らんだ。一つの乳房がないことを忘れるような心の高鳴りを覚えた。

窓外はビルが消え、富士山が去り、京都が去り、やがて田畑が続き、その上にどんよりとした空がひろがった。

瑞子の膝に鉛筆の挟まった大学ノートが置かれていた。だが、目は窓外の空の奥を見詰めて、見開かれていた。

それは始め、列車の進行と共に飛んでいる浮遊物のようであった。だが見続けていると、両手両足を広げた小さな小さな人間の姿になっていった。それはどうも瑞子らしい、時空の中をぐるぐると回って流れて行く。瑞子はいつまでも、その自分を眺めていた。それは米粒のようになり、やがて点となり、やがて空の奥へ消え去るかと思うと、また現れて、人間の形になって戻ってくる。

おーい、瑞子……。

心でそう呼びかけたとき、突然、瑞子の脳裏にある考えが閃いた。それはまだ混沌としたものであるが何かをふっ切るようなものがある。あえて表現すれば、孤独を楽しもう、というようなものであろうか。短歌にうまく歌い込めるかどうかは分からない。未熟な考えである。

鉛筆が膝から落ちて、ころころと転がった。隣席の初老の紳士がそれを拾い、瑞子のノートの上に無言で置いた。

「あ、すいません」

我に返って慌てて礼を言った。

瑞子は座席の正面に向き直り、ほっと含羞のある微笑を口元に浮かべた。

片山郷子

かたやま　きょうこ
1937年　東京都生まれ
現在東京都北区在住
主婦
都立城北高等学校卒業
東京都社会事業学校卒業（専門学校）
小諸藤村文学賞最優秀賞
やまなし文学賞佳作
同人誌「霧」発行

受賞の言葉

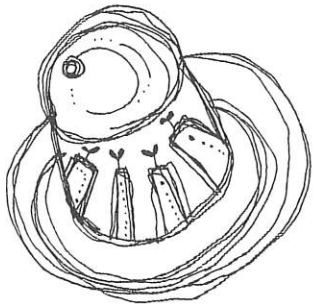
片山郷子

はじめに「文芸思潮」等の関係のみなさまにわたくしの小さな作品を見い出してくださったことを、厚くお礼申し上げます。お手数をおかけしました。

わたくしは自分の作り上げる作品に自分の「思い」を書き込んでいきますが、他人に理解されるような作品は、当然のことではありますが、未熟で、なかなか出来ません。これからも試行錯誤を続けていきたいと考えています。わたくしの持ち時間はかなり残り少ないのですが……。

みなさまのご指導をお願い申し上げます。

ありがとうございました。



第四回　銀華文学賞優秀賞

逝く者

細谷　清

眼が覚めた息子の正治が帰ってくる頃だ炬燵の上にある枕時計が光って午前四時　正治は電気を消さないで寝てろと言うが電気代が払えない運転代行をしている正治は働いた金を社長から貰えない　社長と喧嘩　それでもああして行くんだから　大きなスーパーがいくつも出来てわたし家で作った豆腐が売れなくなったそこの仏壇に納まっているあんたがあの時豆腐屋をやる！　と言わなければ　中国から引き上げてきた時また鉄道の車掌をやれば良かった中国では苦力の使用人がいて貴族様だったのにわたしも東京で女中さんが二人もいたお屋敷に育ってわたしのお父さんがうちの人に男惚れしてこの男は大物になると見込んで満鉄さえ続いていれば有望だったのにまた同じことを考えている過ぎ去ったわたしを引っ張り出してなぜ苦しんだ何処で涙を流した年をとった体はこんなに腰が曲がって顔は皺だらけおっぱいは瘤二つ大きかったのにな　豆腐屋も以前は繁盛していた子供向けの駄菓子も置いて学校が休みの時は子供達が押し掛けて来たこの辺りは陸軍歩兵連隊の跡地で市営住宅が建ち並んだ　あの子供達も　皆大人になってしまった　昔のことだ　商売がうまくいってる時のことを想い出している　豆腐は街の店や温泉街の旅館に卸した夕方には子供達が使った小銭が店先に置いた笊に山盛りになった姑が寝たきりになってゆっくり座ってご飯を食べたことが

ない姑の実家は山持ちの地主だった農地解放で田んぼを失い山は金に成らない跡継ぎがあの葬儀屋だあの家の歴史　わたしにも歴史がある　一つ一つ歴史が積もって此処に寝ているこの天井だってここは陸軍歩兵連隊の弾薬庫だったこれも歴史だからうちの人が豆腐屋を始めるため市から弾薬庫跡を借り建て増し部分の天井をぶち抜いて明るくした家に来た人達皆が明るくなって良いと必ず言うあの窓はうちの人が大工を頼んで開けた　うちの人が　これじゃ暗くてしょうがねい開けよう！　そうね　わたしも言って夫婦の気持ちが合った　昔そんなことがあった　過去のことを掘り起こさなければわたしは消えてしまう今日が来てすぐに明日が来て今日が昨日になる寝てばかりいるわたしには時間が沢山あって時間が追い掛けてくる後ろ向きになっても追い掛けてくる昔だけが残った　昔は女を燃やしたこともあった　一人で悔しい涙を流したこともあった　天窓が少し明るくなった　夜明けだ　運転代行をしている正治の仕事も終わる朝方だ夜中まで飲んでいる客を届けて正治はセブンえれぶんで朝食の弁当を買って子供と嫁のいるアパートに帰る子供は三人いて一番上の子は美也子と言ってこの子だけは正治が小さい時から此処へ時々連れて来たから顔が目に浮かぶ下の子は赤ん坊の時にちょっと顔を見せに嫁が抱いて来ただけでその後は寄り付かないもう一人子供が居るらしいが幾つになったか見当付かない　見当付かないと言えば嫁の年だって　正治より十歳も若いのだから　恐ろしい正治は六十歳を過ぎている　わたしなの今の嫁の年頃は朝四時に起きて夜の十一時まで働いたもんだ嫁は朝早く勤めに行くから正治とすれ違い用事は紙に書いて柱に貼って今日は米を買って来い油とマヨネーズもついでに明日の朝まで金一万円用意しろだと　そんな金正治に有る筈がない　正治が冬で道路がつるつるの時事故を起こしてそれが理由で社長さんが正治の十日分の時給を払わない事故は保険で賄ったというのに正治が怒って社長の愛人宅に朝早く踏み込んだら社長と事務員の愛人が真っ裸になって重なっていたんだと今終わっから待ってろーって怒鳴ったんだと可笑しくって　ハハハハ　正治はうちの人に似てお人好しだからずーとお人好しのことばっかり　何ていったって選挙だ　うちの人は選挙が大好きで選挙というと仕事をぶん投げて駆けずり回り親子で反対党二人で論争出入りの客まで巻き込んで正治はホテルへ納める豆腐の配達を忘れ叱られ取引停止になるところをうちの人が謝りに行って納まった　あの二人はじっとしていることがないうちの人はいつも少しのことで怒鳴り酒呑み友達が来ると大きな口を開け笑って煙草を吸って酒飲んでその後はぐうぐう寝るだけ正治は夜になるとバイクに乗って出て行って音楽会だ今月はなんとか劇団が来てえんしゅつがどうのこうだの世界情勢のナントカ主義がどうの三十歳過ぎても嫁を取らず四十

歳近くで今の嫁　この嫁のことは思い出したくもない　嫁は最初から豆腐屋を嫌いわたし達とは別暮らし世の中がどんどん変わり豆腐屋がだんだん駄目になるそれでもうちの人と正治は相変わらず自分勝手　これからの商売どうするのと聞くと　拙者が悪いんじゃねい！　おまえには苦労を掛けたなと言ったのは死ぬ時笑顔の写真が仏壇に入って静かになった代わりに息子の正治が昼夜動き回っている　動き回っているのは正治ばかりでない世界中の人が動き回っている　死ぬまで　だから順番に死ぬ誰でも過ぎ去るものを創るために動き回るわたしは頭の中がぐるぐる回り今になったり昔になったりもともと此処は歩兵連隊弾薬庫跡でわたしの寝ているベッの下が畳その下が土間でその下は掘れば水の出て来る地面で結局わたしは地面の上に寝ているのよね兵隊さんがこの火薬庫を建てる時掘った土の上にわたしは寝ている　これは発見だ　うちの人だって気が付かなかっただろう酒を飲んでわたしの上に重なっても二人の体は地面の上　分かった　本当のことは隠されている　豆腐屋を開業して泣いたり笑ったり喚いたり行ったり来たり地面の上わたしはこの上でしか活躍出来なかったのよ山の手のお嬢さん育ちのわたしがこんな所で死ぬ本当じゃないお嬢さんの時は死ねなかったし中国では若かったやはり此処しかない此処でなかったら　何処　それは隠されている

少し疲れたなー

誰かあの天窓から覗いたあれは誰だ　俺だー　耳元で声がするので枕から首を外し持ち上げた　テレビの前に男が座っている　あんたは誰だー　返事なしの顔は下向きすぐ後ろ向きテレビを付けたこんな朝早くからテレビなんか見たくないと言ったら男は黙って立ち上がりわたしの顔を跨いで行くその体の大きいこと　やはりそうだ　中国で満鉄の官舎に泥棒に入った男あれあれ隣の部屋へ土足で入った箪笥を開けた着物を探している中国で持っていた着物がそこに有る筈がない男が布袋に何かを入れた豆腐屋になって着物一枚買ったことがないのに　有るの？　男は満足して逃げるが荷物が大きくて窓につかえて腰が砕けて　ほらもう一度　飛び越えたのは体だけ荷物はこちら側に落ちた男の仕草が可笑しくって柱に下がっている鏡がケタケタ笑っている男が逃げる時大人しい鏡を怒らせた鏡とわたしが友達なのをあの泥棒は知らない　逃げた筈の男がテレビに映っている中国で大騒ぎが起きているから泥棒も大急ぎで逃げ帰った大勢の若者が列車を止めて中国の首相や大臣を引き摺り降ろそうとしている特高警察も大勢出て若者を取り囲んで一人の若者が列車の上に飛び乗って演説を始めたその演説のうまいこと駅の後ろに居る黒山の人だかりがその度に歓声を上げ若い女が涙で眼を塞いでわたしに似た若い女は着物姿あれはわたしの着物で泥棒が中国時代のわたし家から盗んだ着物だ列車の上の若い男は手タッチして泥棒

と交代した泥棒より体のひとまわり大きな特高警察が列車に駆け上がり泥棒の背中に印を付けると泥棒は列車から飛び降り逃げて隠れて皆の中へ紛れても印があって捕まった泥棒は後手に縛られ柱に縛られ首まで縛られ鉄砲を向けられ撃たれたわたしはこの泥棒の顔をよく見ていないので枕から首を擡げテレビをよく見た　あぁ　なんと泥棒は正治だ　なんで正治？　まだ誰か居る　泥棒の娘が前に立っている　父親が今鉄砲で撃たれ真っ赤な血を吐き死んだことをこの娘は知らない可哀相だ本当に泣けてくる涙が一列作った耳たぶに溜まったわたしの涙を娘がわたしの目尻に柔らかい紙を当てたおまえのお父さんは泥棒かと訊こうとしたら　なんだ　美也子か　わたしの孫　正治の娘　美也子は悲しい顔をしてお母さんはスーパーで買い物をしているその間に来た東京に就職が決まったから来た最後の別れに来た　わたしはすぐ死なないので最後ではない　元気であることを美也子へ見せ付けるため頬を膨らせたら美也子はぼろぼろ涙を流す声までしゃくって泣く婆ちゃんは自分のことを何にもわかっていないとまた涙だ　わかっているよ美也子に言われるまでもなく婆ちゃんはわかっている外から見ると誰も住んでいない様なぼろ屋で火薬庫跡だからあの天窓からお日様が入らないと川底のように真っ暗闇の底に白く細くやせ衰えているのがわたし　わたしの友達の鏡が写し出してくれる　あれもわたしだけれど本当の婆ちゃんは別に居る若い時もあったあんたみたいに綺麗な時もあった気持ちも輝いて光っていた時もあった今はこんなでも

気分　気分よ　気分を作っているのはわたしだからこの気分は続き通しでこれに従って生きてきた嫌な気分はいつも襲ってくる誰かが押し付けるのでなくわたし自身が受け持っているだから負けたことはないわたし自身が気分を作ってこんな歳になっても続く　これまでのこといろいろ想い出してあの世に持って行く　かくご　かくご　美也子はまだ若いから分からないだろう　婆ちゃんが寝るようになってから十年にもなるのかそんなになるのか婆ちゃんはただ寝ているわけじゃないいろいろ考えて寝ている気持ちが帯のように繋がってそれが十年少しも長くないよ有り難いよ明日が今日になる機械に入った豆腐みたいに次々と今日と言う日が出て来る　正治が豆腐作りをやめて何年になる美也子が知ってるわけないね　豆腐屋の商売が廃れたのを知らず死んだ爺ちゃんは幸せものだそこの仏壇の引き出しの中にお金が入っている美也子にやるあんたが来るのを待っていた町内の民生委員の唐橋さんが時々わたしに呉れて行く　これはわたしの個人的な金です　何度も同じことを言ってそんな金ならいりませんと思って顔は笑って受け取った正治とおまえのお母さんが離婚しない限り福祉は受けられないんだとおまえのお母さんが月給とりだから　誰も頼まないのに　美也子が大人になって東京に住むこと婆ち

ゃんは知っていた美也子が生まれる前から婆ちゃん願っていた美也子の体の中にも別な人間が育っている皆に待たれている電車やビルデングは東京で美也子の来るのをじっと待っている　もう帰るのか　あのな婆ちゃんはあんたがお嫁に行くまで死なないから　そんなに驚いた顔をして　秘密を言うとなあんただけだよお母さんに言うなよ正治には借金があるしな婆ちゃんの福祉年金をあてにしているこの前な正治の友達の船山君と言う人が来てな婆ちゃん寝たふりをして聞いていた船山君からも正治は金を借りている正治はサラ金の利息しか払えないんだとだから婆ちゃんは死ねないお母さんに言うなよ　美也子　明日東京へ行くのなら美也子はもう東京の人だ婆ちゃんの眼には東京が映っている電車が横になって美也子を待っている本当は婆ちゃんも東京の人だ東京で生まれたんだ今でも東京の人になれるんだ駅へ切符を買いに行けないだけだ　わたしの代わりに行け　美也子　婆ちゃんのこと忘れて良いんだそんなに泣くなお金早く仕舞え婆ちゃんはお金いらない天井を見ているだけ腹も減らない近頃はウンコも出ない病院へ行っても駄目　老衰は病気じゃないんだと　もう行くのか　お昼のニュースにお父さんが出ていたの見なかったか　最初は中国で殺され今のテレビのニュースでは頭に鉢巻してナントカの反対相変わらず若い時と同じ我の頭のハエも追えないで世界的なことを考えているんだ正治は　お父さんとお母さんが仲が悪いのは婆ちゃんのせいだ　言ってない　そう聞こえた　あんたのお母さんの頭の中には婆ちゃんはいない自分の鏡を見ても写らない　心にないものは写らないんだよ

　またこの男が来た今度は何の用ですか　あんたの娘はさっき帰ったばかり　泥棒したこと反省して謝りに来た？　着物を返してくれるの　これを食えって　あんた誰　昼飯だ？　昼飯なの鏡だって食わないわたしも同じよだってウンコが出ないんだ体は空っぽ軽くなった世界の何処へでも飛んで行ける気がする自分が何処に居るのかも知っているよ元歩兵連隊連兵場近くの火薬庫跡の市営住宅　ああ　連兵場で思い出した　ああー　これは誰にも言えない　わたしにも秘密があるあんたにも言えないあんたはやっぱり中国人の泥棒だ私と一緒に中国へ行ってお屋敷の土塀の隅に隠した壷から日本国のお札を取って正治の借金をきれいにして下さいませ

（借金はそんなことでは消せない）

　何だ正治か　美也子がさっき来たんだ東京へ就職したんだと仏壇の引き出しの中からお金を取って餞別にやった唐橋さんから貰ったものがあった

（美也子が東京へ就職したのは去年のことだ）

　去年でなくて今のことだ先程のことだよ本当だよ　仏壇の引き出し開けてみろお金がない間違いない　何をそんな

に怒っている　だって食いたくないの　ウンコが出ないから

（食わないから出ないんだ！　くたばってしまえこの糞ったれ婆ばあー）

　ベッドから落ちた　正治の足の育ったことこんな細いあばら骨折れてしまう正治が上から睨んでわたしを恐がっているなんで怒るのよがたがた震えている涙を零している青い顔をしている正治が可哀相だわたしは大丈夫腰を蹴られたがあばら骨でなくて良かった怪我さえしなけりゃいい少しは悲しいふりをしないとわたしを殺すとあんた損よこんなことしなくともおまえに怒鳴られただけで死にたくなるのに　大丈夫だー　婆ちゃん死なないから

（うんこ出ないのは食わないからだ、食わなかったら死んでしまうぞ！　まーだ死ぬことねい）

　今度は死ぬなときたな　正治の首根っこに掴まった腕が太いうちの人の腕とそっくり床からベッドへ戻ったやはり此処がいい天窓も見えるし柱の鏡が心配して光ったそんなに顔を拭かなくて良いそれは涙じゃないのお茶が跳ねたのお茶をいつまでも枕元に置くからわたしはこのベットでしか生きられない顔を横にうちの人の写真の入った仏壇　側のテレビこれで充分　テレビに出たらいくら貰えたニュースさっきのニュース　中国へ行って来たんだべ正治も

（中国へ俺が行くはずがねい）

　わたしは行ける何処へでもわたしが作った時間さえあれば東京で一人暮らしをしている妹に会いに行く遺産を少し分けてくれる以前に約束した　妹が遺言で遺産を恵んで呉れる

（叔母さんがまだ元気なのにぼけた事を言うな、ぼけも薬のせいだ、薬を止めてしまうぞ）

　東京の妹に何回も手紙を書いて出したいつも妹のことを考えているから妹はいつもわたしの側にいる東京で生まれたわたしがここに居てちゃんと東京のことが分かるのよ先のことが分かるのよ妹がそろそろ死ぬ筈だ　なにか連絡があったのか

（いよいよ頭にきたな婆さん、馬鹿なことを言ってないで牛乳を温めたから早く飲め。糞づまりで死ねば妹より先に婆さんこの世から消えるぞ）

　わたしが死ぬのおまえが決めるんじゃない死へ向かっていても役に立つ人間は死なない妹は死ぬことになっているその時間が早く来るか遅く来るかわたしが早回りして早くした願うことは先にある強い気持ちを先に持ち続けどこまでもどこまでも死を先に送ってやるいつだって今　今　長く生きてこんな婆さんになったけどわたしは最初から婆さんじゃないずうっとこのまま婆さんでいれば死なない

　ほら　鏡もそうだと言った

（また鏡か……）

あの鏡はうちの人が買ったこの家に有る物はみんなそうだあの箪笥だって横顔で時々お話をする相談するこの豆腐屋をどうする豆腐作りの道具はまだ残っている豆絞りの機械もちゃんとしている　このまえ店の中を歩いたんだおしっこをしたついでに

（やたら店の辺りを歩くな物に蹴躓（けつまず）いたら危ねいべ！）

大きな声を出すな響く蹴られた腰が痛いのよ道具は死なないで役に立つのを待っている　あの腐った豆腐　いつまでああして機械の上に上げて置くんだ

（あの腐った豆腐にも意味がある、俺が豆腐屋だった証明よ。国産大豆で伝統豆腐を作りたい。大型冷蔵庫もしっかりしているしな）

豆屋に電話しろ国産大豆を注文　東京の妹から金が送られてくる

（東京の叔母さんにも借金があって塩を撒かれている。遺産だってしっかりした養女の娘に横滑りだ）

わたし達姉妹はお金持ちの家に生まれわたしだけが貧乏うちの人とおまえが貧乏にした正治怒るなうちの人もおまえも世間という人達に囲まれ貧乏にされたんだからうちの人だってあの戦争が終わる頃北海道の端へ勤労奉仕に行かされた突然こんな豆腐屋にも命令がきた行きたくないのにうちの人は　拙者は体格が良いからだ　うちの人は肩を張って行った長い間家を空けた自分勝手のあの人でさえ逆らえない世間という中に居るわたしもおまえも今の貧乏は世間のせいおまえ以外が世間なのにおまえも世間の一つだ特別ではいられない自分であって自分でない世間の中に居る他人でしかない世間は悪いことばかりじゃないじっと待っていればあの鏡みたいに目立たなく煩くなく催促もなくこちらの動きをじっと待っている　正治　じっと待ってろ妹の遺産

（もうしゃべるなってのに！　忘れろ。世の中は実力と体力だ。牛乳を残さず飲んでしまえ、もう少し体を起こして、口を大きく開けて、零すな、もったいない、財布に残った小銭で買ったんだぞ）

店が繁盛していた時は小銭なんか半日で笊に山のように溜まった世の中はその時々の顔でこの家にやって来る　ほら　またあの天窓から誰かが覗いているじっと下のこちらを見ている返事してやれ　あの顔は豆腐を買いに来たホテルの社長さんだ

（いよいよ駄目だなこりゃ。このおにぎりは夜の分だぞ。俺は仕事を探しに行く）

運転代行は首になったのか昼間の仕事に変わった方が良いおにぎりは嫁に握らせろセブンえれぷんばかり金持ちになる　正治　人間は覚悟かくごが大事かくごをすれば本当の自分が出てくる　出てくる　出てくる

（婆さんどうした、でる？　出る。牛乳を飲んだのが良かったんだ、立てない！　しかたねい婆ばぁだ）

腰を蹴っといてこのバカ息子　わたしの体は軽いから抱いて行け自分の体だと思って抱いて行けずうっと一緒で離れないこれまでもこれからもわたし達の運命はうちの人が中国に行った時からこうなる定めあそこが出発　この便所の戸は重い灯りが付かない正治の手が小窓を開ける外は晴れで眩しい腰が痛い跨がれない　出来ない　正治が便器の後ろに腰を下ろしわたしを抱え寝巻きを捲くり上げおまえが赤ん坊のときにわたしがやったようにお尻を突き出す便所の底から風が手を出して撫でた冷たく触ったのは正治の指だが後ろにも誰か居る　いない？　いるよ　いろんな人の手が繋がっている一番後ろには昔死んだわたしの母親が居るその後ろに皺くちゃ婆さんがいる　あら　わたしも婆さん　便所の底から来たのですかこの便所いつ汲んだ正治は外で用を足すから溜まらないのよね　あぁ　やっぱりここではウンコ出来ない下の方にほら人の頭五人以上いる

あっ　また一人増えた人の頭にはウンコ出来ない　分かったあの人達は便所汲み屋さんで中をお掃除している便所もわたしに腹を立てた　便所は有難い　有難い

（有難いは糞が出てから言え）

隠していることを喋りたくなった誰かが下で怒鳴っている　隠しているものを出さないと出るものも出ない　正治父ちゃんと正治は本当の親子だけどな　二歳の時に麻疹がもとで死んだあの子は　うちの父ちゃんの子でないの

（知っている。使用人だった武雄という男のことだべ、軍国主義が悪いんだ）

誰が正治に教えたあの男だうちの人の兄でこの市で始めて葬儀屋を開業したら自分が死んでそれでお仕舞い正治の伯父　武雄は近くの村から豆腐屋の見習いにわたしの家の店に来ていたうちの人が勤労奉仕の召集で北海道の端に行ってしまう武雄は住み込みの約束だったが遠慮して店の近くに寝床を定め朝四時に来て豆腐作り午後から小売店へ配達武雄は仕事に慣れていつもわたしと一緒体がぶつかる外は真っ暗朝の四時朝と昼は一緒のご飯暑い夏でも油揚げ肩を並べて油揚げ油が肩に跳ねても熱くない武雄の肩がちょっと触れただけで焼き火箸よ次の日わざと触って強く触ってわたしの家の風呂で武雄は暖まってその熱い体でわたしの寝床へ入ってきたよ夜が明けて朝のお日様は強かったよ次の日から一日一日が頭の中を火の玉みたいのがぐるぐる回り始めたら武雄が赤紙一枚でここの歩兵連隊へ入営した家族の面会日にわたし行ったわよ武雄の両親と一緒にあの伯父もわたしの亭主のような顔で付いて来た正治は五歳連兵場の広場で重箱を広げ武雄は兵隊姿でわたしの顔ばかりを見ていたわよわたしが握った油揚寿司を武雄が口に挿んだまま突っ立った馬に乗った将校に敬礼したよ　武雄の姿がずうっと消えない何十年も写真も有ったが燃やした戦

争が終わった半年後うちの人が帰って来た武雄は戦地には行かず挨拶にも来ず行方知らずうちの人が帰って来たのに嬉しくないわたし怖い女になったのよ次の年に生まれた赤ん坊が月の計算が合わないと言いふらした伯父葬儀屋を始めたあの男　武雄を触って分かった　自分が分かった　うちの人のことも分かった　あの日から豆腐屋が好きになったのよ　経験　経験が女を強くした　ほら　おしっこ

（おしっこが出たらもうすぐだ）

あの伯父がわたしのことをうちの人にいろいろ言ったうちの人が怒って喧嘩普通の喧嘩じゃない作ったばかりの豆腐を店中に撒き散らし油揚げ用の油をその上に撒いて火をつけようと睨んだ顔がわたしに向いた殺されるこの時交番のお巡りが来て治まったあのお巡りはこの近くに居る時々この家を覗いている時々あの天窓からじっと見ている

（大丈夫か婆さん、やはり出ないな……あの伯父がぽっくり逝って良かったんだ）

あの伯父はわたしが殺した病気では死なないわたしある時豆腐に殺してやると指で書いたのよ出来たばかりの豆腐に　そんなことで　出たー

（出た出た出たー、婆さん出たぞ！）

また誰か来た店の戸をガタガタ開けたそんなに揺すると戸が壊れる怒鳴ってもわたし返事できない誰が来ても返事するなと正治に言われている一人じゃない二人太い声とキンキン声豆腐作りをしていた仕事場まで入って来た何を調べる　警察官？　役所の人？　なんでそんなに正治のこと悪く言うのここの主人は正治だよ五年前までは豆腐作りをしていたのわたしがここで寝ていることを気が付かないから覗かないだろう　あっ　鏡に映った　背広を着ている刑事だな正治が金に困ってセブンえれぷんに強盗に入った金がない時は有る所から奪え中国の男達は皆そう言ってた

あんた達は誰？　市役所

「市の財産を管理する管財課」

「立ち退きの執行」

「市の高層住宅計画」

「公共の福祉」

「退去命令文書」

「予定」

「法律」

「市民の敵」

世間の人達はわたしをここの婆さんだって誰でも知っている誰もここを出てゆけなんて言わない世間の中で寝ているのがわたし二十年も家賃が滞納だって　正治が　正治は善い心を持っている若い時から貧乏人のためデモに行ったりビラを配ったり正治は金儲けが下手でも心は間違っていないわたしの息子良心を持った人間　市民の敵？　誰が？

助け合って生きれば敵はいない家賃は払う妹の遺産が送られてくる　すぐ死ぬ　わたしじゃない　妹　誰でも死に近づいている生まれた時から今すぐでないだけ他人の死が目に付くだけ誰でも死の年齢に達しているでもわたしは生きている自分を知っているから体は痩せ衰え豆腐屋の店も荒れ放題世間の人達はもうこの店を忘れているうちの人が死んでわたしが寝たきりになって息子の正治が豆腐屋商売を止めてこの家がどんどん悪くなったでもわたしは死ねないお役人には分からないだろう弱い者や病んだ者の心を法律は知らないわたしは生まれた時から今日のことが決められていた中国に居た五年だけが貴族であそこを逃げ帰って今がどん底の貧乏わたしは貧乏のまま死んでゆくでもまだ死ねない正治が頑張っている世間の事情とわたし達の事情は交換できない大きな覚悟を決めて生きているわたしはここで夜中に来る中国人の男とも闘っている昼間はテレビを見て中国のデモ隊を応援している正治も若い時はよく東京まで出掛けてデモへ行ったわたしは賛成しないが反対しない息子が政治好きなのは自分以外の人間を自分のこととしたからわたしはあなたであなたの眼の中に居るわたしの死もわたしだけのものじゃない世間の皆様の中にある　入院は医者に断られた　老衰は病気じゃないのだと　お役人の背中は大きいね

二人はいつの間にか居ないあの二人はわたしが一番死に近いと眼で確かめて行った他人の死は誰の眼にも見えて自分の死は見えない　年金　妹の遺産　可能性がわたしを死なせない死ぬことを先に延ばしているでも明日死ぬかもしれない気持ちがどっちに勝つか夜になるといつ死んでもいいと思うけど中国人の男が直ぐ来て忘れるでも葬式のことは考えておいたほうがいいな町内の集会所を使って区長さんにお願いして香典返しは少なくして市役所の祭壇を借りて大きな花輪はいらないでも豆屋さんは花輪をよこすあそこからはずいぶん豆を買ったうちの人の葬式の時はうちの人が町内会の会長を長いことやったから町内の人達大勢集会所の座布団が足りないうちの人のお陰で当選した市会議員が弔辞を読む正治が選挙の時応援した議員も来たので右と左に大物議員あの時の正治の嫁の態度には腹が立った自分の舅が死んだのに横を向いて膨れっ面線香の立て方も知らず手を合わせる前に鉦も叩かないあの時の火葬場は寒かったうちの人に最後の別れお棺の中の人は別人二度と開かない扉が閉まった　人生は一瞬　うちの人は死んだがわたしは生きている世間の人が次々と死んでもわたしは死なない安心だこれでいいんだうちの人もこれでいいんだわたしの死はこれで当分ない正治とこれから豆腐作りをしなくちゃ　あの頃は元気だった

また誰か来た　いつもわたしの家を見張っているあのお巡りか？　仕事場だけを見て帰ろうとしている正治は居な

いよ友達の船山君と隣町のサラ金へそこでは金を正治に貸してくれるんだと正治はこの市のサラ金業者には嫌われ何処も金を貸してくれなくなったんだっていよいよ正治も追い詰められたよ運転代行も首になって今はホテルの駐車場係りだけどこのホテルも駄目らしいな　あっ　鏡に写ってわたしを見ている奴はあの時のお巡りなんで黙ってわたしを見るお巡りの涙が粒粒と鏡の上を流れたわたしの家は大丈夫そのうち妹の遺産正治の買った宝くじどちらか当たる必ず当たる　可能性　わたしの寝ている姿を鏡が写してそう言っているお巡りさんこちらへ来てお茶でも飲みませんかお巡りさんの代わりに鏡がいやいやと揺れたそちらから見えるわたしは惨めねあの時も助けて下さった世間は冷たい世間が豆腐屋を潰した世間からは逃げられない　わたしがここで頑張っている限りここの豆腐屋は動かせない　だから大丈夫よ　ハハハハ　笑ったの可笑しくってこんな婆さんを世間は倒せないほうらお巡りも背中を見せて帰って行くあのお巡りもあちらへわたしを引き摺る積もりだったそうだそうだと鏡があいつの背中を写しているこんな愉快なの久しぶり医者の薬と同じ死にそうな人間を死なせないたいしたもんだ　ハハハハ　ハハ

テレビが付いている正治が一度帰って来て嫁のアパートへ行った一日に一度は嫁の所へ戻らないと夫婦でなくなるうちの人が死んでから嫁は一度もこの家に来たことがない来なくていい掃除でもされたら困る汚い汚いと言うこの家はわたしの寝ている所とテレビの有るここだけが片付いていれば良いテレビの中がわたしの家よ世界中何処へでも行く　ほら　中国のあの広場で若い男達がデモをやって叫んでいる正治も東京へ行ってデモをやった善い行いは東京も中国も同じ善い心は大勢の人達と繋がる口を大きく開けて呼び掛けたり呼び掛けられたりあんなに大勢の人が集まるんなら商いをすれば良い饅頭を油で揚げる夏は氷水が良い

あれ　中国の女がもうやっているテレビに映っている大勢の人達が同じ歌を唄っている　あっ　あの男だけが一人で怒鳴っている　あの男だ！　デモ隊に手を振っているあの男だ中国の地図を広げて叫んでいる　俺は此処で生まれた泥棒をもうやめたい俺をどうにかしてくれ！　この国を逃げ出せない　自分を造ったものを造り替えるのが早道！

広場の真ん中に大きな人形が建ってますます賑やか正治に似た中国人がこの人形の小さなものを売っている手に持った笊に小銭がみるみる溜まるわたしの豆腐屋も子供相手にアイスや駄菓子が飛ぶように売れて銀行員が毎日集金に来た　あの男は正治だぞー　いつ中国へ行った中国で生まれた正治は可哀相だ中国まで行って出稼ぎだあれは何処の国へ行っても借金がなくならない　広場へバスが一台そろりと入って来た中国のお偉いさんがマイクを持って乗り込んでバスの行き先で運転手と意見が合わないお偉いさんは

涙を流して手を合わせてなみあみだぶつと唱え終えたお偉いさんはすぐバスから飛び降り高級車に乗り換え走って大門はぴたりと閉まり門は地下トンネルに続いてお偉いさんが戻ったら同じお偉いさんなのに眉が太くなり別人になった蛇腹のトンネルへ日本のテレビ局が尻尾の方へライトを向ける　居る居る　鉄砲を磨いている中国兵その前に立つ中国のお偉いさんが兵隊達に静かに言った　人生は取引だ今は引き合わなくとも取引をすれば後で生きてくる　あの広場はうちの人と中国に居た時見物に行ったことがある広くて　長閑で　平和ね　わたしが言ったらうちの人がいつかこの広場でも鉄砲の撃ち合いがあるさと言った　本当にそうなった

（中国のニュース特集を見るのは止めろ、頭が混同してんだから）

正治と船山君が居る正治は中国に居た筈なのに此処に居る同じような人間は何処にでも居るうちの人が中国で言ったことが今テレビに現れている予定された運命が始まる運が良かったり悪かったり正治は中国に居ても日本に居ても不運続きだけど覚悟を決めたのんき顔新しいジャンパーを着てポケットから金を出した　あら　船山君へやる

（これは今回の利息分、安いもんだ自動車も長いこと借りていることだし）

（金を貸してくれる店が隣町だけど一軒増えたな）

（黙っていたけど、市内でもまた貸してくれることになった）

（えぇ？　何処も貸してくれないというから隣町まで行ったのに）

（市内のサラ金は昨日全部返してきた。へへへ、札束をぐいっと懐へ入れてよ、札束だよ）

（本当かい、宝くじが当たった？）

（もっと確立のあるやつ）

（まさか、これ？）

（泥棒するくらいなら人間を止めるさ。これで暫くはサラ金から抜け出たと思ったんだけどさ）

（本当にどうしたその金、拾った？）

（まぁそうだな、拾った宝くじってとこかな。絶望の時ほどいろんな関係で世界に広がる。口座に金が入った時は大袈裟に言えば神を感じたよ）

（銀行の口座に入ったってどういうこと）

（シッ、婆さんに聞こえる。叔母さんの遺産がとうとう入った。叔母さんの依頼した弁護士から電話があった。電話代滞納で暫く通じていなかったけど、少し金を入れ復活した最初のベルさ。婆さんはぐっすり眠っていた）

（そんな幸運は婆さんにすぐ話したら）

（だめ。さっきあんたに返した金ですっからかん、一万円の札束三つ）

（三百万が、へえー。方々のサラ金へ返済したら失くなったんだ。これも絶望的）
（絶望者は新しい絶望を招く、死にたくなるような絶望さ）
（死ぬことも出来ない絶望もあるよ。君の婆さんのように）
（うちの婆さんは妄想が頭を占めているからその分助かっているんだ）
（君に貸している車は今月車検なんだ、どうする）
（経費は出しておいて。婆さんの年金が来月に入る）
（大事な婆さんだな、毎日何を考えて寝ているものやら）
（想像。昔のこととテレビのことがごっちゃ）
（想像の世界で自分をなくしているのか。その方が楽だ）
（たった一つの俺の金づる。俺は無年金者だ。政府不信で、どうせ何に使われるか分からないと掛け金をしなかった）
（だから昔から現実的に生きろと言っただろう。現実は婆さんの福祉年金で助かっているんだから）
正治と船山君はあそこでわたしの品定めをして二人とも明るく喋っている　二人は仲良く何処かへ出て行った　絶望では死なない　絶望なんか何度もした　絶望の度に世間の有様が見える人様の心も見える体は痩せ細って絶望に浸っていても死なない東京の妹もまだ死なないわたしと昨日ここで話したばかりわたしが妹になって妹がわたしになった妹の遺産は来年になる　今あの二人がこの家から世間へ出て行ったがすぐわたしのことは忘れる正治だけは親子だから時々思い出す世間は関係あるのに関係なしこの家だけが世間になった鏡と話したり箪笥が友達になったり助けたり助けられたりあの中国人もいつも正治になる正治は豆腐屋なのに泥棒になることもある

男が背中を向け蹲り肩を震わせ泣いている　なんだ　正治　声を上げて泣く正治はいつもと違うわたしを抱き上げる太い腕わたしの体がすっかり軽くなったのが自分でも分かる正治が何度も溜息を付いて仏壇を眺めた　わたしを抱き上げた弾みで湯呑みが倒れ零れたお茶がベッドを汚した正治は鼻汁をぐうぐうっと啜るともう泣かない　わたしを抱えたまま箪笥の前を通った　ベッドにはもう戻れない店の出入り口まで来た　近くにある役立たずの大型冷蔵庫が懐かしい　通りに面した店のガラス戸は開いていた　空気が旨い　外で船山君から借りている正治の車のドアも手を広げて待っていた　正治はわたしを助手席に優しく置いた
（待ってろよ）
一旦家に戻った正治は店先のカーテンを引き泥跳ねのあるガラス戸をガタピシッと閉めた　病院へ行くのか　返事なしの丸い背中が運転席に座った　車の後部座席は新聞と

雑誌重なり斜め崩れ捲れ弁当の空箱に食い残しが黴大きな紙袋に背広の上着座席の下に長靴空き缶ごろごろ五年前の豆腐の配達伝票そのまま正治宛の郵便物多数　歩兵連隊弾薬庫跡神田豆腐店を外から観た　赤錆びた屋根垂れ下がりの雨樋
（ハアー、これで終わりだー）
何処へ　何処へ　運転席の正治は返事なし車が動いて町内が消えて行く　わたしの歴史も離れて行く　わたしが居なければうちの人も仏壇も箪笥も鏡も中国人も離れてゆく
運転しているのは本当に正治？　病院へ行くのか　わたしそんなに悪いのか　老衰は病気じゃないんだと　この道は病院へ行く道と違う　町はどんどん後ろへ走って通り過ぎて行く　ここは何町？　建物看板電信柱は空に向かって斜めわたしを見下ろしあっという間に消えた　人間に役立つものばかり　役立たずのわたしだけが喋っている
（ぶつぶつ言うのはやめろ）
やはり正治だ　変なことを考えている　わたしには分かる　頭がはっきり　家を離れてはっきり　この車は何処へ行けば止まる　正治は運転だから喋らない　喋らない車が走っている　なにがあったんだ正治　車の外の景色が大きくなった　おまえと二人なら死んでもいいよ　分かった
此処が何処だか分かった　豆播器が壊れて年中無休の豆腐屋が一日の休み親子三人が此処へ来た　正治が小学六年生の時この湖水に来た　うちの人と正治が遠くまで泳ぎ二人とも溺れ死ぬかと思った　わたしは浜で泳ぐ二人を見続けていた　少しの心配は心地良い　幸せだった　湖の遠い先の山が空と一つ　湖は人の顔でわたし達を観ている　湖の上を靡く雲と遠くの山並みも人の顔で風を波を動かす　優しい湖は光ってわたしの友達の鏡と同じ　前から友達ずうっと昔からわたしと関係があったのにじっと耐えて隠れていた　でも　わたしが此処へ来るのを待っていた　有り難い　涙が出る
（少しの隙間があっても駄目。婆さん、すまない。これ飲め。すぐ眠くなる……もう始まったぞ）
正治　おまえはまだ自分のことが分かっていない　わたしは湖と友達だからこの場所が安心　湖　山　有難い　ありがたいありがたい　有難いものがわたしを包んでいる
豆腐屋のおかみで良かった　苦労で終わって良かった　此処へ来て良かった　正治がわたしを此処へ連れてきてくれて良かった　町を通って来て良かった　坂道を車に乗って来て良かった　あっ　家の鏡が二度光った　もどれ　もどれ

細谷　清

ほそや　きよし

1938年　福島県会津若松市生まれ69歳
福島県立会津中央高等学校通信制課程卒
家業の会津漆器塗師を45年間従事
会津ペンクラブ同人誌「盆地」へ10年間に亘り、小説、童話、戯曲を発表
昭和61年福島県文学賞小説の部奨励賞
平成6年コスモス文学「戯曲シナリオ部門」奨励賞
出版　小説集「会津三十三観音巡り」新風舎
童話集「箱舟」歴史春秋社

受賞の言葉

細谷　清

ハイデッガー「存在と時間」を読み触発されて書いた作品です。未投稿未発表のまま数年間懐へ蔵収していた。本年に入り文芸思潮の存在を知りその主旨に共鳴。

三次通過の知らせを受けたが、この上はなしと諦めていた。受賞の通知を受け取った前日にも、他の文学賞へ他作品で応募「どうせ、ダメもとだ」応募作品を抱え郵便局へ赴く時の気分が格別だ。この行為を何十回もしてきた。

我が生き様を振り返れば、もろもろの希いの叶わぬ人生跡だ。青年時代、下界は天気晴朗なれど己の心象は暗黒の日々。生きる支えが読書。

取引先の倒産の煽りを食った顛末を、思いつくまま書いた作品が処女作だが、すでに四十歳。その後地元同人誌へ、一年に一作のペースで、小説、童話、戯曲を発表、それを焼き回しで投稿を繰り返していた。

何を書けばよいか、どう書けばよいか、少しばかり解かりかけた昨今だが、とたんに筆進まずワープロへ電源を入れる気力もなし。創作の二文字を我が人生から葬ろうとした矢先の今回の受賞は有り難い、文芸思潮の存在は誠に有り難い。

皰を刳る

木村令胡

息のつまるような能舞台でございました。

白眼の部分に金泥を塗った泥眼の面は、実は嫉妬に狂った源氏の愛人、六条御息所の生霊なのでございます。それが綿々と恨みを述べ、葵上を扇で打ち据え、やがては連れ去ろうとさえするのでございます。

この物の怪に悩み病臥している葵上は、正先に置かれた縫箔の小袖によって象徴されているのでございますが、そのまわりをのたうつような泥眼の面の所作事を観ておりますと、怨霊に責め苛まれて病む葵の上よりも、むしろ怨霊と化してまでかくも狂い乱れる女の心根が哀れで、息苦しいほどに胸に込み上げてくるものがございました。

舞台にはやがて行者が現れ、生霊と争うこの急場で面は般若に変ずるのでございます。

――仄暗い暗黒をたたえた裂けた口、悲哀にみひらかれたまま戻ることの無い眼瞼、の鬼形をあらわに舞台に現れたとき、そのおぞましさに肌があわだつ想いもいたしましたが、その面がふと傾いだ刹那、曇った哀しみがよぎり、ふぅーっ、と諦観にも辿り着けない身をよじる絶望の深い吐息の気配を濃く漂わして、怨霊と化してもまだ揺れ動く女心の懊悩を堪え難いほど巧妙に、擦り寄らんがばかりに訴えかけてくるのでございます。

あれ!?　これは遠い昔、窃視した眼が魅かされ、取り籠

まれた、――噫、あの竅……？　それがいま、波のように押しては返し激しくうねりながら、遮って塞いだこの掌を邪険に払いのけ、あろうことか有象無象までも引き連れて現れ出たのでございます。

●●

昭和十九年も夏を過ぎると、第二次世界大戦の戦局はいよいよ日本にも濃い影を落とし、都会に居住していた人は、戦局を読むことに長けた人たちから何らかの伝を頼って中心を外れた地方に向かい、やがて強制疎開へと怒涛の勢いで動き出すことになるのです。

私の生家の裏木戸の近くに、つい先頃まで祖父母が使っていた蔵座敷が家具調度もそっくりそのままに残されていたのですが、その座敷の住人だけをすげ替えたかに、都会から来た三十歳前後かとおぼしき夫婦者が住み着いていたのです。

晩秋のまだ明けやらぬ早朝、この時刻に目覚める習慣などのない私が起きだしたことも不思議なら、廊下伝いの厠を素通りしてわざわざ外の便所に向かった、あの明け方の振る舞いも後になって考えれば腑に落ちないことです。だから、それから起こったことの全てを、幼子が寝惚けて見た痴夢だったことにしてしまえるのならどんなによかったでしょう。

そこは外回りの仕事をする手伝いの者が使う便所ですから、暗くなって使用する者はなく、したがって中に電灯の設備はないのでした。

軋む板戸を閉めた途端に、蜘蛛の巣のように暗闇が顔面にへばり付いてきたので、躰を縮めて目が慣れるのをじっと待ちました。やがて板戸の節穴から青白い明け方の光線が、巨大な氷柱を突き立てる鋭さで射し込んできたのです。

そのとき、裏木戸の開く気配がしました。そこの戸は内側からの差し込み棒が錠前の役目をしているのです。――こんな時間に誰が出て行くのだろうかと、私は節穴に目をあてがいました。ところが人影は外から入って来たのです。――差し込み棒は外されていた⁉　いつから⁉　目も口もありったけ開いたまま私は硬直し、飛び出しそうになる声を懸命に呑み込んで、おもわず便所の戸を力まかせに押さえました。板戸が鋭く軋みました。

人影はずり下がった帯の端を地面に引き摺り、ずるずるに着くずした着物の襟元からは、血を滲ませた幾筋もの引っ掻き傷が覗いていました。目を移すと、爆発したかに散らばった髪の間から見え隠れする顔も首も、手も腕もべっとりと血糊に染まった惨たらしさ……。

頭の重さで躰を引き摺って来たのではないかと思うほど、酷く前のめりの格好でよろよろと井戸端に近付くと、

木枠に両腕を突っ張り全身を預けて荒い息を吐き、やがて釣瓶を荒々しく投げ込んで綱を手繰り始めたのです。

息も絶え絶えに、汲み上げた釣瓶にかぶさるようにして水を飲むその様子のおぞましさ……。更に、片袖らしきものを水に浸して顔にあてがったとき、侵入者は獣のような呻き声をあげて沈むように蹲りました。釣瓶が大きな音をたてて井戸の中に落ちました。

噫、そのとき蹲った女が上目遣いにこちらを見たのです。目が合った……‼　私は思わず肩をすぼめ、夢中で目を瞑りました。なんと、その女は蔵座敷の住人でした。私は総毛立つ躰をわななかせ、力の限り板戸にしがみ付きながら、再び恐る恐る外を窺ったのです。

すると、見る影もなく腫れて歪んだ顔をまっすぐこちらに向けたその女は、竅の中から穴刳るような陰険な目つきで便所の中を覗き込んだのです‼　いえ、実際には井戸端に折り畳んだようにしゃがみ込んだままでした。――外から覗き込んでも中は暗闇でなにも見えるはずなどないのに、それでもその女の刳るような眼遣いは確かに私を見据えていたのです。顔面の流血に貼り付いた髪の毛の隙間から、竅の中を窺う視線の狂気はまさに棘でした。慌ててその竅を塞いだこの掌までも刺し貫いて潜り込んでしまった棘は、無法にも私の生涯をそこに磔てしまったのです。私が、どんな悪いことをしたと言うのでしょうか。

●●

こうして目を瞑りますと、あのときの線香の煙がたゆたいながらわたくしの躰にまとい付いてきて、悪意を潜めたもののように両の肩にずしりと積もっていくのでございます。

わが夫が死んでいった女のために、女房の眼の前でこれみよがしに長火鉢に焚いて並べてみせる線香なのでございます。なぜに長火鉢などに？　と奇異にお思いですか。お厨子と香炉が直ぐ際に在るのに、と。でも、これはわたくしの家の先祖から受け継いでまいったものでございます。親も家も捨て、取り返しのつかない親不孝をしてしまった娘ではございますが、先年、両親ともに亡くなっておりましたことを人づてに聞き知り、二親の位牌と共に菩提寺より預かってきたものでございます。――いかに仏の事とはいえ、女房のわたくしを裏切って通じたおんなの供養に、まさか、まさかこの香炉は使えますまい。

ここに戻りましてからの夫はぽつねんとそこに座り続けて灰を掻き、熨を集め、線香を焚きはじめてから、ずっとこの有様でございます。――あれから、どれほどの時が経っておりますのやら。夫と向き合うように座ったまま深々と凍えていく心と、情感というものを削ぎ落として小さく

畳んだように座った木偶人形のようなこの躰で、わたくしは鋭く突き刺さってくるその煙と匂いに必死に立ち向かっていたのでございました。

夫を盗まれて嫉妬に狂い、二人への憎悪に身を灼いて悶えたわたくしが、とんだどんでん返しでこのような報復を受ける身になろうとは……。まこと人の世の先行きの朧に、潜めた企みの底知れなさに、いま曝され、ねじ伏せられている思いがしたものでございます。

果てしもなく香を焚き続ける夫と、壊れた時計の秒針のように同じところに座り続けるわたくしのこの姿を覗いていたお子が、それからのちも折に触れ『幼い日に、まるで手繰られるように見てはいけないものを覗いてしまった私は、訳もわからずその罪科を着せられてしまったのです。——あのとき以来、お二人への懸念から解き放たれることはありませんでしたが、よもや、またこうして真正面から向き合う縁が巡りこようとは……。あなたは老いさらばえてもこの一期を終われずに、なでおろされる機会を逸した瞼をみひらいたまま彷徨い続ける、という罰から解かれることはなかったのですね』と、囁きかけてくるのでございます。——はい、お察しの通り便所の節穴から覗いていた、あの童でございますよ。それに、まるでなにかにとり憑かれたように蔵座敷近くを徘徊し、障子戸のあちこちに舐めた指で窺を作ったのもあの童でございました。——覗かれているのも、どこまでも纏いついてくる尋常でない執着も気配で存じておりましたよ。あの頃も、そして今も。

壊れた己を引き摺ってでも、こうして生き長らえるわたくしがしぶといのか……、潔く死んでみせて、切っても掃っても絡み付いてくる蔦かずらのような女の執念がしぶといのか……。今となってみますれば愛であれ、憎しみであれ、女が捨て身で命を賭けましたときの変化の底知れなさを思い知った、と身を震わせ、溜め息を吐くばかりでございます。

能面の中に異形面というものがあり、それには天狗や鬼の面があたるわけでございます。その異形面と女とが結合して産まれたのが般若や山姥、そして鬼女だとされております。してみますれば、天狗や鬼を潜ませた男と睦み合ってしまった女たちが、地獄の苦しみの果てに醜いものを産み育てることになるのでもございましょうか。と申しましても、傍目で人の心の内が覗けるものではございません。いえ、それより先にご自分の心の内さえ皆目見えていないのが真実でございましょう？　見えていたのは、思い込みか願望の幻かと……。ましてや男と女のことに至っては、あれこそ曖昧模糊の最たる世界に違いなく、確かなもの、褪せないもののあろうはずもなく、唯一あったのは極限での死という絶対。——その瞬時刹那で止まった愛、の永遠

……。けれど、これも生き残った者の得手勝手な解釈と言われれば、それもまた、確たる証拠など示せるはずなどないのでございます。

一人娘のわたくしには早くから親の決めた許婚がおり、それまではそのようなものかと、己の先行きのことすべてを親まかせでぼんやりと生きてまいったのでございます。その方のご様子も、そしてなによりわたくしの親の眼鏡に適ったお方だけのことはあって、老舗ののれんを守るのに申し分のないご器量をそなえたお方のようでございました。

なのに、わたくしはあの人と出会ってしまったのでございます。——あの刹那、躰の芯を貫いた得体の知れない感覚を、今でも鮮明に覚えております。手垢の付いた言葉を口にするのには些か抵抗もございますけれど、でもあれはやはり、出会い頭に運命のようなものを感じてしまった、としか他に言葉の選びようがございません。——わたくしを見つめたあの眼の輝き、立往生した視線と唐突な沈黙……。今も狂おしいほどありありと、この眼の奥に焼き付いてございます。人様が時に口になさる深いえにし、他生の縁、などというのは、あのように射竦められる感覚。急場で運命の流れが変わるのを感受する説明のつかない胸騒ぎ。——のようなもののことではございますまいか。

べつべつに居てさえも一緒だった、あの頃の充足感……。今となりますれば、わたくしのいちばん輝いて美しかった時代であった、と近ごろ頓に思い出すことが多くなりました。

振り返りますれば、あまりにも怖いもの知らずでございました。わたくしは親を裏切り、あの人は女房子供を打ち捨てて、己らの行為の残酷も破廉恥も後先のことも巧みに脇に追いやって、恍惚の夢の続きの中で駆け落ちをしてしまったのでございますから。それでもあの十三年は、わたくしが命の限りを尽くしてあの人を愛し、信じた歳月でございました。

その夫は今、よその女に心を奪われ、べつな夢の中に紛れ込んで夢を追っているのでございます。男と女のこのすれ違いは、どのような弾みで生じるのでございましょうか。すべてを不変と思い込み、まるごとのめりこんで欺かれたときの平衡感覚のこの脆さ……。

このときはまだ、十三年前に犯した自分の罪を棚上げにして、自分がこうむった裏切りへの怨みつらみにまさる嘆きなどこの世にあろうものか、と思っていたのでございます。

あのとき、あの人と出会うことさえなければ、あのまま親の願い通りに流れるべきところを流れるごく平穏な日常

を、そこそこに生きていけたのかもしれません。——けれど、心の片隅に、（限りあるこの一期を、親の言うが儘に生きるだけでいいのか）と、なにかを待つ想いが生じてから、その未熟な危うさが無意識に罠を仕掛け、結局のところ嵌めたのか、嵌まったのか……。曳き合うというのは、こういうことなのではありますまいか。けれどやはり、あのとき芽生えたものは紛れもなく恋心でございました。おや、首を傾げられましたか……、たしかに恋というものは思い込みや悪戯心から始まることもあるやに聞いてはおりましたけれど、それが育つのは、きっとこころの生命力なのでございますよ。

つまり前進するために無意識に辻褄を合わせ続ける、自己弁護の処方のようなもの？　——でも、辻褄を合わせている本人が合わせていることを忘れ、いつか過ぎてしまうところが哀しくもおかしゅうございますよね。同時に空恐ろしくもございます。合わせているうち、やがてそこに籠絡され、しかも流れが変わっているのに気づけぬ怖さでございます。

あの輝いていたわたくしの十三年が、平穏を覆して、あるとき一気に地獄へ向かいますのは、わたくしどもそれぞれの心の中に棲みついてでもおりました鬼の仕業なのではありますまいか。この頃は頓に、あれは、あの異形面の心を潜めたお人と異形面の血を交えて業を背負った者が、無意識に招きあって符合した結果なのであろうかと、そのようなことに思いが至るばかりでございます。

鬼は隠の訛りとか申すようでございます。だから姿を現さないのでございましょう。わたくしどもは、己らの奥深くに鬼が棲みついていることに気づけなかっただけのことかと……。何事もなければ穏やかに、安らかに齢を重ねてもゆけましたろうに。心を乱し、それを治めきれずに地獄への道を辿ることになりましたのも、隠れていた鬼の仕業なのかと考えますればあまりに口惜しく、やり切れぬ思いで地団駄を踏むのでございます。

結局、わたくしの行き着きました地獄とは、憎しみの果ての自己破滅だったのでございます。呪って呪われて醜く変貌し、なおもあがき続けること。——あのときのわたくしは、燃え上がることに無理に蓋をした埋み火のようなものでしたろうか。唯々くすぶり続けてときを待ち、踏みにじられれば地を這いずってでも生き長らえ、ときに鬼火のような吐息を吐き火種を増やしながら、じっと眼を据えて執念深く人を恨み続けたのでございます。

夫は、あのときを境に自らの声を断ちました。言い訳もなく、咎める言葉の一つも発せずに、唯、かたくなに押し黙って想いをそこに集め、刺すような眼差し、うっすらと軽蔑を含んだ斜めの視線、それをもって報復に出たのでございます。もっと遣り切れないのは、捕らえどころのない

あまりに静まり返ったあの存在自体でございました。

あのおんなは自ら亡ぶとみせて、わたくしを物狂いの檻に嵌め込み、あとは悠々と夫に寄り添ってきたのでございます。——もしかしましたら、夫がものを言わぬわけは、あのおんなが夫の背中にぴたりと寄り添い、背後から夫の口を塞いでいる所為ではありますまいか……？　夫の、わたくしに向ける視線のあの冷酷な鋭さは、あのおんなのわたくしへの陰謀が絡み合って向かってくる所為なのでございますよ、きっと。

結局、狼狽えて生きて己を見失ったわたくしがこの世の地獄に嵌まり込み、その窺の中で更に穴刳り、果てに行き着いた狂態の愚かしさ浅ましさを恥じて今更蓋をしてみましても、あの一部始終を覗いていた童女に宿った記憶までは塞ぎようもないことでございます。

夫の不誠実な匂いに気づきましてからも、しばらくはじとっと己の中に閉じこもり続けていたのでございました。けれど、抑え込んでおりました吐息が行き場をなくしてひとつ零れ落ちましたとき、それまでようやく体裁を保っておりましたこの外皮が、焔にでも炙られたかに、ずるりと剥け落ちたのでございます。

それが、あの夜の出来事なのでございました。

おんなの許へ出向いていく夫の跡をつけ始めましたとき、わたくしは己の空き殻のような肉体の奇妙な感覚に気づきました。がらんどうな外皮だけになって、夫に影のようにへばりつき、夜更けの道を、帰りの目印を心にとどめながら行くのでございます。

やがて、見知らぬお宅の門扉に設えられたくぐり戸の中に夫の姿が消え去りますと、瞬時、このがらんどうの外皮は逡巡したのでございます。けれど、戸惑いはほんの刹那のことでございました。後を追うように屋敷に近付くと、厳重に閉ざされた雨戸が立ちはだかりました。けれどすぐに、戸袋際の戸の一枚がぎくしゃくしているのが眼につきました。浮かして押すと、戸は音もたてずに滑りました。わたくしは廊下に上がり込むと、迷うことなく奥へ向かったのでございます。大層立派な、広大なお屋敷のようでございました。それにしましても、初めて入った屋敷内をどうしてこうも自在に動き回れますのか……、あれはまるで操られ、手繰られている感覚なのでございました。

階段の上り口で不意に、この屋敷の使用人でもありましょうか、背を丸くした老婆と出くわしてしまったのでございます。老婆はへたへたとくずおれるようにへたり込みました。互いに初対面のはずでございますのに、老婆は下から掬い上げるような眼でわたくしを窺ってからしばらくの後、まるで毒でも飲み下すかに切なげな様子で震える指先を上に向けたのでございます。わたくしが何者なのか、なぜここに居るのか、年輪のように深く刻まれた皺の中の細

い眼が、その年輪ゆえにすべてを悟ったのでもございましたろうか。

のけ反りそうな急勾配の階段でございました。が、私の躰はまるでのっぺらぼうな板の上を滑るように、得体の知れぬなにかに引っ張り上げられて行ったのでございます。

薄明かりが幽かに漏れる障子戸に手をかけましたそのとき、なにを感じてか殆んど同時に中の灯りが消えました。勝手を知らない暗闇の中で、どうしてわたくしがまっすぐにあのおんなに飛び掛ることができましたものか、いえ、むしゃぶりついてきたのはあのおんなが先でしたろうか……。噫、――わかりません。爪を立ててかきむしって毟られ、押し倒したはずが倒され、髪を掴んで引き摺り引き摺られ、叩かれれば叩き返す、の無法の限りを尽くしながら、その間中どちらも声を立てることはなかったのでございます。もし境目というものが在るとしたら、灯りが消されたあの瞬間がそれでしたろうか……、無明の深遠に二人のおんなが四つに組んだまま真っ逆さまに落ちて行った、あのときでございます。

あれからどれほどの時が経ち、どこをどのように逃れてここにいるのか、なに一つ覚えておりませんのに両の手には己が下駄をぶら下げ、ずしりと重さの増したこの躰をようやく引き摺るようにして、まだ明けやらぬ晩秋の濃い霧の中で我に返ったのでございます。

着物の片袖が力尽くで引きちぎられた跡を無残に身頃にとどめ、腰紐を外れた前身頃はしどけなくひろがり、ずり下がって螺旋状に腰の辺りを廻って地を這う帯ごと躰を引き摺る己の姿に、この覚醒の残酷を思ったものでございました。

昨夜から差し込み棒を外したままの裏木戸をくぐって井戸端まで漸く辿り着き、釣瓶を手繰って水を含んだ途端に脳天をえぐった鋭い痛み……。ならば、と奪い取って夢中で握り締めてきた片袖を水に浸し顔面に宛がうと、水は焼き鏝の熱さで傷口を責めてまいりました。この痛みが鏡ということか、と己が人相の惨たらしさを察し、思わず洩らしたあの呻き声は、傷の痛みより悔やんでも悔やみきれない己を蔑む吐瀉だったのかもしれません。

――便所の板戸が歯軋りのように軋んだのは、そのときでございました。

噫、誰かいる……。この醜態の有りのままを、本人よりずっと冷静に観察している者が、すぐそこに隠れている……。――だれ？　覗いているのは誰だ!?

両膝を抱え込んで蹲ったまま舐めるように地面に眼を這わすと、そこに小さな下駄の歯の跡が便所へと向かっていたのでございます!!　その板戸を睨めつけ、――ほおら、みぃーつけた!!　この竅……。中から何が見える？　化け物かい？　鬼おんなかい？　ククッ、と自嘲の高笑いのはずが肩をゆすって身を捩って、――あれはまさしく慟哭でございました。竅の中のあの眼への羞恥と怒気が入り混じり、心繕えぬ身悶えの果ての……。

艶やかな黒髪を肩までのばしたおかっぱ頭の、硝子ケースから抜け出してきた人形のような童女が友禅の振袖の袂をすくって胸元に抱え、小首を傾げ、小さな白足袋の爪先を交互に後ろに擦って科よく踊って見せた、あの夜のこころづくしの歓迎の宴……。あれは、わたくしども夫婦がこの地に着いた夜のことでございました。

この家の一人娘は旅回りの芝居小屋で踊りに魅入られ、以来、母親に付き添われて、汽車で隣町まで日本舞踊の稽古に通っているのだとか。たしか、あの夜の踊りは『羽根の禿』でございましたが、素封家の娘の気まぐれをはるかに超えた筋の良さに加え、大人たちの心を奪わないではおかない淫らな美しさを感じ取ったのはわたくしだけでしたろうか。

日頃の、水溜りを避けるしぐさや傘を傾げるしぐさに人をドキリとさせ、思わず振り返らせるあの童女のえも言われぬ色香は、あどけなさの陰に見え隠れするしたたかさの光と影が醸し出すもの、それが妙に心をざわつかせ気がつくと常にその姿を確かめるように探していたものでございます。眼が合うと人懐こい笑顔で答える童女につられて頬笑みながらも、我知らず硬直する頬をおさえて思わず出る溜め息をどれだけ嚥み込みましたことか。――ほおらやはり、こういう生臭いところを嗅ぎだすのか引き込まれるのか、視てはいけないものを拾ってでも視てしまう困った触角を持って生まれてきた童……。噫、むごい!!

わたくしは這いずり寄って便所の板戸の竅に掌をぴたりと宛がい、物言わず塞いだのでございました。

そのときわたくしは、板戸に宛がった己が手の指に絡みついている幾筋もの髪の毛と、その爪のすべてに食い込んでいる血痕に、はじめて気づいたのでございます。その汚れた手を朝もやの中に惚けたようにかざし、絡みもつれ合った相手の姿かたちに思いをめぐらしてみるのですが、つい今しがたのことなのにまるで像が結べないのでございます。

それにしましても、おんなが争い乱れているときに夫は部屋のどの辺りにいてなにをしておりましたものか……。止めに入る声の一つも、割って入った感触の覚えもなく、どう心を凝らしましてもあの場に夫の存在は交わってこないのでございます。――おんなが二人して男を阿呆にしてしまいましたのか。と、しましたら、それぞれの醜さの極みを隠した誰かの咄嗟の機転（？）あのときの暗転の労に感謝せねばならないのかもしれません。

なんとなく耳にしていたことではありましたが、極限まで登り詰めた妬みや怒り、または恐怖に直面したとき、人は己の身の上に何か途方もない超常現象のようなものが起きているらしいことを察するのではありますまいか。けれど、そんな体験を引き寄せてしまった者は決してもとの日常の中には戻れますまい。――おそらく、わたくしはあの時に一生の残り分を賭け捨ててしまったのでございます。眼を塞ぎ、耳を塞いでも押し寄せてくる過剰な情報、つまり異常な知覚能力の罠……。そこに嵌まったわたくしは、人の神経が持ち堪えられる限界を疾うに飛び越えてしまっていたのでございます。

そしてまた夫が家をあけます夜、もう決して愚かなことを繰り返すまい、と堅く己を戒めて夜具を噛む独り寝の暗がりの中に、夜更けの道を行く夫の後姿がありありと浮かび上がってくるのでございます。――いつの頃からでしたろう、わたくしが夫の背中しか見ていなかったことに気づきましたのは。もう再び二人が向き合う日などはまいりますまい。観念しておりながら、また今宵も夫の背中を一心に追う己の心が空恐ろしゅうございます。

実は、わたくしども夫婦がこの土地にまいりましたのは、戦禍を逃れるためではなかったのでございます。肺を病んでいた夫は赤紙からは逃れておりましたが、特高の眼からは逃げおおせなかったのでございます。かなり早い時期から眼をつけられながらも、もの書きの端くれを生きてまいりましたが、ついに連行され投獄されてしまったのでございます。

やがて夫は出てまいりました。が、そのときはすでに政治的転向を終えていたのでございます。中でのことを伏せられても、爪の全てを剥ぎとられた指や、自力での歩行も儘ならない躰の傷を見れば、特高的手段・その拷問の手段は容易に想像がつこうというもの。

娑婆もまた夫には地獄の続きでございました。連行された何人ものお仲間はあの中で果てられ、お骨で戻られていたのでございます。夫は、転向して生き長らえたことへの自虐からでございましょう、日ごとに荒んで、助けようにも手の出しようもない有様でございました。それ故に、わたくしは伝(つて)を頼ってこの土地への逃亡を決行したのでございます。

二人の道行きは、これが二度目でございます。最初はそれぞれの家のしがらみから逃れ、この度は夫をお仲間の眼から外すために……。でも、今となりますればこの道行きは一体何であったのでございましょうか。いえ、最初の逃亡からを問うてみたいのでございます。

一瞬乱れた想念に、夫を尾行していた道筋が閉ざされました。その姿を見失い、想いが引き返してくると、わたくしは何故か安堵して冷たい寝床の中で眼を瞑るのでございます。

けれど、日ごとに険しく変貌していく己を省みて打ちのめされ、恥じ入り、引き替えに満ち足りて輝きを増すあのおんなの容姿を推し量っては、心がちぢに乱れるのでございます。――そしてついに、あの歪んだ思いつきの中にのめり込んでいったのでございます。

あの夜のわたくしは唐草の大風呂敷を小さく畳んで懐に忍ばせ、家を出る夫の後を追ったのでございます。もう二度と浅ましい真似はしますまい、と堅く己に誓っておきながら、夫を尾行するという屈辱を繰り返すわたくしの心は壊れてしまったのでございましょうか。こうして逡巡する想いも辛うじて残っておりますのに、なのに引くことを忘れてしまったこの足が、前を行く者を一心不乱に追い詰めるのを抑えることができないのでございます。

――また、いつぞやのあのお宅でございます。

あの夜、暗がりの中で（なんと広大なお屋敷か）と、仰天したのも道理、そこはこの土地に多い養蚕農家から繭を集めて糸を紡ぐ紡績工場だったのでございます。改めて向き合ってみますと、工場と本邸の微妙な配置といい、厳しい門構えと高すぎる塀の無言の圧力といい、悲惨な女工史を彷彿とさせる名残が、たしかに感じとれるのでございます。

彼の紡績工場も今や軍需工場に中身を替え、本邸の一部までもが、都会から来た学徒動員を引率してきた教師と学生の宿舎となっておりましたそうな。

あのおんなはこの屋敷の主の後妻で、どこぞの斜陽の門閥の出とか。金の力で手に入れた男の勲章のようなものでもあったのかどうか……。一回り以上も離れた歳の差と聞くと、なにか当時の無理無体が眼に見えてくるようでございます。そして今またここの主は軍需景気で意気を揚げ、夜ごと軍の上層部を相手の接待に家を外にしての明け暮れとか。

この高い塀の中で野心家の男の占領品のように扱われるおんなは、この地に一人の知り人とてなく、或いは孤独な囚われ人であったのかもしれません。外へ出れば、村人の好奇の眼の中に田舎大名に金で買われてきたおんなへの蔑みや哀れみが露骨に表れる、そんな明け暮れの中で、都会から流れてきた陰のある男の隠した傷に心惹かれたとて、そこまでは世間によくある話のたぐいであったろうかと思われます。けれど、生傷を隠し持った者同士が忍び逢い身を寄せ合ううち、重ねた傷の加速度で一気に闇に向かわせたものでもございましたろうか。としましたら、この二人は知ってか知らずか、一緒に死んでくれる相手を待ち構え、結ばれてしまった宿縁ということになるのでございましょうか……。

その夜は、屋敷の中に夫の姿が消えたのを見届けてから、悠々と一息おいて後を追ったのでございます。階段を上り、あの部屋の前に立ちますと、中から潜めた話し声が漏れてまいりました。噫、久々に耳にする夫の声……。それに、おんなの声のなんとたおやかなこと……。その声が、夫の声にしな垂れかかるのでございますよ。それを抱きとめる夫の男冥利の恍惚を思い浮かべる己が眼を、この場で焼き潰したいと呪ったものでございます。

階下からは、若い人たちの談笑に興ずる声がのびやかに聞こえてまいります。

わたくしが蹲っている廊下は、灯火管制のためか忍ぶ逢瀬の隠匿のためにか灯りはなく、締め切られた雨戸は外からの僅かな月明かりさえも遮って真の暗闇でございました。

わたくしは鼠小僧よろしく、作務衣のような当時の標準服の中から濃紺を探して身を包み、夫の黒い靴下を履き、大判の黒いジョーゼットのマフラーを目深に頬被りして、息を殺して忍んでいるのですから、間違いなく暗闇の一部となっているはずでございます。

この数日、のめり込むようにして計画を練りに練り、計算し尽した事の決行の最後の審判が今宵くだって、全てがすっかり終わるはずでございます。今、心から願っているのは、唯、弾けるように全てが終わることだけの帰結、それだけなのでございました。

――あれっ？　なんということでございましょう。部屋の中から音量をしぼれるだけしぼった『ドナウ川のさざなみ』の曲が漏れ聞こえてまいりました。イヴァノヴィッチ作曲のウィンナ・ワルツでございます。――やがて、畳を擦るリズミカルな足音……。中の二人は蓄音機をまわし、ダンスを始めたのでございますよ。

第一ワルツのイ短調。哀愁を帯びたこの主旋律に夫もわたくしも魅入られて、どれだけの夜を二人で耳をかたむけ、踊り明かしましたことか……。（わたくしどもの幸せ絶頂の日々を彩ったこの曲を、こんな場面で聴くことになろうとは‼）――いえ、なんと愚かな。この期に及んでなにを考えておりますのやら。再び夫と向き合うことなどありますまいに。

夜もだいぶ更けたのか、冷気が一段と尖ってきたようでございます。そして階下の物音がすっかり静まっていたことに気づいた途端、この屋敷ごとが巨大なエレベーターと化し、ものすごい速度で奈落へ向かって降下していく感覚に襲われたのでございます。

――蓄音機の音も止み部屋の灯りが消えると、静まり返った暗がりに爪を立てるように衣擦れの音が起こりました。キュッ、キュッ……、鋭く重いあの音は、おんなの帯を解く音でもございましょうか。そして着物が肩を滑り落ちて畳に溜まる音。衣擦れのけたたましさも、嬌声や吐息も、わたくしがここにいることを知っての挑戦ではありますまいか。解ける音……。解けて、解けて……、あっ、なんと、なにもかもをかなぐり捨てるおつもりなのか……。その艶めいた含み笑いの匂やかさまでもがこの胸に鋭く爪を立てるのに、そこに重ねる溜め息の淫靡なこと。間を置かず、おんなの発する言葉にならない噫音のさざ波が立ち、気怠げに退いて、またすぐに、いたぶられながらゆっくりと昇り詰めていくのでございます。――そのとき、噫音が怒涛のようにひときわ高く押し上げられ、昇り詰めた極みから真っ逆さまに落下したのでございます。

その絶叫の噫・噫・噫――っ、に押し潰されるように呻いた夫の荒い息遣い……。

わたくしは、廊下の氷のように冷えた床板にぴたりと黒子のように座っておりましたが、やがて両手をぺたりと付き、しまいには伏して額を床に擦り付け、思わず呻いてしまいそうになる声を抑えて夢中で握り締めた掌には、爪が深々と食い込んでいたのでございます。

――見苦しゅうございますよね。今宵こそ、心のほころびに無理矢理指を突っ込んで一気に切り裂く覚悟。などと大層な決意でこの家に押し込んでおきながら、あまりに未練がましいこの様の悪さ……。己の本性さえ手に負えぬのに、人様の気持ちを舵取りましょうなどとは以ての外の愚かさ。怖いもの知らずの悲劇振りほどの喜劇は他にございますまい。

もはや間断なく襲ってくる胴震いに抗うことも忘れて硬く眼を瞑り、唇を噛んでひたすらそのときを待ったのでございます。が、乾いた口腔から漏れた、掠れた笛の音のような己が息遣いを聞き咎めた途端俄かに浮き足立ち、やおら、懐にねじ込んできた風呂敷を取り出し口にくわえると、細めに開けた障子戸から膝繰りで部屋に忍び入ったのでございます。

しばらくは畳みに這いつくばって寝息を窺っておりました。そうこうするうち、部屋の中の様子が朧気に見えてまいりました。絡まるようにして寝入っているその周辺には、予測通り二人の着ていたものの全てが脱ぎ散らかったまま……。その有様を一瞥するや、わたくしは口にくわえていた大風呂敷を広げて、散乱しているそれらを一つ残らず拾い集めたのでございます。この部屋の外でひたすら待ち続けておりました時の心の波立ちは、もはや嘘のように鎮まり、ただ淡々と拾い集めることに集中したのでございます。

掻き集めた包みを背負い、風呂敷の両端を胸元に引き寄せて丹念に結び、意気揚々と立ち上がった刹那、思い通りに事が運んだこの充足感を覆して、あろうことか惨敗の恥辱に塗れた己が心に気づき慄然としたのです。――今更、引き返す道などない‼　恐怖にも似た焦りに気も動転し、後

先の考えもなく、唯、夢中で部屋の灯りを点けたのでございます。

目覚めて、わたくしと眼が合ったときの二人の驚愕と狼狽振りは、止まる仕掛けが毀れたからくり人形の混乱そのもの。それはもう、見るに忍びない様の悪さでございました。

今から思えば、あのときのわたくしはまさに手負いの獣(けだもの)さながらでございました。

布団を手繰って身を隠そうとするおんなの手を邪険に払ってにじり寄ると、声絶(こわだ)えて飛び退いたおんなは我が夫にしがみ付き、夫はその躰を包むように受け止めて敷布を手繰り寄せ、己らの下半身を覆って立ち上がりました。わたくしは夫の手にした敷布を力尽くで奪い取り、後方に蹴り飛ばし、終始無言で相手の手にする物を奪い続けたのでございます。

左腕でおんなを抱え、空き手で己が下腹部を庇うようにして後退りするその無様さと、突き刺し返すような眼差しの挑発‼ その奇妙な対比が長引くほどに、追い詰めているはずが追い詰められ、報復に出向いたわたくしが制裁を加えられていたのでございます。もはや混乱の収拾がつかなくなり、震えが足元から怒涛のように駆け昇ってきたときの、――そこから先はもう支離滅裂‼ いくつもの計算外の事態に狼狽(うろた)え、怯えたわたくしは、いきなり越えてはならない境目を突き破ってしまったのでございますよ、あのとき……。

障子戸を開け放ったわたくしは、全裸の二人を突き飛ばすようにして階下に追いたて、眼につく限りの電灯を点けて歩きながら、うわずった声を張り上げていたのでございます。

「泥棒‼ 早く来てぇー、どろぼうですーぅ」

冷静に考えましたら、二人の身ぐるみをすっかり奪って背負っているその風体からして、怪しげなのはどこからどう見てもこのわたくしのはず。それが、あろうことか『泥棒！ どろぼう！』と、大声で人を呼び集め、その中に自らが向かって行ったのでございます。各部屋に灯りが点いて湧き出すように人がぞろぞろと廊下に溢れ、間をおかずできた人垣の中に裸の二人を追いやって……、その時になってようやく、影にとどまれなかった闖入者の決定的破綻、己が墓穴を掘ったこの深追いの過ちに気づいたのでございました。

ところが奇怪にも、己が点した廊下の灯りをまともに受け、この声で集めた群衆の真っ只中に居りながら、人々の眼は全裸の男女の姿に集中して、当の我が身は在りながらにしてそれらの視界からすっぽりと消えてしまっていたのでございます。人間の意識とはほんに可笑しゅうて危ういものでございますよね。――ま、なにはともあれ、長居は

険難、けんのん‼ 今、点になっているこの群集の眼たちが我に返らぬうちに、とわたくしは一目散にその場を逃げ出したのでございます。このとき、頭の中では繰り返し打ち上げ花火があがり、暗闇をかき出すように炸裂し、ひび割れた闇は散乱し続けていたのでございます。

おんなが自らの命を絶ちましたのは、あれからすぐのことでございましたそうな。

全裸で庭を走り抜け、その勢いで井戸に飛び込んだという話でございます。

夫が、その場をどのように逃れてきたのか仔細は存じませんが、ひっそりと蔵座敷に戻ってまいりました。――あの同じ道を、返報がわたくしを追って来たのでございます。夫は、その執念だけでここに辿り着いたのでございましょう。これがあの蔵座敷での出来事の始まりでございました。

唯ひたすら香を焚き続ける夫は、能面のごとく感情を深く沈めたとらえどころのない顔付きの裏で、一体どのような仕返しを目論んでおりますのか……。

――なぜに？ いつから?! この踏み違いが始まっていたのでございますか。

――あのとき、特高の手からぼろ雑巾のようにして投げ返されたあなたの躰を抱きとり、生きることを放棄したあなたを引き摺るようにしてあの地を夢中で逃れ、家畜なみに詰(つか)め込まれて運ばれた長い長い汽車の旅……。しっかり掴まえていないと無くなってしまいそうなあなたの命ごとを、片時も離さずこの懐に掻き抱いてすごした逃亡の旅の極限の心寒さと、飢えと恐怖。乗り越えられたのは、あなたを死なせたくなかったから。二人で生きたかったから。――あの地獄からようやく逃げ果(おお)せたと思ったのに、……それなのに。――なにか言ってください。お願いですから、わたくしを納得させるなにかを言ってください。それからの報復なら諦観には辿り着けないけれど、黙って受けもいたしましょう。

今、無音の空間に座り続けていて認識できることといえば、明るくなること、日が陰ること、暗闇になること。その繰り返しを数えて、時の経過を推量すること。――なのに、もう数えることすら忘却してしまい、わたくしは俄かに焦りを覚えたのでございます。床の間に吊るした面と対座しているが如き夫の、あまりの捕えどころのなさに焦れて苛立ち、とめどないこの身の震えがあまりに情けなく、なおいっそう苛立つのでございます。

やがてわたくしは恨めしい経糸(たて)に虚しい緯糸(ぬき)を絡ませ、先には狂気の仕上がりが待っているだけの機を織り始めていたのでございます。そして更に時を忘れて際限もなく織り

続け、それは時折糸の擦れる鋭い悲鳴を吐きながら見る間に空間を埋め尽くすほどの嵩になり、明かりという明かりを遮断していくのでございました。刻一刻と暗さが増し、やがて闇は部屋より大きくなって、突如、眼の前いっぱいに、宙吊りの般若の面が曇った表情で現れたのでございます。

太い吐息を漏らす裂けた口腔は果てしのない暗黒を湛え、一瞬、慟哭の呻き声をあげたかに思われました。わたくしが思わず眼を塞ぎ、耳を塞いで飛び退き、無我夢中で這い出して後ろ手で閉めて押さえたこの戸の向こうで、今なにが起こっておりますのか……。

飛び退いたときに背後に感じた闇の中の目配せの気配、あれは一体どういうことか?!

——もしや、性愛の至極を死によってそこに止め、永遠に褪せないものにしてみせたおんなとの一瞬のほうが、わたくしどものこれまでの歳月より重いとおっしゃるのですか。それゆえにその女を死に追いやったわたくしを、これは悩乱か邪鬼かと決め付け、調伏の力をもって制裁しようと企んでいでもおりますのか。——それもこれもあのおんなへの慰藉なのでございますよね。わたくしが部屋を飛び出す瞬間に闇の中で感じた濃密な目配せの気配は、やはり気のせいなどではなかった……!! と、耳を欹て、眼をむいて苛立ち、押さえた戸を揺すっては、身をよじって地団駄を踏み鳴らし続けたのでございました。

今となりますれば、わたくしを脅かしたあのときの般若はおんなの怨霊などではなく、あれは、醜く変り果てたわたくし自身を見紛ったのだと承知しております。

夫を責め、おんなを憎んで悶々と心乱していく過程の中でひび割れた細胞が毒を作り、心の襞の闇で増殖したものが鬱情を跳ね除け、羞恥の心を喰い千切って鬼に変貌してのけたとき、わたくしの瞼は終生なでおろされる安息の機会を失い、——噫、もうそれ以外のわたくしに戻ることは終に無かったのでございます。

たしか愛人御息所の生霊も、行者との争いのなかで般若に変貌した己と向き合ってしまうのでございますが、なぜに調伏の呪文だけでむげなく割愛してしまえるのでございましょう。いつの世も、驕れる者の心ない一方的な仕打ちに変わりはないようでございます。

もう、この地にもそう長くは止まれますまい。

不義密通を犯した男と、衆人環視の中でその家の内儀を死に追いやることをしたわたくしが、逃げ出す算段もせず、追い立てられることも裁かれることもなしに蔵座敷に居座れたのは、あれらのことが起きてからというもの、気味悪がった村人が蔵を遠巻きにするだけで寄り付かなかった——

——というだけのこと。結果、「臭いものには蓋」的なこの風潮が、皮肉にも夫婦の報復地獄を長引かせ、もう一つの禍事まで招いてしまったのでございます。

戦局はいよいよ終盤なのでございましょうか。紡績工場の隠れ蓑を着たあの軍需工場も資材の入荷が止まってしまったのでございます。何も無いところからは何も作れますまい。

そして、この地の老若男女は一丸となって竹槍を作り、朝明けから日没まで飽きもせずに突きの稽古を始めたのでございます。その気合の声にまじって、バケツリレーの掛け声も聞こえてまいります。はて、敵国の爆撃機B29や焼夷弾に竹槍やバケツの水でどう応戦するつもりなのか?! 爆撃の破壊力も、戦乱の地獄も知らない人達なのでございます。

唯、戦争末期の混乱の煽りか、或いは軍との関わりに乗じた者がその力で醜聞の隠蔽を謀ったのか、村全体を震撼させた猟奇的事件が一斉に口を封じられ、この記憶に蓋をすることを強制でないように強制されて、まことに奇怪な終結を見せたのでございます。

●●

能楽堂の見所に己が姿を認めたとき、なぜ、どうして、という当然の疑問より、夢と現、表と裏、過去と今、の輪転に心攫われ、思わず鳩尾を押さえ込んだのが先でございました。

そして、急調の鼓の囃子に誘い出されるように般若の面が舞台に現れたとき、かつて覗くことに執着した竅の中の者が覚醒し、しかも謡にまぎれて語りかけてくる!? と、そそけ立つ身を硬くして思わず身を引いたのは、鬼面に独特の命を与え放射してくる演者のナイフの刃のような、ぞくりとする執心を身に覚えたからでございました。——そういえば能の謡とは死者が在りし日の秘められた物語を語る声であり、やがて姿を現して演じるのだとか。この様式が多くの能の骨格をなしているのだと聴かされたことを思い出しました。

——それにしましても足音の演技のこの異様なほどの長さ、頭を激しく振りながらまるで地団駄を踏みならすが如きこの鬼気迫る所作事は、狂いの舞といわれる『翔り』が組み込まれていたのでしたろうか……。しかも、その心の動揺・苛立ちの表現が、この五百ほどの見所の中からわたくしだけを選んで迫ってくる……?! これは、けっして思い過ごしではなく、なにか尋常ではない気配をこの足拍子の響きの中に感じるのでございます。

けれど、ここに在るのは能舞台。

能楽は観客の想像力を通して「なにかを訴えかける」を、

本意とするとか。

——としましたら、あの昔、覗かれて覗き返した竅も同じだったことになりますまいか。

観客に柾目を合わせた舞台の檜板がぐいぐいと見所に迫り出してくるのか、我を忘れたわたくしが舞台に向かっているのか……。このとき、舞台の灯りと観覧席の仄暗さの差異に混乱した眼前に、二つの孔が迫ってきたのでございます。暗く、どこまでも深い底なしの空間……。何者かの双眸がその闇の底に貼り付いている、という恐怖。——もしや、これはあの竅から覗き続けていた童の眼か？　いや、まさか……、そのようなはずはない。

人にはあるまじき凄まじいまでのあの感知能力を持った者が、一生懸命に生きようとすればするほど、結局、己だけにとどまらず周りの人をも不幸にしているのでございます。この童の行く先々には、わたくしと同じ安息に見放された修羅の道が待ち受けているだけ。このことは、竅をはさんで眼と眼が絡み合ったあのとき直感的に気づいたのでございます。

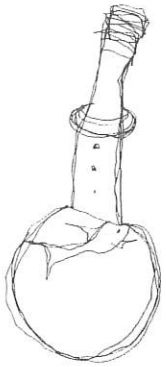
素封家の器量よしの一人娘が神隠しに遭い、村を挙げての捜索の甲斐もなく行方が知れぬ儘になりましたのは、わたくしどもが蔵座敷に立て籠もっていた時期でございましたが、あれから六十余年もの歳月が過ぎていたのでございます。当時を知る人の大方はすでに泉下の人となられましたのに、わたくしは「化け物だ」「鬼だ」と石撃たれ、追い回されながら、未だにあの戻って来れなくなるはずの不可知な時空間の入り口辺りを、さ迷い続けているのでございます。あのときの裂け目を見失った過ちからか、わたくしはこのように老いさらばえてもまだこの竅に弾かれ戻され続けているのでございますよ。この竅があのときの入り口であるのなら、疾うに突き抜けることができていたはず。——こうして童の眼に捉えられた儘その眼と向き合っている限り、この竅は鏡、だったのではありますまいか。だから、これは孔のない竅……。では、人ひとりの通過を許したあの竅は今何処に?!

今更気づきましたところで、わたくしには、ここを刳って入り込む力は疾うに失せております。どうか、一つ一度のお願いでございます。この小さな躰を始末するだけの隙間でよいのです。この辺りの上下層をほんの一瞬だけ辷らしていただくことは叶いませんか。

——このとき、舞台の演者の手招きに吸い寄せられるように、わたくしは無我夢中で橋がかりに這いずり寄り、欄干に手を絡ませたのでございます。——おお、これがそこへ抜ける架け橋か、離れまいぞ。と心急くのに、自力では立ち上がることもままならず、誰かが差し出し握らせてくれた杖に夢中で縋りついて躰を起こすと、その杖は童の手のように頼りなげでありながら、この躰を全力で引き受け、曳いて行こうとするのでございます。

逸る気持ちに足が追いつかぬわたくしは首だけが無闇と先行し、さながら捩れ錐の刃先のように、先を刳って進むかに突き出した顎を頭ごと振り廻して、総身体当たりの態で足を踏み出したのでございます。杖に引き摺られるように一足、また一足と、この足遣いは尺取り虫のように覚束なげながら、今、確実に橋がかりを渡っているのでございますよ。

このとき、ほつれた白髪にそよと吹いた風の気配は気のせいでございましょうか……。



木村令胡

きむら　れいこ

1937年　福島県会津若松市生まれ
58　会津服装専門学校卒業
　　同校へ勤務
80　日東衣料入社
　　ブティック503・ルミエール店店長
98　退職

1957より会津ペンクラブ会員・「盆地」同人
2003　小説「扉の中の鏡」を新風舎より刊行
2004　第57回福島県文学賞準賞を受賞
2005　小説「火色の蛇」を日本文学館より刊行
2006　第2回「文芸思潮」エッセイ賞当選
　　「怖い夢には帆船を浮かべて」
　　第3回銀華文学賞奨励賞受賞
　　「この戸の向こう側」

受賞の言葉

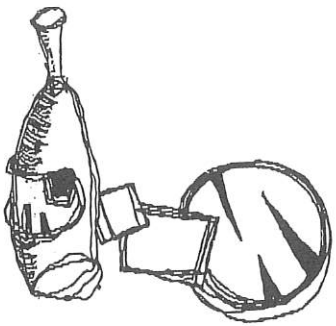
木村令胡

昨年一月二十八日、「文芸思潮」授賞式出席のために上京する朝、異変通告は鏡の中に待ち受けていました。首筋と顎にパチンコ玉大のしこりが現れ、顔はぱんぱんのムーンフェイス！恐怖に近いショックは受けましたが、上京を見合わせるかどうかの迷いはありませんでした。首を隠せる洋服に替え、予定通りの電車に乗りました。（これはただ事ではない。だからこそ、予定は変えない。後悔はしたくないから）もぐら叩きのように、頭をもたげる妄想を叩き続けながらの往復でした。

帰宅後、即戦いが始まりました。病院を数箇所まわされ、ようやく落ち着いた病院でも検査の明け暮れ。「血液の病気」と、告げられたのが七月。「リンパ腫」の頭に悪性が付くと即手術。「リスクの大きい手術なので、検査を慎重に……」言葉の暴力にいたぶられて、希望と絶望に揺れてゆれる綱渡り……。妄想は生きものだ、と思い知ったのもこの頃。

この索（あなた）りの果てに、妄想に呑みこまれて命より心が先に壊れるかもしれない恐怖が、この「竅を刳る」を書かせたのだと思います。時代・人物を意識的に傀儡（くぐつ）化した手法は、等身大の設定では情緒過多で破綻を来たすかもしれない自分の力量不足を考えてのことです。

「選評」を読むことは叶わないであろう覚悟で、原稿を送ったのが七月初旬。

八月末の手術予定がどんでん返ったのは、私の血の悪性と良性もどんでん返ったということなのか……。ともあれ私は八ヶ月振りに竅から這い出すことができたのです。

――そして十一月に入って、五十嵐勉編集長から優秀賞受賞の知らせをお電話で頂いた時の、ドキッとしたそれから後の記憶が未だに繋がりません。ただ、編集長が言われた「凄みがありました」の言葉が胸を打ちました。私は、どんな賞より、どんな褒め言葉より、命を賭けて妄想と戦った恐怖と哀しみの日々の吐息を、作品の行間から聞き分けていただけたことが嬉しかったのです。心からの喜びと感謝を申し上げます。ありがとうございました。